光よあれ

私たちは主のもの　66人の証し　シリーズ第4集


P.324


P.79


P.99


P.18

P.307

光よあれ

私たちは主のもの　66人の証し　シリーズ第4集

吉祥寺キリスト集会編

この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。

（Ⅰコリント　1・21）

光よあれ

私たちは主のもの　66人の証しシリーズ第4集

吉祥寺キリスト集会　編

はじめに

ゴットホルド・ベック

ここに「光よあれ」の第4集をお届けできることは、大いなる主の恵みであり、大きな感謝です。この本を刊行した目的は、多くの方々に「まことの愛、まことの喜び、まことの光」についての生き生きとした証しを読んでいただくことにあります。

私たちが生活している今の世は、嘘や偽りに満ちています。また、自己中心的な考え、エゴイズムが、人々の人生を重苦しいものにしています。また多くの人たちは、二つの顔、つまり本音と建て前を使い分けることに神経をすりへらしています。これらのことは、人間が生きていくために必要なことだと思われています。しかしそれらは、本当に必要なものなのでしょうか。もっと大切なことが、最も基本的なことが、実は忘れ去られているのではないでしょうか。

この本に登場する多くの方々は、そのようなこの世のことではなく、イエス・キリストにあるまことの愛、喜び、光を、あふれるばかりに体験し、そのことをまっすぐに証しなさっています。これらの方々を満たしているものは、主イエスご自身の愛であり、喜びであり、光です。

この本を初めて手になさった方の中には、私たちの動機を誤解なさる向きもあることでしょう。ある方は、私たちが「キリスト教の宣伝」をしたり、「会員を増やそうとしている」とお思いになるかもしれません。しかし実際はその正反対なのです。私たちはいわゆる「宗教」というものが、人々を惑わし、まちがった仕方で慰めを与え、人々からお金を取るものだ、と確信しています。私たちの願いは、あなたがいわゆる「キリスト教に入信する」ということでもなければ、

「教会の会員になる」ということでもありません。私たちはそのようなことをお勧めしているのではありません。あなたにとって今何より必要なのは、しっかりとした人生の土台を発見することと、人生のゆるがぬ支えを見出すことです。あなたは、いつまでも続くまことの喜び、人生の喜びを必要としています。「愛、喜び、光」。この本の目標は、あなたをまことの愛と、喜びと、光の人生に導くことにあります。

傷ついた心は、介抱され癒されるべきです。かたくなに凝り固まった心は、神の愛によってほぐされるべきです。満たされない心は、主イエスによって満たされるべきです。これこそが、この本を作った目的です。今日この本を、あなたが手に取ってくださったことを心から感謝申しあげます。

- 現代人は、愛を必要としています。
- 現代人は、喜びを必要としています。
- 現代人は、光を必要としています。

この三つのことについて、少しご一緒に考えてみましょう。

1　現代人は、愛を必要としています。

ある若い娘さんがいました。彼女の母親は死んでしまい、彼女は一人ぼっちになってしまいました。彼女は暖かさと愛情に飢えてある集団に入ってしまいました。それは一般に原理と呼ばれる組織で、彼女は家を捨て仕事も辞め、まったく行方が分からなくなってしまいました。二年の

後、彼女は精神的にも肉体的にもぼろぼろになって家に送り返されてきました。いわゆる洗脳によって彼女はもはやものごとを筋立てて考えることや理論的な結論を導き出すことができなくなっていました。この例のように、愛の欠如は恐ろしい結果を引き起こします。現代の大きな問題の一つは、孤独であり、愛の欠如です。

現代人は、愛を必要としています。神の言葉である聖書の中で、私たちはまことの神の約束を見出します。「わたしはあなたを愛する！」これは決して空しい言葉ではありません。生けるまことの神、全宇宙の創造主は「わたしはあなたを愛する！」と一人一人の人間に呼びかけておられるのです。この本にある多くの証しを通しても、まことの神は「あなたを愛しておられる」ということが語られています。ここに登場する方々は主なる神のまことの愛を経験しました。ですからそのことを、一人でも多くの方々に知ってほしい、という心からの願いを持つようになり、これらの証しを記したのです。

2　現代人は、喜びを必要としています。

人間は誰でも、本物の、何時までも続く喜びを持ちたいと願っています。しかし実際には、誰もが喜びよりは多くの悩みを背負いこんでいます。「私は幸せになりたい。しかし、どこにも真の喜びなどというものはない。私はもう諦めた」と言う人が何と多いことでしょうか。仕事、レジャー、お酒、異性、お金、……人間はそれらを追い求めることによって悩みを忘れ、束の間の喜びを得ようとします。しかし人間は、これらによっては決して本当に幸せになることはできま

せん。

イエス様がこの世に来られた時、キリストがなぜお生まれになったかを語るために一人の御使いが天から遣わされました。

御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」（ルカ2・10、11）

人間が真の喜びを必要としているがゆえに、天地の創造主であり人間を愛してくださる神は、そのひとり子をこの世にお遣わしになりました。

喜びがなければ、人生は魅力のないものです。喜びがなければ、人生は重荷です。喜びがなければ、人生は退屈です。主イエスは、今日も私たちに呼びかけておられます。

わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです。（ヨハネ15・11）

この本に登場する方々は、困難な人生にあってさえもまことの喜びに満たされている方々です。この方々は証しの文章を通して、まことの喜びを一人でも多くの方々にお伝えしたいと望んだのです。これらの方々は、決して夢の世界に生きているのではありません。むしろ大変現実主義的な方々です。なぜなら、現実に、まことの喜びを手に入れることができたのですから。主イエス

を知っている人は、まことの喜びを持っています。主イエスを知っている人は、重荷から解放されています。主イエスを知っている人は、安心して死に向かうことができます。

3　現代人は、光を必要としています。

光がなければ、人間は暗やみの中に放っておかれ、手探りをしなければ歩くことさえできなくなります。光がなければ、人間は内面的に支えを失ってしまいます。光がなければ、人間は何事についても確信を持つことができなくなります。なぜ、私たちはこの地上にいるのでしょうか？人間の地上での生活の基となるものは、何でしょうか？　また、死後、私たちは、何処へ行くのでしょうか？　これらの問いに答えることができないとしたら、それは大変不幸なことであり、それはちょうど、人生を正しく導く光を失っている状態に例えることができます。有名なウォルフガング・ゲーテは、死の直前に「もっと光を！」と叫びました。この言葉はまた、現代人の痛切な叫びでもあります。これに対して、主イエスは、次のように私たちに呼びかけておられます。

「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」
（ヨハネ8・12）

「わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれもやみの中にとどまることのないためです。」
（ヨハネ12・46）

主イエスは、あなたを愛しておられます。主イエスは、永遠の喜びを提供してくださいます。主イエスは、光の下に来るようにと呼びかけておられます。

私は切なる思いで主を待ち望んだ。主は私のほうに身を傾け、私の叫びをお聞きになり、私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった。そして私の足を巌の上に置き、私の歩みを確かにされた。……幸いなことよ。主に信頼するその人は。（詩篇40・1～4）

どうかあなたも、主イエスを受け入れ、主イエスに従って生きることを今から始めてみてください。そうすれば神の恵みによって、あなたの人生もまたゆるがぬ基盤の上に立った人生となり、まことの愛、まことの喜び、まことの光に満ちあふれた、価値あるすばらしい人生となります。

目次(1)

はじめに……ゴットホルド・ベック 7

光よあれ 私たちは主のもの66人の証し第4集

1 「ここに、主がおられる」……故 山川千秋夫人 山川穆子(きよ) 18
故 山川千秋さんの葬儀におけるメッセージ……ゴットホルド・ベック 47
2 世にある限り主を伝えん……深見邦枝 63
3 もはや私ではなく、キリストが私の中で……故笹川郁夫 79
走るべき行程を走り終えた夫……笹川公子 99
主を仰ぎ見ると彼らは輝いた……重田定義 109
4 主に導かれて七十年……竹本誠一 115
父を語る……(1)竹本隆 (2)池田康 (3)竹本真夫 (4)飯守節子
5 「主われを愛す」故 長沼純子さんの思い出……野田暢子 126
死を輝いて生きた人、長沼純子さんとの出会い……近森大志郎 152

6　主の御手に刻まれし我が名……鈴木世喜子　157
7　限りない主の愛……故長澤文枝　211
天国で楽しい再会を（母の証し）……唐澤梅子　217
主は私の羊飼い（父の証し）……唐澤喜文　226
主は生きておられる（妹の証し）……一瀬かほる　228
8　高慢を砕かれて……大塚二郎　242
悲しみから喜びへ……大塚玲子　262
9　まもなくかなたの……中西規夫　276
わたしは主、あなたをいやす者である……中西和世子　288
10　主は愛の神……上野和子　307
神よ、よくぞお導きくださいました……上野松夫　324
11　主こそわが道、真理、そして生命……瀬島志郎　332

続く

目次(2)

42人の証し（カラーページ）……161～184

- 天の御国を目指して…重田定義／主は最善をなしてくださる…重田花子
- イエス様のご支配の中に…高橋艶子／生きておられるイエス様…柳原基子
- 罪からの解放…荒井弘恵
- 主イエスのみこころは？…上野葉子／与えられた平安…上野巨志
- 互いに愛し合いなさい…上野路子
- 主は成し遂げてくださる…高田真実／神様の計画…高田馨
- 私と共にいてくださる主…高田由里
- 晩年の幸い(Ⅰ)…池田種吉／晩年の幸い(Ⅱ)…池田住枝／共に祈れる喜び…池田康
- 国籍は天にあります…故 宮山守、宮山恵子／空しさから光へ…北村栄
- 神様の愛…小野田美恵子／神様、感謝します…岩上眞砂美
- 心の支え…真嶋康子／恵みに囲まれて…岩上桂子
- 真実なる神…野口修／主は私の助け主…野口香
- 安らかな人生…渡辺慶江／主の愛に生かされて…渡辺利江
- イエス様とともにある平安…野田賢一／主を知った喜び…野口浩司
- 苦しかったわが旅…藤間肇／娘の結婚を通して…藤間てる

・真の生きがい…河野穂積／主の愛に導かれて…河野和子
・老後を支えられて…竹澤規／祈り人の生活を…竹澤千穂子
・不変の愛を生ける力として…岩本政和／イエス様は永遠のいのちです…岩本千佐子
・神の国とその義を求めなさい…江草清子　・神は愛です…竹本桃子
・喜びの泉イエス様…旭マサ子　・主は私の力、私の盾…深沢洋一
・天国へのスタート…藤田五良　・神にはどんなことでもできます…竹田竹子
・空しい生き方から解放されて…細貝武郎

あとがき……ゴットホルド・ベック　348

基礎的なみことば……351

「実を結ぶ命」のおすすめ　「光よあれ」のおすすめ
「神の愛」(上)(下)のおすすめ
全国のキリスト集会のご案内



▲国際的なキャスターとして活躍していた頃の千秋さん。

▼カーター元米大統領にインタビューする千秋さん。





▲上野さん宅の家庭集会(成城)で。左から妻穆子さん、長男冬樹さん、千秋さん。

ここに、主がおられる

山川穆子(きよ)

東京高輪に生まれる。京都藤の森小、日当山中、大阪女学院を経て関西学院大学心理学科卒。一九六三年日本航空にスチュワーデスとして入社、一九七二年退職しフジテレビロンドン特派員だった山川千秋さんと結婚。長男冬樹さん、次男史門さん。趣味はステンドグラス制作。

故　山川千秋

フジテレビ・ニュースキャスター。一九三三年東京に生まれる。東大法学部と教養学部を卒業。一九五九年フジテレビ入社。翌年フルブライト留学生として米シカゴのノースウエスタン大学院でジャーナリズムを専攻。帰国後報道



▲「3時のあなた」で昭和天皇の訪米について解説する千秋さん。

部に配属、警視庁記者クラブ、首相官邸詰め記者、一九六八年六月からニューヨーク特派員、同年十二月からロンドン特派員を勤める。約七年の海外勤務の後一九七五年から解説委員。その後ワシントン支局長を経て一九八六年に帰国。夜の「ニュース工場」、朝の「モーニングコール」のニュースキャスターとして活躍、一九八八年十月九日、がんに併発した腎不全で召される。



▲レストン氏（著名なジャーナリスト）に取材する千秋さん。

「食道の表層の広範囲にわたってがん細胞が検出され、喉頭部まで広がっています」

三月三十日、聖マリアンナ医科大学附属病院で、主治医の竹山勇先生から主人の病状を知らされた時、私は目の前が真っ暗になり、全身の力が抜けて体がこなごなに砕かれたようになりました。病院から自宅までは車で十分ほどなのですが、その日はどこをどう通って帰ったのか、まったく覚えていません。なんとか家にたどりついたものの、家の中で子供たちに涙を見せることはできません。ですから夜、家を抜け出して街をさまよい、泣きながら考えました。考えれば考えるほど、残された子供たちと生きるより、主人と一緒に死にたい、いっそこのまま車にはねられて死んでしまいたい……。

私は子供の頃から教会には行っていますが、イエス・キリストとの劇的な出会いを経験したこともなく、熱くも冷たくもない信仰生活を送っていました。自分が何かを求める時のみ祈り、聖書を読む、という生活でした。私は主人の病状を知ったとき、神に祈るというより、一家心中ばかりを考えて日を過ごしたのです。

そんなある夜、家を抜け出し外をしばらく歩きました。家の近くの公園に来ました。この公園は主人が子供たちを連れてよく遊びにくるところです。私は、ふと、祈る気持ちになりました。でも、祈る言葉が出てきません。何をどう祈ったらよいのかも分かりません。それでも必死でイエス様に呼びかけました。「イエス様、私はどうすればよいのでしょうか？　どうすればよいのでしょうか？　お教えください」

ベンチにうずくまって、何回も何回も祈りました。すると、「一粒の麦を……」という、イエス様のみことばが、自然に心の中に響いてきました。

一粒の麦（主イエス）がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。（ヨハネ12・24、25）

これは、生まれて初めての経験でした。主イエスからお答えをいただく……。こんなことは今まで一度も経験したことがありませんでした。それまでは、目の前の試練から逃れようとばかりしていた私でした。しかしいつしか私は、その試練を受け入れようという気持ちになっていたのです。ほんの一瞬の変化でした。人間にこのような変化が、一瞬にして起こりえるでしょうか？やはりこれは主によって与えられた力だ、と確信し、涙を拭いて家へ帰りました。

華かな日々

私が初めて主人と出会ったのは、一九六七年の大晦日でした。紅白歌合戦の裏番組の、フジテレビの「今年話題の百人」に、国際線のスチュワーデスとして日本航空から言われて出演したときのことです。そこで番組のディレクターをしていたのが、主人でした。そのとき彼は私に目をとめて「メーキャップルームはあちらですよ」と親切に先に立って教えてくれ、私の目をのぞきこんで「きみは日本と外国の橋の役目をする人だ」と言ってくれたのを覚えています。翌年、彼

はニューヨーク特派員、すぐまた半年でロンドン特派員になり、欧米の国際線を使って飛び回る日々が続きました。よく偶然みたいな顔をして、私が搭乗しているフライトに乗り込んできましたが、実は職業柄私のフライトスケジュールを調べあげていたのです。断わりきれず何度か会っているうちに、私は彼の人柄と、広範な話題、特派員としての仕事の誠実な進めぶりにすっかり感心してしまいました。

やがて結婚話が進んで、彼が私の家に来ることになりました。私は一人娘ですから、父が常々嫁には出したくないと申しておりましたし、父や母は色々と考えて縁談を用意してくれてもいたのです。そこへ彼がやってきて「私の人生をやり直すには、どうしても穆子さんが必要です」などというものですから、父はすっかり腹を立ててしまって「人様の大事な娘を人生やり直しの道具にくれ、とはなにごとか」と反対いたしました。父に機嫌を直してもらったり、それやこれやで私たちが結婚に漕ぎ着けたのは、一九七二年の十一月のことでした。ロンドンのセントブライド教会で、簡素ですが厳粛で忘れることのできない式を挙げました。

当日は、真っ白なロールスロイスが家まで迎えに来てくれました。ロンドンでは「誰でも一生に二回はロールスロイスに乗る」というジョークがあります。一度は結婚式の真っ白なロールスロイス、そして二度目はお葬式の真っ黒なロールスロイスなのだそうです。私は日本から抱えていったウエディングドレスを着、彼がハロッヅで買ってくれたヴェールを被って、二人で晴れがましい白い車に乗り込みました。式場は地下にあって暖房がなく、とても寒かったのを覚えています。牧師さんの後について結婚の誓いを長々と繰り返すのですが、寒くて寒くて歯ががちがち

鳴りました。主人のテレビ局の方々、友人の方々、日航のロンドン支店の方々、また当時ロンドン駐在だった作家の深田祐介さんはじめ多くの方々が祝福してくださいました。

新婚旅行はパリでした。夢のような日々、それは結婚した翌日からずっとこの春まで続きました。やがて主人は論説委員を拝命し、ワシントン支局長になり、家庭では長男冬樹、次男史門が生まれ、一九八六年に帰国してからはフジテレビの夜の「ニュース工場」、ついで朝の「モーニングコール」のニュースキャスターへと、仕事が変わっていきました。朝から夜遅くまで、刻一刻と変化する世界中の情報に真正面からぶち当たっていく主人の姿、それは妻の私が見てさえ、まぶしいほど仕事に脂の乗りきった、充実した国際ジャーナリストの姿でした。

そんなある日、主人の声に起こったわずかな変化を、当時やはり「モーニングコール」で主人と机を並べてキャスターをなさっていらしたアナウンサーの城ケ崎祐子さんが感づかれて、次のように語っていらっしゃいます。

「山川さんは常々『僕はフルブライト留学生の時、お前の声はとってもいい声だって教授や学生に褒められたんだ』と自慢していらっしゃいましたが、そのご自慢の声、太くて低くて、響きのある独特の声が、少しかすれるようになったのです。『あらどうしたの、ご自慢の声がかすれぎみね』って冷やかし、ご本人も笑っていらっしゃったのですが、それがこんなに難しい病気の前兆になろうとは、誰一人思いもしませんでした……」

声が出にくい状態になったのは、主人が私用でニューヨークにとんぼ返りをした翌日の月曜日

のことでした。その時は過密スケジュールが続き、単なる声帯の疲労だと軽く考えていました。というのは、主人は一月の終り頃に人間ドックに入り精密検査を受けていたのですが、その時はどこにも異常がなく、コレステロールも正常なら糖尿の気もなく、評価はすべて正常のAランクでした。もちろん食道のレントゲン写真も撮っていて異状はなかったのです。のんきに、風邪気味で声帯の疲労にちがいない、と信じ込んでいたのです。軽い気持ちで自宅に近い聖マリアンナ医科大学附属病院の耳鼻科に診察にいったのですが、「精密検査をしましょう」と言われました。精密検査をするためには、数日の入院が必要です。主人はテレビの仕事、講演などスケジュールがいっぱいでしたが、何とか予定をやりくりして、三月二十四日に入院しました。翌日から検査が始まり、それは二十九日まで五日間続きました。そして翌日の三十日、担当の竹山勇医師から呼ばれたのは、私一人だったのです。そしてその宣告は、むごいものでした。

本人に告知するべきか

公園で祈った瞬間から、私の中に、主によって与えられた力が湧いてくるのを感じました。

死も、いのちも……私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

（ローマ8・38、39）

死は絶望ではなく、希望につながっています。私たちイエス様を受け入れた者は必ずいつの日か天国でイエス様の下で再会できるのです。私はイエス様に信頼して子供たち二人と生きぬくこと、

そして主人にはがんであることをはっきりと告げ、この世での残された日々をせいいっぱい生きてもらおう、ということをごく自然に考えるようになっていました。たしかに主人には、社会的にも、家庭的にも、まだやりたいことがいっぱいありました。死の病を持った人間の一カ月は、健康な私たちの何年分にもあたります。また、この世で残された日々を、人間の力だけでがん宣告された主人とともにがんばりきれるものではありません。主のみ力に信頼し、主により頼むしかないのです。私は、このように考えて、兄の森島洋太郎と、仲のよい下条嘉子さんに電話をし、相談しました。兄は阪大の理学部で助教授をしていますが、電話口で次のように率直な意見を述べてくれました。

「千秋さんは、がんであることを隠しおおせるような相手ではないよ。隠しておいて知られたら、彼もお前も告知するよりずっとつらいことになるよ」

下条さんは、子供の幼稚園で知り合った仲のよいクリスチャンのお友達ですが、電話をすると、何も言わずすぐ駆けつけてくださいました。嘉子さんは私の手を取って涙を流してくださり、私が話す言葉を聞いてすぐ私の考えを分かり、支え、力づけてくださいました。そして、私ははっきりと主人に真実を告げよう、真実のみが人を解放するのだと、決心しました。また告げっぱなしではいけない、必ず希望も一緒に与えてあげなければいけない。人が死に直面した時、希望とは何か？　こういう時、人間が人間に与えられる希望などあるはずがありません。「主人にイエス・キリストを知ってほしい。受け入れてほしい」これ以外に、希望はないのです。

告知、そして回心へ

翌四月一日の夕方に、私は主人にがんであることを告げました。

「食道に悪性の腫瘍があるそうです。それも、喉頭にまで広がっている可能性が高いそうです。手術をしなければなりません。その際、喉頭も一緒に取り除かなければいけないようです」

主人は、取り乱すこともなく冷静に受け止めてくれました。しかも「僕は強い男だから大丈夫だよ」と、かえって私のことを気遣ってくれました。でも、その心中はいかばかりであったことでしょう。ジャーナリストにとって、ニュースキャスターにとって、喉頭を切除するということがどういうことを意味するのか。私たちは、ただ手を握りしめあってじっとしているだけでした。何時間も経ったように覚えていますが、それはたった数分間のことだったのかも知れません。握り合った手の皮膚を通して、私たちは一体となって、この衝撃に耐えようとしていました。耐えなければなりませんでした。

やがて私は気を取り直して、一緒に聖書を読むこと、礼拝に集うことを勧めてみました。でも主人は

「いよいよ駄目だ、という時に病室に牧師さんを呼んでくれるだけでいいよ」

と、中々私の勧めを受け入れてくれません。そこで私は、生まれて初めて経験したこと、公園でイエス様に祈り、お答えをいただいたことを話しました。私の表情が、よほどせっぱつまって見えたのでしょう。主人は、

「分かった。君の言う通りするよ」

と、いってくれました。

下条さんが集っておられる吉祥寺キリスト集会のG・ベックさんが、翌日お忙しい中を駆けつけてくださいました。ベックさんは初対面にもかかわらず、心から心配してくださり、眉の間に皺を寄せて聞いてくださいました。

「ご主人の状態、どうですか?」

私は、どうしても主人にイエス様を知ってもらい、イエス様を受け入れて救われてほしいこと、それ以外にはもはや希望がないこと、しかし、主人は大変合理主義的な考えが強い人なので、信仰に入るのはかなりむつかしいのではないかということを、率直に申しあげました。

「主人はなかなか受け入れないでしょう。理屈っぽくて難しい人ですから」

ベックさんはしかしほほ笑みを絶やさずに、独特の暖かいお人柄あふれる口調で、病院の六階の面会室で二時間ほど主人とお話をしてくださいました。主人は、私が思っていたよりずっと真剣にベックさんと話しこんでいましたが、後で聞きましたら、二時間ほどお話しした中でたった一つの言葉以外何を聞いたのかまったく覚えていない、と言いました。その一つの言葉こそ、主人のその後の闘病生活の中で常に彼を支えてきた言葉だったのです。

「人は病気では死にません。主イエスが定められた時こそ、その人にとって最善の死の時です。死は終わりなどでは決してなく、キリストと一緒にいられる最高の幸せの始まりです」

この言葉は衝撃的でした。思えばイエス様は、このベックさんの言葉を通して主人のかたくなな

心のかんぬきをへし折り、一挙に恵みと憐れみの世界に抱きとられたのです。

主の恵みと、人の子らへの奇しいわざを主に感謝せよ。まことに主は青銅のとびらを打ち砕き、鉄のかんぬきを粉々に砕かれた。（詩篇107・15、16）

ベックさんは、この時のことを、次のように語っておられます。

「千秋さんは死の恐怖、不安から逃れるため、安心して死ぬためには一体どうすればいいのか必死で考えていました。私は、その答えは人間によっては絶対に与えられない、それができるのは神、すなわちイエス・キリスト以外にない、と言いました。すると彼は『どうすればイエス・キリストに救ってもらえるのか?』と尋ねました。私は、神の前に正直になること、これまで神に背いてきた罪を悔い改めて、主イエスを私の神として受け入れると口に出して言うことです、と答えました。千秋さんはしばらく考えて、彼の過去の背きの罪を素直に告白しはじめたのです。やがて彼の表情は穏やかなものとなり、私が、人は病気によって死ぬのではなく、神がわたしの所に来なさい、と言われた時が死ぬ時で、それは最善の時であり、死は終わりなどでは決してなく、キリストと一緒にいられる最高の幸せの始まりです、というと、素直にうなづいておられました」

人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。（ローマ10・10）

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」のです。（ローマ10・13）

このようにして主人は、ここに真理がある、と確信すると、勇敢にあっという間にそこに到達してしまったのです。というよりそれは、人知を越えた主のすばらしい救いのみわざでなくてなんでしょう。

キリストは……ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。

（ヘブル7・25）

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。

（エペソ2・8）

この日から主人は、めきめきと明るく元気になりました。その生活態度に、私たち家族はかえって慰められ、励まされました。常に明るく、愚痴を言わず、泣き言を言わず、周囲の者を深く思いやり、すべてに感謝する生活でした。苦しい数々の検査も、祈りと共に受けることができました。後日、大手術に向かう時も、不安はまったくなく、「すべて主の御手に委ねます。もしみこころならば私を召してください」と祈ることができました。手術後の回復が思わしくない時も、自分のことより、同室の患者さんのために祈り、同僚のために祈りました。また、この死の病が子供たちではなく自分に与えられたことを主に感謝しつづけました。

主人はまだ元気な頃、私と子供たちが日曜礼拝に行くことを大変喜んでいました。特に子供た

ちが信仰を持つことを強く望んでいました。そんな主人に一緒に礼拝に行くことを再々勧めましたが、そのたびに「八十歳になったら行くよ」とか、「大の男がイエス様助けてくださいとか感謝しますなんて女々しくて言えるか」などと言って、その気はまったくないようでした。「自分は心身ともに強いのだ。男は強くなければならない。人に頼らずに自分で計画し、挑戦し、その結果を自分で負うのだ」という考えが人一倍強い人でした。その主人が、ベックさんとお会いするうちに「人間は弱いものだ、また弱くてよいのだ、人間は生まれた時から自分では何一つ人生を切り開いていく力など持ち合わせていないのだ、すべてが神の御手の内にあり、すべて神のご計画の内にあるのだ」ということを心から信じるようになりました。肩を張って生きてきた、一見華やかな日々の虚しさと平安のなさ、そしてすべて主の前に投げ出して赤児のように主に祈り、主に拠り頼むことによって得られる平安を日に日に知るようになりました。自分に何が起ころうとも、すべては主のご計画であり、その後のことは主イエス・キリストが最善をなしてくださるのだという信頼によって、闘病が支えられてきました。主人はその頃、日記に次のようなことを記しています。

「四月八日　四月の大雪だ。夜銀座へ出た。東大文一２Ｂのクラス会である。時間があったので、風月堂に入った。私が愛したさざめきが懐かしい。一人でそのさざめきを聞いていると、自分の運命がはっきりと見える。しかし、と私は思う。今は昨日までの私ではない。これらの人々も、その幸せがある日突然終わる。死は、すべての人に必ず訪れる。その時この人はどうするのか……。私は違う。今は神の恩寵に近づいている。ならば自分の苛酷な運命を知り、信

仰に入りつつある私の方が幸せである、と私は断言できる。

クラス会は楽しかった。東京高裁の花尻君が同僚のがん死を例にとり、そろそろ我々も自分の死生観を持つ必要がある、とクラス会には珍しいスピーチをして皆の共感を誘った。『その通り！　現にこの私がそうだ』と叫びたかった」

「四月十日　午前、ベックさんの集会に参加した。集会は感動的だった。史門は八歳という年齢にもかかわらずよく耐えた。両親が涙を流しながら祈る姿に驚いたと思うが、今になぜかが分かるだろう。その時のために、あるいはもっと先の君自身のために、両親は連れて来たのだ」

また、ベックさんは、次のように話してくださいました。

「四月十三日に私が千秋さんと出会った時、彼が最初にいった言葉は、印象的でした。『ベックさん、よく、分かりましたよ。私は病気のためには死にません。主なる神の時が来なければ死にません。そして神の時は最善の時です。ですからもう、心配することは止めました』。すばらしい挨拶です。千秋さんがそう言われた時、わたしはほんとに嬉しくてしようがなかったのです。なぜなら、こう言いうる人は、本物の信仰を摑んだ、とはっきり言えるからです」

主人の上に起こった変化を、病院の看護婦さんは次のように語っておられます。

「山川さんは、ベックさんと話された翌日、入院する際にどっさり持ち込まれた政治・経済の専門書やアメリカ大統領選に関する資料、ワープロなどをすっかり自宅に送り返し、ベッドの上ではひたすら聖書を読み続け、聖書のテープを繰り返し聞いておられました」

私がこのことをベックさんにお話しますと、ベックさんは

「がんだ、手遅れだ、と分かった人は、経済の本を読むことによって励まされないでしょう？このような人に必要なのは、ただ、聖書です」

と静かに、確信をもっておっしゃいました。

また、この頃の日記に、主人は私や子供たちを思い遣って次のように記しています。

「四月十八日　午前七時、採血、午後一時、点滴開始。妻が来た。やはり私はこの妻がいなければ病とは闘えない。痛烈に思う。

妻が史門の絵手紙を持って来た。舟に色々な動物が乗っている。ノアの方舟だろう。その下に『心に残ったこと……ダディーと野球をしたこと』と書かれてあった。そのことが私の胸をついた。病が明らかになるまで、ほったらかしにしていたことだったからだ。病を知ってはじめて、不憫さから、努めて公園に出てほんの短時間付き合っただけなのに、子供の心にはそれが大きく残る。

史門よ、冬樹よ、私はよい父親ではなかった。あるいは、有名かもしれない。人から尊敬されているかもしれない。それによって、君たちも一目置かれたかもしれない。しかしそれは、よい父親を意味しない、と今日分かった。しかも、この世で君たちの父親であることができるのは、短い。済まない、と思う。許してほしい。

間もなく明日は投与が始まる。お前は耐えることができるか。試練が始まる。妻がさりげなく置いていった『実を結ぶ命』がんにうち勝ったドイツ少女リンデの一部を読み、衝撃と勇気

と平安を得た。電気が消されたら、暗闇の中で祈ろう」

「四月二十三日　朝、外出許可が出た。一歩外に出て、やはり愕然とした。目が一瞬クラクラッと圧倒される思いだった。たった一週間で私はもう、『山川千秋』ではない。一人の典型的ながん患者だ。

風景がこれまでと、すべて違って見えた。春四月。さまざまな花が咲いている。美しい。しかし、私との間に無限の距離ができた。私は間違いなく、滅びゆく肉である。死が近づいた。自分自身の死の足音が聞こえる。

透明に生きたい。明るくこの世を去りたい」

子供たちにどう伝えるか

その頃、妻として私が直面しなければならなかったのは、子供たちにこのことをどう伝えたものか、ということでした。

主人は検査や治療の時に入院し、それがない時は自宅に帰る、という生活をしていました。自宅にいる時は、日記にある通りよく次男の史門にねだられてキャッチボールのお相手をしていました。やがて戻って来た主人は「史門の投げる球は、どんどん強くなっていく」と言って、いつもサングラスの下の目を赤くしていました。主人は子供の将来を考え、ボールを投げながらその一球一球に、愛する者への別れの思いを込めていたのです。

長男の冬樹は、高校受験をひかえ、微妙な年頃ですし、優しい子供でしたから真実を告げるこ

とにためらいがありました。しかし、見掛けは平穏ながらその裏ではぴんと張りつめた家の中の空気に、敏感な冬樹が感づかないはずはありません。四月末頃になると、「お父さん、元気なのになぜ入院しているんだ。お母さん、何か隠しているんだ。なぜこっそり泣いているんだ」といって詰問してきました。ある朝起きてみると、家中にクッションの中身やお菓子の食べかすが散乱していました。冬樹のしわざです。私は決心しました。その夜、冬樹が塾から帰宅すると「ちょっと話したいことがあります」といいました。史門が寝た後のことです。冬樹は緊張した顔になりました。

「お父様の検査の結果は、食道のがんでした。君が大学生になるまではもたないかもしれません。でも、人の命は医学だけでは決められません。人は病気では死にません。イエス様が与えてくださる時が最善の死の時です。一年先か、二年先か分からないが、お父様のために、イエス様にお祈りしましょうね」

冬樹は一晩泣き続けました。翌日からとても素直になりました。子供たちにも信仰がありましたから、ただひたすら、主に祈り続けました。

「実の助君」のこと

もっとも神から遠い所にいた主人が、このように主イエス・キリストを受け入れたことは、今思うと主人がこの世に生まれる前からの主のご計画でした。それまでも主人は、知識としての聖書には大変詳しく、また仕事の折りに自分の足で聖地を何回も歩いておりましたが、その時は、

いずれ来るであろう神のご計画のことなど知る由もありませんでした。主人は後に自分の病気を知った時、昔聖地を一緒に旅した友人の「実の助君」に、はっきりと「あの時の聖地への旅は、この闘病のための主のご計画だったのだ」と手紙で書きおくっています。

「実の助君」は、主人が実の弟のように愛し、私たちでご結婚の仲人もさせていただいたカメラマンの方です。彼のお父様は牧師さんで、彼が生まれて間もなく中国に伝道に行き、その時何者かに連れ去られ、それっきり行方が分かりません。ですから「実の助君」はお父様のお顔を知りません。しかし「実の助君」の中には信仰の芽がしっかりと植え付けられていることを、病を得た主人は知ることができました。そしてパリ支局でカメラマンをしている「実の助君」と、手紙や国際電話で語り合い、聖書についていろいろなことを教わったりしていました。

主人は「実の助君」に、この世でもう一度会えることを願っていましたが、その願いは叶えられませんでした。しかし、このように、主人は人生のすべてに偶然は無い、すべてが神のご計画だったのだということを、はるか過去まで遡って一つ一つ知るようになりました。そうして聖書を知識としてではなく生きた神の言葉として、最初のページから最後のページまで何一つ疑うことなく幼な子のように信じました。

手術までの日々

主人はその頃、病院で検査のない時は主治医の許しを得て自宅に帰り、家と病院を往復する日々を過ごしていました。主人が六月二十八日に大手術を受けるまでの日々がどのようであった

のかは、主人が書き遺した日記がよく語っています。主人はジャーナリストとして事実と客観性を重んじることを信条にしていましたので、日記もまたそのように書かれていますが、簡素な記述を通して、その頃の主人の仕事への思い、家族への思い、治療の苦しさ、そして主への思いがにじんで見えます。所々、抜き書きしてみます。

「五月十六日　夢で目が覚めた。どこかの駅に長年預けてあった荷物を受け取って開けてみた。中身は忘れてしまっていた背広、仕事用品。背広にはメーク用の白粉が厚く付いていた。それらは過去、ニュースキャスターとして一流と言われた当時の必需品だった。夢の中の私は、それを懐かしんだ」

「五月二十六日　午後、ＣＴ(断層撮影)。新聞に前検事総長伊藤栄樹氏死去の報。自分から腸がんであることを公表していた。彼は信仰を持っていたのだろうか。何が彼を支えたのか聞いてみたい。自分の死が、案外早いのではないか、という気が、この頃する」

「六月四日　冬樹が変わった。夕方、成城の上野邸の家庭集会に参加。冬樹、史門も一緒。祈りとメッセージの後、冬樹はベックさんと別室で長時間話をした。よかった、と思う」

「六月十九日　冬樹と二人だけで吉祥寺集会に行った。冬樹と肩を並べて祈ることができただけで、感激の涙が止まらなかった。安心して死ねる思いだ」

「六月二十日　今日病院に帰ったら、もう当分の間家には戻れない、と思い、一日忙しかった。夜、病院で正式に手術を通告された」

「六月二十一日　朝から検査漬け。午後遅く穆子が来た。深い疲れを感じる。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ11・28）

という言葉が魂にしみる。主よ、私を力で満たしてください」

「六月二十二日　血管撮影。検査はものものしい雰囲気の部屋で始まった。検査が終わり『辛い検査なのによく頑張りましたね』と褒められたが、本人はそれほど大変と思えなかった。主治医も後で『検査の先生が褒めてましたよ』と言った。そんなものなのかなあ、と思う」

「六月二十四日　呼吸練習が本格化した。やはり、大手術のようだ」

主人が日記をワープロで打てたのは、この日までした。

いよいよ大手術を受けるという日の前の晩、ベックさんが来てくださって、主人となにやら楽しそうに話しあっておられました。その時のことを、ベックさんは次のように語ってくださいました。

「『どう？　千秋』と聞きますと、彼は答えたんです。『ぜんぜん心配しません』『けど、遺書くらい書いたでしょう？』といいますと、彼は『もちろんですよ』と笑いながら遺書の入っている封筒を見せてくれました。千秋さんは死を恐れることから完全に解放されていたのです」

手術とその後の経過

手術は、六月二十九日に行なわれました。食道がんが喉頭にまで転移している可能性がはじめ

からありました。組織検査ではその時まで異常が発見されませんでしたが、手術をしてみないことには本当の所は分かりません。食道を切り、喉頭を切ってしまった場合、話すことができなくなってしまいます。筆談しかできないということは、ジャーナリストである主人にとっては耐えられないことです。主人は「手術の最中、喉頭にがんがあっても残してほしい。残された時間を有効に使うためにも、ぼくには声が必要だ」と強く希望し、この希望が病院側にも受け入れられ、声帯除去は見送られることになりました。手術は八時間近くを要しました。

手術後一週間、主人は意識不明でしたが、はじめて目覚めた時、次のように言いました。

「ここに、主がおられる、とベックさんに伝えなさい」

主は、おられる。主は、私と共にいてくださる。これは、主人にとって実感でしたし、事実でした。主人はずっと、一人ぼっちではなかったのです。

手術後の経過はよく、二週間目には集中治療室の中で歩き回れるほどに回復しました。ところが、その頃から、すでに肺が化膿しはじめていたのです。連日三十九度を越える高熱が出ました。そして、解熱剤と抗生物質が大量に投与され、さらに手術後も放射線治療が続けられました。八月中旬には胃に穴があき、吐血をしました。輸血、透析……体力的な衰弱に加えて、薬や治療の副作用が重なり、少しづつ弱っていきました。

主人の日記も、手術前はワープロで打っていたのですが、手術後はもうその力がなく、鉛筆でほんの数行、病状を記録するのがやっとでした。歪んだ文字が病状の悪化を語っています。

「七月七日　眼がさめたら、穆子が立っていた。この日は幻覚、幻聴、幻影の世界」

「七月二十二日　透視。痛い、連日坐薬のお世話になっている」
「七月三十一日　右腕つけ根の痛みが耐えがたくなっている」
「八月六日　朝ふるえ、発熱三十九度」
「八月九日　穆子呼ばれる。輸血。胸の傷、洗浄つづける」
「八月十七日　照射開始、第一回。部屋に帰って、倦怠感、発熱三十七度。夜三十八度以上に上がる」
「八月十九日　尿がコーヒー色になった」
「八月二十六日　急に午後二時三十分手術室へ。胸の切開。五時までかかった」
「八月二十九日　白い不思議な薬をのみ出す。輸血千ＣＣ」
「八月三十日　突然血便が消えた。尿も心なしか量が増えた。輸血千ＣＣ、気分悪し」
「八月三十一日　朝輸血のせいか気分悪し。血圧一五六―九六、尿の方はまた茶色に戻った」

鉛筆を握ったのは、この日が最後になりました。

このような状態の中で、しかし主人は主に感謝し、主とともにある永遠のいのちを確信していました。ベックさんはこの頃主人とよく話しておられましたが、次のようにおっしゃっておられます。

「透析しないと駄目だ、と分かりながら千秋さんは透析はいやだ、というんです。どうして？早く天国へ行きたいの？　と聞くと、ほほえんでうなずきました。千秋さんはイエス様を知ることによって、永遠のいのちを持つようになったから、死ぬと必ずイエス様と一緒になると確

信したのです。」

私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。（ピリピ1・23）

たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。（詩篇23・4）

また、次のようにもおっしゃっています。

「千秋さんはほんとに苦しい状態の中でも、いつも『病気になることによって、私は救いを得た』といっておられました」

あなたは、見ておられました。害毒と苦痛を。彼らを御手の中に収めるためにじっと見つめておられました。不幸な人は、あなたに身をゆだねます。（詩篇10・14）

九月十六日は、主人の五十五歳の誕生日で、この日主人はフジテレビの定年を迎える日でした。この日にはかなり体力も落ち、高熱が続き、貧血もひどい状態になっていました。私はこの日、「今度の日曜日、子供たちを連れてきましょうか」と主人に言いますと、「退院のめどがついたら、連れてきてくれ」との返事でした。主人はやつれた自分の姿を子供たちに見せたくなかったのです。元気な時の姿だけを覚えていてほしいというのが、主人の願いでした。しかし、主人は

子ぼんのうでしたから、子供たちに会いたがっていました。そこで子供たちに、主人に手紙を書かせました。子供たちは、お小遣いを出しあってバースデー・プレゼントにブラウンの電気シェーバーを買い、バースデーカードに次のように書きました。

「おたんじょ日おめでとう　早くよくなってください　いのってます　史門」

「誕生日おめでとう。あせらずにゆっくり病気を治してください。毎日祈っています。漢字もうまく書けるようになりました。偏差値も上がりました。来年は高校合格というプレゼントを贈ります。　冬樹」

このプレゼントに主人は大喜びしましたが、ブラウンの電気シェーバーは、ついに一度も使われないままとなりました。

「主の愛の中で、あなたを待ちましょう」

九月下旬には敗血症、血液凝固症、また腎不全などの合併症が重症となり、人工透析も行なわれるようになりました。十月に入ると、ついに意識がなくなりはじめました。その頃のことをベックさんは次のように話しておられます。

「私が千秋さんの口から聞いた最後の言葉は、『イエス様は、私の望みです』という言葉でした。病気の状態が急に悪くなった時、穆子夫人が何回も何回も『もうすぐ、もう少しで、イエス様と一緒になれますよ』とお医者さんと看護婦さんの前で呼び掛けたのです。死んでもイエス様とともに生きるようになるという確信こそが、彼の希望だったのです。数日後に訪問した

とき、彼はまだ何か話そうとしたんですけれども、できませんでした。奥様が『主は、ここにおられる、といいたいの？』と聞きますと、彼ははっきりうなずきました」

意識不明が一週間ほど続き、いよいよ危篤状態で、召されるのも時間の問題となった時、私は病室の主人の枕元で、六月の大手術前に「僕にもしものことがあったら開けなさい」と渡されていた主人の手紙の封を切りました。ベックさんに手術のことを「ぜんぜん心配しません」といい、笑いながら封筒の所在を示した、あの手紙です。中には、子供たち二人への手紙と、私あてのものが入っていました。いずれも便箋にボールペンで書かれたもので、長男と次男へは、次のようなことが書かれていました。長くなるので一部分を抜き書きいたします。

冬樹あての手紙の一部

「……お父さんは病に倒れたが、そのことによって主イエス・キリストを知った。それは素晴しいことだと思わないか？　父親を亡くした君の人生は平坦ではないが、主にたよって生きれば素晴しい人生が与えられる。……また天国で会おうぜ」

史門あての手紙の一部

「きみの父は召された、きみはたった九さい……どんなにいやなことがあっても、やりとおしてくれ。きみにならできると信じているよ……天国でまたあおうね」

また私あてには次のような手紙を遺しました。

「穆子へ

私の妻になってくれて十数年、地上では短かったと、すまなく思います。しかし、私は本当

にしあわせでした。私は、あなたによって二度生まれ変わりました。この世にも純粋な夫婦愛があることをあなたは教えてくれた。そして、主にある永遠の夫婦愛があることを教えてくれたのもあなただった。

私は、あなたとめぐり会ったことであなたに感謝します。深く、深く永遠に感謝します。そのように計画された主に感謝を捧げます。私は、私に信仰を植えつけてくれたことで、あなたに感謝します。

あのころ、森島穆子でなければ私は生きてゆけないとＮＹやヨーロッパで感じつづけていたのは、神の啓示であったことが、今わかるようになりました。心からありがとう。私は地上であなたを愛した。そして、召されたあとも、永遠にあなたを愛します。私にとって、あなたは最高の妻でした。とにかく、私は、心から愛したし、死後もあなたを愛しつづけます。私は愛に生き、愛の中で死にます。そして今、主の愛の中に、新しく生き、あなたを待ちましょう。愛は永遠です。

再び心からありがとう。

二人の息子を残されて、あなたの地上でのこれからの生は、決して平坦ではないことも知って、つらい思いでいますが、道はかならず開けます。すべてを主にゆだね、二人の息子を信じてたくましく生きてください。あなたなら、それをやってくれる。なにより、三人には、主の愛の衣があるではないか。

感謝と、はげましと、愛をこめて

天国で会いましょう。

千秋」

読みながら、読み終わって、私は、声をあげて泣きました。あの幸せな日々から突然の病の告知、そしてこの半年の闘病のすべての思いが押し寄せてきて、私はただひたすら泣きました。しかしやがて、その悲しみと涙の中に、イエス様にある平安の思いが忍び込んできて、静かに静かに広がっていったのです。

死も、いのちも……私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはありません。

（ローマ8・38、39）

あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」

（イザヤ43・1、4）

気が付きますと、私は主人のベッドにもたれて、イエス様が主人を救われたことを、主を信じて召されようとしている今の主人のことを、そして私も、子供たちも、天国で主人と再会できることを、心からイエス様に感謝していました。

十月九日　午前十一時二十八分。主人千秋は私たちにみとられて、天に召されました。その顔は、平安そのものでした。

私たちの国籍は天にあります。(ピリピ3・20)





私は、死の病を主人と共に闘ったと思っていました。しかし、主人の遺した日記を読み、また闘病生活の日々を通して、そうではないことをはっきりと知るようになりました。死の病を背負った人と共に闘えるのは、妻でもなく、親兄弟でも子供でもなく、ただ主イエス・キリスト以外にはない、ということをはっきりと知らされ、深い感謝に満たされました。

主人が天に召された翌々日の一九八八年十月十一日に、吉祥寺キリスト集会で葬儀が行われました。このとき、ベックさんは次のメッセージをしてくださいました。

故山川千秋さんの葬儀におけるメッセージ　ゴットホルド・ベック

愛する山川千秋さんの葬儀に際し、主のみことばを学び、主のみことばについてみなさまとご一緒に考えられることを、ほんとうに嬉しく思っております。私が千秋さんとお話できたのは、わずか半年だけでしたが、私は彼が大好きになり、彼の所へ行くのをいつも楽しみにし、お会いするといつも祝福され、そして彼から逆に励まされたのです。ですからわれわれはみな、彼から多くのことを教えられました。彼は先に、目的地に着いてしまったのです。

今日の葬儀は、「キリスト教式」の葬儀ではありません。聖書のみことばに基づいた葬儀です。そしてこの葬儀の目的は、イエス様ご自身をご紹介することにあります。神のみことばである聖書に基づく葬儀は、ふつうの葬儀とはちょっと違います。いわゆる「宗教」と呼ばれるものにおいては、いつも人間の行ない、人間の存在が中心になりますが、聖書においては人間は傍らに置かれ、イエス様がその中心となられます。

多くの人は、葬儀によって死んだ人の霊が慰められると思っていますが、それに対して主なる神は、死んだ人の霊はもはやこの世にはいない、とはっきり言っています。天に召された千秋さんの霊も、もはやこの地上にはなく、すでにイエス様の所に行っておられるのです。

救われる、つまりイエス様を知るために、人間は「キリスト教」という「宗教団体」に入らなくともよいのです。愛する千秋さんは「キリスト教」に入ったのではなく、「イエス・キリストを信じる」ことによって、いきいきとした希望を持つようになり、安心して望みをもって死に向かうことができたのです。天に召された千秋さんが、もしこの場におられたならば、彼はお集まりの皆さま方に向かって、きっと「どうかイエス様を信じてください。信じて後悔した人は一人もいません。イエス様を信じることこそ、最高の喜びなのです」とおっしゃるに違いありません。

多くの方はおっしゃるでしょう。「ほんとうでしょうかねえ」「考えられない」「信じられない」と。私は初めて千秋さんにお目にかかる前に、奥様の穆子さんにお会いしましたが、彼女もこのようなためらいを少し持っていたようです。彼女は言いました。

「主人はなかなかイエス様を受け入れないでしょう。理屈っぽくて、難しい人だから……」

けれど、初めて千秋さんにお会いするタイミングはある意味で非常によかったのです。その前の晩に、奥様は医者に言われたことをそのままはっきりとご主人の千秋さんに話された後だったからです。この奥様の決断は、すばらしいものでした。千秋さんと私はよく二人だけで話し合いましたが、いつも彼は奥様の穆子さんのことを心からほめたのです。奥様は千秋さんにとって、ほんとうにすばらしい助け手でした。そして彼はいつもそのことを心から主に感謝したのです。

私自身次女のクリステルを早く亡くしましたが、そのお墓には次のみことばを刻みました。

「私は見た。それは天にある開いた門である。『ここに上れ。』」（黙示4・1）

私と妻は、我が子が死んだのは決して病気のためではなく、主なる神が「ここに上れ」と呼んでくださり、召してくださったからである、ということを確信しています。

四月のはじめ、二度目に千秋さんと会った時、彼の挨拶はちょっと印象深いものでした。

「よく分かりましたよ、私は病気のためには死にません。主なる神の時が来なければ死にません。そして神の時は最善の時です。ですからもう、心配するのは止めました」

私は嬉しくてしようがありませんでした。なぜならこう言いうる人は、本物の信仰を摑んだとはっきり言えるからです。

バッハのカンタータに「神の時は最上の時なり」という曲がありますが、その初めの合唱の歌詞は次のようになっています。

「神の時は最良の時。神の望みたまう限り、われわれは神の内に生き、動き、存在する……神の望みたまう時、われわれは神の内に正しい時に死する」

聖書ははっきり言っています。人は病気によって死ぬのではなく、神の時が至って死ぬと。一九八八年十月九日午前十一時二十八分は、私たちの愛する千秋さんの神によって定められた時でした。

今日の葬儀の目的の一つは、聖書にある

彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならいなさい。

（ヘブル13・7）

というみことばを、みなさまとご一緒によく考えてみることにあります。このみことばは、千秋

さんの華やかだった生活を見て「私たちも同じようにしましょう」と言っているのではありません。千秋さんは「自分の人生は、虚しかった」と、はっきり告白しているのです。そうではなくて聖書は、千秋さんの「生活の『結末』をよく見て、その信仰にならいなさい」と言っているのです。千秋さんの「生活の結末の特徴」とは何でしょうか。私はみなさまとご一緒に、三つの角度からこの問題を考えてみたいのです。

1「イエス様が今日も生きておられ、私を愛していてくださる」という確信

新約聖書の書簡集の大部分を書いたパウロと千秋さんは、ちょっと似ているのではないかと思います。パウロは、もとサウロと言い、当時としては最高の教育を受けたエリートでした。彼はイエス様を徹底的に無視したばかりか、イエス様を信じる者を迫害することが神を喜ばせる道だ、と思い込んでしまいました。サウロは「イエスは、世界一の大嘘つきで、詐欺師で、神を冒瀆する人物で、十字架につけられて死んだのは当然の報いだ」と信じこんでいたのです。しかし、十字架につけられ、よみがえられ、天にまで引き上げられたキリスト・イエスは、このサウロに直接呼び掛けられました。

彼は地に倒れて、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」という声を聞いた。彼が、「主よ。あなたはどなたですか。」と言うと、お答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである……」（使徒9・4、5）

その瞬間、サウロは、長い間自分が正しいと考えていたことが実は間違いであり、自分の人生が間違った方向に進んでいたことに気が付いたのです。サウロは、イエスに背いていた自分の罪に屈しました。それから彼は熱心な伝道者となり、信仰の喜びをもって十年間イエス様のことを宣べ伝え、最後には希望を持って殉教の死を遂げたのです。彼は次のように告白しています。

私は、自分の信じて来た方をよく知っております。（Ⅱテモテ1・12）

まさにこの言葉こそ千秋さんが私に証ししてくださった言葉だったのです。彼は私に言いました。

「私は長い間真理に対して盲目でした。自分のことについてもまったく何も知ってはいなかったのです。しかし今は、イエス・キリストが私を愛してくださっただけでなく、私のためにご自身を捨ててくださったこと、イエス様が日夜私のことを思っていてくださることを知っております。イエス様は、私の個人的な救い主です」

また、私が初めて千秋さんと出会ってお話しをしたとき、彼は次のように祈ったのです。

「私は今まで神に対して無関心でした。神に背いていました。私は過ちを犯した者、わがままな人生を送った者として私の今までの罪を告白します。どうか不信仰の罪を赦してください。イエス様が私のために死んでくださり私の代わりに罰を受けてくださったことを感謝します」

神の前にこのような態度をとる人々は皆、例外なく救われます。イエス様はそういう態度をとる人々を決して捨てられません。

千秋さんは、私に納得させられたからイエス様を信じたのではありません。何かひらめくもの

があったから信じたのでもありません。いい気持ちになるから信じたのでもありません。彼は、「聖書がそう言っているから」信じたのです。つまり、千秋さんにとって唯一の拠り所は、神のお約束でした。

ここで少し、有名な人々の聖書に対する考えを見てみましょう。ドイツのマルチン・ルターは次のように告白しました。

「聖書とは、古いものでも、新しいものでもない。それは、永遠なるものだ」

イギリスの物理学者で数学者でもあるニュートンは、

「いかなる世界、いかなる歴史におけるよりも、聖書の中には、より確かな真理が存在する」と言いました。

ドイツの詩人であるウォルフガング・ゲーテは書いています。

「私が獄に繋がれ、一冊の本を持ち込むことが許されるとしたら、私は聖書を選ぶ」と。

フランスのナポレオンは

「聖書は単なる書物ではない。すべてのものを征服する力を持つ生きものである」と、言いました。

インドのガンジーは

「私の生涯にもっとも深い影響を与えたのは、聖書である」と告白しています。

アメリカの元大統領であるリンカーンは

「聖書は、神が人間に賜わったもっともすばらしい贈り物である。人間の幸福に必要なものは

すべて聖書の中にある」と書いています。

ダビデ王は

「聖書は、神のみことばは、私の足の灯、私の道の光です」と記しています。

千秋さんにとって、聖書とは何だったのでしょうか。彼が入院した時、彼は政治、経済の本を持っていったそうです。しかし、やがて彼は、こういった本を開こうとはしなくなったのです。がんだ、手遅れだ、と分かった人は、経済の本を読むことによって励まされはしないでしょう。千秋さんは朝から夜まで聖書を読んだり、聖書のメッセージが入っているカセットテープを聞いておられたということです。人間は誰でも心の拠り所、心の平安、まことの喜び、人生の内容と目的、そして生き生きとした希望を持つ必要があるからです。そうしてこういうものは、ただ聖書を通してのみ与えられるものだということを、千秋さんは知るようになり、確信するようになったのです。千秋さんは、神のみことばを通して救いに導かれ、神との平和、ほんとうの喜び、そして永遠のいのちを持つようになりました。聖書こそ、千秋さんの人生の土台となったのです。つまり、千秋さんの「生活の結末の特徴」とは、「私の考えていること、今まで思っていたこと、感じていることなどは決して大切なものではなく、ただ、神のみことばである聖書はどう言っているかが大切だ」という態度だったのです。言い換えますと、彼が発見したのは、次のようなことでした。彼はかつて私に言いました。

「私が聖書を判断するのではありません。聖書が私を判断すべきです」

聖書は、主なる神ご自身が語られたことをそのまま私たちに伝えています。聖書に書かれている

ことは、事実のみです。それらを人間が認めようが、認めまいが、事実は事実なのです。千秋さんは確信しました。「聖書は、宗教、哲学などとはまったく関係がない」と。聖書は人間が作ったものではありません。神の啓示そのものです。主なる神が語られたことは、神の啓示です。それは、上から与えられたものなのです。パウロは、次のように記しています。

私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。（ガラテヤ1・12）

神は私の内にみことばを啓示された……。信仰の土台とは、こういうものです。千秋さんの生活の結末をよく見て、その信仰にならうということはまた、人間の考えていることはぜんぜん大切ではなく、主なる神が何を考えておられるか、それこそが重要だ、ということを絶えず覚えることです。主なる神は真理であられますから、主なる神のみことばも永遠に真理そのものです。聖書に書かれている事実がちっぽけな人間に理解できるかできないかは、決して問題ではありません。信じても信じなくても、認めても認めなくても、事実は事実だからです。千秋さんの喜びの源は、神のみことば、また神の約束でした。神のみことばは、最大の宝物であり、回心の種子であり、真理そのものであり、彼の足の灯であり、彼の道の光だったのです。パウロも、千秋さんも、長い間イエス様に対して無関心でした。それのみか、パウロはイエス様を憎んで迫害しました。誰も彼をまちがった道から引き戻すことはできなかったのです。しかし彼は、どうしてイエス様を信じるようになったのでしょうか。彼は次のように記しています。

いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。（ガラテヤ2・20）

主イエスを通して明らかにされた愛は、パウロを圧倒しました。イエス様によって明らかにされた神の愛は、パウロの人生そのものを根底から変えてしまったのです。イエス様を通して明らかにされた愛は、パウロに迫り、すべてを放棄し、犠牲にし、その愛を宣べ伝えることを彼に要求したのです。

また、初代教会の人々はどうして命懸けでイエス様のことを宣べ伝えたのでしょうか。その答えは次のように書き記されています。

キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。（Ⅰヨハネ3・16）

「わたしはあなたを愛する」、これが神の呼びかけです。これは決して虚しい約束ではありません。宇宙の創造者、支配者である主は「わたしはあなたを愛する」と、一人一人の人間に呼びかけておられます。千秋さんもまた、「生けるまことの神は、私に関心を抱いてくださり、私を除け者にしないで私を愛してくださるのだ」ということを知るようになったのです。

2「主なる神によって、私の罪が赦され、忘れられている」という確信

千秋さんの生活の結末の特徴の二番目は「私のわがままや罪がすべて赦され、主なる神に忘れられているという確信でした。自分の過ち、自分のわがままを神に告白する者には誰でも、イエス様は「あなたの罪は赦されている」とおっしゃってくださいます。「罪」は人間と生けるまことの神との間にある隔ての壁です。

千秋さんは、確かに勉強家で、豊富な知識を持っておられた方でしたが、しかし一番大切な知識を得たのは、天に召される半年前だったのです。それは、「神と私を隔てている罪が、イエス・キリストの流された血潮によってすべて赦されている」という確信です。イエス様は十字架につかれた時、私たちの代わりに死んでくださったと、聖書は言っています。罪を犯す者は罪の奴隷です。罪を犯す者は滅ぶべき者です。しかし神は罪人の滅びを望んでおられるのではなく、罪人が悔い改めて生きる者となることを望んでおられます。聖書の救いとは、罪の赦しです。この救いにあずかったダビデは次のように告白しています。

幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。（詩篇32・1）

東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。（詩篇103・12）

千秋さんはあるとき、聖書の聖句を私に示してくださいました。それはパウロの次の言葉です。

私たちは、この御子のうちにあって、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。（エペソ1・7）

千秋さんも自分の汚れた過去をパウロのように思いだしたことでしょう。しかしこの過去はもう、重荷ではなくなったのです。なぜならば神の憐みを受けたからです。パウロはまた、自分の汚い過去について、正直に次のように述べています。

私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。（Ⅰテモテ1・13～15）

千秋さんは、長男の冬樹さんのことで何か悩んでいました。けれども、彼はイエス様を知ることによって、見方が変わったようです。彼は私に「冬樹が悪いと思っていたけれど、実は私が悪かったのです。悪いのは私でした」と言ったのです。また彼はこうも言ったのです。「病気になることによって私は救いを得た」。これは千秋さんの喜びであり証しでした。

不幸な人は、あなたに身をゆだねます。（詩篇10・14）

主なる神に身をゆだねる者は、義と認められ、受け入れられ、救われます。まことの幸せを受けるようになります。不幸とは、ほんとうの幸せを得るための手段に過ぎません。千秋さんのように頭を下げて自分自身を低くし「イエス様、私のわがままをお赦しください。あなた様が私の代わりに罰せられたことを心から感謝します」という態度をとる人は、誰でも罪を赦され、救われます。なぜかといいますと、主なる神は、嘘を知らないからです。ご自分の約束を守る方であるからです。主の約束は、ほんとうにすばらしいものです。

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。（ローマ8・1）

「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。」（ヘブル10・17）

わたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。（イザヤ43・25）

神は罪を赦してくださり、忘れてくださいます。もう思い出さない。心に止めない。主なる神の救いとは、こういうすばらしいものです。

3「死から永遠のいのちに移されている」という確信

千秋さんの生活の結末の第三の特徴は、「私はイエス様を信じることによって、もうすでに死から永遠のいのちに移されている」という確信でした。初代教会の救われた人々は、次のように告白しています。

私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。（Ⅰヨハネ3・14）

御子を持つ者はいのちを持っており、御子を持たない者はいのちを持っていません。（Ⅰヨハネ5・12）

千秋さんは、イエス様を信じることによって、永遠のいのちを持つようになったのです。イエス様は真理そのものです。イエス様を知る者は、自由になります。イエス様は次のように約束してくださったのです。「わたしは真理です。わたしがあなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです」。千秋さんは、イエス様を知ることによって、永遠のいのちを持つようになったから、死ねば必ずイエス様と一緒になる、と確信したのです。

たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。（詩篇23・4）

千秋さんもまた、死の恐れから解放されていました。私は彼が大きな手術を受ける前の日の六月

二十八日に会って、少しお話しました。彼は言いました。「私は全然心配していません」「けど、遺書ぐらいは書いたでしょう?」彼は「もちろん」と笑いながら封筒を私に見せてくれたんです。

手術後彼は一週間意識不明でしたが、はじめて目が覚めた時、奥様に言われたのです。「ここに主がおられる、とベックさんに伝えなさい」と。

手術の前に、彼は一度もこの病気を治してください、元気にしてくださいとは祈らなかったようです。「みこころであるならば、私を天国に召してください」と祈ったそうです。また、透析しないとだめだ、と分かりながら、彼は透析はいやだ、と言ったのです。「どうして? やはり早く天国に行きたいの」と聞きますと、彼は笑いながらうなずきました。意識がある内に彼の口から私が聞いた最後の言葉は「イエス様は私の希望です」という言葉でした。もう、話す力がなくなってしまった時、奥様が「ここに主がおられるといいたいの?」と聞きますと、彼ははっきりうなずきました。

千秋さんの生活の結末とは、そういうものでした。死んでもイエス様と共に生きるようになるという確信こそが、彼の「生活の結末の特徴」でした。

イエス様は、あらゆる災いを転じてよいものとすることがおできになる、偉大な救い主です。

イエス様は、いかなる罪も赦すことがおできになる偉大な贖い主です。

イエス様は、あらゆる束縛から解き放ってくださる偉大な解放者です。

イエス様は、死の恐怖に繋がれて奴隷となっている人々を解放してくださるために、十字架の上で救いの代価を払われたのです。

そして、死の恐怖からの解放こそが、聖書によって提供されている「救い」です。

来るべき天の御国の栄光をめざして

聖書は、天の御国について、次のように述べています。

> 神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。（黙示21・3、4）
>
> もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらない。（黙示22・5）

ほんとに、来るべき栄光は、すばらしいものです。ですから聖書はこう言っています。

> 今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。（ローマ8・18）

私たちは千秋さんの生活の結末の特徴をよく見てきました。それはまた、この本の他の部分で多くの人々によって証しされているように、千秋さんだけでなく主イエスを信じる人々すべてに共通した特徴です。私たちは、彼らが死に際してとった態度をよく見て、その信仰にならわなけ

ればなりません。私たちは目先のことだけでなく、将来のこと、いつかは確実にやってくる自分の死について、真剣に考えなければなりません。

がんになり、脳卒中になり、心臓病になり、年を取り、死が近づいてきたなら、いったい私たちはどうすればいいのでしょうか？

主イエスを信じている人は、そのような状態に置かれても、絶望的にはなりません。なぜならその人は、イエス様の復活にあずかり、永遠のいのちを持っているからです。死んでも生きる。死んでもイエス様と一緒に生きる。これこそが私たちに与えられた、死に対する唯一の真の解答であり、神が備えてくださった驚くべき恵み、また救いなのです。

イエス様を信じて天に召されていく人々こそ、真に幸福な人々です。

▼ニューヨーク・スカースデールの自宅の庭で、ご夫妻と長男冬樹さん。



▼1988年10月11日葬儀の日、穆子さん、史門さん、冬樹さん。



世にある限り主を伝えん

深見邦枝



▲花束を抱いて受洗を喜ぶ邦枝さん。

一八九九年七月十日京都府下井田村に生まれる。額田高等小学校卒業後実家で家事手伝いをしながら裁縫などを習う。一九二六年深見哲雄さんと結婚。一九四五年哲雄さん天に召される。その後中野で菓子店を約四十年経営。長男忠利さん、次男令考さん、三男嘉哉さん。



◀荻窪家庭集会で
救われた喜びを証しする邦枝さん。

私のような者が神さまによって見出され、今日まで主の深いご愛と導きによって守られてまいりましたことを何と感謝してよいかわかりません。これまでの九十年の人生の中で主は大きなことから小さなことまで愛の御手を差し延べ、また折にかなった助けを与え続けてくださいました。私は十七才の時に教会へ導かれ、それから七十余年の年月が過ぎました。聖公会に身を置きながらも、もっと霊の豊かな恵みにあずかりたいと求め続け、あちこちの教会をめぐり歩いておりました。そうするうちに、四年ほど前、ある方から一冊の本をいただきました。それが吉祥寺キリスト集会の証し集「光よあれ」の第二集でございました。それを拝見しますうちに、お一人お一人の素直で素朴な証しに驚き、また感動いたしまして、ぜひ一度うかがいたいと思いました。そして吉祥寺集会に集わせていただき、私は主に心から感謝いたしました。この集会こそ私の集うべき所であることをはっきり感じたからでございます。

それまでの私は奉仕にバザーにと駆け回り、結構良いクリスチャンだと思っておりましたのが大きな間違いであったこともわからせていただきました。吉祥寺集会に来て初めて私は、ああ大変だ、私は油のない五人の娘（マタイ25章1から13節のイエスさまによるたとえ話）の一人だったと示されたのでございます。そしてこの集会は使徒の働きの時代のようにただ聖書を中心とし、生きて働かれるイエスさまのご臨在のもとにお一人お一人がしっかりと主につながり、みことばに拠り頼む信仰を与えられていらっしゃることがわかりました。またお証しをうかがいますと半年や一年で次々に家族の方が救われていらっしゃるご家族が大変多いのでございます。私は七十年たちましてもまだ家族が救われておりません。けれども集会に集わせていただきましてから、

家族の救いもみことばによって信じることができるようになりました。長い信仰生活の総仕上げをさせてくださるために、主が私をここに導いてくださったことを心から感謝いたしました。イエスさまの十字架の意味も、この集会に導かれてからはっきりと知りました。罪の染みだらけのこのような者が、イエスさまの十字架の血潮によって聖くしていただき、大胆に神の聖所に入ることが許されておりますことを、みことばや集いを通して確信させていただきまして、本当に感謝と感激の毎日でございます。

ここで今日に至るまでの私の小さな信仰の歩みと主のお導きについて少し証しさせていただきます。私は一八九九年七月に京都府下丹波の山村に生まれました。私の生家には六百年も前の日蓮在世当時の仏壇があり、桐箱に入った難しい巻物の経典もたくさんございました。おじいさまっ子だった私は、いつも祖父の膝の上に乗せられて難しいお経を子守歌がわりに聞かされておりましたので、四才の頃にはわけもわからないままにバリバリとお経を読むようになっていたそうでございます。そして誉められるとなお一生懸命にお経をとなえるという具合に育ちました。けれども、父が私の十二才の時に亡くなり、続いて祖父も亡くなりました。そしてその後いろいろな事情があり、その古い家をたたんで母は名古屋に出る決心をしました。

名古屋で成人した私は、祖父の遺言でお寺のお庫裡（くり）さまになることになっていました。けれどもお寺に行くならお寺に足りないものをどこかで見つけて持って行かなければならないと思いまして、天理教とか本願寺とかまたお宮に行って手をたたいてみたり、いろいろなことをいたしました。ただ教会だけは十字架が立っていて何となく陰気くさいからあれはだめだと思っておりま

した。そうしましたら、ある時「ただ信ぜよ……」と太鼓を叩いてラッパを吹いている方たちに出会ったのでございます。何だろう、にぎやかだなあと思って立ちどまって聞いておりますと救世軍の方々でした。パンフレットをいただいて読みますうちに、驚いたことが二つございました。一つは耶蘇のお茶屋さん、もう一つは耶蘇の芋屋さんのことが書かれておりました。何だろうと思って読んでみました。明治の頃にはイエスさまのこと、またイエスさまを信じることを世間では耶蘇と申しており、この耶蘇のお茶屋さんというのはある女郎屋さんのことでした。このお店のご主人は、悔い改めて救世軍に入ってから、十八人のその家の女の人たちを全部解放してあげて、本当のお茶屋さんになったと書いてあるのです。これはうちのお寺のやり方とはずい分違う、大したものだと思いました。次に芋屋さんの方はどうかと申しますと、そのお店は以前さつま芋で焼酎を造っており、大変お金が儲かったそうです。でもその方は焼酎でアルコール中毒などの害が起こることを知って、その後大学芋屋さんになり、たくさん儲けたお金を救世軍の病院とか社会事業に寄附しているということでした。このことを読んだ私は、この方々の信仰は本物に違いないと思ったのでございます。

私が行っておりましたお寺では寄附の額の大きな順番に名前を書いて貼り出すのでしたが、いつも一番たくさん捧げる人はある芸者さんでした。その人は信仰芸者という名前がつくぐらい信仰熱心なのです。そしてお金をお客さまからまきあげることも大変上手だったそうで、そのためにお客さまの家庭に大変な不幸が起こったりすることがよくあると聞いておりました。とにかく大変商売上手な芸者さんでした。ところが、その人はお寺にお参りしますと、「罪障消滅」と何

回も何回も一生懸命いい声で拝むのです。そして次にはまたきれいな声で大そう熱心にお経を読むのです。そしてそれが済むと、「私はたくさんのお金も捧げて来たし、これで罪障も消滅されたから、さあこれからはがんばってたくさん稼ごう」という人だったのです。その街のお宮さんにもどこにもその人の名前が書かれたガス燈がございました。そんなふうに寄附はどんどんするので、どんなにお客さまの家庭を破壊しても信仰芸者で通っており、商売は商売、どんなに人を困らせてもお金を寄附してお経をとなえさえすれば許されると信じているのでございます。そしてお寺もそのお金を何の疑問もなく受け取っておりました。そこで私はあの耶蘇のお茶屋さんと私のお寺とをくらべてみました。そしてやはり、悪いと思ったことを悔い改めて生き方をすっかり変えることのできる耶蘇の方々の信仰こそ、本当の信仰であり、そのようなすばらしい御業をなさるイエスさまこそまことの神さまだと信じたのでございます。

それから私は時々教会に足をはこぶようになり、牧師さんもたまに家を訪問してくださるようになりました。するともう母が大変怒りまして、牧師さんがお帰りになると塩をまいて掃き出して家を清めなければと申し、「お前はほんとに親孝行だけれども、私の一番嫌いな外国の耶蘇を信じるなんてとんでもないことだ」とさんざん叱られました。聖書から何から全部焼かれてしまいましたが、小さな聖書を隠し持っておりますと、また読んでいるのだろうと物指しでピシピシとたたかれるほどでございました。私が叱られるのはいいのですけれど、苦労の多い母に心配をかけるのはほんとうに申し訳ないと思いました。けれどもそういう時が大分続きました。結局私はどんなにいじめられてもしかたないけれど母が気の毒でたまりませんでしたので、しばらく聖

書とお別れしようと、ある日山に登ってまいりました。聖書は家で許しが得られるまで教会にお預けしようと決心しておりました。しばらく座っていてから、まだお祈りの仕方も聖書もよくわかりませんでしたけれども、夕方になりましたので「神さま、しばらくお別れでございます」と言って、聖書のどこを読んでよいかわからないままに開きましたところ、「汝我を選ばず、我汝を選べり」というみことばが目に入ったのでございます。私はいろいろな宗教を調べて、良いものがあったらお寺に持って行こうなどと考えておりますうちにイエスさまに出会わせていただき、イエスさまこそまことの神さまに違いないと自分で選んだつもりでおりましたら、それは大間違いで、何というすばらしいことでしょう、神さまが私を選んでくださっていたこともそのみことばからはっきりと示されました。こんなに有難いことがあるでしょうかと、もう涙が溢れて溢れて、これではもうしばらくお預けという訳にはいかなくなりまして、また信仰の戦いが始まりました。

そのうち、とうとう家には置いておけないと母が申すようになりましたので、宣教師の方にそのことをお話しいたしますと、宣教師の方の家でお手伝いをさせてくださることになりました。苦労の多い母には本当に自分勝手なことをしているようで申し訳ない思いで一杯でございました。教会では一生懸命祈っておりましたが、聖公会ですのでお祈りもみな祈祷書なのです。ですから個人的なお祈りがあることをまったく存じませんでした。けれども、とにかく神さまを信じて行こう、私は日蓮宗には行かれない、どんなことがあってもこの信仰を守り通したいと思う一心でございました。

それから数年たちまして、だんだんと母の心もやわらぎ、私も結婚することになり、子供も与えられました。そのころ母がひどい座骨神経痛を患っておりました。主人の友人の別荘が別府にあり、そこに母の病気に良く効く温泉があるということを聞きまして、主人の会社もちょうど九州にありましたのでそこに住むことになりました。母は毎日浜に行っては砂の中にうまって神経痛の治療をしておりました。ある日のこと、母はいつものように出かけて行きましたが、夕方まったく違った様子で帰ってまいりました。目をまっ赤にはらして「すまなかったなあ」と申しますので「どうしたのですか」と聞きますと、「今日はとんでもないところに行ったよ」との返事です。「どこへ行ったのですか」と聞きますと、なんと教会へ行ったと申すではありませんか。今日はいつもと反対の道から行こうと浜へ向かう途中、人がどやどやと入って行く所があり、いったい何事があるのかと思ってついて入りますと、その日その教会では、母のなつかしい丹波の笹山の方のお葬式があったというのです。昔大変な遊び人だったその方が、耶蘇に救われてとても熱心になられ、その別府の教会の役員を長く続けられてから召されたというそのお葬式だったのでございます。とにかくすばらしいお葬式だったようですし、丹波の笹山の方がどうして九州の別府に来られたのだろうかと耳を傾けている母にまわりの方々がとても親切にしてくださり、イエスさまのお話を聞いているうちに母は本当に今まで悪いことをしたと後悔したとのことでございました。これまでイエスさまを信じたために私をいじめたこともすなおにあやまり、「イエスさまは私のような者を赦してくださるだろうか」と涙ながらに申しました。私は本当に嬉しくなって母に「イエスさまは本当に悪かったという気持ちがあれば全部許してくださるのですよ。

それよりもお母さんにそむいていた私の罪を許してください」と申しました。

それから母はすっかり変わりまして日曜になると教会に行きなさい、行きなさいと申すようになりました。母もいっしょに行くというところまではまいりませんでしたが母の態度はまったく変わりました。そして母は数年後に名古屋に帰りましてまた別の病気で病院に入りました。その時東京に住んでおりました私は、十日に一度ぐらい見舞いにまいりましたが、いつもお祈りをしてほしいと母が私に頼むのでございます。私が手を握ってお祈りをいたしますと安らかになって喜び、いつも私が行くのを待っていてくれました。しばらく後に召されました時もその顔は生前よりも二十才も若くなったようだと不思議がられたほど平安で、喜びと感謝に輝いておりました。昔の家のことですからお葬式は旧いしきたり通りでいたしましたけれども、神さまは母を救ってくださったのだと本当にわかるようにしてくださり、私は感謝で一杯でございました。

その後、戦争で主人の会社もつぶれてしまいましたうえに、病気をしたこともなくいっしょに同じ教会に通っておりました主人が急性肺炎になって突然召されました。その時四十六才の私は、一番下が四年生の三人の子供を養っていかなければならなくなりました。家も焼け出され、これからどうしたらよいでしょうかと神さまに一心にお祈りをいたしました。寮の栄養士になりたかったのですが、三人の子供を連れては寮に入れません。困っておりました時に相談に乗ってくださる方があり、お菓子屋さんならできるでしょうと、仕入れから何から教えていただきました。お店を始めたものの、お人好しなので商売だか何だかわからないようなことばかりして、ほんとに困り者でしたけれども、一生懸命がんばってどうやらやっていけるようになりました。ところ

がお世話をしてくださった奥さんがとても頭のいいやり手の方で、近くの家があいたからと言ってその方がラーメンやお酒を売るお店を始められることになりました。そしてそのために当時で合計四十万というお金を借りなければならなくなり、私に「ちょっと判を押してくださいな」と言われましたので「何のためですか」とお聞きしましたら「保証人をお願いしたいのだけれどあなたには決して迷惑をかけないからちょっと判を押して」と申されました。聖書には保証人になってはいけないというようなみことばもあり、私もどうしたらよいか困りましたが、お世話にもなりましたのでお断りもできずに判を押しました。

それから一年ぐらいたった時、そのお店はお酒を売るために貸し売りがかさみ、高利貸しからお金を借りていたらしいのですが、私の知らないうちにその方がどこかに行ってしまわれたのです。そのために私のところに高利貸しの集金人が何人も来るようになり、お菓子の売上金を毎日みんなその支払いに当てなければならなくなってしまいました。その時は本当に困り果ててしまいました。毎日厳しい生活でますます借金の利子がかさみ、どうしようもなくなってまいりました。そしてとうとうある日執達吏もやってまいりました。なにかむずかしい顔をした男の人が二人やってまいりまして、一人は黙ってさっさと中に入り、一人は外に立っていますので「何ですか」と聞きますと「こういう者です」と言われ、名刺を見ますと執達吏なのです。これが話に聞いたことのある差し押えでございました。そこらじゅうペッタンペッタンと紙を貼られてしまいますし、その頃は本当にどうしたらよいかわからずただ毎日聖書を開いては一生懸命神さまに「みことばを与えてください」とお祈りをしていました。するとある日次のみことばが与えられ

たのでございます。

恐れるな。あなたは恥を見ない。恥じるな。あなたははずかしめを受けないから。あなたは自分の若かったころの恥を忘れ、やもめ時代のそしりを、もう思い出さない。あなたの夫はあなたを造った者、その名は万軍の主。あなたの贖い主は、イスラエルの聖なる方で、全地の神と呼ばれている。（イザヤ54・4、5）

ああうれしい。私の「夫」が全宇宙を所有し支配したまうお方であるなら、百万やそこらの借金ぐらいなんとかしてくださるだろうと、このみことばによって私の重荷はすっかりなくなってしまいました。最高のみことばをいただきましたので涙が出るほどうれしくて、その翌日からは全然不安がなくなってしまい、借金取りがやって来ましても「主よ、やってまいりましたよ」というような具合で、主にすっかりお頼りすることができるようになりました。そうしておりますうちにご近所の方も、あの未亡人は三人の子供を学校にやっているのに保証人になったために借金をかかえて苦労しているらしいから、最初借金をした人を探してやらなければいけない、と思ってくださり、区役所かどこかで探し出してくださって借金は元の方が支払ってくださることになりました。そしてみことばをいただいてから一年後には、すっかりこの問題が解決いたしました。

本当に、大きいことから小さいことまで、主はこんなに無知無能な私をもかえりみてくださって、そのお店を四十年くらい続けることができるようにお導きくださいました。寝ている暇もないほど忙しい時もございましたが主は憐れんでくださり、病気になりました時も大したことにな

らずに済んでまいりました。

ところが一昨年の夏、お店の貸し主の方がこの建物を壊して建て替えるので転居してほしいと言われました。私は年も九十近くなり、お店を続けていくことも難しくなりましたので、この機会に小さいアパートに移ることになり、今の住居を与えられまして感謝しております。今度のアパートに替って困りましたのは、目が悪くて鍵がかけられないということでございました。暗がりで鍵穴に鍵を差し込むのが大変なんですけれど「主よ、主よ」と主にお願いしますと、ちゃんとはまるのです。自分であわててやろうと思っても一度もできたことはありません。本当に何とすばらしい主だろうと思います。大きな借金も主が解決してくださいましたし、小さいことは階段を上がるのも鍵をかけるのもお財布をしまい忘れた時も、いつでも「主よ」と言って主にお願いいたしますとすぐに聞いてくださるのです。自分であわてて探している時はちっとも出てまいりません。まったく不思議でございます。

そういう失敗だらけの年寄りでございますが、ただ主の憐れみによりまして何十年もの間この通り守られてまいりました。この証しの最初で述べましたように、霊的に求め続けておりました私を主は吉祥寺集会に導いてくださり、今まで求めても得られなかった霊的な満たしを与えてくださいました。日曜の礼拝も集会の皆さま方が次々と立たれて聖書からみことばをお読みになり心から主を礼拝していらっしゃるお姿を見て、私は初め「何日ぐらいこの練習をなさるのですか」とうかがったほどでございました。そうすると「いいえ、練習など全然しませんよ、その時その時イエスさまから心に示された方が立って祈られるだけですよ」と答えられて、私はまった

く驚いてしまいました。集会のみなさま方のお顔も明るく輝いて平安に満ちておられます。今までどこを探しても吉祥寺キリスト集会のような教会は見つかりませんでした。どこの教会の方もそれはそれは一生懸命なのです。同じ時間を費しておられます。でも喜びがないし確信もないのです。本当にお気の毒に思います。

また吉祥寺キリスト集会の方々がご自分のご家庭を開放してお開きになるいろいろな家庭集会にもうかがわせていただきましたが、どこでもイエスさまを中心として皆さまが仲よく生き生きと語りあわれ、聖書の学びを通し、また証しを通して生きてお働きになるイエスさまを身をもって証ししておられます。けれども、この集会が主によってここまで導かれますまでには、ベックさんご夫妻がはるばるドイツからおいでくださって今日までどんなにご苦労なさったことでしょうか。しかし今、主の豊かな祝福により多くの方々が導かれていらっしゃり、お月謝もいりませんし出入りはまったく自由で、ただここに集うだけで本当に満たしていただけるのでございます。お一人お一人の集会に集う方々もこのような年寄りにいつもご親切にしてくださり、感謝の申し上げようもございません。このような集会にお導きくださいました神さまに心から感謝し、これからはこの枯れ木に等しい者も、なんとかして主のすばらしさをお一人でも多くの方にお知らせしたいとお祈りいたしておりました。

そうしておりますうちに、今秋かぜをこじらせまして、東海大学東京病院に入院させていただくことになりました。これまではお医者さまにかかることもあまり好まず、と申しますよりは、とても入院などしている暇のないような生活の中でなんとか主の憐れみによって守られ、過ごさ

せていただいたのでございましたが、このたびはあまりに咳がひどいのをご心配くださったまわりの方々のお勧めに素直に従いまして入院させていただきました。すると思わぬ大病が発見されたのでございます。いろいろな検査をしていただきますうちに、大腸の一部にがんがあり、その部分が極端に狭くなっており、もしそのまま知らずにおりましたら、すぐに腸閉塞になるところだったそうでございます。直ちに手術ということになりました。九十才近くになっての手術ということでございましたが私にはまったく何の不安もございませんでした。以前の信仰では、召されたら多分天国に入れていただけるだろうという程度で確信がなかったのですが、今はみことばを通して救いの確信をいただいておりますのでまったく怖れはございませんでした。生まれて初めての入院、初めての手術でございましたが、イエスさまのみこころなら一日も早く天の御国に入れていただきたいですし、もしまだ地上でご用があるのでしたら主はもう少し地上に生かしてくださると信じて、まったく平安のうちに手術に臨むことができました。

手術直後に、慢性気管支炎からのひどい咳と傷口の痛みで苦しんでおりました時、夢うつつの中で私は暗い長いトンネルのような所に立っておりました。ずっと先の方には二つの出口が見えておりました。その一つははっきり天国とわかるような広くすばらしい、明るく輝いた所でございました。そして、もう一つの出口はこの地上の景色でございました。私は早くこの暗いトンネルから出たいと思い、どちらの出口に出していただけるのだろうかと焦っておりました。すると「ゆだねよ」とおっしゃる主の御声が聞こえてきたのでございます。「ああ、そうだ、主はみこころにかなう出口へと導いてくださる」と思い平安が与えられました。そして導かれた出口は再

びこの地上だったのでございます。術後の経過も良く、もうしばらく地上に留まって主のご用をさせていただくのがみこころだったことを夢と現実を通してはっきりと示された思いでございました。

それにつけましても、入院中につくづく思わされましたのは神さまをご存知ないお年寄りはなんとお気の毒でしょうという事実でございました。年を取って体も弱り、先には何の希望もなく、財産がどんなにあっても死ぬ時は何も持って行くことはできませんのに、病院の中でさえご自分の財産の心配をなさり、あの人にもあげたくないしこの人にもあげるのが惜しいと思い悩んでおられる方さえいらっしゃいました。けれども、イエスさまは信ずる者には永遠のいのちでさえも代価なしに与えてくださり、病める時も悩みの時も手を取って引き上げてくださり、「汝安かれ」と慰め励ましてくださるのでございます。年取って老い先短い病人にどんな人間の言葉が慰めになるでしょうか。いくら「がんばってください」とか「安心してください」と言われても、何の根拠もない空しい言葉にしか過ぎません。言うべき言葉をご存じないために、空しいと知りつつそのような言葉をかける方もまたかけられる方も、なんと悲しく淋しいことでしょう。

しかし、生きて働かれるまことの神イエスさまを救い主として受け入れた者は、年を取ってもこの世の生活の後には天の御国でのすばらしい生活が待っているというはっきりとした希望を持っております。そこでは

神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。

（黙示21・3、4）

と約束してくださっているのでございます。また地上に置かれておりましても、私の約七十年間の信仰生活で体験いたしました通りに、主はすべての必要を満たしてくださり、私たちの祈りを聞いて最善の時に最善の導きを与えてくださるお方なのでございます。このようなすばらしい主イエスさまを知った喜びを私だけで隠し持っていたのでは申し訳がない、お一人でも多くの方にこの主を証ししなければ天国へのおみやげが少なくなってしまいます。

ちょうど病院のベッドの上で、私ばかりがこのようにすばらしい主に救われこんなにたくさんのお恵みにあずかっていては本当に申し訳がない、なんとかしてこの主を多くの方々にお知らせせねばという思いで一杯になっておりましたその時、集会の方々がおいでくださいまして、私のような価値もない者の証しをも主は必要としてくださり、証し集に載せてくださるという思いがけないお知らせをいただいたのでございます。このように小さな者の願いをもお聞きくださる主はまことに全能のお方でございます。十字架はすべての解決であり、主に不可能はございません。

私が救いを祈ってまいりましたあの方この方、そして私の家族の救いもきっと主は成就してくださる、どんなにかたくなな方をも主はお救いくださるという確信をも今は主によって与えられております。

私が自分の病気のために苦しんだとしてもそれは自分のためでしかないのでございますが、イエスさまはあのように私たちの罪のために釘打たれ、いばらの冠をかぶせられ、御血を流されながら「父よ、彼らを赦したまえ」と私たち一人一人のために父なる神さまにとりなしてくださったのでございます。

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。（ヨハネ14・6）

イエスさまご自身がこのようにおっしゃっておられます通り、たとえどんなに善行を積んだとしても、このイエスさまの十字架上での罪の赦しをご自分のものとして感謝してお受けにならなければ、またこの主をご自分の救い主としてお受け入れにならなければ、天の御国に入れていただくことはできないのでございます。主のご再臨も間近い今、もっともっと多くの方にこの救い主イエスさまをお知らせせねばと思うばかりでございます。知恵もなく力もなく体力もない私を主が憐れんでくださり、世にある限りこの主イエスさまを証しさせてくださいますように切に祈る毎日でございます。

▼ベックさんと吉祥寺集会の原田良枝さんのお見舞いを受ける邦枝さん。東海大学病院（代々木）で。



もはや私ではなく、キリストが私の中で

故　笹川郁夫

一九五二年鳥取県に生まれる。成徳小、烏帽子中、赤塚高、京都産業大卒業後、㈱小泉製麻勤務。妻公子さん、長女友代さん、長男鉄平さん、一九八七年九月二十八日天に召される。



▲点滴をしながら軽井沢バイブルキャンプに参加した郁夫さん。1987年5月重田さんの別荘で。



◀東海大学病院に入院中、重田さんと。

一九八七年五月四日、軽井沢キャンプの集会において、笹川郁夫さんが演壇に立った時、集まった人々の間に感動のざわめきが広がりました。ここに集まっている人々はみな、笹川さんが重症のがん患者で、とても軽井沢にまではるばるやってこられるような状態ではないことを、ましてや演壇に立って話をするなど思いもおよばない体であることをよく知っていたからです。彼が演壇に立つと、その弱った体に徐々に生気がみなぎりました。彼は、この世では後わずかな生命だと知りながら、どうしても集会の人たちに、初めてキャンプにきた人たちにお話をしたくて、車に揺られ、点滴を受けながら、ここまでやってきたのです。彼は少しの間、集まっている人たちをいとおしむように見渡した後、次のように語りはじめました。そしてこれが、彼のこの世での最後の証しとなったのです。次にお載せするのはその全文です。その後に続けて奥様の公子さん、また笹川さんの面倒をなにくれとなく看られた医学博士の重田定義さんの証しを掲載します。併せてお読みください。

笹川郁夫さんの証し

簡単な略歴から申しますと私は神戸市の出身です。けれども生まれたのは取鳥県の母の実家でした。難産だったせいで、母親は私を産むとすぐに亡くなりました。当時父親はクリーニング業を始めたばかりで、軌道に乗るか乗らないかという時期でしたので、乳のみ子をかかえてやってゆくのが大変だったため、半年間ほど親戚の間をミルクをもらいにまわった後、私は現在の笹川家に養子として迎えられました。養父母には子供がいなかったので、一人子として可愛がられて

育ちましたが、私は自分の生い立ちを小学校六年くらいの時に知りました。そして子供心になんと自分は不運な人間だろう、この世に神も仏もいないのではないだろうかなどと、少しひねくれた心を持つようになりました。その上大変なわんぱく坊主で、したい放題の事をしてきて、しかもそういう環境で育てられたものですから、自分一人で何でもやり遂げる習慣がつき、それが自信に変ってきて何でも自分でできると思い込み、まるで自分が全能者であるかのような錯覚におちいっていました。そのようにして成長し、大学を卒業して神戸市内の企業に就職し、転勤で東京に来て約九年になります。こちらに来てからも別に何不自由ない生活を送っており、仕事の方も順調に行っていましたので、私には全然神さまの存在は必要ありませんでした。

ところがそのようなごう慢な私を、神さまは祝福してくださったのです。去年の六月、胃の具合がおかしくなりました。ふだんから健康にも自信がありましたし、スポーツもやっており、体も今の私からは想像できない大きな体をしていましたので、それまではまったく医者に頼った事がありませんでした。しかしどうも具合が悪いので近くの病院で検査を受けたところ、初期の胃がんと診断され手術しなければならないと言われました。ところが自分ではどうも信じられません。自分に限ってそんな病気になるはずがないし、自分の努力によってそんなものは治るのではないかという気持ちもありましたが、今度ばかりはそうもいかず、ついに手術することになりました。ところが入院する段になると非常に怖いのです。今まで病気になったこともないし、痛みとか苦しみを味わったことのない人間ですから、一日でも入院するということが不安でしかたがないのです。検査そのものも怖いし、手術などに至っては病院から逃げ出したいほどでした。こ

んなに自分は情けない人間だったのかとそこで始めてつくづく知りました。

そんな思いでいた手術の前日にベックさんがお見舞に来てくださいました。そして私に聖書からのみことばをくださり、三位一体の神について話してくださいました。それまでも私はこの宇宙には非常に関心を持っていましたので、何もない無の状態からこういう無限大のものを、いったい誰が造ったんだろう、この大自然、地球そのものを造ったのはすごい神さまに違いないという気持だけは持っていました。そしてその神さまと聖書に書いてある神さまとが、ベックさんとお話してみて初めて一致したのです。その時ベックさんが携えて来てくださったのは次のみことばです。

父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。

（ヨハネ6・37）

これは私が聖書に接して初めていただいたみことばでした。私はこのみことばにひどく感動し、神さまはそのように捨てないお方なのだから、自分から飛び込んでいけばよいのだと思い、安心して手術を受けようという気持になり、翌日、ほんとうに平安に手術を受けることができました。術後は非常に経過も良く、三週間ほどで退院できました。入院中は病室で毎日毎日聖書を読みました。初めて聖霊の働きを受けた時ですから感激の毎日で、自分で聖書を開いてもみことばがパッと飛び込んできますし、また集会のみなさまが見舞いに来てお話ししてくださったことを夜思い出したりするともう感激で一杯になりました。誰でも病気になると心が弱くなると思いがちで

すけれども、心が弱くなって悲しくて涙が出るのとは違って、嬉しくて嬉しくて涙が出るのです。病室でほんとうに毎日のように自分の感激をどう書き記そうかと思っては、嬉し涙にくれていました。

入院中はこのように喜んでいたのですが、退院してからの私はまだ聖書を知ったばかりで肉的な思いが非常に強く、思うことがまた人間中心になってしまいました。体が大きかったせいもあり、胃を切って体力が落ちたとはいえ体重は七十キロ以上ありましたし、会社へもすぐ出てふつうに仕事ができるような状態でしたので、まだ神さまを第一とすることができませんでした。そして自分を第一として自分の気力と体力でこの病気を治してやろう、そして自分でできないことがあった時には神さまにお祈りしようというような身勝手な信仰になってしまいました。ですから聖書も自分の都合のいい時に読む程度でしたが、集会だけは出なければならないと思って毎週日曜日には集会に出席していました。けれどもまだその頃はただ形式的に集会に出ていただけで、自分と神さまは一対一で心が通じ合っているのだからそれでいいじゃないかと自分勝手な解釈をして、集会の方々とのおつきあいをまったく避けていました。握手をしたり、顔を見て話すのが嫌で嫌でしかたがなかったのです。結局まだ救いの確信が得られていなかったからだと思います。

こんな不信仰な私を神さまは今度は徹底的に砕かれました。今年の三月になってまたおなかの具合が悪くなり、今度は腸の方がどうもおかしいのではないかと思い、重田さんのご紹介で東海大学病院に入院し、いろいろな検査を受けた結果、腸にもがんがだいぶ拡がって来ている、ということが分かりました。ところが検査がようやく終ったころ、腸閉塞を起こして緊急手術をする

ことになってしまいました。しかし、これも主の恵みで、この時腸閉塞になったおかげで、がんのために二週間ももたないところまで来ていたことがわかった、と手術後主治医が話してくださいました。初めはがんの再発なのだから今度入院したらもう最後だと感じていましたから、いつ死ぬんだいつ死ぬんだという思いばかりが頭の中にあって、聖書のみことばが信じ切れない、そんな状態で不安と絶望におびやかされていました。けれども入院したその日から重田さんが毎日見舞いに来てくださり、また集会のみなさま方にも来ていただきましたが、そのお見舞の時に皆さんがそれぞれみことばを携えて来てくださるのです。そして不思議なことに入院してからはみことばが素直に全部心に入って来るようになったのです。ほんとうに不思議なのですけれども、その時その時に必要なみことばが毎日来てくださる方々からいただけるのです。今日はこんな思いをしているから、こういうことで悩んでいるからと祈っていると答えのみことばがさっと与えられるのです。毎日みことばで養われているようでした。そして急速に信仰が深くなって、自分でも考えられないほど心の状態が変ってゆき、毎日自分が喜びで満たされるようになりました。腸閉塞の手術の後などは口から何も入れずに三週間過ごさなければならなくなり、かなり参った時もありましたが、みことばの糧によって病室の中でも明るく過ごせるようになりました。

あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。

（ヤコブ4・14）

というみことばが与えられた時、ほんとうに今まで自分に頼って自分がすべてだと思っていたごう慢な私は、こんなに人間というものが頼りないものかと初めて思い知らされました。あれほど強靱を誇り、自分は鉄人だと思っていたような自分の肉体もほんとうに弱いもので、自分ではどうすることもできないただの肉の塊にしか過ぎず、時が来れば消えていく霧のようなものだと実感しました。その時は失望してしまい、生まれて来ても何もいいことが無かったなあというような気持になりましたが、すると今度は次のみことばが与えられました。

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

（Ⅰペテロ5・7）

霧にしか過ぎない自分がどんなに心配してもしかたがない。神さまがかわりに心配してくださると言っておられるのだから、すべてを神さまに委ねようという気持になって来ました。そうすると今度は救いに関するみことばかりが聖書の中から目に飛び込んでくるのです。たとえば、

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

（イザヤ41・10）

恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。

（イザヤ43・1、4）

このように非常にありがたいみことばが与えられ、ほんとうに恐れなくてもいいのだ、神さまが私といっしょにいてくださり私を強めてくださる、そして神さまが守ってくださるのだからこんなに心強いことはないと確信することができるようになりました。

正直いって入院した時にお医者さんを全面的には信用できませんでした。お医者さんだって人間ですからできることとできないことがあるでしょうし、すべての病を治すことができるかと言えばそうではありません。やはり自分を造ってくださったのは神さまですし、自分をどのようにもできるのは神さまですから神さまがみことばによって約束してくださっていることが一番自分にとっては力強い助けになったのです。お医者さんであろうと誰であろうと人には頼れないし、人は私を救うことができないと確信できたので、全面的に神さまに頼ろうと思い、ほんとうにこれらのみことばによって助けられました。そしてみなさまとお話することや、メッセージを伝えに来てくださる重田さんとの学びを通して大きな喜びと力が自分の中にみなぎってくるのが分かるようになりました。これはほんとうに口で言っても説明できないことですが、ベッドでがんとの戦いに疲れはててガクッとなっている時にみことばの話を聞いていると、どんどんと内の方から力が湧いてきて背中もシャンとして腰の痛みも大して感じなくなってくるのです。ほんとうに不思議でした。

けれどもやはり私も人間ですから、家族のことを思ったり、あるいは子供の写真を持って来てもらったりするとほんとうにいとおしくてたまらないのです。そしてまた肉的な思いが強くなって家に帰りたいとか、早く健康になりたいとか、家族と共に過ごしたいとか、家族が悲しむ顔を

見たくないなどという非常に辛い気持になってくるのでした。

ところがその時気付いたのは、私たち人間はちりのような存在にすぎないのですけれども、そのちりのような人間にさえこれほどまでに深い情愛で親が子供や家族を愛する気持があるのだから、神さまが私たちにくださっている愛情というものはもう測り知れないものではないかということでした。自分のようなつまらない人間にもこれほど子供をいとおしむ気持があるのなら、神さまはいったい私たちをどれほど愛してくださっているのかと思った時、神さまの愛にくらべたら私たちのちっぽけな愛なんてくらべものにならないと思うようになってきたのです。そんな愛情深い神さまに守られているのに、何をめそめそくよくよしているんだと、いつも自分自身を励まし続けていました。

私はあまり聖書を学んだことがないのですが、ある日ベッドで聖書を読んでいますと、こういうみことばがありました。

こういうわけで、なすべき正しいことを知っていながら行なわないなら、それはその人の罪です。（ヤコブ4・17）

私はこのみことばを見て、神さまからは一方的な恵みを受けるだけ、集会のみなさま方からはいろいろしていただくだけで、自分は何もしていないからこれは私の罪ではないかと変な受け取り方をしてしまい、これでは天国に行けないのではないかと非常に悩んで、ある日重田さんにその思いを投げかけました。すると重田さんは「神さまは私たち人間が正しいことなど何もできな

いことをご存知でありながら、一方的に私たちを愛してくださって、私たちの行いによってではなく、ただ恵みによって救ってくださったのだから、私は何もできません、けれどもこんな私をあわれんでくださり救ってくださって感謝しますという気持が大切なのです。あなたの行いによってでなく信仰によって義と認められるのですよ」と教えてくださいました。しかし、私は今まで自分で何もかもやって来た人間ですから、何もお返しをしないでいることを自分自身で許せないのです。自分が何か神さまに対してのお返しと、人に対するお返しをしたいので、自分にできることはないでしょうか、ぜひ何かさせてくださいと病室で毎日祈っていました。すると看護婦さんとか隣のベッドの方が聖書に関心を持ち始めたのです。私自身は何も伝道のようなお話はしたことがありませんし、むしろ隣で毎日重田さんと聖書のお話をしているので逆に迷惑がられているのではないかと遠慮したくらいなのですが、隣の方が退院の時聖書に興味を持たれて生まれて始めて聖書を手にされたのです。そして退院したら自分で聖書を本屋さんで買ってみようという気持になったとおっしゃるのです。これはまさに神さまのお導きであると思いました。それから、病室でよく私の世話をしてくださったある看護婦さんは、私がただ枕元に置いたベックさんの書かれたリンデさんの本と重田さんの書かれた「私達の国籍は天にあります」という本に興味を持たれ、非番の時にでも読んでみますからと言って借りて行かれ、その後感激されて看護婦さんの間で回し読みをするのでぜひもう少し貸してくださいと言われたこともありました。主は何もしていない私さえも用いてくださって福音をお伝えになると知って心から感謝しました。

それ以外にも入院中に小さなことですがいろいろ祈ったことがあり、そしてほんとうに祈りは

聞かれるという体験をしました。入院するまでの私はただ毎日曜日に集会に出て適当に祈るだけなので、その時の祈りというのは全然成就されませんでした。ですから祈っても祈らなくてもどっちでもいいんじゃないかと以前はよく妻と議論したことがありました。

妻は一九八一年に救われ、その年から私が救われるまで五年間、私は妻の信仰を迫害し続けていました。ほんとうに私はひどい人間だったと思います。私は妻が信じているのはキリスト教らしいと思っていました。けれどもキリスト教というのは十字架があってマリア様の像があるというようなカトリック的なものだと思っていたので、吉祥寺集会には全然そういうものはないし、もしかするとこれは新興宗教の一種かも知れないと思ったりもしました。しかも妻は信仰を持ってからも、私が抱いていた宗教に入った人のイメージとはずい分と違っているように見えるのです。何か間違っているのではないかと思ってこちらから質問してみるのですが、たいした答えも返ってきませんし、妻は「私は弱い人間だから信仰の道に入った」と言うのです。「では来ている人の中には強い人もいるんだろう」と聞くと「みんな弱い人間ばかりです」と言います。私は「弱い人たち同士で何ができるんだ、強いしっかりした指導者がいない集団など大したものではない」と言ったり、「信じたらどんな確信が得られるんだ」と聞くと、聖書のみことばがどうのこうのと言うだけで「その箇所を開いてみなさい」と言っても彼女はまだ信仰が浅かったものですからその箇所を開くこともできず、「ではその聖書のみことばを説明してみなさい」と言っても彼女にはできないのです。ただ知っているみことばを繰り返して言うだけなのです。「それ見ろ、聖書には大したことは書いてないじゃないか、私の言っていることの方が正しいから悩みご

とがあれば私に相談しなさい」と言いながら、どうも「吉祥寺集会はおかしい」と思っていました。牧師さんもいないし、単なるふつうの人間の集りで、しかも皆さんが悩みを持った不完全な弱い人たちばかりです。そういう人たちばかりが集って何ができるんだとほんとうに馬鹿にしていました。よく妻を集会に送って行きはしたのですが、ついて行って後ろの席で皆さんが聖歌を歌っている時に、私は心の中で「ナムアミダブツ」などと念仏をとなえて絶対にこの魔力に負けてはならない、いずれは自分が前に出て逆にこの大勢の人たちを間違った道から救ってやるんだというような、ほんとうに思い上がった気持を持っていたのです。ですから最初に信仰を持った後で集会に行った時でも、前に言いましたようにおつきあいは避けて、ただ後ろの方に座って終ればすぐに帰るという状態が毎週続いていたわけなのです。

しかしそのような時にも、次のような素晴しいみことばが語られていたことを後になって思い出して、あの頃の私は主を呼び求めていなかったのだということがよくわかりました。

主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。

（詩篇34・18）

聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」

（ローマ10・11）

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。

（ローマ10・13）

最初の頃はただイエスさまと契約ができたから、もう自分は勝手なことをしていても救われているのだという気持だけで、ほんとうに悔い改めも感謝も祈りもない間違った方向に向いてしまっていました。二度目の入院中に思い知ったことは、心から信じて祈るということなのです。こんなお祈りをしてかなえられるだろうか、などと思うとそれはもうだめなのです。祈ったことは必ず成就される、しかも真剣に祈ればきっと神さまは聞いてくださると信じて祈ることが大切だとわかりました。それも朝一回祈ったからそれで聞いてくださったというのではなく、時間があれば絶えず祈るのです。もう朝から晩までその一つのことを、どんなに小さなことでもいいのですが、必死で神さまにずっとお祈りするのです。ちょうど、生れてから一才くらいまでの赤ちゃんが、お母さんに対して意思の伝達能力がないものですからギャーギャー泣きますが、あれと同じように神さまに対して泣くように祈ればいいのです。そしてみこころにかなう祈りは必ず聞いてくださるという確信を持って祈りますと、神さまは答えてくださるのです。小さなことですけれど、私は入院中にいろいろな不安に捕われました。たとえば検査のこととか、熱が出たり、腰が痛くなったり、おなかの調子が悪くなったりしてその都度不安になりましたが、一つ一つ祈るとほんとうに私の不安を主が取り去ってくださるのです。イエスさまが私とともにベッドの横にいっしょにいてくださるというのが実感として感じられました。神さまは触ることもできなければ見ることもできない遠い存在だと思っていたのに、病室の中に自分といっしょにいてくださるのです。それが何というか存在感があるというか、ほんとうに寝ている時も、何をしている時も、

神さまがともにいてくださるという安心感が心の中に与えられました。ですから、いっしょにいてくださる神さまを確信していつも祈りました。どういうことが成就されたか、一つ一つ細かく申し上げたいのですが、時間の関係で省略させていただきますけれども、それは間違いのない事実なので信じていただきたいと思います。次のようなみことばがあります。

わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。

（エレミヤ33・3）

私たちのちっぽけな人間の頭脳でどんなに考えても、神さまのご計画は私たちの理解をはるかに越えた大きなものなのです。だから私たちがいろいろ神さまのことを、ああだ、こうだと考えてもわかるはずはありません。神さまは私たちのようなちりに等しい者とはくらべようもない完全な方ですから、その方の考えを理解しようなんて思うこと自体が間違いであり思い上がりであって、神さまをただ信頼するだけでいい、ただ信じればそれであとは神さまが自分たちの理解できない大きなことをしてくださるというその確信だけでいいのです。

入院中にもいろいろありましたが、私が退院前に祈ったことについて証ししたいと思います。まず今回の入院は妻にも言いましたが、この病院から出る時は棺桶だなあと言いながら入院しました。生きて退院できるなどとは考えられない病状だったのです。でも入院中なんとか一度でいいから一時帰宅という形で、いったん退院させていただきたい、もう一度家族とのひと時を過ごしてこの世の名残りを惜しみたいという気持で祈りました。この祈りがほんとうに成就されて今

1　聖霊がくだるまえ

イエス様のうえに聖霊がくだるまえに、イエス様は祈られました。

さて、民衆がみなバプテスマを受けていたころ、イエスもバプテスマをお受けになり、そして祈っておられると、天が開け、聖霊が、鳩のような形をして、自分の上に下られるのをご覧になった。また、天から声がした。「あなたは、わたし（主）の愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」

（ルカ　3・21、22）

私たちは、ここにしるされたバプテスマが、イエス様のおおやけのご奉仕の出発点であったことを知っています。イエス様が洗礼を受けるときに祈っておられると、祈りのとちゅうで聖霊がご自分のうえにくだるのをごらんになりました。そののち、イエス様はナザレの会堂でつぎのように証しをしておられます。

「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。…」

（ルカ　4・18）

この「主の御霊」によって、イエス様はこの地上での日々をおくられ、この「主の御霊」によって、イエス様は父なる神からゆだねられ任されたつとめをはたすことがおできになったのです。ここでも「祈り」がたいへん重要です。イエス様は「祈りながら」御霊によって奉仕のための力を得られたのです。ペテロはつぎのようにしるしています。

それは、ナザレのイエスのことです。神はこの方に聖霊と力を注がれました。このイエスは、神がともにおられたので、巡り歩いて良いわざをなし、また悪魔に制せられているすべての者をいやされました。（使徒　10・38）

イエス様は、聖霊がご自身のうえにくだられたあとで、つまり聖霊によって力づけられたあとではじめて、ご奉仕を開始されたのです。初代教会のひとびともまた、聖霊によって力づけられたあとではじめて、イエス様のよみがえりを証しするご奉仕を開始しました。私たちもまた、聖霊に満たされることなしに、主に仕えることができると思うなら、それは大きなあやまりです。もし私たちが、聖霊に満たされることなしになにかできるなら、私たちはそれを自分の力でやったこと、自分の名誉にしてしまい、きっとごう慢になることでしょう。しかし、主はそのようなことを決しておゆるしにはなりません。私たちがご奉仕について学ばなければならない、最初の、いちばんたいせつな教訓はつぎのことです。

すると彼は、私に答えてこう言った。「これは、ゼルバベルへの主のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。』と万軍の主は仰せられる。」（ゼカリヤ　4・6）

主に仕え、実を結ぶということは、自分の力ではだれひとりとしてできることではありません。聖霊に満たされることなしには、なにひとつできません。聖霊に満たされることは、どのように

して起こるのでしょうか。イエス様は祈られ、御霊がくだりました。祈ることは「より頼みたい」ということの表現です。主により頼みたいと思うひとは聖霊に満たされるのです。私たちはただ習慣的に祈るのでしょうか。あるいは私たちの祈りは「より頼みたい」という私たちの意欲のあらわれなのでしょうか。これはたいせつな点です。

「してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありましょう。」（ルカ　11・13）

ここに書かれているとおり、私たちは救われた者として、聖霊が「あたえられる」ために祈る必要はありません。なぜなら聖霊は、もうすでにあたえられているからです。しかし私たちは、聖霊に「満たされる」ことを願い、祈らなければなりません。主から力をきせられること、つまり聖霊に満たされることは、キリスト者にとって一瞬一瞬、どうしても必要なことです。ですから、祈りはどうしても必要なのです。

そして私たちにとって必要なことは、主のみまえにしずまること、主とひとつになること、主がなさりたいことを知ること、主のみこころと一致すること、主にまったくゆだねきること、主によって自由にもちいていただくことです。私たちは決して自分の力で主に仕えようとしてはなりません。なぜならそれはまったくおろかなことであり、時間と労力の浪費にすぎないからです。

2　おおやけの奉仕のあと

「いつ」、イエス様は祈られたのでしょうか。この質問の二番めの答えは、「おおやけの奉仕のあとでイエス様は祈られた」というものです。ルカの福音書のつぎの箇所を見てみましょう。

さて、イエスがある町におられたとき、全身らい病の人がいた。イエスを見ると、ひれ伏してお願いした。「主よ。お心一つで、私はきよくしていただけます。」イエスは手を伸ばして、彼にさわり、「わたしの心だ。きよくなれ。」と言われた。すると、すぐに、そのらい病が消えた。イエスは、彼にこう命じられた。「だれにも話してはいけない。ただ祭司のところに行って、自分を見せなさい。そして人々へのあかしのため、モーセが命じたように、あなたのきよめの供え物をしなさい。」しかし、イエスのうわさは、ますます広まり、多くの人の群れが、話を聞きに、また、病気を直してもらいに集まって来た。しかし、イエスご自身は、よく荒野に退いて祈っておられた。（ルカ　5・12～16）

「多くのひとびとが集まってきた。しかし、イエス様ご自身は、よく荒野にしりぞいて祈っておられた」とあります。このようにイエス様は「おおやけの奉仕のあと」でよく祈っておられたのです。もちろんイエス様は、あらゆる時代をとおしてのもっとも偉大な祈りびととして、いつも祈っておられました。イエス様はあらゆるご奉仕のまえにも、あとにも祈られました。しかしここではとくに、イエス様が「ご奉仕のあとに」よく祈られたことに注意を向けたいと思います。

イエス様のおおやけのご奉仕は、おもに病人をいやしたり、悪霊を追いだしたり、福音を宣べ

伝えたりすることでした。病人はだれでもイエス様によっていやされました。悪霊につかれた者はだれでも解放され、福音を宣べ伝えることによって多くのひとびとが救われました。そのようなご奉仕のあとで、イエス様は祈られたのです。なぜでしょうか。それについては三つのことがあげられます。

はじめに、イエス様にとってこの世のひとびとの罪と接触することは、こころのおもい、意気消沈することでした。なぜならひとびとはみな、自分自身のことだけしか考えなかったからです。しかしイエス様は、祈ることによってふたたび自由に呼吸することができ、こころからよろこぶことがおできになったのです。

つぎに、病人がいやされ、悪霊が追いだされ、福音が宣べ伝えられるとき、力が失われます。疲労困憊してしまいます。しかし祈ることによって、イエス様はたえず新しい力とよろこびを回復なさったのでした。

三番めには、ご奉仕によって評判になるというわながあります。もちろんイエス様は、決して中心に立ちたいとはお望みになりませんでした。イエス様は決してご自分のための栄誉をおもとめになりませんでした。父なる神のご計画だけが、イエス様によって実現されるべきでした。ですからイエス様は、いつも父なる神にさけどころを求め、祈っておられたのです。

私たちもまた、まいにちいろいろなひとびとに会い、多くの罪と接触します。私たちはそれによって多くのひとびとの苦しみを知るように導かれます。イエス様は私たちが悩む者とひとつになること、ともに悩むことを望んでおられます。それはたいへんこころのおもい、意気消沈させ

られる体験です。しかし祈りによって、私たちはあらたな希望を得ることができるのです。

私たちはしばしば精神的、また肉体的に、力がつきはててしまいます。というのは、私たちの戦いは悪魔の力にたいする戦いだからです。この戦いはとてもたいへんな戦いです。というのは、悪魔がなかなかあきらめないからです。悪魔は死にものぐるいの抵抗なしには獲物を決して手ばなそうとしないからです。

ひとりのひとがイエス様の御名を呼び求めるようになると、悪魔にたいする大きな勝利となります。それは霊的な戦いです。この戦いは、ひじょうにつかれる戦いです。しかし祈りによって、私たちはどのようなときにも、主から新しい力をいただくことができるのです。

ところが主が祝福し、私たちをもちいてくださったとき、「評判」という私たちをだめにしようとする悪魔のわなが待っていることに気をつけなければなりません。

D・L・ムーディーは主によってもちいられた有名な伝道者だったのですが、かれはあるとき、福音を宣べ伝えたあと、あるご婦人から「あなたのおはなしはすばらしかった。うたがいもなく私がいままで聞いたうちで最高のメッセージでした」と言われたのです。するとムーディーは答えました。「悪魔も私におなじことを言いました」と。

「私はたいしたことをやった」と思いこむことはおそろしいわなであり、それを自分で信じこんでしまわないように気をつけなければなりません。というのは、主は、人間のほこりや人間のごう慢をおみとめになることはないからです。高慢なひとはもちいられません。主は、人間が自分のために栄誉を得ることを決しておゆるしになりません。

走るべき行程を走り終えた夫

笹川公子

一九五一年神戸市に生まれる。雲中小、啓明女学院中等部、同高等部を経て武庫川女学院短大国文科卒業後、財団法人小原流に二年間の勤務を経て一九七六年小泉製麻勤務の笹川郁夫さんと結婚。一九八七年夫郁夫さん天に召される。

主人笹川郁夫が一九八七年九月二十八日に天に召されましてから、多くの生活の変化に戸惑いながらも主を見上げてゆくことだけを支えとして今日まで生きてまいりました。現在小学校六年生の長女と四才の保育所に通っている長男との三人暮らしです。神戸の小泉製麻という会社の男子寮の寮母というのが今の私の仕事です。この会社は主人が勤務していたところで、主人が召される前から会社が後に残される私たち家族のことを心配してくださり、主人が召されてすぐにこのお仕事を与えてくださいました。多人数の食事の用意などまったく自信のなかった私でしたけれども、いつの間にかお仕事にも慣れ、通勤しなければならないような事務職ではなくて、いつでも子供たちが帰って来た時にはおかえりなさいと迎えてあげられるこの職場は、主が最善のものとして私たち家族に用意してくださっていたものだったと今は心から感謝して過しております。

人一倍健康だった主人にがんが発見されたのは一九八六年、結婚後十年目、主人が三十四才の時のことでした。初めにかかった近くの病院のお医者さんは診察後、私だけを呼んで、「ごく初期のがんがあるようなので手術で取ってしまえば大丈夫です」とおっしゃり、私から主人に手術

を受けるよう説得してほしいとのことでした。私はがんであることを主人に告げるべきかどうか非常に迷っていました。けれども薬物療法の進んでいる現在のことですから、手術をしなければならないと聞いただけで、主人は敏感に自分の病気ががんであると気付きました。そして、それまで強く生きて来た主人が生れて初めて不安と怖れに圧倒されそうになった手術の前日、ベックさんが来てくださり、みことばを通して神さまの救いを宣べ伝えてくださいました。主人は素直に主イエスさまの救いを受け入れ平安を与えられて、集会のみなさま方の祈りの中で手術を受けることができました。本当に感謝でした。ずい分長いと思った手術が終ってほっとした時、私はお医者さんに呼ばれて、切り取ったものを見せられ「おなかを開いてみたら予想外に病状は進んでおり、胃の四分の三とそのまわりも大きく切り取りましたが、リンパへの転移があるので、いつ再発してもおかしくない状態です」と告げられました。爆弾を抱えているようなもので、いつどこに転移して痛み出すかわからないということなのです。一瞬私は自分の耳を疑い、頭を大きなもので打たれたように感じました。そして、そんなことは手術して癒されると思って喜んでいる主人に今とても話せないと思い、悩み、苦しみ、祈りました。手術後三週間位で退院した主人は、退院後一週間目にはもう私たち家族を連れて那須の高原へ自分で車を運転して出かけるほど元気でした。主人自身の証しにありますように、母親の顔も知らず肉親との縁が薄かった主人は、私たち家族に対してとても情が深かったように思います。

その後病院から私に呼び出しがあり、もう一度手術がしたいので、他の病院でCTスキャナーを撮ってくるようにとのことでした。そして、後日そのスキャナー検査の結果の入った封筒を取

りに行った時、封筒の口が閉じられていなかったために、主人はお医者さんに宛てられたその報告書から自分の病状がどんなものであるかを知ることになりました。そのような状態の中で主は主人を導いてくださり、十月には主人も洗礼を受けることができました。私たちは暗黙の了解のうちにがんが再発する日のあることをお互いに知りつつ生活する日々がしばらく続きました。そしてその日は予想していたより早くやってきました。十二月ごろから腸の調子が悪くなり始め、翌一九八七年一月にはもう激しい痛みが襲ってきて食事ができなくなってしまったのです。今度は集会の野田さんの奥様が心配してくださり、東海大学医学部に勤務しておられる重田さんにご相談してみたら、と勧めてくださいました。重田さんはいろいろな病院の名をあげて自宅から通いやすいところを教えてくださいましたが、二度目の入院は死を覚悟してのものでしたので、まだ信仰を持ってから間もない主人は入院後精神的に落ち込むことを怖れ、少し遠くても聖書を通して交ってくださる重田さんのいらっしゃる東海大学病院を自分で選びました。また、何が起こったとしても、医療関係の方々や設備の優れた病院に入ったうえでのことなら納得できるからという思いがあったことも事実です。

二度目の入院をしてからの、またそれまでの主人の信仰の歩みや自分の気持については、主人が自分の証しの中で詳しく語っておりますので、ここでは、妻としての私の側からの証しをさせていただきたいと思います。大学病院に入院してからは、まず病状をつきとめるための検査、検査の毎日でした。子供たちの世話を集会の方々にお願いして、私は主人との面会のために毎日三時間近くの道のりを東大泉から神奈川県伊勢原市の大学病院まで一生懸命に通いました。夜遅く

家に帰ってから子供を寝かしつけ、洗濯や片付けなどをする毎日は健康な私にもかなり大変なことでしたけれど、自分のことなど考えている余裕はまったくありませんでした。ただ、観光客の多い小田急線の電車の中で楽しそうな親子連れを見たりすると初めのうちは辛い気持ちになったことを覚えています。

このようにして、毎日みなさま方の祈りと助力に支えられ、イエス様どうか私を助けてください、力を与えてくださいと必死に祈りながら通っておりますうちに、主人がイエス様をだんだんと体験的に知るようになり、苦しみの中にあっても主を喜ぶことができるようになってきたのが私に分かりはじめました。痛みや熱の苦しみの中で打ちのめされながらも、聖書を通して神であるイエス様以外に頼るべきお方はないことをよく知らされ、ちっぽけで哀れな自分がどんなに神様に愛されているかを彼が話すようになったのです。そして祈りは答えられると言うのです。病気の進行につれて体は確実に弱っていっても、イエス様を見上げて喜ぶ主人を見て、私はどんなに嬉しく、また励まされたことでしょう。信仰の幼い私自身それまでは目の前の現実に振り回されて、なかなか一人で主を見上げて喜ぶところまではいきませんでしたが、痩せ衰えながら顔を輝かせてみことばを味わい喜んでいる主人を見て、もうこれからは私一人ではなく、主人と二人で一緒にイエス様を信頼して戦って行くことができるのだと思うと、心が感謝で満たされ、疲れも消える思いでした。そして、病室で一人で病気と戦っている主人の痛みと苦しみのどちらか一つでもいいから代りに負ってあげたいと心から思いました。

ちょうど入院して三週間ほどたったころ、腸閉塞が起り、緊急手術を受けることになりました。

この手術でおなかを開けた結果、がんはおなかの中でどんどん拡がり、いろいろな機能をだめにしている、大腸はもう機能を失っているので小腸から直腸へのバイパスをつけたが、それも間もなく詰まってしまうでしょう、と担当医の先生は私に摘出した白い固りを見せながらおっしゃいました。そして、この処置はあくまでも、少しの期間だけでも家に帰って家族との生活を持ちたいという本人の希望をかなえるためのものに過ぎないことも知らされました。その説明を聞きながら、私はこれが現実なのだ、これからの苦しみは彼にとってどんなに辛いだろう、彼の苦しみと悲しみはもう見たくないです、どうぞイエス様み心ならばこの手術で主のみもとに行かせてください、と私は心の中で祈っていました。

手術で人工肛門を付けずに済んだので腸は大丈夫だと思っていた主人も、出てくるものを見て、もう腸もだめになっていることを悟り、ある日私に真実をたずねました。この時のくるのを覚悟していた私は、彼に対して正直になりたいと思い、真実を話しました。聞く方にとっても話す方にとっても本当に辛いことでした。その後まだ苦しい状態ではありましたが、少しだけ口から食物が入るようになった段階で、医療の場から離れる不安なども抱えたまま、主人は退院の決心をして三月十七日に家に帰りました。

家に帰ってから、食べられるとは言っても柔かいものをほんの少しずつ食べては吐いていました。そのような状態の中で主人は礼拝や学び会などにも集い、家庭集会で証しする機会も与えられました。これらの事をさせてくださいと主人は入院中一生懸命で祈ったそうです。痩せ細って痛みのために腰も曲った体で、少し食べては吐く主人の姿を見るのは本当に辛かったのですけれ

ど、その中でイエス様を見上げて喜んでいる主人を見て、私も主人の祈りが次々とかなえられることを心から主に感謝し喜ぶことができました。

けれども四月十五日から五日間の沖縄旅行の頃から、もう口からは水分のほかいっさい食物がとれなくなり、それから召される九月二十八日までの約五カ月間点滴だけで生きていました。四月二十九日、吉祥寺集会の交り会での証しの日も朝から具合が悪く、お昼過ぎに近くの病院で点滴を受けてすぐ集会の方の運転される車で集会場までたどり着いたような状態でしたのに、証しを始めると主人の顔は喜びに溢れてくるのです。そして、家でぐったりして苦しんでいる彼とは人が変ったように輝いて、イエス様のすばらしさを皆さまにお知らせしたくてしかたがないという気持に満たされて力が与えられて話し始めるのです。これはきっと主人自身不思議なことだったのではないかと思います。五月初めの軽井沢バイブルキャンプの時は、大学病院から五日分の点滴を用意していただき、苦しみながらも車に乗せていただいて軽井沢の重田さんの山荘で一日二本ずつ点滴を受けながら久しぶりの自然を家族と共に楽しみました。ベランダから見上げる真青な高い高い空、そこに枝を延ばして純白のやさしい花をつけている山こぶしの下で私たちは沈黙したまま柔かい春の陽ざしに包まれていました。誰も口を開きませんでしたが主の平安が私たちの心を満たしていました。青い空の向うに間もなく彼が行こうとしている、そしていつか私たちも行くことを許されている約束のみ国を望み見ていたのかも知れません。主人にとって久しぶりの日光浴でした。けれども一日二本の点滴ではカロリーが足りず、滞在中にもだんだん力がなくなっていきました。車で五分もかからないキャンプ場にも一度は行ってみなさま方にお会いし

たいと言っておりましたが、なかなか行かれそうにもありませんでした。そこにベックさんからほんの少しでも証しを、というお話しがありました。本人はもちろん周囲の私たちも、もうとてもそんな体力はないから無理ではないかと思いました。けれども、指定された時刻近くになると、それまで沈黙していた主人は意を決したような表情で洋服に着かえ始めました。もう後は主におゆだねするだけでした。車で着いたキャンプ場では、五分もお話しできるだろうかと思っていた私たちの予想をはるかに越えて、四十分も証しをすることができたのです。四月二十九日吉祥寺集会で証しさせていただいた時の原稿は持っておりましたが、もうその時は読むこともできなくなっており、原稿なしの証しでした。主人自身も証しの最後に言っておりますが、この時の証しは主人がしたのではなく、信じる者の中に住まれる聖霊自らが主人のボロボロになった肉体をさえ用いて語ってくださったとしか言いようがありませんでした。三百人以上の方々の「今去り行くなれをわれら主にゆだぬ。安けくあれかしまた会う日望みて……」と歌ってくださる合唱に送られてキャンプ場をあとにした主人は、証しの任を果し終えた安堵感と激しい痛みで疲れ果て、一日予定を早めてその日のうちに野田さんの車に乗せていただき三度目の入院をしました。

この入院以後は、点滴も胸の静脈に針を固定して、連続的に注入できる中心静脈点滴となり、それによって肉体の栄養状態はかなり改善されましたが、痛み苦しみは一段と激しくなり、召される九月二十八日までの約五カ月間は痛み止めの注射をだんだん強くし、痛みと戦う日々となりました。ところが主人は外泊の形で七月のキャンプにも行くと言い出したのです。この時はさすがに私もこの道が閉ざされるようにと主に祈りましたが、主人の祈りの方が強かったらしく、キ

ャンプ場にはほんの五分ほどしかいられませんでしたけれど、多くの方々にお会いでき、大好きな聖歌五二一番「キリストにはかえられません」を歌っていただき、またこの世でのお別れも黙したままさりげなくすることができました。病院へもどってからは激しい痛みの中でただ召される日を待っている主人を見ていると「神さま、もう主人は十分に苦しみました。そしてできるだけのことはしたと思います。もう今の彼は何もすることができません。どうぞ憐んでください」と祈らずにはいられませんでした。

主人が召された後の私と子供たちの生活については不思議にまったく不安がなく必ず主が守ってくださると確信しておりましたが、父親を失った後の子供たちの想い出のために、終りまで良い父親やさしい父親のイメージを残してやってほしいという思いが私にありました。けれどもその頃の主人は、もう良い父親として子供に接する事さえ難しいほどの状態にあり一日一日を耐えて生きるのに精一杯だったと思います。「こんなに何もできなくなってしまったのに、なぜまだ天国に迎えてくださらないのだろう……」とつぶやく日もありました。あまり人間的にやさしいたわりを見せると、彼は心が弱くなり先の希望よりも今までをふり返って絶望しそうになってしまいました。けれどみなさま方の熱い祈りに支えられて天を見上げ、主の恵みを思う時だけ彼の心には喜びが溢れていました。激しい痛みの中でもみことばが彼を元気づけ、励まし続けて耐えさせてくださったのです。またこの頃主人の養父や実父、そして集会のみなさま方とも主は会わせてくださいました。この方々の救いを家族思いの主人は祈っておりました。

この世での最後の別れになった九月二十七日の夕方、天国に行く喜びと死のふちを越える怖さ

のはざまにいた主人の思いと私の思いが一つになり、私は初めて「天国に一緒に行きたい。何もかも主がしてくださるのだから後のことは心配しなくてもいい。私も一緒に行かせて……」と言って彼にすがりつきました。彼は「もうちょっと待っとき」と言って涙を流しました。主はこのようにして、主人を召される前日に私たちの絆を固くしてくださったのです。「明日から個室に入ることになっているから夜もいっしょにいられるね」と言ってその日別れました。

翌朝三時頃主人に急変が起ったとの知らせに野田さんの奥様に運転していただき病院へ駆けつけました。それまで痛みのため体をまっすぐにすることができなかった主人が、その朝は体をまっすぐに伸ばして眠っていました。まだ脈はありましたが、その様子を見て「ああ、イエス様は今彼をみ腕に抱いて天国に連れて行ってくださっているのだ」と思いました。もう意識はなく、痛みもありませんでした。聖書のみことばを読み、聖歌を歌い、天を見上げて、ようやく主人はこの傷ついたボロボロの体から離れて自由になれるのだと思いました。「郁ちゃん、よかったね。望んで望んで早く行きたいと言っていた所に行けたのね」と私は黙って彼に語りかけていました。

主人の死顔は、安らかでした。酸素吸入のマスクをはずし、心電計のコードをはずし、点滴の管をはずしていただくとき、長女の友代は泣きました。長い間点滴につながれて、八十五キロあった主人がこの時私が両手で抱きあげることができるほど軽くなっていました。それから病院に来てくださったみなさま方と共に主を賛美しながら、病院でお世話になったみなさまとのお別れをしました。葬儀も本当に豊かな主の祝福のうちに行なわれました。多くの方々のご助力をあらためて感謝いたしました。

それから一年あまり、主はすべての点で私と子供たちを守ってくださり、この十一月二十三日には神戸集会の能勢川キャンプの折に主人の召天一年目の記念会を開いていただくことができました。またその折に長女の友代が洗礼にあずかるという大きな祝福も主は与えてくださいました。「わたしの恵みは、あなたに十分である」というみことばの通りに、子供たちの生活も私の仕事もすべて最善のものを与えていてくださいます。神戸集会や吉祥寺集会の多くのみなさま方の励ましと愛に包まれて私は幸せです。私自身は強くなる必要はなく、力に満ちたお方に信頼してただ従っていく時、大きな喜びがあると信じております。私も子供たちも主人との天国での再会を楽しみに、元気に明るく主を見上げ、感謝しつつ毎日を歩んで行きたいと心から祈っております。最後に、今私の依り頼んでいるみことばを記させていただきます。

二つのことをあなたにお願いします。私が死なないうちに、それをかなえてください。不信実と偽りとを私から遠ざけてください。貧しさも富も私に与えず、ただ、私に定められた分の食物で私を養ってください。私が食べ飽きて、あなたを否み、「主とはだれだ。」と言わないために。また、私が貧しくて、盗みをし、私の神の御名を汚すことのないために。

（箴言　30・7～9）

主を仰ぎ見ると彼らは輝いた

重田定義

一九二七年東京に生まれる。番町小、都立四中、慶応義塾大学医学専門部卒業、現在東海大学医学部教授（衛生学）、東海大学医学部医の倫理委員会委員長。著書「私達の国籍は天にあります」。妻都代子さん。趣味はフルート。
家庭集会　東京都杉並区清水二―八―十二　電話〇三―三九五―一七七五　毎月第二土曜日午後五時半

私が初めて笹川郁夫さんにお会いしたのは、手術した胃の調子が再び悪くなったので私の勤務している東海大学医学部附属病院で治療を受けたいというご相談に来られた時でした。何しろ吉祥寺キリスト集会は人数が多いので、それまでは笹川さんのお名前も知りませんでした。しかし、入院されてから天国に凱旋されるまでの七カ月間は、ほとんど毎日のように「主イエス・キリストにある兄弟」としてこの世の兄弟をはるかに超えた親しいおつきあいができたことを今あらためて心から主に感謝しています。

笹川さんが入院なさった時には、すでにがんがどのような治療によっても治る見込みのないほど進行しており、そのことは入院後しばらく経ってから奥様の公子さんからご本人に告げられていました。ずっと後になって知ったのですが、公子さんからその話を聞いた直後に私が病室に入ってきたのだそうです。私はお二人がいつになく沈黙しておられたのに気がついた程度で、いつ

ものとおりみことばを読み、しばらくお話をし、祈って帰りました。あとで笹川さんはその時のみことばは、真相を知ってショックを受けた自分にとってまことに適切なものだったと言われました。私が事情を知ってみことばを選んだのではないかと思われたそうです。私はそれを聞いた時に、主が私の口を使って笹川さんに最も適切なみことばをお与えになり、慰め励まされたことを知り心から主を賛美しました。次のみことばの通りでした。

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。万軍の神、主よ。私にはあなたの名がつけられているからです。

（エレミヤ　15・16）

笹川さんは、自分が主イエスに救われてこんなに主の恵みを受けていることを、そして喜んでいることを少しでも多くの人に伝えたいのに、自分はベッドに寝ているだけで何にもできないといつも言っておられました。しかし、主は笹川さんの願いをかなえて、医者ももう手のほどこしようのない状態の笹川さんを用いてすばらしいことをしてくださったのです。三月にいったん退院し、五月に三度目の入院するまで、笹川さんは沖縄で、東京の集会で、また軽井沢のバイブルキャンプでと、計五回も大勢の人々の前で主イエスに救われた喜びの証しをされ、また、言葉だけでなく態度をとおして医師や看護婦、医学生、見舞客に主イエスを信じて生きる喜びを証しされたのです。主治医は、がん再手術の患者が数カ月も安定した状態で経過するのは、ほんとうに珍しいことで、いったい何の力がそうさせたのか理解できないと言っていましたが、私たちには

主が笹川さんを用いてご自身のご栄光を現わしてくださったのだということがよく分かります。

死が間近に迫った人には肉体的、精神的、社会的、霊的の四つの苦痛があると言われています。霊的苦痛以外の苦痛は医学や社会や家族の支援で和らげられますが、そのような状態にある人は愛する家族との別離を考える時、死後自分はどうなってしまうのか、どこへ行くのかを考えた時、悲しみと不安と恐怖にさいなまれます。これが霊的苦痛であり、これだけは人間の知恵や努力では決して解決できません。しかし、主イエス・キリストを信じる者は、死に勝利された復活のキリストにあずかる者とされ、死に勝利する永遠のいのちを与えられているので死を恐れません。霊的な苦痛を覚えることなく、むしろ、キリストが天に用意してくださっている永遠の住まいに入れるので喜ぶことができるのです。

パウロは人間の体をしょせんは朽ち果てなければならない天幕にたとえています。

私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。

（Ⅱコリント　5・1）

天幕は風雨や炎熱に耐えられるような丈夫な布地で作られていますが、やがてはぼろぼろに破れてしまいます。人間の体も天幕と同じようなものです。どんなに医学が進歩しても、死を阻止することはできません。肉体の死、これを聖書では第一の死といいます。もし肉体の死が個人のいのちの終りであれば、死後のことを心配する必要はないはずです。なぜ人間は死後のことを恐

れるのでしょうか。それは第一の死の後に起こることを恐れるからです。聖書ではすべての人が死後神の前に出てさばきを受けなければならないといっています。その時神の前に完全に正しい、義であると認められない者は、善人も悪人も、知者も愚者も、金持ちも貧乏人も、残らず永遠の滅びすなわち永遠の苦しみを罰として与えられる、これが第二の死であるといっています。これこそが恐ろしい死です。ではこの恐ろしい死を免れることのできる人は誰でしょうか。神は完全に義なる方ですから、完全に神に従うことのできる者しか義と認められません。しかし、人間はアダムが神に背いて以来、その子孫である私たち人間は誰一人として完全に神に従うことができなくなってしまったのです。神に従いたいと思っても自分の自我に負けてしまうからです。神中心ではなく自己中心に生きること、これこそが罪なのです。そのような人間を神はあわれんで、滅びに向うしかない罪の中から救い上げるご計画を立てて実行なさいました。それが神の子が人となられたイエス・キリストの十字架上での死なのです。イエス・キリストはすべての人を滅びから救うためにご自身が私たちのすべての罪を背負って十字架にかかり、また三日目に復活して、その事実を信ずる者に完全な罪の赦しとキリストの復活にあずかる永遠のいのちを与えてくださいました。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」（ヨハネ　11・25）

神はイエス・キリストを自分の救い主と信じた者の名を神の前に義なる者としてイエス・キリ

ストのいのちの書に記入してくださる、言いかえれば「天の国籍」を与えてくださるのです。主イエス・キリストを信じ受け入れた者は、この肉体は破れやすい天幕のような仮の住まいにすぎないこと、そしてこの天幕が破れても神が天国に用意してくださるすばらしい住まいに永遠に住まうことができると信じることができます。またこの確信と希望を持つゆえに、この世の患難がどのように辛くてもすべてをイエス様の御手にゆだねることができるのです。

ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

（Ⅱコリント　4・16～18）

人間が死に直面せざるをえない時に、取るべき態度は二つしかありません。一つは絶望であり一つは希望です。この世がすべてであると思っている人にとっては死は絶望でしかありません。しかし、主イエスを信じる者にとっては希望です。それは死に勝利したイエス・キリストのいのちをいただくことによって自分も死に勝利することができるからです。だから笹川さんも肉体の死は迫っても天の御国を仰ぎ見て喜ぶことができたのです。そしてまだそのことを知らないで死を怖れている人々に、自分の体験を通してぜひこのすばらしい主イエスの救いを知ってもらいたいと心から願っておられたのです。

笹川さんが天国に凱旋された時、私は次のみことばが頭に浮かびました。

私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。

（Ⅱテモテ　4・7）

笹川さんは自分の走るべき行程を走りつくして、主イエス・キリストの恵みと祝福を証しする任務を果たし終えて目標の天国に到達されました。またお二人の幼いお子さんをかかえながら主イエスに心から信頼し、悲しみも苦しみも主にゆだねて笹川さんの天国への道程を支え共に走りぬかれた公子さんを通しても、私は信頼する者のうちに働かれる主の偉大な力を知りました。今も遺されたお二人のお子さんを育てるためにたくましく明るく働いておられる公子さんを通し、また、去る十一月に笹川さんが召される前から主イエスを信じていた小学校六年生の長女友代ちゃんが自分の意志で洗礼を受けイエスさまを信じる信仰の証しをされたことを通しても、主はこの世に残されたご家族を愛の御手によって守り育んでいてくださることを目のあたりに見せていただいております。

神が笹川さんご夫婦を通してご自身のご栄光を現わされたことを覚え、心から主を賛美し、笹川さんとの交わりを通して主と共に歩むキリスト者の勝利の姿をこの目ではっきりと見せていただいたことを、私は妻と共に心から感謝しております。



▲熱海にて。左から長男の嫁竹本裕子さん、長女池田康さん、誠一さん、妻愛子さん。

主に導かれて七十年

竹本誠一

一九〇五年高知県に生まれる。
一九二八年日本歯科医学専門学校（現在の日本歯科大学）を卒業。
一九三〇年郷里にて歯科診療所を開設、今日に至る。
家族は妻愛子さん。長男隆さん、長女康さん、次女節子さんは東京在住、次男真夫さんは土佐山田町。孫は各家庭に二～三名ずつ総勢十名。
趣味は読書、美術品鑑賞、旅行など。

父を語る

(1) 竹本　隆（長男・歯科医）
(2) 池田　康（長女・夫は池田傅一さん）
(3) 竹本真夫（次男・歯科医）
(4) 飯守節子（次女・夫は飯守恪太郎さん）

父を語る(1)

竹本　隆（長男・歯科医）

毎年盛夏には、高知でバイブル・キャンプが開かれます。その年、私たち家族も東京から参加していました。午前の集会の後、昼食も済んで、食堂には何人かの人々がテレビで高知商業が出ている甲子園の高校野球を見ていました。その中にたまたま私の父も、私の娘の百合子もいたのです。父はどういうわけか、孫の百合子に改まった口調で「野球はお好きですか？」と話しかけます。百合子はおじいちゃんが変なことを聞くな、と思って黙っていますと、父は、もっと話かけなければいけないと思ったのでしょう、今度は「東京の方ですか？」と聞きます。百合子は、これはてっきり私を孫だと気が付いていないんだと思ったので、「何言ってるの！　百合子だよ！」といいますと、父もさすがに気が付いて、困ったようなバツが悪いような顔をしましたので、一同大爆笑でした。近頃印象に残っている父の横顔です。父は現在八十四歳ですが、元気で歯科診療を続けています。

父を語る(2)

池田　康（長女・池田傳一氏夫人）

私は女学校の時、基督教団の教会に通っていたのですが、ある日、教団の方のことで何かが気にいらず、家に帰って「あの人はクリスチャンなのに……」と愚痴をこぼしたことがありました。たまたまそこにいあわせた父は、「クリスチャンがみんなええ人ばっかりやったら、イエス様の十字架は、なんちゃあ要らん」と、ボソッといいました。この一言が、その後の私の信仰の土台になったのです。父は私たちを叱ったことなど一度もないけれど、一番大切な信仰の基だけは、しっかりと子供たちに伝えてくれていると思います。

主に導かれて七十年

竹本誠一

一九八一年六月の　ある日　次男の真夫から　明日吉祥寺キリスト集会の　ベックさんによって洗礼を受けるという　話がありました　その時には　吉祥寺集会のことは　まだほとんど　理解してもいなかったし　またあまりにも突然のことでありましたので　全く当惑いたしました然しすべてを　主におまかせして　予定通りに　受洗することに　なりました　当日の受洗者はこの高知の物部川にて　前々より　受洗を希望して　おりました　池田傳一（長女の主人）と真夫夫妻の三名で　ありました　あまりにも　急な話でありましたので　随分戸惑いましたが今思い返して見れば　やはりこのことは　主のお導きで　あったことと　感謝いたして　いるのであります

この日の受洗の場所は　物部川の本流で　足場が悪く　それに雷雨も加わり　困難を極めましたが　現在は　この物部川の支流で　適当な渓流を　見つけることができ　高知でのキャンプの都度　多くの方々が　受洗されておられます

この時　数カ月前から　建築中でありました　真夫の住宅が完成近くになり　床板がやっとできたところでありました　早速集会が　ベックさんの　「メッセージ」で　行われました　これが土佐山田集会の　初めての集会であったのであります　その後毎年　信仰の友が加えられ　今は数十名の　方々により　日曜礼拝が　守られているのであります　吉祥寺及び　その他の集会の皆さまの　時々の御支援も　感謝せざるをえないのであります　またこの辺境の地へも　ベックさんは度々来られ　私共は　主の福音を　聞く機会をえまして　まことに感謝であります　こ

の集会におきまして　教会の色々の制度もなく　ただ心から捧げる　礼拝のみが　真の礼拝であり　主の御臨在を　覚えることを学び　大いなる感謝であります

神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。
（ヨハネ　4・24）

また　十字架の血による　感謝の喜びにみたされ　「キリスト」にあって　互いに愛をもって集っている　みなさま方に接し　今まで　教会で見られなかった　暖かい　クリスチャンの集いを　知ることが　できました

次男真夫の住宅建築も　計画いたしました時は　集会のためにとは　全く考えてもいなかったので　ありましたが　ここが　「家にある教会」として　日曜礼拝が行われ　伝道の一役を　担うことができて　またまた　喜びであります　これも　主の御心であり　主の御計画で　あったものと思い　感謝いたしているのであります

人の歩みは主によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。（詩篇　37・23）

私の家より　約三キロ離れた　土佐湾の海岸ぞいに　赤岡町があります　その町に　聖公会の教会が　出来ましたのが　大正二年であります　私の家庭が「クリスチャンホーム」となりましたのも　大正二年でありました　「光よあれ」第二集に　明治四十二年頃と　記しましたが　その後確かな記録を見ると　それより四年後のことでありました　この聖公会の教会は　初めわず

か四～五人の婦人の方々により　初められたのでありますが　大正四年には　信徒は　四十名ぐらいに　増えていたようであります

その頃は　高知県においても　伝道の機運は　中々に盛んであって　伝道師の外にも　大学々長といった面々が　続々来県し　各地で　伝道講演が　行われたのであります　また一般の人々も　「キリスト」教に好意を持ち　聴衆も多く集り　その態度も　謹慎的であった　とのことであります　しかしその後　聖公会赤岡支教会は　解散となりましたので　私共は日基に吸収され日基教団香美教会を　大正九年に設立したのであります

私の家は　元々神道でありましたので　神棚があったことが　幼児の記憶に　残っているのであります　父は元来　旧来の　習慣を打破することには　積極的で　ありましたので　「キリスト」教に　転向するにも　全く躊躇(ちゅうちょ)することは　なかったようであります　また　子供の頃使った　小学入門書第一巻に　「神は天地の主宰にして……」と　教えられて　いましたのでああ「キリスト」教の神は　天地の主宰者である神　であると　すぐに　分かったと　父は述懐して　いたのであります　この時に　「クリスチャンホーム」となる機会を　とらえなかったなら　私の家には　「キリスト」　の救いは　来なかったのかも　知れません　初めに一人の男が「キリスト」　を知ることによって　今日一族すべての者が　主の御赦しに　あずかることができたのであります　まことに　主の御導きは　神の奇しき　みこころの　現われであります

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

明治の末期頃　私の父の　経営していました　製紙工場の中に　岩中虎次と言う　一人の職人が　いたのであります　この方が　父に熱心に伝道して　くださったのであります

この岩中さんに　二十才足らずの　「マサヲ」さんと言う　一人の娘さんが　ありましたが幼児の時に　盲目になってしまっていたのであります　ところが　大正元年の時であります　この方が鍼の修業に　上京することに　なったのです　しかし行先は　ただ東京の浅草に　お菊ちゃんと言う　知人がいるというだけで　番地もわからず　他に何の目当もないまま　一人で上京したのであります　今は　身体障害者には　色々の援助がありますが　何の頼るべきものもない当時としては　まことに無謀なことであったでしょう　しかし　何とか　東京に着くことができ人力車にて　浅草にまいったのでありますが　盲人を乗せた　人力車の周囲は　たちまち　物見高い人々が　人垣をつくったのであります　車夫は随分困ったことと思います　ところが　その人だかりの中に　何と　お菊ちゃんその人の　声を　聞いたのであります　そして　三年の修業の後に　帰郷して　生活の道を　開くことが　できたのであります

このことを通して　一切を　神にお任せしていることは　いかに　力強いことであるかと　非常に心を打たれたと　父は回想して　いたのでありまして　これが入信の　動機とも　なったのであります　この「マサヲ」さんは　前に記しました　聖公会赤岡支教会初期の　五人組の　一人でありました

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

私の父は　昭和四十一年十月　九十四才をもって昇天いたしました　父が　「イエス・キリスト」を　早くから　我が家に　受け入れて　くれましたことを　私は心から　感謝しています　父の辞世の歌は　「朝顔や　あすは　御国の垣に咲き」　でした

私の家族が　受洗いたしました時は　私は少年期でありましたので　日曜学校に　二、三の友達と　道草を　食いながら　毎週行ったのでありました　その時代の印象に　一番心に残っているのは「クリスマス」のことであります　教会で　夜の　「クリスマス」　が終り　その帰り道　夜空に輝く　無数の星空を　見上げながら　寒い北風を　ほっぺたに受けながら　家路を急いだ時のことは　今も懐しく　感激の思い出であります　また　子供心に　天地の神を　崇める心が芽生えたことと思います

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言う年月が近づく前に。　（伝道者　12・1）

その頃　この地域は　郡部に於ける　地方伝道の　一拠点でありましたので　家庭集会も　大正の初期の頃から　始められていたのです　まだ電灯もない時代で　ありましたので　うす暗い「ランプ」のもとで　信徒二十名ぐらいの集会でありました　そこが聖書を学ぶ所　また伝道の場となったのであります　この家庭集会は　一時は　中断したことも　ありましたが　機会あるごとに　ずっと続けてきたのであります

父が信仰の　支えとしていましたのは　内村鑑三主筆の　聖書之研究誌でありました　この

聖書研究誌は　教会では　中々受け入れられなかったもので　ありますが　この雑誌が　日基の高知教会の売店にて　求められたのは　皮肉なことであったと　父は述懐していたのでありますしかし　この雑誌の読者は　少しずつ　その数を増したのでありました　そして熱心な人々がこの雑誌により　聖書の解き明かしを　得ていたのであります

日支事変より　太平洋戦争と　十数年にわたる　有史以来の大戦も　天地を支配する神の　審判を受け　敗戦に終りましたが　この長い戦時中にありましても　日曜礼拝は　中断されることもなく　また家庭集会も　きびしい灯火管制下に　ありながら　電灯に黒いカバーを取り付けその下で　集会が　守られたのでありました　まことに　暗い時代でありましたが　その間何の支障もなく　主に守られましたことは　幸いであり　また　感謝であります

終戦後は　自分の仕事や　子供達の教育のことで　無我無中で　数年を過ごしましたが　その間　長女（現在池田康）は　近隣の子供達を集めて　家庭での日曜学校を　開いていたのでありました　その後　各自それぞれ　進学することになり　一人　また一人と　子供達は　高知の地を離れ　上京してしまいました　そして最初に落着いた所が　吉祥寺であったのであります　このことによって　吉祥寺キリスト集会との出会いが　決定づけられたのでありまして　まことに主の豊かなお導きは　私共の考えの及ばないところであります　今は皆　それぞれの家庭をきずきまして　一族すべての者が　吉祥寺キリスト集会にて　多数の方々と　主にあって　暖かい交りに　あずかっているのであります　まことに大いなる喜びであります　感謝であります

ことばに表わせないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。　（Ⅱコリント　9・15）

私は幼児の時に「イエス・キリスト」を知りましてから　早や七十年余りを　過ぎたのであります　思えば　長くもあり　短くもあり　また楽しい時もあり　悲しい時もあったのであります　まことに　「バプテスマ」　は十字架への途であります　しかし私は　「クリスチャン」　であることを　幸いと思い　また誇りに　思っているのであります　それは　「キリスト」　の栄光に入るための　第一歩であります　つきない神の　生命の泉が　そこにあるからであります

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。

（Ⅰコリント　1・18）

過ぎし日を　かえりみて　あの時ああすれば善かった　この時こうすれば善かったと　思う場合も　ありましたが　今思うことは　すべて　事実あったことが　一番善かったのであります　まことに　主の豊かなお導きを　感謝して　心から　主を讃えざるを得ないのであります

私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさって恐しいほどです。私のたましいは、それをよく知っています。

（詩篇　139・14）

まことに　世は移り　人は代るのであります　いつの間にか　先輩　友人　それに肉親の者と幾多の人々を　送ったのであります　しかしまた　それに優る　多数の信仰の友を　主は　お与えくださいました　東京吉祥寺に　於ても　またこの高知の山田集会に於ても　次々と　主にある　新しい　兄弟姉妹を　お加えくださいまして　ほんとに　感謝であります

一つの時代は去り、次の時代が来る。しかし地はいつまでも変わらない。

（伝道者　1・4）

今私は　高知の田舎の生家で　妻と二人だけでありますが　妻の姉が　手伝いに来てくれていますので　我家は三人暮しの「老人ホーム」であります　その姉も先年　受洗しましたので共々に日曜日は　山田集会にて　礼拝を守りえまして　これまた感謝であります　私の信仰はまことに頼りない　薄信ではありますが　今日まで　主は　導いてくださいました　今後も必ずお守りくださることを信じて　残りの人生も　主にあって　勝利を確信し　歩んで行きたいと思います

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

（ピリピ　4・6、7）

父を語る(3)

竹本真夫（次男・歯科医）

父から聞いた話。「ある日患者さんの歯の治療をしていたら、なんか南側の畑に人が走る。なんかあったんかな、ずいぶん人が走るなあと思うてたら、しばらくして来た別の患者さんから『今日は大変でしたろ』とお見舞を言われたので『いやー、なんかありましたか』と聞くと、『先生とこのボイラー室が小火でしたよ』と言われて、あれあれ、と思うた。」親父らしい話だと思って、心に残っています。

父を語る(4)

飯守節子（次女・飯守恪太郎氏夫人）

父は高知に住んでいますから、かねがね吉祥寺キリスト集会を実際に自分の目で見たいと思っていたのですが、ある日その望みが叶えられて吉祥寺集会に現われ、みなさまにご挨拶することになりました。自分の子供たち、その配偶者たち、さらに孫たちの多くが集まっている集会なので、しっかりお礼を言わなくては、と思ったのでしょう、長男の隆、その妻の裕子から始めて、順番に名前を挙げていきます。わりあいすらすらと挙げてきて、私の主人の「飯守恪太郎……」と言ったっきり、苦悶しているのですが、節子という名前が出てきません。集会の中にくすくす笑いが広がり、前列の方々など、小声で「せっちゃん、節子さん」とささやいてくださるのですが、慌てている父の耳には入りません。それでもついに思い出して「節子」と言ってにっこりした時には皆さん大笑いでした。私はそういった父の姿が、なぜか無性に好きです。

「主われを愛す」

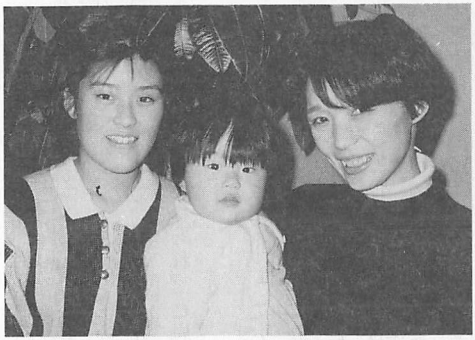
長沼純子さんの思い出

野田暢子

奉天に生まれる。一九四六年引き揚げ大分県別府市に居住。市立北小、市立中部中、県立鶴見ヶ丘高、明治大学商学部卒。日綿実業入社。在学中ご主人と知りあい結婚。家族は夫繁さん。長男賢一さん、次男浩司さん。

故　長沼純子

青森県十和田市に生まれる。十和田市立藤坂小に入学後、一九六四年仙台に転居。仙台市立宮城野小、宮城野中、常磐木高等女学校を卒業後上京。装道服装学院卒。一九七三年十二月ご主人の金弥さんと結婚。お子様は長女香奈さん、長男寛人さん、次女貴英さん。がんで一九八四年十二月二日、主に召される。





▲「イエス様はいつも私と一緒にいてくださいます」病床の長沼純子さん。



(左上)左から長女香奈さん、次男篤さん、新しい奥様の裕美さん。

◀ご主人の金弥さん。

はじめて純子さんにお目にかかったとき、純子さんは恐ろしいほど寂しげで硬い表情をしておられたのを私は今でもはっきりと覚えています。お子さまに対しても笑顔を見せることはあまりなく、思いつめたような、水のように澄んだ目をしていらっしゃいました。長身でほっそりしたお体だけに、いっそう孤独で淋しそうでした。彼女はまだ自分の病名を知りませんでしたので「がん」という言葉は禁句でした。今の彼女を支え、慰めることのできるお方はイエス様しかいないと、そのとき痛切に思いました。

私たちの集会のお仲間で東海大学の医学部の教授をしていらっしゃる重田先生から電話があったのは、七月のある日のことでした。「集会の仲間で聖路加病院の内科の医者である近森先生の患者さんに末期のがんの方がおられ、その方のために自宅の近くで二日に一度注射をしてくださるお医者様が必要だが誰か知らないだろうか」という用件でした。とりあえず、いつもお世話になっている山本先生をご紹介しました。お話をうかがって見ると、その患者は長沼純子さんという方で、私の家のすぐ近くの新しく建ったマンションにお住いだというではありませんか。難しい病の中にある純子さんを思い、心からお祈りしました。

やがて、九月の中旬頃に、集会の方と四人で、長沼さんのお宅に伺うことになりました。その時は純子さん、実母のツルさん、長女の香奈ちゃん、長男寛人君、次女の貴英ちゃんがいらっしゃって暖かく迎えてくださいました。皆様がほんとに純真な心を持たれたご家族で、はじめてお会いした方々とは思えず、親しく楽しい時間がどんどん過ぎていきました。話題にはイエス様の

ことやいろいろな証しがでましたが、そんなふとした折に、純子さんの表情には何か心が動いているような様子が少し見えました。私たちは「光よあれ」をお渡ししてその日はお別れしましたが、純子さんは私たちの証しの中に何か心にひびくものがあったのでしょう、「主を信じたい……主の導きをはっきり感じます」と言われました。

数日がたって、お母さまのツルさんが私の家にお見えになりました。

「純子はいま、真剣に証しの本を読んでいます。どうぞ純子を救ってください。精神的な苦しみから解放してやってください。朝から庭を見つめて黙って一日中座り続けている純子の横顔を見るとたまらない、ほんとうに神様に救われなければ、と思います」

お母さまの目からは、次々と涙がこぼれ落ちてきます。私はただ主がこのご家族を深く憐んでくださることを祈り続けるのみでした。

それから数日後の九月十七日のことです。ベックさんが純子さんを見舞ってくださいました。ベックさんはイエス様のこと、神様の愛のこと、永遠の命のことなどを、いつもの暖かい、少しドイツなまりのある日本語で切々と語ってくださいました。そうしてその後、純子さんとツルさんは、お二人ともはっきりとイエス様を受け入れ従う決心をし、心から主の前に祈られました。

その日はちょうどツルさんの六十四歳の誕生日とかで、お二人が「新生」なさったお祝いも兼ねて、ケーキとお茶でほんとうに楽しく幸いなひとときを持つことができました。ツルさんは、いままで縛られていた思いわずらいから解放されたせいでしょうか、はしゃいでよくお話しなさ

います。純子さんはあいかわらず笑顔は少なく淋しそうではありましたが、心の重荷を下した、という安心感を味わわれていたようでした。

「私は神様を知らず、背いていた罪人です。これからは聖書を信じて生きます」

そしてほんとに心の底からの思いを吐き出すという感じで、小さな声で、

「信じることができて、よかった……」

とゆっくりゆっくりかみしめるように言われました。

ベックさんが、がんで失われたお嬢様のリンデさんの証しの本を差し出されると、純子さんは

「必ず読ませていただきます。ありがとうございます」といわれました。

純子さんとお母さまのツルさんが主を受け入れられてから数日後、純子さんは聖路加病院に再入院なさいました。病室の壁には、重田ご夫妻が贈られたみことばの色紙が掲げられていました。

「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」

（イザヤ　43・1）

そのみことばを見て、病院の看護婦さん、掃除婦さん方が近づいていろいろと声を掛けたり、励ましてくださるようになりました。純子さんの周囲には少しずつ変化が現われ、彼女が主に守られ、周囲の人々に支えられて平安に、快適に過ごせるように整えられはじめたのが分かるようになってきました。

十月に入ると、病状は少し進んで、苦痛が度々おしよせてくるようになりました。しかし、この当時の純子さんについて私が思い出すのは、苦痛にもかかわらず、ほんとに明るく笑みこぼれていらっしゃったその笑顔であり、それを通して、誰の目にも明らかに見えるようになった主の支えです。

純子さんは三四〇号室に替わられていましたが、とっても明るく、心が強く元気になられたのがよく分かりました。イエス様を知る前のあの真っ暗な苦しみを通り抜けて、彼女はいま、何かから解放されたかのようでした。以前のあの恐ろしいほど寂し気で硬い表情はまったく消えうせてしまっていました。笑顔がほんとうに美しいのです。

「私はイエス様を信じたその日から、もう自分の命についてあまり思い煩わなくなりました。『恐れるな！』と神様が言われますので『はい、もう恐れません』……。ただ、それだけなんですよ」

とその笑顔の中から言われました。

看護婦の中に千田ウルスラさんというクリスチャンの方がおられ、忙しくても必ず一日一度はベッドに来て話をしてくださるのだそうです。また、病院の先生方からもよく「長沼さんは明るくて病人らしくないね」と言われるのだと、楽しそうに話していらっしゃいました。

また、その頃、こんなこともありました。十月のある日、私がうかがいますと、純子さんのベッドが空で、しばらく待っていたことがあります。廊下を通る点滴の運搬車の響きに驚いて出てみますと、ちょうど彼女が廊下の向こうを歩いて来るところでした。彼女は私を見つけると、

「野田さーん、私きょうあなたと会いたかったのーっ」

と体中で喜びを表わしながら小走りで近づいてきました。その嬉しそうなようすと言ったら……。そのような純子さんを見たのは、ほんとに初めてでした。それまでは、ご自分を決して崩さず、いつも肩を張っているようだったのです。

「今日のお昼前、とってもいいことがあったの。それを誰かに聞いてもらいたくて……。お隣の方に、玄米で作った飲み物を教わったの。それを飲むと元気になるんですって。嬉しいわ。いままでの私って、小さいときから感情を押さえて押さえて生きてきたの。嬉しいときも、悲しいときも、いつも心の中で押さえつけてきたの。だからこんな病気になったんだわ。これからは嬉しいときは嬉しいって言う。悲しいときは悲しいって言う。素直になるの。そうすれば生きることがほんとに楽になるのよね」

私たちは二人でお祈りをしました。

「病気になったことを通して私はイエス様を知ることができ、心からよかったと思います。また、一口の水がほんとうにおいしいこと、苦痛の後には必ず平安が来ることなど、今まで気が付かなかったことを一つ一つ教えてくださいましたことを感謝します。私の回りにやさしい看護婦さんたち、クリスチャンたちを置いてくださったこともありがとうございます。これもすべてあなた様のご計画であることを心から感謝します。主人や子供たちもイエス様を知ることができますように。お隣の方に勧めていただいた玄米で作る飲み物と励ましによって、私の病気がなおりそうな気がいたします。感謝いたします。このお祈りをイエス様のお名前によって

祈ります。アーメン」

また必ず来てくださいねと熱心に言われる言葉を後に、お別れしました。病室を出ると、涙が溢れました。玄米で作る飲み物に希望を託して、治ると信じこんでいる彼女……。これからどのようにしてお話をすればよいのか。しかし、純子さんがだんだんと幼な子のようにイエス様に信頼していかれる様子を見て、主はすべてをご存じであり、すべてがご計画の内にあり、彼女にとって最善の方法で導いておられることを確信することができました。

三日後に、純子さんの妹さんが青森からお見舞いに来られました。純子さんはとても喜んで、二人で病院の食堂に行き、カレーライスを三口、アイスクリームを一口、召し上がりました。少し刺激が強過ぎたのでしょう、その後お腹が痛くなったのだそうです。ほんとうに苦しそうでしたがその中から、

「カレーがおいしかった！」

と子供のように無邪気に言われる様子に、来ておられたご主人も、看護婦さんもつられて思わず笑い出してしまったのだそうです。

私がお見舞いしたときもかなりつらそうでした。

「これからいろいろな事があるでしょうけれど、ただ、イエス様を見上げましょうね」と言いますと、うつむいて苦しそうだった彼女は顔を上げて、

「私は恐れていません。思いわずらっていません」

と、はっきりとおっしゃいました。

それから一週間ほどしてうかがいますと、ガスが出るようになり、すっかり楽になったとのことでした。この間のカレーライスとアイスクリームの一件で胃に刺激が起こり、それまで胃も腸も動きを止めていたことが分かり、それに合った治療法が採られるようになり、ガスが出て胃腸の膨満感が減ったのだそうです。聖書には主はすべてのことを働かせて益としてくださるとありますが、「事実ですね」と二人で感謝しました。

「詩篇はほんとにすばらしい。私の心そのもので、大きな慰めです。特に23篇が好き」その頃の純子さんが好んで読んでいらっしゃったみことばは、詩篇でした。

主は私の羊飼い。私は乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。……たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。……私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私はいつまでも、主の家に住まいましょう。

（詩篇　23篇）

この頃の純子さんの何よりの願いは、一度でいいから自宅に帰りたい、そしてご主人、子供さんたちと水入らずの日を過ごしたい、ということで、そのために一生懸命がんばっていらっしゃる様子でした。主も憐れまれたのでしょう。その望みが叶えられたのは、秋も深まる十月二十一日のことでした。純子さんは最悪のコンディションでしたが、ご自宅に帰ることができ、子供さんたちと会われました。それは、純子さんのご家族にとって、何物にも代え難い一日だったこと

でしょう。その日のことは、ご家族のお一人お一人の胸の奥に、きっと深く深く刻み込まれていることと思います。

十月の中旬になりますと、病室の純子さんの鼻から胃に管が差し込まれ、胃の中のものを全部出す装置が着けられました。そのせいでしょうか、吐き気を訴えられ、咳も出ます。心は元気そうですが、体はつらそうなのです。管が邪魔でしゃべれないから、何でも話してほしいといわれるので、瀬島安江さんのことをお話しました。安江さんはご主人より先に天に召されましたが、ご主人がイエス様を受け入れられてから、「安江は朝一番の飛行機で天国に旅立ち、僕は夕方の便で旅立つために準備をしているのだと思っています。天国が近く思われ、安江と今こそ本当の夫婦になった実感がします」と喜んで証しなさっていることをお話しますと、彼女は真剣に聞いているようでした。

十月の末に、ベックさんとご一緒に純子さんを見舞った時のことです。いつになく、純子さんは何か気にかかることがあるご様子でした。挨拶もそこそこに、ベックさんに向かって

「近森先生が、主人に会いたいと言っておられます。それがどういうことなのか、お分かりでしょう？　私は自分の命がどうなっても主イエス様の所へ行くんだから何も思いわずらっていません。しかし主人はイエス様をまだ知らないし、私のことで苦しんでいます。もし私がもうそんなに長くないということを彼が聞くと、大変な状態になってしまうのではないでしょうか。それを思うと私は、主人や子供たちがかわいそうでかわいそうで……」

ますます痩せて大きくなった目に、大きな涙があふれてきます。ベックさんは純子さんの手を優しく取って、話されました。

「純子の病気は医学的には中々むつかしいけれど、主には奇跡をなさることができます。人は病気では決して死にません。主が備えられた時が来なければ、死ぬことはできません。ご主人や子供さんのことは、イエス様が心配してくださっているのです。純子が心配しても何もできないよ。しかしイエス様は『主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます（使徒16・31）』と約束してくださっているから必ず救われるよ」

純子さんは、見る見る明るい顔になられました。思いつめた様子がすっかりなくなり、思いわずらいからまったく解放されたようでした。私たちは、純子さんの一番好きな詩篇23篇のみことばを壁に貼りました。

十月も最後の日になりました。この頃の純子さんは、顔色は青白く、貧血状態が進行しているように見受けられました。激しかった胸の動悸も治まり、脈拍も正常に戻っていると看護婦さんが教えてくださいました。胃にたまる血液を出すために、あいかわらず鼻に管を通した不自由な状態ですが、人間の体は何と不思議に造られているのでしょう、やがて純子さんはそれにもなれて管も気にならなくなり、うがいもできるし咳もでなくなり、話すことも平気にできるようになりました。

「家族のことは、イエス様が心配してくださり必ず救ってくださるとのお約束を知って、もう

何も心配はなくなりました」

と幼な子のように無邪気に神様を信頼して心からくつろいでいらっしゃいます。純子さんはまだ一度もクリスチャンたちが集う集会にはいらしたことはありません。聖書だって、ほんの数カ月前までは手にとったことさえなかったはずです。それが、主イエスの御救いを受け入れて、イエス様に従う決心をしてわずか一カ月ほどの間に、こんなに明るく輝く姿に変えられるのを見て、私たちは、単純にみことばを信頼しきるときに、神様は人の思いをはるかに越えて主にある平安を与えられるのだということを目の当たりにする思いでした。ベックさんは純子さんのことをお話しになるとき、よく聖書の次の箇所を引用なさいます。

主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。

（ルカ　1・45）

まさにその通りの、素直で幸せな純子さんの姿でした。

この頃から純子さんはそれとなくご自分の葬儀についての希望を口になさるようになりました。

「私はイエス様を信じる前から、自分のお葬式は仏式ではなく、教会でやってほしいと漠然と思って主人にもそのように言っていましたけれど、いま、その希望が叶えられて、はっきりクリスチャンとしてのお葬式ができて、こんな嬉しいことはないわ」

その日は、こういったことをおっしゃって、どうしてか話題が葬儀のことに向かいがちです。私も少し困ってしまって、冗談みたいにして

「純子さんの時にはね、お花できれいにきれいに飾ってあげましょう。お花の中でほほえむ純子さんを見たら、子供さんたちにも、ご主人にも、きっと天国があるということ、それもすぐ身近にあるということが必ず分かっていただけるでしょう」

といいますと、

「お願い、お願い、そうして！」

と顔が輝きました。

病人の前で、本人の葬儀の話など、一般の方から見ればとんでもなく思いやりに欠け、不謹慎なことに思えるかもしれません。クリスチャンは何てひどい人たちだ、と思う方もあるでしょう。しかし、主イエスを受け入れた人たちから見ますと、人間がこの地上で生かされている本当の意味は、死後に始まる真実の人生のための準備期間に過ぎないのです。イエス様に救われた人間は、神様の祝福と憐れみを願いながら、どのような時にも大胆に主の側に立ち続けなければなりません。その時、人間の最大の敵である「死」が、かえってすばらしい希望につながるということ、それも、クリスチャンになってわずか一カ月あまりの純子さんが、死を目前にしながら、その恐怖から完全に解放され、輝いていらっしゃる姿を見ます時に、神様のご臨在を深く深く知らされました。

私はこう確信しています。死も、いのちも、……私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。（ローマ　8・38、39）

この頃、聖路加病院看護学校の日野原重明校長先生が、看護学生を引きつれて純子さんを名指しで訪問なさったことがありました。日野原校長は、

「長沼さんはカソリックですか、プロテスタントですか、それとも聖公会ですか?」と尋ねられました。純子さんは

「私そんなことわかりません。私はクリスチャンです」

と答えられ、リンデの本「実を結ぶ命」を校長先生に渡されました。色々な宗派を作ったのは、多くは人間の考えによることです。私たちは「何派」にも属さず、ただイエス・キリストによって救われ、イエス・キリストだけに属するクリスチャンです。

純子さんとは、よくご一緒にお祈りをしました。

「この病気を通してイエス様を知ったことを感謝します。また、家族のことをイエス様が心配してくださっていますので私はもう心配する必要がないことを感謝します。すべては神様のご計画の内にことが起こり、私を神様のご計画のままになしてくださいますように。主のご栄光のみが輝きますように。」

純子さんは、いつもこのようなことを、確かめるように一言一言祈っておられました。お祈りの後は一段と元気になられ、細い両手を上げてガッツ・ポーズをとられ、その姿に勇気付けられてよくお別れしたものです。彼女の口癖は、次のようなものでした。

「私はこの病院の中で、一番幸福な人なの」

クリスチャンの看護婦さんの千田ウルスラさんは、その頃の純子さんについて、次のように話されています。

「九月の終わり頃でしょうか。再入院なさって間もなく、純子さんはよく聖書を読んでいらっしゃいました。話しかけましたら、『私はもっともっと聖書を知りたい』と言われますので、私は毎日少しでも時間を作ってご一緒に聖書を読んでお祈りするようにいたしました。ある日、すごく苦しい処置がありました。それが終わり、私が部屋に入った時『今日はつらかった?』と聞きましたら、『いいえ、私はその前と、途中で一生懸命祈りました。そしたらぜんぜん痛くなかったのです。だから、つらい処置の時こそイエス様が側にいてくださることをつくづく感じました』とおっしゃいました。

まだ元気だった頃のある日、純子さんをお風呂に入れていましたら、『バプテスマって何ですか』と聞かれましたので、バプテスマとはキリストと共に死に、キリストと共に生きる、よみがえる、つまり生まれ変わったことを証しすることですよと説明しましたら、『私も生まれ変わりたい、洗礼を受けたい』と言われました。それ以後、とうとう洗礼を受けることはできませんでしたが、いつもご自分をクリスチャンと呼んでおられました。私たち看護婦に対しても、はっきりと、『私はクリスチャンになりました』とおっしゃっていました。純子さんの祈りは、感謝でいっぱいの祈りでした。『この病気のためにも感謝します。この病気を通して私はイエス様を知ることができました。それが私にとっては一番すばらしいことです』。このつらい病気のために感謝できることは、人間の力ではないことを、私はつくづく感じました。あ

る日のこと純子さんは、ピリピの4章を見つけて、私に示されました。

何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

（ピリピ　4・6、7）

人知を越えた神の平安があることを、私は知識の上では知っていましたが、今回それを体験的に知ることができました。この神の平安が純子さんの心にあったことは、誰でも部屋に入った人が感じることができました。看護婦さんたちの間にも、多くのことが教えられました。純子さんは私にこう言われました。『たとえこの病気が治らなくても私は心配しません。私のために心配しません。私はイエス様のみもとに行くことを知っております。ただ、主人と子供たちのために、もう少しの間生きていたい』とおっしゃっておられました。『主われを愛す』の二番がお好きで、いつもリクエストなさいました。『我が罪のために栄えを捨てて、天より下り十字架につき……』これは純子さんの信仰を、一つにまとめた言葉だと思います。純子さんのすばらしい信仰によって、私たちは強められました」

十一月のはじめになると、病状が進んでいるのでしょう、純子さんは個室に替わられました。その頃お見舞いにうかがった日々の中で、ベックさんとご一緒に訪問した印象深いある日のことをお伝えしたいと思います。

その日、面会券を看護婦さんに渡したとき、「長沼さんですね、よくいらっしゃいました」と親しげに言われ、驚きました。個室にはご主人の金弥さんも来ておられ、ちょうど千田さんが聖書を手にとってイザヤ書の43章を読み終わったところでした。純子さんは朝からつらい状態が続いていたとのことでしたが、お話しているうちに目に力が戻り、胸の動悸も治まり、顔が透き通るように明るく輝いてきました。

「ベックさんが来てくださると、私、不思議によくなるの」

「じゃ、僕たち、毎日来なくちゃね」

とベックさんが優しい目に笑みをたたえながら答えられると、純子さんは嬉しそうに何度もうなずいておられます。

ご主人は傍らの椅子に静かに座っておられます。純子さんはご主人を大きな目でみつめながら、色々な心遣いを示されています。ご主人は、

「今は僕のことなんかいいんだ。それより貴女は自分のことだけ考えていればいい」とおっしゃいます。純子さんは大きな目に涙をためて、じっとご主人をみつめられて

「私はイエス様を受け入れたときに楽になったから、心配はないの。それより、あなたのことが心配。あなたも早く楽になってほしい」

そして、私たちの方を向いて

「主人は優しい人で私のことを大変心配しています。主人が楽になることが、私の今一番の願いです」

と涙ながらに訴えられます。ベックさんは、

「いま、彼は一番苦しいんだよ。でも大丈夫。主は必ずご主人を救われるから。純子はどうか心配しないでね。主は思いわずらうな、といっておられるでしょう?」

「そうでした。もう、思いわずらいません」

と純子さんは素直にうなずかれました。そして、千田さんがくださったという賛美歌「主われを愛す」の歌詞を書いたすてきなカードを見せてくださいました。ベックさんやみんなの歌う声が聞きたい、という純子さんのご希望で、私たちは聖歌四七五番を歌いました。千田さんも声を聞きつけて一緒に歌いたいと仲間入りされました。

主イエスのみもとに休み場あり。荷を解きおろして憩いをえよ。贖い主よわれをそこに、
かくまいたまえ、み恵みもて。　（聖歌四七五番の2）

歌い終わると純子さんとご主人の拍手が病室に響きました。

純子さんはまた、次のようなことを私たちに話されました。

「愛するということがどういうことか、口でいろいろ言うのではなく、ただ黙って抱きしめる、それがどれだけ慰めや励ましになるかということが、やっと分かりました。娘の香奈が来たとき、私は香奈を抱きしめてやりました。『香奈ごめんね、いままで、優しいママでなくて。これからは優しいママになるからね』と言いましたら、香奈は大きな声でエーンエーンって泣きました。香奈が帰るとき、にっこり笑って私を見てくれたあの顔を、私はいつまでも忘れないでしょう。ほんとうに私は、初めて娘のあのような可愛らしい素晴らしい顔を見たんです」

そしてまた、次のようなことも話してくださいました。

「私の母は経済的に大変で一生懸命働かなければならず、私にとっては母というよりも父親でした。厳しく育てられ、抱いてもらったり優しく甘やかしてもらったりする余裕がなかったのです。それで私も自分の子を育てるときに、優しくする、ということが分からなかったのですね。でも母は、ほんとに私を愛してくれていたんです。」

数日後ベックさん、近森先生とご一緒にお見舞いしました。夕方のことでしたが、個室は薄暗く明かりが灯けられていません。純子さんはベッドの上でうつぶせになり、膝を折り、膝の間に顔を入れ、祈っているような姿勢で背中に押し寄せる痛みをじっと耐えていらっしゃいました。ベッドの傍らにはご主人の金弥さんが彼女の背をさすりながら黙って座っていらっしゃいました。気配で気が付いた純子さんは、体を起こし、顔を上げられました。その顔は、昨日までとはうってかわって苦痛のために憔悴しておられ、顔がいっそう小さくなられたように見えます。

「朝から痛みが激しくて……昼過ぎに注射を打ってもらったのですが効かないようです。いまお医者さんを呼んでいるのですが……」

とご主人。近森先生がすぐ看護婦さんを呼んでくださり、注射が打たれました。私たちはその間、廊下に出ていました。やがて純子さんの痛みが和らぎ、呼吸も楽になってきました。私たちも部屋に入りました。麻酔が効いてきたのでしょう、少し眠そうな表情で、

「もう痛くなくて、ふわーっと気持ちがよくて、頭がぼうっとしている……」

と言われます。私が注射の跡を揉んであげていますと、

「つらいとき、苦しいとき、私は小羊になったような気がします。そんなとき、イエス様が私を抱いていてくださるのを心から感じます」

彼女は呂律が回らず、目を開けていられないようです。

「何かお話してください、でないと私、眠ってしまいそう。今朝、聖書ですてきなところを読んだのよ」

彼女は、はさんであるしおりで、聖書を開け、その部分を指で示しました。

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。

（イザヤ　63・9）

「何か歌って……」

彼女の注文で、皆で心をこめて二曲歌いました。彼女は拍手をし、さしあげた聖歌のコピーを胸に抱いて、ベックさんに手をとられて、幼児のように眠ってしまいました。

純子さんは、今夜はきっと安らかに眠れるにちがいない、私たちはそう思いました。しかし、すぐにドアがノックされ、ガラガラと大きな機械が病室に入ってきました。今からレントゲンを撮るのだそうです。病巣との闘いが、続いているのです。室外に出た私たちは、処置が終わるのを待って、再び病室に入りました。一緒にお祈りをしましょうということになり、ベックさんと私がお祈りをした後、彼女も声を出して、一言一言確かめるように祈られました。

「今日も朝からつらいとき、側にいてくださって心から感謝いたします。私が弱いときこそイエス様が強く私に現われてくださり、抱き上げてくださり、私を励ましてくださいます。そうしてそのことを心から感謝いたします。感謝をすれば感謝がたくさん返ってきて私はイエス様のみことばがどれだけすばらしいかをいつも心に感じております。肉の苦しみはまだまだ続いても、イエス様が側にいらっしゃるかぎり私の平安はいつまでも続いておりますので、どうぞご計画通りになさってください。イエス様のご計画により、すばらしい日々がやってきますようにに心からお祈りしています。いつもいつも私のために心を砕いてくださりありがとうございます。つたない祈りをイエス様の御名によってお祈り申しあげます。アーメン」

ベックさんの大きな手が動いて、彼女の額に掛かる髪の毛を掻き上げ、子供にするように彼女の頭を撫でてあげられますと、彼女は幼児が父親にそうされるのを喜ぶようににっこりしました。

「みんな帰る頃になって私の目が覚め、元気になってくるなんて、残念だわー」

と駄々をこねるように言われた可愛い姿を今でもはっきり覚えています。

十一月も下旬になり、お子さまの寛人君を保育園へ送り迎えするようになりました。園長先生が、他人の私が送り迎えするほどさしせまった事態ならばと、貴英ちゃんを明日から預ってくださることになりました。ツルさんとただただ感謝しました。この他にも色々なことが重なって、ベックさんとご一緒に再び純子さんをお見舞いしたのは、少し日が経ってからになりました。純子さんは待ちかねていらしたご様子で、涙ぐんでおられます。二十三日からは私もできるだけ付

き添うことをいい、「沢山沢山甘やかしてあげましょうね」と話しますと、彼女はうなずいて、声を詰まらせて泣かれました。私のようなものでも、ただ共にいてさしあげるというだけで、どんなに大きな慰めになっていたことか……。これからは彼女が天に召されるまで、ただただ一緒にいようと、決心しました。

「純子は肉体的に少し弱っているけれど、精神的には決して悪くないよ、純子の傍にいつもイエス様がおられるでしょう。イエス様はいつも純子のことを一番考えているよ」

とベックさんが慰められますと、彼女は

「ええ、分かっています。こないだも病院からカウンセラーにかかるようにと勧められましたが、そんな必要はありません、私にはイエス様がいます、とお断りしました」

としっかりとおっしゃいます。ベックさんは、

「そうだよ、純子の心のことは、イエス様が一番よく分かるよ。ほんとうに分かるのは、イエス様だけだよ」

と力付けられました。

十一月二十三日になり、午前九時半から病院に入りました。ご主人のご兄弟や親戚の方、純子さんのお姉様、弟様も来られ、病室はお見舞い客が多く、あわただしく落ち着かない雰囲気です。ご本人は思ったよりもお元気で、こっそりと片目をつぶって私に合図なさると、

「危篤になったみたいでしょ？　でも私はまだ死なないわ」

とささやかれました。

見舞い客が途絶えると、純子さんとお話をしました。彼女に迫っている厳しい現実のために、イエス様だけを見上げましょうと話しました。また「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい（Ⅰテサロニケ　5・16、17、18）」とある通り、たとえどんな状態になろうともこの神様のご命令を守りましょう、それが一番苦しんでいるご家族や周囲の方々へのこれから生きていく上での大きな慰めになっているのですから、また、私たちは母親として後に残される者のことを考えましょう、私たちのことはイエス様が心配してくださっているから大丈夫ですよと、励ましました。

彼女は大きな目で私を見て力強くうなずかれ、

「私はイエス様を知って以来、いつも祈っています。すべてのことを感謝しています。自分の命についても思いわずらっていません。イエス様が家族を必ず救うと約束してくださっていますから、そのことを思ったら喜ぶことができます」

とおっしゃいました。

十一月二十七日朝、病院に入り、付き添いの佐藤さんに会い、純子さんの着替えを手伝いました。部屋中に血の匂いが満ちています。純子さんは明け方に激しく血を吐かれ、寝間着もシーツも血まみれになってしまったのだそうです。壁のカレンダーのみことばが呼びかけてきました。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

（イザヤ　41・10）

私はこのみことばを読み、

「たじろぐな、とおっしゃっていますから、どんなことが起こってもたじろがないでいましょうね」

と言いますと、彼女は、

「私はたじろいでいません、一度もたじろいでいない……」とおっしゃいます。この頃、彼女との挨拶はいつも

「怖くないでしょう？　イエス様が一緒にいてくださるのが分かる？」

です。彼女は、どんなに状態の悪い時でも

「私は怖くありません。イエス様はいつも私と一緒にいてくださいます」

と答えます。このやりとりは、終始変わることはありませんでした。しかし、彼女の体は衰え、眠くて眠くてたまらないご様子でした。

この後、純子さんは病状が悪化し、ほとんど動くことができなくなってしまわれました。

十一月三十日の午後四時三十分過ぎ、純子さんが危篤におちいられたとの報が入りました。集会のみなさま方に電話して、祈っていただきました。

十二月一日、純子さんは血圧を上げる注射によって一時的に持ち直されたとか、お宅に電話し

てツルさんの元気な声にほっとしました。今日は純子さんの十一回目の結婚記念日だそうです。ベックさんに連絡を取り、一人で病院に向かいました。看護婦さんが喜んで迎えてくださり、「今小康状態ですから、どうぞよろしく」と言われました。

病室では、純子さんのお姉さまの美智子さんが、目をまっ赤に泣きはらしておられます。その泣き声に、純子さんは、「どうして泣くの」と聞かれ、看護婦さんに、美智子さんに胃の薬を飲ませてくださるように頼まれています。ご自分が危篤でありながら、お姉さまのことばかり心配しておられるのです。私は傍によって、「夕べは大変でしたね。でも、イエス様はいつも傍にいてくださいますよ」と話しかけますと、静かにうなずかれました。

純子さんのお好きな「主われを愛す」を歌いました。千田さんが病室に入ってこられ、詩篇23篇を読まれ、その後お祈りをいたしました。

たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから……。

（詩篇　23・4）

四時前、ベックさんが駆けつけてくださいました。千田さんのお勧めでベックさんがお祈りをなさると、純子さんのご様子に強い反応が現われ、お口が動きました。

「ありがとう……」

病室は静けさと平安で満たされ、主のご臨在がひしひしと感じられます。

ツルさんの声が純子さんには一番よく聞こえるらしく、

「純子、返事をしなさい、純子、純子、純子……」
と呼びかけられますと、純子さんは
「はい、はい、はい」
と呼ばれた数だけ答えられますので、ついみなで笑いだしてしまいました。この場にあっても彼女からは巧まないユーモアがあふれてくるのです。「主われを愛す」を皆で歌いました。純子さんはもう一度二番を聞きたいと言われますので、繰り返し歌いました。歌い終わると、ふたたび病室の中に平安と静けさが満ちあふれます。そうしている内に、香奈ちゃんが見えました。

「香奈ちゃんに話しておきたいことが一杯あるでしょう?」
とうながしますと、純子さんは
「話したいことは、一杯あるんだけれど、頭が、ごちゃごちゃして……」
といいながら、手を合わせてお祈りの姿勢をとられました。その全身からは、彼女が香奈ちゃんに本当に言い残したい願い、主を信じ強く生きてほしい、という母親としての切ないほどの願いが溢れて、その場にい合わせた皆は涙で胸がつまりました。香奈ちゃんは涙の中からお母さまに呼びかけました。
「ママがんばって! 私もイエス様を信じるからね! 私いつも寛人と祈ってるよ……」
純子さんは、薄れていく意識との闘いの中から全身をふりしぼって、一声、
「香奈!」

と大きく娘の名を呼ばれました。

帰り道、ツルさんがしみじみと話されました。

「私は主人、妹、甥と三人続けて亡くしました。その時は悲しくて悲しくて、血圧が上がってしまって頭が狂いそうになりました。しかしその三人より、もっと血の濃い我が子の純子が召されようとしているのに、なぜか私は以前と違って平安なんですよ。純子は神様のみもとに行くんですものね。いつかはそこで会えるんですものね。今はただ、純子がこれ以上苦しまないように、できるだけ早くみもとに召してくださいと、祈っています」

十二月二日。一人の魂が、今、この世を去ろうとしています。悲しみの中にも不思議な明るさと、平安、慰めが病室に溢れ、神様が確かにこの場にいらしてくださっています。

午後一時半過ぎ、突然空が暗くなり、冬には珍しく雷がゴロゴロとなりました。

午後二時十二分　長沼純子さん　天に召される　三十二歳

息を引きとられるほんの少し前、彼女は天を見上げてにっこりとほほえんで息を引きとられたとのことです。彼女は天国に迎え入れてくださるイエス様を、きっとその目で見たのでしょう。

死を輝いて生きた人、長沼純子さんとの出会い

近森大志郎

一九八二年山口大学医学部卒業、一九八六年まで聖路加国際病院内科に勤務。現在高知医科大学老年病科助手としてロンドン・セントジョージ医科大学心臓科学部門に留学中。

それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。もし私たちが、キリストにつぎ合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。

（ローマ　6・4、5）

私が初めて長沼純子さんに出会ったのは一九八四年の初夏でした。若く非常に美しい方で、外見上からは、すでにその肉体ががんによって蝕まれているとは想像しがたいほどでした。この時から主治医として純子さんの治療を開始したのですが、検査結果を総合すると進行性胃がんのためにがん性腹膜炎を併発し、腹水の貯留をきたしている状態でした。現代の医学ではどうすることもできません。このため、上級医師およびスタッフと検討しご主人とも相談の上、一度退院できるようにすることと、苦痛の除去を第一とすることを治療の主体とすることに決定しました。幸いにも抗がん剤が奏効し、腹水も消失して歩いて退院できるようになりました。

当時純子さんにはがんであるとは宣告していませんでした。しかし、やがて状態が悪化して再入院することは確実です。退院される日に病院のチャペルで、長沼夫妻と病気のこと、および彼女にとってこの病気はどのような意味があるかについて話しあいました。

大多数の若い人は大病を患うことなく生活し、仕事・勉学・余暇などに日々を過ごしています。闘病生活を通してはじめて健康のはかなさを体験し、生とは何か、死とは何かを考え、そして、人生の意義、目的を真剣に考える機会が与えられるのではないでしょうか。

私はその場でイエス様に救われた自分の体験などを話し、聖書を読むように勧めました。純子さんは本当に素直に、

「イエス様のことをよく知りたい」

と言われました。この時すでに純子さんは主の恵みの中に移されていたのです。

退院後、純子さんのお宅の近くの重田先生および野田さんと一緒に、長沼夫妻のご自宅を訪問しました。この時も彼女は真摯な態度で常にイエス様に対して心を開かれていました。それから吉祥寺集会の大勢のみなさま方による祈りが始まったのです。

夏の間は落着いていた病状も、秋には悪くなり、腹水が増加してくるようになり、再入院することになりました。そして、入院中に純子さんはベックさんから福音を伝えられ、イエス様を受け入れて救われました。

今回の入院では、最初は効果のあった抗がん剤も無効で、治療は末期医療が中心となりました。がんは一般の人々に恐れられています。その理由は、この病が手おくれの場合死を意味している

というばかりではなく、末期に伴う苦痛に対する恐怖もあるからではないでしょうか。がんの末期症状として患者さんを苦しめるのは疼痛ばかりではありません。がんの進展や合併症によっては、呼吸困難、嘔気、腹部膨満感、睡眠障害など、多種多様の症状が出現します。これらの一つ一つを軽減させ、より苦痛の少ない状態で臨終を迎えることができるようにするのが末期医療の目的です。

純子さんの場合は若くてがんに侵されているにもかかわらず、このような苦痛を訴えることが例外的に少なかったように思われました。病の床にあっても、

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。（詩篇23・1、2）

と笑顔でみことばを口にすることができました。

私は、病気が非常に重篤であり、死に至る可能性があることについて伝え、その後二人で祈りました。

主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。（詩篇　23・3、4）

この時彼女は落胆することなく、

「私のことについてはイエス様と一緒にいるので何も心配することはないけれども、三人の子供たちと後に残された主人がかわいそう……」

と言われました。

現在、日本においては「がんの告知」がなされることは少ないようです。その背景についてはいろいろ言われていますが、患者さん本人に病状を告げない場合、重大な問題が生じてきます。がんの末期になると、病気の進行について周囲の人がどのように説明しても、自分の体の具合は患者さん本人が一番良く分かります。そして、説明と実際との乖離について深く悩むようになります。ここで「本当は快方に向かっているので、病気が進行していると感じるのは気のせいだ」とか「弱気なことは言わずに頑張りなさい」と医療従事者や家族が答えることが多いのですが、この返事によって患者さんは周囲との繋がりを失い、孤独な立場に追いやられます。患者さんは病気についての情報を知ること以上に自分の体調をみんなに分かって欲しがっていることが多いのです。この病気についての共通の認識がなければ、会話の範囲も狭くなり、心の交流も途絶えがちになります。一人一人の人生のなかで、最も弱々しく依存的で、大勢の周囲の人々によって守られるべき死の床において、精神的に孤立した状態で臨終を迎えるとは何と悲しむべきことでしょうか。しかしながら「死」という問題を抜きにしては、このような患者さんと全面的に心が通いあうことは不可能です。「死がすべての終りである」としか考えることができない人々にとっては、死に直面し、死について語り合うことは非常に困難なことかもしれません。また、たとえ話しあったとしても、すべてを諦める以外に道はなく、虚しさしか残りません。けれども、す

べての人間にとって、このような虚しい終末しか用意されていないのでしょうか？　決してそうではありません。

そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。

（ヘブル　2・14、15）

イエス様によって魂が救われた人々にとって、もはや死とは恐怖でも虚しさでもなく、やがて天国における再会が約束された短い別れにしかすぎないのです。死の床においても死を恐れることなく、永遠のいのちを信じて、多くの主にある兄弟姉妹に守られ共に祈ることができることは、何と幸せなことでしょうか。

長沼純子さんは十二月二日に天に召されましたが、永遠のいのちを確信し、平安に天国に旅立たれました。死は、この世における別れを意味し、万人にとって悲しいものだと思います。しかしこの悲しみの中において、永遠のいのちを信じ、希望を持って歩むことができることは、主による大いなる恵みです。

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

（ローマ　6・23）

主の御手に刻まれし我が名

鈴木世喜子



▲結婚式で教え子たちに祝福されて。

福島県郡山市に生まれる。芳賀小、小原田中、県立安積女子高を経て、早稲田大学社会科学部卒業。現在多摩市公立学校に勤務。家族は夫力さん、長女陽子さん。



◀ご家族で記念撮影。左から夫力さん、長女陽子さん、世喜子さん。

「献身的な愛情を捧げ得る者と結ばれることは、言葉で表現することも想像することもできないような大きな祝福です。そこには失望はありません」。これはかつて中国で、神によって大きな働きをした英国の宣教師ハドソン・テーラーが、彼の母親に宛てた手紙の一節です。

一九八六年十一月十五日、吉祥寺キリスト集会で、神さまの導きによって、私は、愛する力さんと結婚式を挙げました。

会場に入り切れなかった学校の教え子たちが、花束を手に、ウェディングドレスをまとった私に駆けよってきてくれました。式を終えた私たちはもみくちゃになりながら、子供たちからの祝福を受けたのでした。そのような子供たちの姿を通しても、主の祝福とご愛を感じ、深く感謝したのでした。

幼いころ

わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。　（イザヤ　43・1）

私は、福島県郡山市に、国井勲、イサヲという同じ名前を持つ両親の長女として生をうけました。ほんとうにきめ細かな両親の愛情に包まれ、屈折することなど知らず、のびのびと成長しました。

私は世喜子という名ですが、この名は「人のために生きなさい。人に喜ばれるような人生を送ってほしい」という両親の願いが込められてつけられた名前です。幼な心に私自身、人のために

生きる生涯を送りたいと願うようになりました。しかし、その心の奥深くを探り、何に栄光を帰そうとしていたかと考える時、幼いながら自分自身のためにではなかったかと驚くのです。感受性の強い子供でしたが、よくクラス委員をしているようないわゆる優等生でした。最初苦手なことでも、頑張れば人一倍できるようになる、というのが子供なりに持っていた信念で、まわりの人たちにもそのように教えられてきました。そして大抵の場合、そのようになっていく恵まれた子供でした。しかしそのことが知らず知らずのうちに子供心の中に誇り高ぶる傲慢の芽が育っていく土壌となったのでしょう。

そんな子供の頃にも「人間をお造りになったのは神さまに違いない。そして神さまはいつでも天から私を見ている。そしてすべてを知っている」と、誰に教わるともなく空を見上げて思ったことをふと思い出すのです。

神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。

（伝道者の書　3・11）

はじめての挫折感

屈折することを知らない温室育ちの子供がいったん挫折すると、本当にもろく、そのショックから立ち上がり難いものであることを、高校生になって嫌というほど味わうことになりました。憧れの女子校――進学校へ入学して間もなく、私は卒業式を指折り数えて待っている生徒に変っていました。人前でのほんのちょっとした失敗から人前に立つのが嫌い、集団が嫌い、人間が嫌

いとなり、だんだんと学校へ行くことが苦痛になっていきました。今まで挫折することを知らずに育ってきましたから、思わぬ落し穴に落ちてしまったような感じでした。

そういう自分に鞭打つように学校へ通っていましたが、ある朝、学校へ向かうはずの自分の足は逆方向の駅へと向かっていました。もうどうしても、学校へは足が向かなくなってしまったのでした。福島駅まで汽車に乗り、学校の制服姿で鞄を持ったまま「今から逃げだしたい」「今から逃げだしたい」と一日中、福島市内をぐるぐるあてどなく歩き廻っていました。「私は、こんな人間ではなかったはずなのに、なんとかしなくては、なんとかしなくては」となすすべもないまま歩き続けたあの一日を忘れることができません。日が暮れてしまうと同時に心細くなり、家に「迎えにきてほしい」と泣きながら電話を入れていました。両親は何事があったのだろうと、タクシーを飛ばして迎えにきてくれました。

母はその数日後に「お前はどうして一人で苦しんでいるのか。お母さんに何でも話してほしい、お前の苦しみはお母さんの苦しみなんだから、お母さんと一緒にお前の問題を解決していこう」と言ってくれました。しかし「私の憐れな心を母が知ったらどんなにがっかりするだろう」と思い、また「母に話しても誰に話してもこの問題は解決しない、私の内側の問題なのだから」と思っていたのです。

父親はそういうことがあってから、少しでも学校の帰りが遅くなると、私の帰りを路地で立って待っていてくれました。私は自転車通学でしたから、私の自転車姿を認めると一足先に父は安心したように黙って家へ入っていきました。父親の無言の愛情でした。その父親の後姿を見なが



天の御国を目指して

重田定義
東海大学医学部教授(衛生学)
東京都出身／番町小／都立４中／慶応大学医学専門部卒／妻　都代子
住所　東京都杉並区清水2-8-12
〒167　電03-395-1775
家庭集会　通常毎２土曜夕５時半

ひとり娘のまりを天国に送ってから５年になります。聖書のみことばの約束によって私共夫婦の寂しさは娘との天国での再会の希望に変えられ、その希望は日々強くなっています。娘は私共夫婦のみならず両親にとっても何物にも変えがたい宝でした。けれども神はその宝を20年間私共の手に預けられ、主イエスを信じる者としてくださり罪の赦しと永遠のいのちをお与えくださったうえでご自分のもとに取り戻されました。それ以来私共夫婦の心は地上から天国に、主イエスのみに向けられ、主に従って歩みたいと切に望む者と変えられました。娘が召されて半年後主に示されて家庭集会を始めました。母も家庭集会や吉祥寺集会に集い始め、みことばにふれ主にある兄弟姉妹との交わりを与えられて神の愛を知り、自分の罪を示され、イエス・キリストを救い主として信じる者とされました。母の救いはまりが切に祈っていたことでした。母に肺がんが発見されてからも主は平安と天国へのはっきりとした希望を与えてくださっています。私と妻も（Ⅱコリント5・15）のみことばのように天国を目指しつつ主に従って歩みたいと心から願う毎日です。

主は最善をなしてくださる

重田花子
東京都出身／東京女子高等師範学校附属小学校／同校附属高等女学校卒／82歳／子供　二男

私はキリスト教式で結婚式を挙げ日本キリスト教団の教会に通い子供たちも日曜学校に通わせておりましたが、確信のないままにいつしか教会を離れてしまいました。その後50余年経った1983年12月に、孫のまりが突然天に召され、その時の驚きと悲しみは忘れることができません。けれどもその後、長男夫婦の生活を見つめ、また、まりに会いたい一心で神様を求め集会に集いますうちに、神様から離れ自分の思いを中心に生きてきた私自身の罪が示され、1985年６月受洗いたしました。そして集会のみなさま方とのおつきあいが与えられ、生きて働かれるイエス様を知る者とされて感謝でいっぱいです。昨年夏に足の甲がむくみ、検査の結果心不全一歩手前とのこと、また思いがけず肺にがんのあることも発見されました。もし主を知らなかったらどんなに驚き悲しんだことでしょう。けれども主はいつも私と共にいてくださり、苦しみも痛みも共に担ってくださることを信じておりますので何の不安もなく、天国に行く特権を与えられておりますのでむしろ希望が湧いた思いです。主は最善をなしてくださることを体験し、平安な日々を過ごしております。

生きておられる イエス様

柳原基子

静岡県出身／下泉小／徳山中／島田高／佐伯栄養学校卒／夫　幸男／子供　三女

住所　横浜市港南区上永谷5-22-67

〒233　電045-844-6056

家庭集会　毎月１回（不定期）

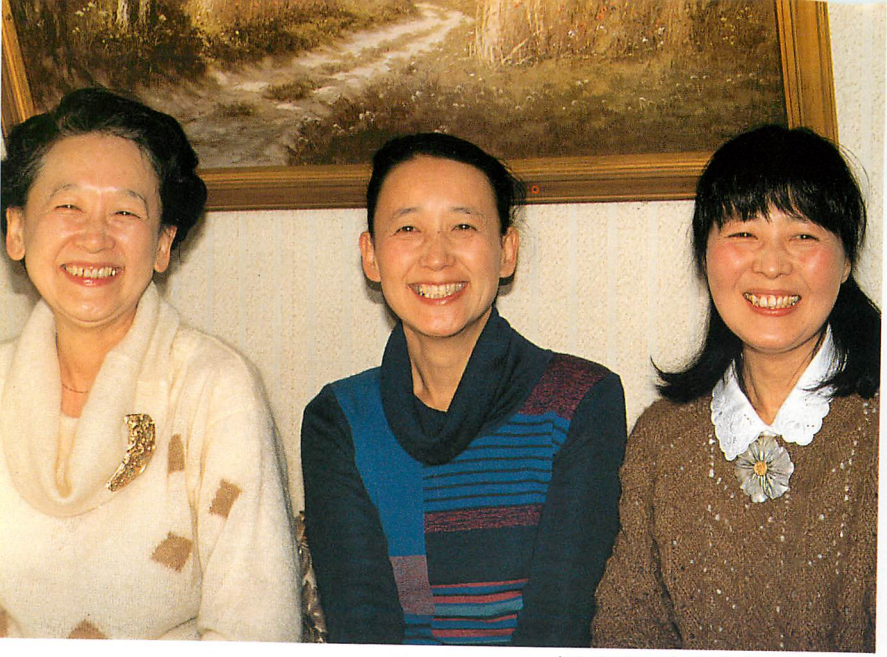
私がイエス様の名前を最初に聞いたのは小学校の頃日曜学校でのことでした。その後の不安の多い人生の歩みの中でも、時折懐しい子供賛美歌を口ずさむことはありましたが、イエス様がこの私のために十字架にかかって死んでくださり、私が救われるのを両手を広げて待っていてくださることなど思いもよりませんでした。先に救われた姉から信仰のすばらしさを聞いた時も、それを認めながらも、自分の考えで歩みたい気持でした。しかし父が突然行方不明になるという事件を通して、死の恐怖と人間の力の限界を認めざるを得ませんでした。「もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです」(ローマ10・9)このような祈りに導かれ、心から平安を与えられました。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである」（Ⅰコリント２・９）永遠のいのちを与えられたことを感謝し、計り知れない神の愛の中で日々過しております。

罪からの解放

荒井弘恵

静岡県出身／下泉小／徳山中／県立島田高／山脇服飾美術学院卒／夫　家秀／子供　二男一女

自己中心でわがままだった私は、結婚生活の中で自分の罪に少しも気がつかず、そこから逃れるために夫を責め、別居を続けていました。自立の目的で始めた仕事も、ただ、むなしさをまぎらわすだけだと気付きはじめたその時、姉の誘いでバイブルキャンプに参加しました。イエス様か、仕事かの選択に迷いつつも主を受け入れたのですが、かたくなな私は自分を捨てきれずにおりました。そんな時、息子が心臓病だと診断され、光の中に出していない罪の告白を示されてはじめて悔い改めました。「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」（Ⅰヨハネ１・９）そして息子の手術の時は、主にゆだねて祈ることを体験し、心からの平安を与えられました。また主は、私を心から夫を愛する妻に内側から造りかえてくださいました。離婚裁判までしていた夫婦が主のあわれみによって再び一つになり、家族が建て直されました。これは人にはできないことです。「聖書はこう言っています。『主に信頼する者は、失望させられることがない』」（ローマ10・11）



左から高橋艶子さん、柳原基子さん、荒井弘恵さん。

イエス様の ご支配の中に

高橋艶子

静岡県出身／下泉小／県立榛原高
女／県立沼津高女専攻科卒／夫
正一／子供　二男一女
住所　三鷹市井の頭2-30-7
〒181　電0422-44-3898
家庭集会　1・3日曜19時/ケーキの会（不定期）

「神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました」(コロサイ1･13) 二十年前、私は恵まれた環境の中でより充実した幸せな生活を求め、余暇には、料理、手芸、アートフラワーと稽古事に力を注ぎましたが、すればするほど虚しさのみが残り、確かな心のよりどころが欲しいと願っておりました。そんな時ケーキの会に導かれ、聖書の話を聞き、福音の真理にふれ、自分の傲慢で愛のない自己中心的な醜い姿を鏡に写したように示され、素直に悔い改めに導かれました。イエス様の十字架の死は、私の罪を取り除いてくださる唯一の道だったのです。赦されたことを感謝してイエス様に従う決心をした時、解放感と平安が与えられ、求める心は満たされ、生きる目的がはっきりしました。神の知恵は底知れず深く、完全です。神はこの世を支配しておられます。真実な愛とみことばの約束は決して変らず、恵みをもって日々導いてくださるイエス様にすべてをゆだね、力強く生きることのできる幸いを心から感謝しております。「すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです」(ローマ11・36)

与えられた平安

上野巨志
東京都出身／南大谷小／南大谷中、砧中／桐朋学園高校音楽科卒／ロンドン・ロイヤルアカデミー・サティフィケートコース終了

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハネ3・16)

神は僕たち人間を愛してくださいました。神の愛を知った生活は、本当に平安です。イエス・キリストを主として、信仰を持って歩んでいく時、自分はどうしようもなく、どこまでも罪人であることを思わずにはいられません。神の前にたびたび罪を犯し、イライラしたり怒ったりしてしまいます。しかしそのような時も、神に祈ることによって平安が与えられます。また、人生におけるさまざまな問題や悩みに直面した時にも、神はみこころにかなった道を備えてくださり、導いてくださると思います。

「神に信頼する者は、失望させられることがない」(ローマ9・33)と聖書にあります。また「わたし(主イエス)は、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」(マタイ28・20)とも書かれています。どんなことがあっても常に神がそばにいて守っていてくださるということは、本当に大きな喜びです。

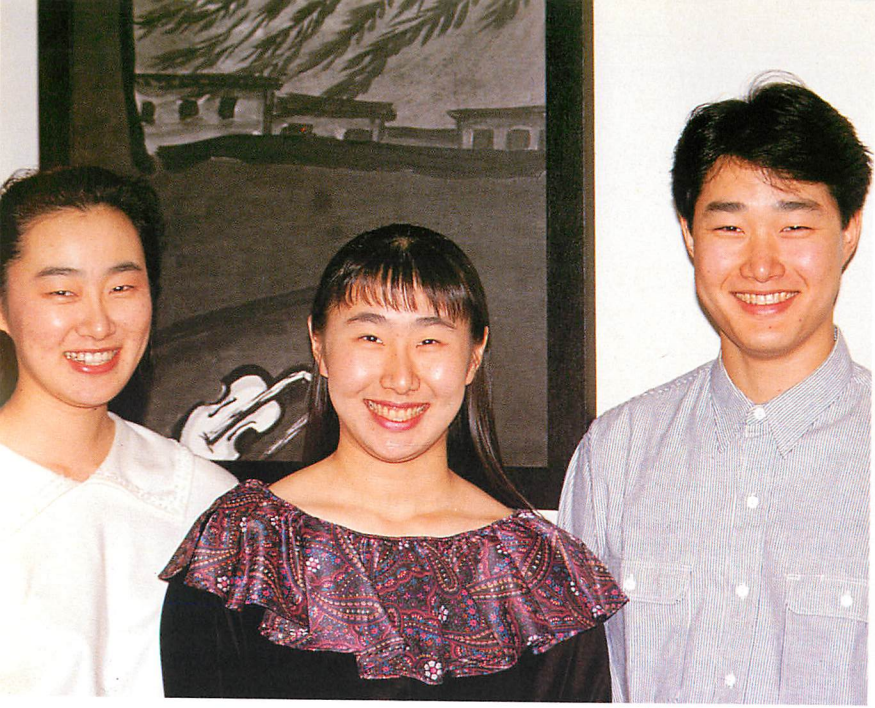
互いに愛し合いなさい

ヨハネ13・34

上野路子
東京都出身／南大谷小／玉川聖学院中等部／桐朋学園高音楽科卒／ロンドン音楽大学在学中

母がクリスチャンでしたので、私は母の胎内にいる時から神様の福音にふれて育ってきました。それほど神様は私を愛してくださり、救ってくださろうとなさったのです。神様は私たちの目には見えませんが、心の中におられ、私たちの心の中のすべてを知っていらっしゃいます。私は人間にはだれにでも罪の性質があることを認め、イエス・キリスト以外に救いの道はないと信じました。

私は、子供のころから戦争についてとても関心を持っていました。なぜ人々がお互いに傷つけあい、殺しあわなければならないのか不思議でした。そのころから神様の存在は信じていましたが、私にはどうしようもないことだとあきらめていました。イエス様はこうおっしゃいました。「あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」(ヨハネ13・34) 神様が私たちを愛してくださったのですから、私たちも互いに愛し合うことによって神様を愛することができるのではないでしょうか。人種差別や戦争のない世界になるように祈ってやみません。



左から上野葉子さん、路子さん、巨志さん。

主イエスのみこころは？

上野葉子
ドイツ留学中
東京都出身／町田市立第五小／町田市立南大谷中／玉川学園高／東京芸術大学音楽学部卒

4才からピアノを習い、17才からコントラバスを始めました。両親ともクリスチャンで、私も子供の頃から当然のように主イエス・キリストが救い主だと思っていましたが、中学生の頃自分の罪を示され主イエスに従って歩もうと決心しました。

子供の頃から、自分の勉強する音楽が主の栄光を現わすものとなるよう願っていました。しかし一方では、自分にとって音楽が主の栄光を現わす最善の道かどうか悩むときもたびたびありました。「私などが音楽をやっても主の栄光を現わせない。やめた方がいいのではないか」と思っていました。

しかし大学を卒業し、西ドイツ・フランクフルトへ行って、ドイツ人の先生について勉強するうちに、この気持ちは主イエスからでなく私自身から来るものだと示されました。練習が辛いので「み心でない」と言って逃れようとしていたのです。

今だに怠惰な者ですが、主イエスのみことばのみに頼って進みたいと思います。「私たちは、私たちを愛してくださった方によって、……圧倒的な勝利者となるのです」（ローマ8・37）

神様の計画

高田　馨（かおり）
会社員
東京都出身／八王子市立元木小／
八王子市立恩学中／都立日野高卒

私が洗礼を受けたのは中学1年生の時でした。生まれた時から集会に行っている私にとって、それはあたりまえのことのように思えました。していることも、それ以前と変わらず、聖書は日曜日と心配ごとがある時だけしか開きませんでした。けれども、このような生活を神様は変えてくださる、と信じていたことは確かです。私たちの生活は、生まれる前から神様のご計画の通りである、と母から聞きました。私は中学時代の後半から、色々な人と友だちになることができましたが、どの友だちもみんな神様が与えてくださったんだ、と今改めて感謝しなければなりません。というのは、私は、友だちの一人が神様を信じて大きく変わるのを見て、神様のすばらしさを知り、自分の信仰も大きく変えられたからです。聖書も毎日読むようになりました。この友だちとの出会いも、神様が私が生まれる前から計画してくださっていたのでしょう。今では、すべてのことが神様のご計画であると確信しています。「神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」(ローマ8・28)

私と共にいてくださる主

高田由里
東京都出身／元木小／恩方中／都
立八王子北高卒

私は中学2年の時に洗礼を受けました。その時は本当に真剣な気持ちだったのですが、中学3年の時、受験で忙しく、だんだん集会に行くのがイヤになり、「勉強があるから」などと言って休むようになりました。そのうちに神様からも心が離れ、毎日が楽しくて、「神がなんだ」と楽しみを追いかけるのに夢中になりました。もう私の心には神様が入る余地もありません。そのうちに、楽しんでいても何かむなしいと感じるようになりました。いろいろなことをしてみましたが、満たされません。そんな時、仲のよい友だちに裏切られ、大きなショックを受けました。悲しみで一杯だった時、母が、「女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない」(イザヤ49・15) とイエス様がおっしゃっていると言うのを聞いて、初めて本当に自分の罪を見つめ、「私はイエス様を忘れていたのに、こんなに罪深い者なのに」と感謝しました。どんな時にもイエス様が共にいてくださり、自分が幸福であるのもイエス様のおかげだとわかって本当に感謝しています。



左から高田馨さん、由里さん、真実さん。

主は成し遂げてくださる

高田真実
武蔵野市立境南保育園勤務
東京都出身／八王子市立恩方小／
恩方中／八王子市北高／東京都立
川高等保育学院卒

私は幼い頃から教会に行っていました。信仰を持ったのは中学2年の時です。それまでの私は、両親が行くから、と義務的に行くだけで喜びがなく、教会に行っていることを人に知られたくありませんでした。しかし主は、少しずつ私に働いてくださり、友人に福音を伝えることを通して主の素晴らしさを体験させてくださいました。

就職試験の時、どこも倍率が高く、就職できないのでは、と不安に思いました。試験を受けてから結果が出るまで、とても長く感じられました。しかし、「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる」（詩篇37・5）などのみことばによって、平安が与えられ、主を信頼して祈り続けました。今の職場に正式に決まったのが3月30日、そして4月1日から勤務につきました。主に信頼しているとはいいながら、自分で計画を持っていたのですが、それは神様のご計画とは大分違っていました。自分には理解できないような試みを受ける時もありますが、主がみことばによって答えてくださるので平安です。「主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます」（詩篇138・8）





共に祈れる喜び

池田　康
高知県出身／香宗小／高知高等女
学校卒／夫　傳一／子供　二男

クリスチャンホームに生まれた私は、子供の頃から日曜日には教会に行き、聖書を読んで祈るという生活を一応は続けていました。結婚してからは、教会から帰れば、自分の生活を満たすためのいろいろなスケジュールに追いまわされる毎日でした。それから25年後、思いがけなく主人の両親と共に吉祥寺集会に導かれました。私は、そこで初めて、イエス様と共に歩む集会のみなさんの、喜びに溢れた生き方に接して驚きました。今まで努力してきた数十年の信仰生活は色あせて見え、それまで自分のためになると思っていたすべてのものが、無益なものに思えました。「人は、たとい全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありましょう」（マタイ16・26）いのちを得ようと、永い間教会には通いましたが、主のもとに行こうとしなかった私には、イエス様との出会いがありませんでした。その後、さらにイエス様は、主人をも救ってくださいました。心の遠く離れた私たち夫婦でしたが、主は私たちの間に平和を与えてくださり、共に祈る者と変えてくださいました。今は主に在る日々を心から感謝しています。

晩年の幸い(Ⅰ)

池田種吉

川越市出身／お茶の水京華商業中退／白木屋呉服部を経て、大丸呉服部退職／1899年生まれ／妻　住枝／子供　三男三女

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」(マタイ11・28)長い人生の前半生は全く救いのない暗闇でした。代々続いた家業が祖父の代で破産して、父がその後始末をして、一家をたたんで上京したのは私が11歳の時でした。幼い子供たちと病人を抱えて、文字通り重荷を負っての長い旅でした。少年の私は働きに出ましたが、父は54歳で他界し、病身の母と幼い妹たちを残され、平安な日は一日としてありませんでした。28歳の時、何も知らずに嫁いで来た妻は、苦しい家のためによく働いてくれました。しかし高慢で頑固で愚かな私は成功を夢見て妻の労苦をかえりみず、ただ働くことだけを生き甲斐としていました。神様はちゃんと見ておられました。勝手気ままな長男によく尽している嫁の姿を見て、頑固な私も勧められて聖書を見るようになりました。私の苦しい時からイエス様が私を見守っていてくださったのに違いないと思いました。そして81歳でイエス様に従う決心をしました。人生の終盤にイエス様の大きな救いにあずかった今、妻と共にこの平安を感謝しております。

晩年の幸い(Ⅱ)

池田住枝

東京都出身／下谷尋常小学校／上野高女家政科卒／1906年生まれ／夫　種吉／子供　三男三女

私は1979年６月24日に、吉祥寺キリスト集会で、ベックさんによって洗礼を受けさせていただきました。今年83歳になる考え方の古い人間です。仏教の家に生まれて、仏教の主人と結婚しました。年をとってから、思いがけなくクリスチャンになりました。これは、私が若い日よりイエス様の大きな愛と救いのご計画のうちに包まれていたからではないかと思います。そもそも信仰を持つようになったのは、長男の嫁が、おじいさんの代からのクリスチャンで、その嫁の行いにいつも感心していたことがきっかけです。いつも優しく接してくれますので感謝しております。聖書に対する勉強が足りない私ですが、現代の世相を見て、こんなことでよいのかと思わずにはいられません。人間ですから、神様から見れば落度だらけですが、私も聖書を読んで、イエス様の言うことに従って、ついていきたいと思っています。「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた」(イザヤ63・９)

国籍は天にあります

故 宮山　守

元富双ゴム工業㈱社長
東京都出身／野方東小／府立五中
／東京工大応用科学科卒／妻　恵
子／子供　一男

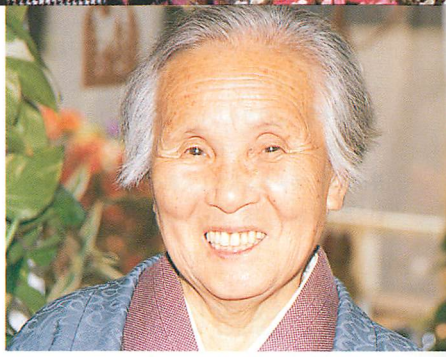
宮山恵子

長野県出身／前橋市敷島小／群馬
県立前橋高女卒／58歳

「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる」（詩篇37・5）思いもかけず、夫は自分の肺がんが絶望的であることを知り、何も分からないけれど幼子のように素直に十字架の救いを信じ、主の御手にゆだねる生活をしたいと、入院を前にして洗礼を受けました。闘病生活は約半年で終りました。短い信仰生活ではありましたが、検査と抗がん剤の点滴をくり返す苦痛の多い日々を聖書を読み、祈りのテープを聞いてすごしました。「僕だけこんなにのんびりしていて悪いみたいね」と、淡々と笑顔で語っておりました。夫は新約を読み終り、旧約に入りましたが、「いつまで続くかな」と一人つぶやく言葉に返事のできなかったことを覚えております。しかしキリストの恵みは時間の長短ではありません。すべてを信頼しておまかせすることによって、神の愛は豊かでありました。痛みのない時は、がんであることを忘れてしまうというほどのなぐさめが、いつもベッドの上に満ちあふれていました。「主の前に静まり、耐え忍んで主を待て」（詩篇37・7）時を惜しむように礼拝に出席し、みことばのはげましをいただき、永遠の生命を与えられる喜びを持ちつつこの世を離れ天に召されました。私には夫との間に知恵おくれの障害をもつ息子がおります。これが私の運命だと思い、夫と共に重荷を負って二人で問題を解決してきました。同じ境遇の友人に恵まれ、厚い友情に支えられてきました。私は試練にあっても、助けを求めず、弱音をはいてはいけないと自分に言いきかせ、ただ夫の理解のもとに人生の大半を過してきました。

しかしこともあろうに、夫が肺がんで手術もできない状態であることが分かった時、私は自分を支えることも夫の支えになることもできない無力な者であることをはっきり知りました。ふり返ってみますと、私の身近におこった苦しみや悲しい出来事を通し、軽井沢や家庭集会にお招きくださった主イエスが、私にもっともふさわしい方法で救いの道へ導いてくださったのでした。夫と共に迎えた洗礼式は悲しい中にも喜びがありました。「私は、神に信頼しています。それゆえ、恐れません。人が、私に何をなしえましょう。あなたは、私のいのちを死から、まことに私の足を、つまずきから、救い出してくださいました。それは、私が、いのちの光のうちに、神の御前を歩むためでした」（詩篇56・11、13）私の信仰生活のスタートはまた夫の闘病生活の始まりでもありました。また、その頃は最愛の夫が私の前から去っていく日のことを想い、涙とともに祈りました。夫が召され、墓石には「私たちの国籍は天にあります」（ピリピ3・20）を刻みました。今は不思議なほどの平安が与えられております。





空しさから光へ

北村　栄
長野県出身／上片桐小／飯田高女
卒／84歳／子供　五人

主人に従って北海道庁16年、群馬県庁８年、そして海軍省に出向した主人は五人の子供を残してボルネオで戦死しました。後家のがんばりで五人の子供を育ててきましたが、そのがんばりがわざわいして、その頃導かれた教会になじむ気になれず、神様の恵みにあずかることができませんでした。

吉祥寺集会の軽井沢キャンプに招かれて、その雰囲気に感激を覚えました。これだ！と思いベックさんとお話をし、すべてを明け渡してただ主に信頼する生活に入ることができました。

長女の婿宮山守さんの闘病生活の日々の中で、イエス様の示されたお力はすばらしいものでした。日々主を見上げて、しっかりとした歩みができますようお祈りしております。

「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます」（ピリピ４・６、７）



左から小野田美恵子さん、岩上眞砂美さん(妹)。

神様の愛

小野田美恵子
東京都出身／東久留米市立第九小
／東久留米市立西中／都立保谷高
／竹早教員養成所幼稚園教員科卒
／夫　登

私はみじめで哀れで、何の価値もない人間です。何不自由なく生活をして来ましたが、心の状態は最悪で、いつも腹を立てていたり、ちょっとしたことで人を妬んだり、自己嫌悪に陥ったりしていました。こうしたいと思うことがあっても、実際には反対の言動をとるなど、自分自身が始末におえない状態でした。しかし父なる神様がこのどうしようもない私のために、ひとり子であられるイエス様を十字架につけられたことや、神様が私を価値ある者として妬むほど愛されているという事実を知った時、私の心は神様の愛で満たされました。「人とは何者なのでしょう。あなたがこれを尊び、これに御心を留められるとは」(ヨブ7・17)神様はこの天地を創られました。神様は全能です。不思議なことですが、その方が私に目を留めていらっしゃるのです。だから何も心配する必要がありません。神様の愛が私の内にある時、人を愛することができますし、自分自身をも愛することができます。素直になることができ、体中に熱い満たしがあるのです。キリストの内には、自由と喜びと平安があります。神様はすべての人がキリストを受け入れることを願っておられます。

神様、感謝します

岩上眞砂美
石神井幼稚園教諭
東京都出身／東久留米市立第九小
／東久留米市立西中／立川女子高
／竹早教員養成所幼稚園教員科卒

私が神様を信じるようになったのは、中学2年生の時でした。それまでは、私が集会に集うと母がとても喜ぶので、親孝行のつもりで集っていました。しかし、神様は私に「罪」について知らせてくださいました。それは「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです」(ローマ3・23,24)という聖句にある通り、「人はみんな罪人だ」ということでした。そして中学2年の時「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです」(ローマ10・10)というみことば通り、私は救われることができました。今では「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」(使徒16・31)という約束どおり、家族全員主を信じる者に変えられて、クリスチャンホームの中で、神様の愛を感じながら喜んで暮らしています。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハネ3・16)



左から真嶋康子さん、岩上桂子さん(妹)。

心の支え

真嶋康子

東京都出身／江戸川小／土浦第一高女卒／夫　一男／子供　一男一女／孫一人

私が信仰に導かれましたきっかけは、私共に脳軟化の祖母がいたことでした。まだ母も丈夫でしたので、祖母の世話も、三度に一度は見て見ぬふりもできましたが、母にもこの時が来るのだ、と思った時、とても不安になりました。その後、妹が集会に誘ってくれました。お話はよくわからなくても、ただ集会へ行くだけで平安を与えられ、導かれるままに洗礼を受けさせていただきました。それからも試練はありました。中でも、健康に自信があり、頼りきっていた主人が倒れ、手術後も最悪の状態で生死をさ迷い、九死に一生を得ました時には、病気の心配と小さな会社の経営面とで夜も眠れず、気がつくと祈っていました。神様は、ズタズタの私を、回りの人を通してしっかり支えてくださいました。私は、この時の感謝の涙を忘れることはないでしょう。「私のたましいは、あなたにすがり、あなたの右の手は、私をささえてくださいます」(詩篇63・8)「私は主に申し上げよう。『わが避け所、わがとりで、私の信頼するわが神』と。(詩篇91・2)「あなたのみおしえを愛する者には豊かな平和があり、つまずきがありません」(詩篇119・165)

恵みに囲まれて

岩上桂子

東京都出身／江戸川小／牛込三中／精華学園卒／夫　勲／子供　二女

「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい」(ピリピ4・4)

私は、脳軟化の祖母を見ているうちに老いることの恐ろしさを感じ、母がこのようになってしまったら果たして看病できるだろうか、と悩む日が続き、信仰を持つことを望むようになりました。ちょうどその頃、家庭集会に導かれて救いを受けることができました。今から10年以上前のことです。私は愚かな者ですが、神様はこのような者をも愛してくださり、弱い者には助け手を与えるとの約束通りに、主人と二人の子供を救ってくださいました。感謝で一杯です。神様が与えてくださった賜物は、どんな小さなことでも感謝でき、いつも喜んでいることができるので幸いです。これも神様の恵みです。神様からの恵みを一つでも逃さないように、神様に向けて感謝のアンテナを張り続けていきたいと思っております。愛されている幸せを感じながら、少しでもお役に立つ者に変えられたいと、毎日祈っております。

「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで」(Ⅰ歴代誌16・34)



真実なる神

野口　修
武蔵野赤十字病院内科勤務
東京都出身／東久留米九小／西中／早稲田大学高等学院／AFS25期生／東京医科歯科大学医学部卒

「私は生きているかぎり、主をほめたたえよう。いのちのあるかぎり、私の神に、ほめ歌を歌おう」(詩篇146・2)

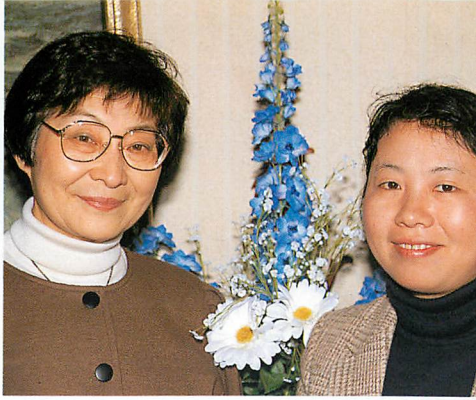
人の役に立ちたいと思って私は医学部に入学しました。しかしその後で、自分には病に苦しむ人を慰めてあげられるものがないことを知るようになりました。私の内には人を裁いたり、怒ったり、傲ったりする醜い心があります。その上、これらからはどうにも逃げきることができません。けれども信仰を持ってはじめて、自分がそんな人間だからこそ、私の罪のためにキリストが十字架でかわりに死んでくださったのだとわかりました。神様に愛され、赦されていることはもっとも大きな慰めです。その神様の前に心からへりくだったとき、経験したことのないほどの大きな喜びと解放がありました。自分自身も、自分の将来も、すべて主の御手の内にあるという平安がありました。決して失われることのないものを与えてくださった主をほめたたえつつ、いつまでも歩んでいきたいと思います。「彼に信頼する者は、失望させられることがない」(ローマ10：11)

主は私の助け主

野口　香(妹)
日本火災海上保険(株)有価証券部勤務
東京都出身／滝山小／東久留米西中／小金井北高／米国ロータリー交換留学生／恵泉女学園短期大学英文科卒

「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る」(イザヤ41・10)

高校一年のとき、心に多くの悩みを持っていた私は自分に失望し、自分の将来にも希望が持てずに思いわずらってばかりいました。そんなときに初めて聖書に示されている神様の愛が、自分にも向けられているのだということを知り、イエス様を自分の救い主として心に受け入れました。自分の心の重荷を主にゆだねるようになってからは、いつの間にか真暗だった心の中が主の光で照らされているように明るくなり、心に平安が与えられました。こんな私のためにも主は必要なものすべてを備えていてくださり、すべてのことを最善に導いてくださっていることを、日々の体験を通して知るようになりました。主はいつも心に思い浮ぶ以上のことをしてくださいます。主がいつでも、またどこでも確かに私と共にいてくださるので、毎日を心から主に感謝して歩めるようになりました。すばらしい主に、ご栄光が限りなくありますように。



安らかな人生

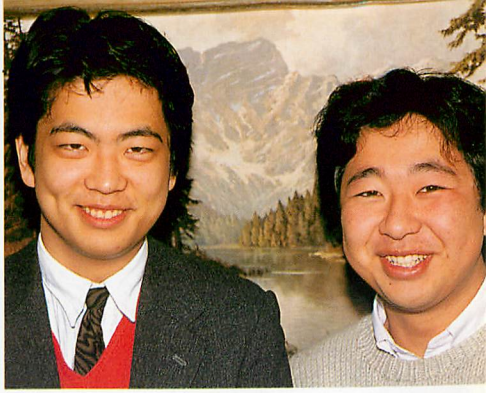
渡辺慶江
東京都出身／平井小／国府台女子
学院卒／子供　三男／孫　十人
住所　千葉県市川市国府台5-15-15
〒272　電0473-73-2473
家庭集会　木(不定期)朝10時半

主は私に何回もみ恵みの手をさしのべてくださいましたのに…。長男が高三、次男が高一、三男が小六の頃、兄弟三人で教会へ行っておりました。私も子供につれられて一度伺いましたが、私のかたくなな心は主の恵みを受けることができませんでした。それから何年になりますでしょう。次男が吉祥寺集会に集うようになり、私共も主のもとに導かれることができました。主人はがんで片肺を摘出後2、3年の命と医師に言われておりましたが、みなさまのお祈りにより、13年もの命をいただき、1985年4月20日天に召されました。主人と細々ながら聖書を読みはじめ、主の愛を知り、「主に信頼する者は安らかである」のみことばのように主人と安らかに過ごすことができました。感謝申しあげます。「お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい」(エペソ4・32)先日このみことばが私の心を捉えました。私には許せない思いがあると思いました。しかしそれは私の心の重荷でもあるのです。一歩一歩主と共に歩むことができ、人を許して生きていけますように祈っております。

主の愛に生かされて

渡辺利江(嫁)
東京都出身／番町小／三輪田学園
中／三輪田学園高／慶応大文学部
卒／夫　二郎／子供　三男二女
住所　八王子市大和田町7-6都営2-108
〒192　電0426-46-5826
聖書学び会　毎土曜7時半

「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません」(ヨハネ15・13)聖書に出会う以前、私の心はさめていて、ほんとうの愛とは無縁の者でした。聖書を通してイエス様を知ってからは、このように生きるべきだと感動しましたが、クリスチャンと接するようになって「イエス様は唯一の神であり救い主」と聞いた時には、イエス様が言われたように隣り人を愛して生きていくことの方が大切、と強く反発しました。けれども実際には自分の都合のよい時は親切にしたり優しくしたりできても、自分の感情や利害関係がはいってくるといつでも自分が大事で人を押しのけ、友のためにいのちを捨てるどころではありませんでした。「人を愛して生きていくことの方が大切」と思っていた私は、そのようにできない自分にぶつかり、そんな自分勝手で弱い私をゆるしてくださるためにイエス様が十字架にかかられ、いのちを捨ててくださったことを知ることができました。こんなにも愛してくださっている主に感謝する毎日です。「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです」(Ⅰヨハネ4・19)



左から野田浩司さん、賢一さん。

イエス様とともにある平安

野田賢一
東京都出身／杉並区立井荻小／区立荻窪中／都立富士高卒／国立埼玉大学経済学部在学中

イエス様が一方的に私を引き寄せてくださって以来、8年がたちました。主の恵みの大きさにただ感謝するのみです。今までの自分の歩みを振り返ると、自分がいかに弱い人間であるか、また自分の持つ罪がいかに大きいかを感ぜずにはいられません。イエス様が救ってくださらなければ自分はどうなっていただろうと思うと恐ろしくなります。イエス様を受け入れる前は、縛られ、自由がなくなるのではないかと心配していましたが、この8年間はその心配を見事に吹き飛ばすものでした。むしろ、イエス様と一緒の生活は私をより自由にしてくれました。そして何より次の聖書のみことばは、まだ世の中のことを何も知らない私に、尽きることのない安らぎを与えてくれます。「わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません」(ヨハネ6・37) イエス様のいない人生は、むなしく基盤のない、不安定なものです。私はこれまで、何度となくイエス様から離れそうになりましたが、そのたびにイエス様は引き戻してくださいました。これからもイエス様にしがみついて生きていきたいと思います。「恐れるな。わたしはあなたとともにいる」(イザヤ41・10)

主を知った喜び

野田浩司
東京都出身／杉並区立井荻小／区立荻窪中／東京電機大学付属高卒／東京電機大学電子工学科在学中

私の家族は両親と兄と私の四人で、全員が主を受け入れているクリスチャンホームです。私が家の中では一番最後に受け入れたのですが、なりゆきで信じたのでもなく、親に言われて信じているのでもありません。ただ、主が私自身に働きかけてくださって、本当にこの方しかいないと思ったから信じているのです。

ある日私が聖書を開くと、「招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです」(マタイ22・14) というみことばが与えられました。私はこのみことばを読んだ時、自分が本当に選ばれている者かどうか、とても悩みました。その後、私の受洗の時、ある方が、ちょうど同じみことばを贈ってくださいました。私は、これは偶然ではないと信じて、主が私の名を覚えていてくださることを感謝しました。主がいつも私と共にいて助けてくださるので、本当に心強いです。私には「どうしてこうなるのかなあ」と思えることも、主の目から見れば最善の道であるということを、日常生活を通して確かめることができる幸せは、クリスチャンだけに与えられたものだと思います。十代のうちに主を信じられたことは、本当に良かったと思います。



苦しかったわが旅

藤間　肇
東急フーズレストラン事業部勤務
埼玉県出身／本町小／東実／専修大学経済学部卒／妻　てる／子供二女

学徒出陣。ペンを捨てて銃を取り戦場へ駆り出された第二次世界大戦当時の暗い青春の日々。そして戦争に敗れ焼野原となった東京に復員してくると食料難。賃金労働者、そして雨の日は傘がないため会社を休んでいた窮乏の日々。私はその頃、希望もなく暗い人生裏街道をさまよい、死についてよく考えたものでした。それはあたかも旧約聖書にあるネゲブ砂漠やシリア砂漠をさまよっているようなものでした。私は当時無神論でしたので、人生はまさに暗黒でした。そしてそれは私が主に出会うために神が備えられた道程でした。

長女文枝と二女敏江がイエス様に救われ、その子供たちに導かれて吉祥寺キリスト集会に行くようになり、私もイエス様の十字架による救いを受け入れ、妻といっしょに1983年１月に洗礼を受けました。そしてわれわれ一家は、希望に満ちた輝かしい未来に向けて歩き出し、限りない喜びが私たちの心を満たしました。今は主なる神に感謝と賛美を捧げ、大きな平安と祝福をいただいている毎日です。

「主よ。私のたましいは、あなたを仰いでいます。わが神。私はあなたに信頼いたします」(詩篇25･1､2)

娘の結婚を通して

藤間てる
埼玉県出身／三芳野小／旧川越高等家政女学校卒／夫　肇／子供二女

私の家は仏教徒でしたが、数年前に長女文枝が吉祥寺集会に導かれて、救われました。続いて次女敏江も救われました。その頃、私は長女が年頃なので早く良い方と結婚させたい、おそくなってしまうと悩んでおりましたが、当の本人の心は平安で、「神様を信じて祈れば、みこころにかなった方が与えられる」と一心に祈っておりました。また、聖書のみことばは、とても素晴しいとも言っておりました。そのうちに祈りは叶えられて結婚しました。このことによって、私も集会に導かれて、ベックさんともお会いし、お話を聞きました。聖書の内容も十分わからないまま、1983年に主人と一緒に受洗いたしました。キリストは私たちの罪をあがなうために死んでくださり、三日目に復活して私たちに永遠の命を与えてくださったこと、罪とは神からはなれることなどを学びました。神様を信じ日々聖書を読み、祈りによって感謝と平安のうちに過ごさせていただいております。「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい」(ピリピ４・６)



真の生きがい

河野穂積

吉崎木製工業㈱勤務
徳島県出身／大井小／加茂谷中／
阿南工業高卒／妻　和子／子供
一男二女

「その人が本当にあなたの神ですか？」と主は私に問いかけてくださった。'74年秋、肺結核の友人を見舞った時に言われた言葉です。その頃の私は趣味に生きがいを見いだし、中でもギターに夢中で、スペインの大ギタリスト、A・セゴヴィアに大変憧れていましたから、「河野さん、あなたの神は誰ですか？」と友人から唐突に問われた時、「セゴヴィアかな」と答えたのです。今思えば、何と無知だったのかと恥ずかしいです。聖書には「彼らの神は彼らの欲望であり…」(ピリピ3・19)と書いてありますが、当時の私も、自分の欲望を神とし、生きる目的とする霊的盲目の状態にありました。しかし、恵みとあわれみに富む生ける主は、ご自身のみことばによって私の心の目を開いてくださいました。「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます」(ローマ5・8)私のような無価値な罪人のために死んでくださった主、そして復活によって私にも復活の希望を与えてくださった主。今私はこの主イエスを生きがいとすることを許され、心から感謝しています。

主の愛に導かれて

河野和子

福岡県出身／明治小／白光中／大
牟田北高卒／夫　穂積／子供　一
男二女

「神がまず私たちを愛してくださった」(Ⅰヨハネ4・19)平凡な家庭に生まれ育ち、悩みもなく過ごしていた私は、神を求める気持ちなど全くなく、信仰を持つと束縛され自由を失うように思っていました。しかし、今の主人に誘われ、義理で何度か集会に行きました。聖書を全然知らなかった私も、話を聞き、また預言と成就を見た時に、聖書＝真理とわかり、みことばの前に完全にひれ伏しました。そして、聖書を通して自分が神から離れた罪人であること、イエス様の十字架は私が受ける罰の身代りであったことを知り、神の前に罪を告白し赦しをいただきました。それまでわからなかった人生の目的、死後のことなど、すべてに聖書は答えを与えてくれました。'85年9月、第四子を死産で亡くしました。一見悲しいこのできごとを通しても、主は私共家族に天国への望みと主に信頼することのすばらしさを教えてくださいました。何のとりえもないこんな私をも、主は愛し救ってくださいました。今は主にある自由と全き平安を得、主に感謝しつつ歩んでおります。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」(イザヤ43・4)



老後を支えられて

竹澤　規

東京都出身／中目黒小／府立化学工業学校／教員検定／妻　千穂子／子供　一男／孫二人

私は何か困ったことが起きると、自分の力でなんとかしようとひとり悩んでいました。しかし、吉祥寺集会にうかがうようになって、いつとはなしに神にすがることを覚えました。神様この問題をどう思われますか、と祈りに専念すると、心のざわめきがやんで、心底静かになります。素直な気持ちになって、以前に比べて物事を広範囲に見渡せるようになり、だんだん狭い考え方から解放されてきました。聖書の中に、「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ」(エレミヤ29・11)とあります。どんなに誠実に暮らしていると思っても、それが神の計画から外れた知ったかぶりだったりうぬぼれだったりすれば、人の目には美しく見えてもやっぱり罪であることを知りました。神を忘れて、いつの間にか自己中心的になり、傲慢になってしまいがちですが、残り少なくなった人生を、自分の思うままに現実逃避に使ったり、やりたいことを全部やろうと焦ったりしないで、すべてを神様におゆだねしたいと思います。

祈り人の生活を

竹澤千穂子

東京都出身／世田谷区立旭小／調布学園高女卒／夫　規／子供　一男／孫　二人

私は、昔からお百度参りとか占いなどが大嫌いでした。ですからお友だちも、私と話をする時は、近ごろよく話題になっているバイオリズムとか天中殺という話はさけてくださったようです。そんな私ですが、聖書を知り、福音に接して本当の信仰を見つけてみると、それは実に明るくて気持ちのよいものでした。どうしてイエス様を信じられたか？ベックさんご夫妻のお顔の輝きを見ると、本当に主なる神を第一として生活しておられることがよくわかったからです。また、聖書の中に心の支えとしたいみことばをたくさん見つけました。それからは、以前にはずいぶん悩んでいた心の問題からも解放されました。「人がもし、何かを知っていると思ったら、その人はまだ知らなければならないほどのことも知ってはいないのです」(Ⅰコリント8・2)これは私の大好きなみことばです。イエス様は、くる日もくる日も、私が死んだあとまで、永遠に憐んでお守りくださること知り、心から感謝しています。これからは、多くの方がこのすばらしい神様に出会うことがおできになるように、日々祈り続けていきたいと思います。

不変の愛を生ける力として

岩本政和

日本電色工業㈱代表取締役
神奈川県出身／根岸小／根岸中／県立緑ヶ丘高校／早稲田大学法学部卒／妻　千佐子／子供　二男一女



私は、特別な悩みや病によって主と巡りあったわけではありません。私たちは、主を信じ、主の子供となることを恐れます。それは、束縛されてしまうのではないかと心配するからです。私もそうでしたが、多くの方々がこのような考えで主イエス・キリストを受け入れることを拒んでいるのではないでしょうか。しかし、私は主を信じて以来、みなさんにお話しできるくらい平安な毎日を送っています。主は常に私の中心においでになり、揺るぎない愛情を注いでくださっています。この煩雑な世にあって、個人ではとうてい理解できない難問にぶつかることもありますが、そのような時にも、自分自身を空にして主に頼り、祈ることができるというすばらしい特権を与えられ、常に主の御手の中に暮らしています。「主は、私たちの神。私たちは、その牧場の民、その御手の羊である」(詩篇95・7)と書かれている通り、私は御手の悩める羊です。そしてもっとすばらしいことは、私が日々、仕事、家庭、子供のことと、日常生活に追われていても、主の愛は不変だという事実です。「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです」(ヘブル13・8)

イエス様は永遠のいのちです

岩本千佐子

東京都出身／平井南小／小松川中／京橋高／女子栄養短大卒／夫政和／子供　二男一女

困難な問題が次々に起こり、押し潰されそうなのに、世間には平静を装うむなしい毎日。こんなに淋しい心で、何にも頼ることができない所で、生活をしているのが怖い、と感じました。そんな時、「実を結ぶ命」という本に出会いました。リンデさんの世界は永遠に続く平安で満たされていました。驚き、私も満たされたいと切実に思いました。聖書によって主イエス・キリストというお方のご存在を知りましたが、きよくなければ罰せられる、と思い込んでおりました。家庭集会で、ある方から「そのままの自分でいいのですよ」と言われ、惨めな自分を引きずって、「主イエス様」と口に出して呼んでみました。涙がこぼれました。温かい安堵の涙でした。「わたしは、『わたしはある』という者である」(出エジプト3・14)とおっしゃる神様に、お赦しください！助けてください！と叫び、主イエス様の十字架のお苦しみによって、罪咎を赦されたことを心から感謝し、信じただけです。イエス様は、御自身を家族の者にもあきらかにしてくださり、両親、長男、夫と共に救いにあずかりました。ただイエス様だけを喜んでいたいと、切に願っております。



神の国とその義を求めなさい

江草清子
高知大学名誉教授・高知医科大学名誉教授・元高知県教育委員・清和学園講師
高知県出身／鎌倉高等女学校／津田英学塾卒／カリフォルニア大学／ミシガン大学／74歳／子供　二男一女／孫　四人

私は幼い時から神様の話を聞くことが何よりも好きでした。まことに神の恵みというより外ありません。家族にクリスチャンはいませんでしたが、恵みにより浅野順一牧師や植村環牧師らに導かれて1935年、津田英学塾の学生時代に受洗しました。海軍飛行将校であった夫を戦争で失いましたが、ただキリストにある信仰にのみ支えられて、苦難の戦後を生き抜いて３人の遺児を育てることができました。愛と哀れみの神は必要なものはすべて与えてくださいました。

信仰の基盤に立たない限り真の教育はできないし、また人間関係にも世界各国の間にも真の平和は絶対に成立しえないという信念に基づいて40余年の信仰生活を歩いてきましたし、今も歩いています。

「何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます」(マタイ６・31～33)



神は愛です

竹本桃子
学校法人百草台幼稚園教諭
東京都出身／新山小、多摩第２小／多摩中／佼成学園高／宝仙学園短期大学保育科卒

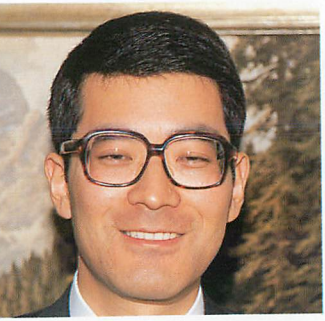
私が短大に通っている頃、両親と妹は集会へ行くようになり、イエス様を信じました。みんなの信じているイエス様は、どうやらすてきな方らしいと感じてはいましたが、「こんな若いうちから、楽しい友だちとのつきあいや好きな音楽をやめて日曜日に集会に行くなんて冗談じゃない！私が母の年齢になったらその時に考えればいいじゃないか」と思い、両親に隠れて遊ぶことばかり考えていました。しかしある時、そのことがすべて明るみに出されたのです。私はものすごく叱られる覚悟をしていたのですが、両親は許してくれ、一緒に祈ってくれたのです。その時に初めて、神様の愛の深さと自分の醜さを知り、これからはこの愛から離れまいと決心しました。今まで、これが愛だと思っていたものが、ただ自分がかわいいだけの自己愛だったことなど、いろいろなことが、こんがらがった糸がほどけるようにわかるようになりました。私は今、毎日幼稚園で子どもと接しています。ほんとうに愛のない私ですが、神様の愛によって接する時に子どもたちは心を開いてくれます。「愛は決して絶えることがありません」(Ⅰコリント13・８)



喜びの泉イエス様

旭マサ子
東京都出身／三軒茶屋小学校／成城学園中学校／成城学園高等学校／成城大学文芸学部国文コース卒／夫　清見／子供　一女

主イエス・キリストに個人的に出会うと、どうしてこんなに楽しいのでしょう。心の奥底から喜びが湧いてきて止まりません。以前、喜びのないクリスチャンだった時、聖書が伝える救いを、宗教論の一種であろうと考えていました。キリスト教という宗教を「持つ」とか「やる」という意識でしたので、頭だけの聖書知識で死んだ信仰でした。「宗教」とは何でしょう。人間の観念がありもしない神を造り出し、「ものは考えよう」などといって心の持ち方を操作しようとする人間的努力のことです。人間が造り出した神らしいものは、無数にあります。しかし、人間と人間が存在する宇宙を創造された神は、唯一です。永遠の神が今も現実に生きて働かれ、虫けらよりも小さな私を愛してくださり、日々私の祈りを聞いて導いてくださり、励ましてくださるのです。神の約束が成就するのを待っている間のワクワクする楽しさは、この世の何物とも比べものにならない不思議な喜びです。「わたし（イエス）を信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる」（ヨハネ７・38）



主は私の力、私の盾

深沢洋一
山根短資㈱勤務
東京都出身／国立五小、東久留米九小／東久留米西中／聖望学園高／東京国際大学商学部卒

幼稚園の頃先生から、「イエス・キリスト」という名前を聞いたのが、私とイエス様との出会いの始まりでした。しかし、福音と接する機会はなく、私の心は長い間固く閉ざされていました。中学校三年の頃、母の勧めで家庭集会に集うようになりました。このようにして再び出会うことにより、イエス様は、一筋の光を私に放って、心を開いてくださったのです。その後、集会のみなさんの祈りに支えられて、1981年４月に受洗しました。

主を真の救い主として受け入れたその時から、私は主によって心の底から変えられました。御名を呼び求めれば必ず正しい道を示してくださり、人生のすべてをゆだねられるというこの偉大なお方に、永遠に従って行く決心をしました。主は、天地万物を創造され、今も生きておられる真の神です。その主が、聖書のみことばや集会での素晴らしいおつきあいを通して、恵みと平安を与えてくださったことに、私は日々感謝しています。「主は私の力、私の盾。私の心は主に拠り頼み、私は助けられた。それゆえ私の心はこおどりして喜び、私は歌をもって、主に感謝しよう」（詩篇28・７）



天国へのスタート

藤田五良

関めぐみ幼稚園
山口県出身／松崎小／防府高校／長崎商大卒／83歳／妻　一枝／養女　芳子

私は1906年生まれです。青春の頃台北の一角でキリスト教の路傍伝道に接したのが神様との出会いの始まりでした。その後、私の人生は荒海に翻弄され、難破しかけたことも何回かありました。しかし神様はこの哀れな羊をお見捨てにはなりませんでした。数年前、ビリー・グラハム師の集会に導かれ、その時「ザアカイよ急いで降りて来なさい。今日あなたの家に泊ることにしているから」のみことばがいつまでも私の心に残りました。私は昔通っていたことのある教会に悔い改めて帰りました。そしてもっと生き生きとした信仰にあこがれ悩んでいた時、松見さんのお誘いで吉祥寺キリスト集会に導かれたのでした。その頃私は試練のただ中で、主の救いの御手に縋りその憐れみをひたすら乞い求めていた時でした。いつの間にか聖書がいのちの泉、希望の力として私の心に響いてくるようになったのです。イエス様は十字架で私の過去の罪全部を背負って血を流され、そして復活なさいました。私はイエス様の十字架を信じ、受け入れ、イエス様に従って生きる決心をしました。私は生まれかわったのです、「永遠のいのち」の中に。



神にはどんなことでもできます

マタイ19・26

竹田竹子

塾講師
東京都出身／都立小池小／都立駒場高／津田塾大(専)卒／子供　二男一女

一年余り前、主人が天に召されました。主人に育てられたも同然の身の上の私でしたから、その死は一度に多くの肉親をなくしたようなものでした。心の中には、主人に魂の平安を与えてくださり、やがて再会する希望のある天の御国へと導いてくださった神様への深い感謝がありますのに、激しい悲しみが実に執拗に襲ってくるのです。何カ月も苦しみながら祈り続ける私に、やがてみことばが与えられました。「神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません」(Ⅰコリント10・13) ある日私は、自分が時折堅固な砦の中にたてこもってしまい、主人の他は誰も、神様さえ入っていただくまいとしていたのに気付き、愕然としました。何という恐ろしい罪でしょう。身ぶるいして泣きながら、お赦しくださいと祈りました。不思議なほど心が静かになり、すべてを主の御手にゆだねます、という気持になりました。主人の生前から、その死に遭ったらとても耐えられる自信はないと恐れていた私でしたが、自分の力ではなく、主のお恵みによってそれが成しとげられました。



空しい生き方から解放されて

細貝武郎
㈱クラレ中条工場 NIC 生産技術部勤務
東京都出身／岩槻小／王子中／小石川高／東京大学理学部卒／妻裕子／子供　一男二女

誰もがしていることだから自分もしないと損だという思いや、人から強く言われることにいやいや従って生きる人生は、何と情けないことでしょう。そう思いながらも、今まではこれが人生なのだと半ば諦めて生きてきました。そんな生き方でしたから、今思うと自分の言葉や行動に責任を持たないで適当に逃げて生きてきたような気がします。不可能な約束をしてしまい、実行できないことを恐れていたのです。「神が『光よ。あれ』と仰せられた。すると光ができた」（創世記1・3）私は幸いにも、この力強いみことばをはじめ、聖書にある主のみことばは、すべて真実で、力と愛に満ちていると信じることができました。私にとって主に従うとは、まず自分の言葉や行動は自分に責任があり、たとえ人から強いられてしたことであっても、自分がしたことだから他人のせいではないと自覚することから始まりました。主が導いてくださったのですから、それには必ず意味があります。聖書に拠り頼んだこのような生き方をしたいと願うようになってから、たとえそのとおりにできなくても、気持ちが明るくなりました。これこそ解放でした。



ピクニック気分で昼食。軽井沢バイブルキャンプで。

ら「ああ、お父さんはいつから待っていてくれたのだろう」と胸がいっぱいになりました。

しかし、落し穴に落ちてしまったような私は、自分の内側ばかりを見つめ、自分の悩みがこの世で一番大きいかのように内向的になっていきました。そして、自分の抱えている問題で精一杯で、人を思いやる心の余裕などなく、利己的に、利己的になっていく自分がわかりました。自分の醜さだけが増長されていくような日々でした。たった一人の妹に対しても、「こんな私が近くにいたら悪影響を与えてしまうに違いない」と思っていたのを覚えています。

「どこかに逃げ出したい」。そういう思いと「何とかしなければ」という思いと、その不安と緊張の日々に、私の心はカラカラに渇いていました。「安息所、安息所がほしい」と日記などにも書き綴ったことを覚えています。

罪を示される

高校時代の倫理社会の先生はクリスチャンでした。倫理社会の中にイエス・キリストの単元があり、その先生は、原罪について、処女降誕について、信仰について話してくださいました。

「君たちは、処女マリアから、イエス・キリストが誕生したことが信じられるか。私は信じています。それが信仰です」とおっしゃいました。また、

「君たちは、何かいけないことをした時、まず、神の目を思うか。それとも人間の目を思うだろうか」と問われました。私は一瞬ギクッとしました。「私は人の目を思う。神の目を思えたらどんなにいいだろう。でも、私は人の目を思う。何と嫌な人間なのだろう」それは私が、たぶん

神によってはじめて罪を示された時だったのだと今にして思うのです。私は「神の目を思いたいけれど、神と連絡する何の術も知らない」と思いました。

学生時代

大学に入学すると同時に、自分に課した目標がありました。第一に「自己改革」という目標でした。高校時代のあの空白の三年を取り戻したいと考えました。そして自分自身を根本から改革するのだと固く決意したのです。第二に掲げた目標は「本物を見極める目を養いたい」ということでした。そして第三の目標として、この大学四年間で自分はいったい何をしたらいいのか、「生きる目的」を見つけたいと思いました。ですからキャンパスにこもった生活ではなくて、外へ外へと出て行き、多くの人と出会い、多くのことを体験し「自己を確立」していきたいと強く願いました。「柳のようになろう。大木のように強風に立ち向かって生きても、強風の前に案外、簡単に折れてしまうではないか。しかし、柳のように流れに逆らわず、したたかに生きたい」と思いました。人が変ったように活動的になりました。金春会（能クラブ）に入部し、学生会館の部室にせっせと通い、謡の練習に明け暮れる日々が始まりました。若い学生たちの集まるそういう環境のなかでは自ずと恋愛が一つ、また一つと学生生活の一つの流れとなっていきました。

教会訪問

こういう大学四年間のなかで、たった一度だけ、当時求道中であった先輩に連れられて高田馬

場の教会を訪問しました。正直いってその教会でのことは、ほとんど忘れてしまっていますが、覚えているのは「もっと信じられるようなことを言ってくれたらいいのに」という思いと「あんな愚かな言葉で私をクリスチャンにしようとしている」という強い反発でした。

この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。

（Ⅰコリント　1・21）

このように聖書に語られていることなど、当時の私には、知るよしもありませんでした。

一緒に連れて行ってくれた先輩はその教会訪問の後、公園のベンチに腰かけて次のように言いました。

「僕の心の扉をイエスさまがノックしているのがわかるんだよ」

なんともおかしなことを言うなあ。自己陶酔しているのではないか、と、私はたぶん口もとに笑いを浮かべて聞いていたに違いありません。でもその時の先輩の真剣にうずくまるような姿に、私は決して笑えないものを感じていたのです。

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

（黙示　3・20）

無駄な階段

大学に通う傍ら、デザイン学校で機織りの勉強をしたりしてみたものの、「試行錯誤」かつ「フル回転」の大学四年間が過ぎても私は結局何をしていいのかわかりませんでした。卒業後、美術教員の免許を取得するための美大での通信教育、そして建築や絵の勉強なども同時に始めていました。

そんなある日、私の目はパラパラとめくった雑誌に掲載されていた、つげよし春さんのイラストに釘づけになってしまいました。そのイラストには階段の断面図が描かれてあり、その階段は途中で切れています。そしてその切れた階段のてっぺんに、呆然と佇む一人の男の人が描かれてありました。そしてその横には「無駄な階段……」という文句が記されていたのです。「ああ、私の生き方はこれだな」と思いました。「私は、まだ絶対的なものに出会っていない……」という焦りがありました。

そのころ「教会に行きたい」という思いがふと心の中に浮びました。しかし同時にもう一つの声が私にささやきました。「教会というところは、おまえのような人間の行くところではない。教会とは心の綺麗な人たちの集まりなのだ。おまえには教会の敷居は高すぎやしないか」「本当にそうだ。私のような人間の行くところではない」。

教会に行きたいという思いも、このようにいとも簡単に立ち消えになってしまいました。

このままの自分では、遅かれ早かれこの道でも必ず行き詰まりがくるだろうと漠然とそういう思いを抱きながら、教師生活がスタートしました。私には欠けているものが多くある。それは嫌

になるほど知っている。何か基本的に、絶対的に欠けているものがあるのだ、という思いが常にありました。しかし、それが何であるのかわかりませんでした。

私ではなく、あなたが

そんなある日、私は机に向かって、せっせと日記を書いておりました。友人からもらった小型テレビがつけっぱなしでした。突然、次のようなクリスチャン作家三浦綾子さんの言葉がテレビから耳に飛び込んできました。

「みこころでしたらこの小説を書かせてください。みこころではありませんでしたら、この小説を書かせないでください。私はこう祈ってから、いつも小説を書き出します」

不思議な言葉を聞いたような気がしました。「自分はどこにあるのだろう。自分がないではないか」そう思いました。

その頃の私の生き方の中心は、あくまでもこの「私」でした。自分があっての仕事であり、自分があっての恋愛であり、自分があっての情熱をぶつける対象、「自分が」「自分が」という自己追求の道をひたすら走っていましたから、三浦綾子さんの「みこころでしたら……」の祈りは、何か不思議なことをはじめて聞いたように感じたのです。

また、三浦綾子さんは次のような詩をその番組の中で紹介しておられました。

癩の人へ

どうして私ではなく　あなたが？

あなたは　代ってくださったのです

その時直感でしたが、この詩を作った人は真実の愛、本当の愛を知っている人だと思いました。何がこんな詩を作らせることができるのだろう、すごいなあと思ったのを覚えています。

その頃の私の日常生活は、ひたすら自己追求への道を、虚しい心になってしまうことを恐れるかのように、自分自身に鞭を打つかのように、生きていました。

今、その当時の日記を読み返すと、息苦しくなってしまいます。「ひたすら情熱を注ぎ込めるものを捜し求めて、この先も生きて行くだろう。」「がむしゃらに突き進んでいくことだ。頑張ることだ。」

聖書との出会い

ある晩のこと、私はせっせと、スケジュール表を作っておりました。私は紙があるとすぐ何かを書き込んでいるようなメモ魔でしたが、その時の私にとって、仕事が終わってからの時間をどのように埋めるかということが最大の関心事でした。

月曜はピアノ、火曜はデッサン、水曜は油絵教室、木曜は陶芸教室……。まるで心の隙間を埋め込むかのようにびっしりのスケジュール表を完成した時、私は今まで味わったことのないひどい虚しさにおそわれました。「私は一体何をしているのだろう。こんなことをしていて、いったい何になるのだろう」。私はその場に無気力にうずくまってしまいました。断崖の上で、前にも

進めず、後ろにも退けずといった絶望的な心でした。その時私は、ふと「神さま」とつぶやいていたのです。

その時「米子」という映画のポスターが文房具屋さんの前に貼ってあったのを思い出しました。それは、田原米子さん（宣教師）をモデルにした伝道映画でした。次の日曜日にその「米子」という伝道映画を見に、府中のある教会へと出かけました。神さまに出会うまでの渇望、何かを求めてさ迷い歩く若き日の田原米子さんの姿は、自分によく似ているなと思いました。そして、講壇の横に掲げてあった次のみことばを見つめていました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。
わたしがあなたがたを休ませてあげます。
（マタイ　11・28）

すると突然、牧師さんが「本当の幸福とは、いったい何だと思いますか」と質問なさいました。私は心の中で「本当の幸福って一体何だろう。その人その人の生き方、価値観によっても違うし、自分の中でも不変のものではない。あんな簡単な質問なのに、分からないな」と思いました。そして牧師さんは「本当の幸福とは、魂の中に平安があることではありませんか？　神さまと一緒に歩み出す時、魂の中に平安をいただくことができます」とおっしゃいました。私は「そんなものがあるなら、その魂の平安を私もほしい」と切実に思ったのです。

その日、新約聖書をいただき、生まれてはじめて聖書を読む機会が与えられたのです。「聖書の中には、何が書いてあるのだろう」と家に帰るのももどかしく、近くのレストランに入って聖

書を読みはじめました。みことばが私の心に浸みわたり、それは渇いた砂地に水が浸み込んでいくという表現がぴったりでした。その日から、学校の仕事が終ると、夜の時間が聖書を読む時間に変ったのです。分かる分からないは問題ではありませんでした。

神不在の教会

二度三度と何かに惹かれるように、その府中の教会を訪ねました。三度目に訪ねた時は、ちょうど「祈禱会」でした。そしてそこでなされていたのは「異言」の祈りでした。地の底から響いてくる、何語で語られているのかわからぬその「異言」と称する祈りは、共鳴しあい、一種異様な響きとなり、渦を巻いているようでした。私の頭の中で黒い衣裳をまとった異国の女たちが洞窟の中でうごめき、そのまわりにこの「異言」が展開されているような錯覚をおこしました。（いつだったろう。こんな場面を映画で見たことがあったかもしれない）ひとりでいろんなことをぼんやり考えていました。そしてその「異言」の渦の中に、決して入ってはいけない自分を感じていました。その「異言」には、熱気を帯びた怪しい美しさがありましたが、その中に「聖さ」はありませんでした。

何かひどく裏切られた思いで重い心を抱きながらその日帰宅したことを覚えています。「あの教会は、とてもいい教会のように思う。みんなとっても喜び、熱気が溢れている。だけど、あの異言の祈りさえなかったら…」と思いました。

その府中の教会に行っている期間と並行して、私は吉祥寺キリスト集会の竹本さんが開業され

ている桜ヶ丘歯科診療所に通院していました。その待ち合い室の中に、「光よあれ（第一集）」と「実を結ぶ命」が何冊か積まれてあり「ご自由にお持ちください」と書かれてありましたのでさっそくいただいて読みはじめました。そして「実を結ぶ命」の後半まで読んできた時に「みこころに反する祈り」と題して「異言」のことがベックさんによってメッセージされていたのです。「あの府中の教会も異言の祈りさえなかったらなあ」と思っていた矢先のことでしたので、そのメッセージを何度も何度も読み返し、しまいには日記にその箇所を書き写していました。

後日うかがったことですが、ベックさんは、このペンテコステ派の教会が信者たちを惑わし、この末の時代において強力な勢いをもって日本の教会を浸蝕していることを憂い、警告の意をこめてこの「実を結ぶ命」を刊行なさったとのことです。主の完璧なタイミングと主のご愛に心から感謝いたします。ベックさんは「実を結ぶ命」のなかで次のように警告されています。

「私が万が一にも異言を語ることができるようになったとしたら、私は昼も夜も主イエスにこのいわゆる「賜物」を取り除いてくださるように祈り続けることでしょう。なぜならば、そのいわゆる「賜物」は神からきたものか、悪魔からきたものか判断することは非常に困難であるからです。（中略）今日の霊的状況は、かつてのイスラエル人に似ているところがあります。多くの真面目で熱心なキリスト者たちの中には、神のみことばによる啓示だけでは満足することができずに、それ以上のものを求め、異言で語ることや、不治の病がいやされることを求め、奇跡や幻を求めることが少なくありません。しかし、その人たちは、実は悪霊が自分たちを誘惑しているのだということに気がついていません。信仰は見ることの反対です」

また、同書の「宗教と啓示」というメッセージにも強く心を惹かれました。

「人々は、いわゆる『宗教』と『イエス・キリストに対する信仰』とは同質のものであると考えていますが、これは大きな誤解です。『宗教』は人間が作り出したものであり、『イエス・キリストに対する信仰』は、上からの啓示によって与えられたものです」

私はこれを読み、「人間が作り出し、人間の手が織りなす宗教ならば、自分には必要ないし、いらない」と思いました。

私は祈りました。今までの漠然とした祈りから、はじめて唯一絶対なる神を意識した、神への祈りであったと思います。

「神さま。深いことについて私は何も知りません。異言について、同じ教会と名がつくところで、全く相反することが語られています。神さま、あなたが私を連れて行きたいところへと私をお導きください。神さま、あなたによって祝福されている教会へと私を導いてください」

走りよる神

忘れもしません。一九八三年の十一月五日(土)、私は神さまにこのように祈りました。

「神さま、明日は日曜日です。最近雨が降っていません。私は雨降りが大好きです。もし明日雨が降ったら、吉祥寺キリスト集会へ行きます。傘をさして行きます」

次の日曜日の朝、私は起きあがるとすぐに窓ぎわのカーテンを開けました。

雨が降っていました。久しぶりの雨でした。

私はその時、雨をもう偶然だなどと考えませんでした。神さまの導きをはっきりと感じました。第一集の「光よあれ」に付いている地図を頼りに、天からの祝福の雨の中を傘をさして、私は吉祥寺キリスト集会へと向いました。汗ばむ右の手には、しっかりと「光よあれ」を握りしめて。

その日はちょうど洗礼式でした。主の前に頭を垂れ、涙ぐみ、主の救いを証しする「洗礼」にあずかる方々が本当に美しく聖らかに見えました。私はその洗礼式の一部始終を熱い思いで見続けました。

集会からの帰り道、私の心の中は熱いもので満たされていました。家にたどり着くと私はこらえ切れずに泣き出しました。それはちょうど迷い児が母親の姿を見出すことができず、目にいっぱい涙を溜めて必死でこらえていて、母親の姿を見つけたとたん「わあー、わあー」と泣きながらその胸の中に飛び込んで泣いている心そのものでした。

「ああ、やっと帰るところに帰ってきた。私は今、神さまの胸の中で泣いている」そう思いました。その日、ほとんどはじめてお話したような集会の竹本裕子さんでしたが、自宅の電話番号を聞いておりましたから、その嬉しい気持ちを聞いてほしくて、電話をしていました。竹本さんも大変喜んでくださり、「ルカ十五章の放蕩むすこの部分を読むように」勧めてくださいました。

立って、父のところに行って、こう言おう。「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。」こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄っ

て彼を抱き、口づけした。　（ルカ　15・18～20）

神さまの方へ向かって歩み出そうとした私に、父なる神は両手をいっぱいに広げて走りよってきてくださったのです。神さまのご愛が痛いほどよく分かりました。そしてその時、同時に私の脳裡をよぎったのは、高校生時代、自分のことしか考えられず、人嫌いで苦しんでいた私の帰りを、路地で立って待っていてくれた父親の姿でした。「神さまは、神さまご自身の大いなる愛を教えてくださるために、前もって高校生時代にあのような体験を与えていてくださったのだな」と本当に感謝しました。

息子は言った。「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。」ところが父親は、しもべたちに言った。「急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。」　（ルカ　15・21～24）

救い

主は、救いへのすべての道を完全に備えていてくださいました。次の日、私は竹本さんに案内されて、山本さんのお宅で行われている家庭集会へと誘われ、幸いなことにベックさんとお話し

することができました。そのお話のすべてははっきりと覚えてはいませんが何よりも印象的だったのは「世喜子は生まれつきの罪人なんだよ」と言われたことでした。

「牢屋に入れられるような罪を犯さなかったのは守られていたからで、もしそういう環境に置かれれば、罪の性質を持っているのだから、同じように牢屋に入れられる罪を犯したかもしれないんだよ」と言われました。「罪人」だと言われて嬉しい人はいないかもしれませんが、私はその時、自分が罪人と聞いて正直、ほっとしたのです。自分がどういう者なのか、自分の正体がやっと分かったのです。「ああそうだったのか。だから自分はこうなんだ」と思いました。

神から離れた人間は、自分が何者であるのかすらわからぬ、悲しい存在なのかもしれません。

ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。

（詩篇　51・5）

そして、ベックさんはおっしゃいました。

「何よりも大きな罪は、自分の人生から神さまを締め出し、神様に背を向けて生きてきたことだよ」

自分の罪がよく分かりました。そして私は今まで、神さまに背を向けて生きてきたことを神さまにお詫びして、イエスさまを救い主として信じ受け入れました。ベックさんが共に祈ってくださいました。

なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中

からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。（ローマ　10・9、10）

その夜、竹本さんと帰る車の中で、波一つない夜明け前の大海を思わせる大きな大きな平安が私の心の中に広がっていきました。今まで体験したことのない神さまのみが与えてくださる平安でした。主の大いなる御手に包まれた自分を思いました。

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。（ヨハネ　14・27）

わたし、このわたしは、わたし自身のために
あなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない　（イザヤ　43・25）

その日から私の心の中は、平安とあふれるばかりの喜びに満たされました。嬉しくて嬉しくて、しかたがないのです。かつては朝起きると同時にきのうのことを思い出し、「あんな嫌なことがあった」と溜息をつくことのよくあった私ですが、一八〇度変って、「ああ、イエスさまに救われているんだ。イエスさまがともにいてくださるんだ。イエスさま、今日はどんなすてきなことがあるのでしょうか。イエスさま、ほんとうに感謝します」と朝を迎えることができるようになったのです。そして今まで、何気なく見ていた自然が、洗われたようにキラキラ美しく輝いて見

えるようになったことが印象的でした。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、すべてが新しくなりました。（Ⅱコリント　5・17）

十字架

「イエスさまの十字架が、なぜ救いなのか」。私はその頃、正直いって分かりませんでした。ベックさんは何度も「頭の知識や理解ではない。イエスさまの十字架は、神さまがお取りになった方法なのだ」と繰り返し、繰り返し語ってくださいました。私自身も「自分のちっぽけな頭で理解するのはやめよう。神さまのお取りになった方法なのだ。それを信じよう」と思いました。なぜ、イエスさまの十字架なのか分からないけれど、素直に信じることが許されたのです。それから、私は神さまに祈りました。「神さま、私はイエスさまの十字架も、その血潮の価値も分かりません。どうかイエスさまの十字架の真の意味を教えてください」。

それから、数カ月たったある日の夜、三浦綾子さんの小説「塩狩峠」を読む機会が与えられました。この「塩狩峠」は、明治四十二年二月二十八日、北海道旭川で鉄道職員長野政雄氏の乗った列車が塩狩峠の頂上にさしかかった時、突然客車が機関車から離れて暴走し、キリストの忠僕であった長野政雄氏が自らの命を犠牲にし、車輪の下敷きとなり、乗客全員の命を救ったという事実をモデルにした小説です。「塩狩峠」の中からその事故の場面を引用させていただきます。

無気味な沈黙が車内をおおった。だがそれは、ほんの数秒だった。「あっ、汽車が離れた！」

だれかが叫んだ。さっと車内を恐怖が走った。「たいへんだ！　転倒するぞ――！」その声が、谷底へでも落ちていくような恐怖を誘った。だれもが総立ちになって椅子にしがみついた。声もなく恐怖にゆがんだ顔があるだけだった。（中略）信夫はこん身の力をふるってハンドルを回した。だが、なんとしてもそれ以上客車の速度は落ちなかった。みるみるカーブが信夫に迫ってくる。再び暴走すれば、転覆は必至だ。次々に急勾配カーブがいくつも待っている。たったいまこの速度なら、自分の体でこの車両をとめることができると、信夫はとっさに判断した。一瞬、ふじ子、菊、待子の顔が大きく目に浮かんだ。それをふり払うように、信夫は目をつむった。と、次の瞬間、信夫の手はハンドブレーキから離れ、その体は線路を目がけて飛びおりていた。客車は無気味にきしんで、信夫の上に乗り上げ、遂に完全に停止した。（塩狩峠より）

明治四十二年二月二十八日、真冬の北海道旭川の塩狩峠には真白な雪が降り積もっていたと思います。そのまっ白な雪の上に、この長野政雄氏の真赤な血潮が飛び散ったのを私ははっきりと見ました。そしてその血潮を通して、イエス・キリストが十字架上で流された犠牲の血潮の意味が始めて分かったのです。私は滅びへとまっしぐらに暴走する列車に乗っていた「罪人」という乗客でした。滅びへところげ落ちていくのが当然の罪人でした。「こんな私を救うためにイエスさまは十字架にかかり死んでくださったんだ」「私だってこんな私のためには死んだりしない……」。

イエスさまの十字架の愛が私に迫ってきた時、その時、もう真夜中でしたが、私は毛布を頭から被って号泣しました。

正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

（ローマ　5・7、8）

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――

（エペソ　2・1～5）

一通の手紙

一九八五年の夏、私は一通の手紙を、敬愛する吉祥寺キリスト集会の田中美智子さんに送りました。

「主の御名をほめたたえます。お元気ですか。最近ある問題について確信があり、美智子さん

ならと信頼し、心の中にあることを知っていただきたいと思います。実は私の結婚のことです。この結婚の問題は、主から与えられた信仰の訓練であると思います。みことばをいただいてもう少しで一年になります。ほんとうにみことばだけです。目に見えるものは何一つ動いていません。昨年の四月二十三日の山本さん宅で開かれた集会で、私はある方に対する思いを与えられました。「もしかしたらこの人かもしれない」と思いました。そしてそれから私は、もしみこころでなければ私のこの思いを取り除いてください、もしみこころならば愛する思いを与えてくださいと祈りました。昨年の七月一日の夜、私は机の上に聖書を開き、「この思いは肉（神の性質に反する人間の生まれつきの性質）からくるのですか、それともあなたからのものですか教えてください」と祈り求めて、ほんとうに三十秒か一分だったと思います。

これらのことはすべて、神から出ているのです。（Ⅱコリント　5・18）

というみことばが与えられました。

私はそのとき訓練の開始だとは思ってもみず、自分の思いでこの道はすぐ開かれるのだと思っていました。しかし、二カ月、三カ月と経つうちに、自分にとってこれは信仰の訓練なのだということがわかりました。「時がくれば私（主）がそれをする」。主はずっとみことばを与え続けてくださいました。そして今年の春頃から私は、みこころを知っておりながら告げ知らせなくてよいのかという思いと、主の時がくるまで待つことが主のみこころなのだという思いの中で、みこころがわからず悩みましたが、主は愛するものには、その眠っている間にすべて備え

てくださるというみことばに、ああ、待っていればいいのだなと支えられてきました。そして、主に信頼せよ。主が成し遂げてくださるというみことばに支えられました。

今年の六月十一日、私はその方の夢を見、目覚めてから聖書の中に、

主は、この国に、一つの新しい事を創造される。ひとりの女がひとりの男を抱こう。

（エレミヤ　31・22）

というみことばを見出しました。

夢と共に与えられたみことばを、心から感謝していましたが、それから五日経った六月十六日の礼拝で、その方が同じ箇所を朗読して祈られました。また今年の春、ある集会の方に「血のつながったお兄さんがいるでしょう？　よく似ているわ」と言われ、その方を指されたことがありました。もし私が助け手としてその方のために造られているとしたら、自分の夫となる人とはどこか似ているところがあるのだろうと思っていましたが、確かに言われてみれば似ている人です。その方に対する思いは本当に静かな思いです。そしてその方について私はほとんど何も知りません。美智子さんが祈りに覚えてくだされば本当に幸いです。すべてのことを主に委ねます。手紙を書くことができて感謝します。美智子さんの上に主の祝福が豊かにありますように」

それから一年後の十一月十五日、時が満ちて、主が語られた通り、主はご真実をもって私たちを結婚へと導いてくださいました。祝福された結婚の扉が、主の御手によって静かに開かれてい

きました。無理なく、鮮やかに、一つ一つ開かれていったのです。まるで、鮮やかな絵巻物を見ているようでした。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。
私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。
わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。
主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、
あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、
あなたの一生を良いもので満たされる。
（詩篇　103・1～5）

風疹と長女の誕生

一九八七年、七月三十一日に長女の陽子が誕生しました。陽子が私のおなかの中にいた妊娠五カ月のはじめの時に、私は風疹にかかってしまったのです。私たち夫婦の新婚旅行先の長野県で、私は次のみことばを与えられました。

彼らの腹は、あなたの宝で満たされ、彼らは、子どもらに満ち足り、その豊かさを、その幼子らに残します。
（詩篇　17・14）

旅行先から東京に帰って一カ月後、検査の結果妊娠していることが分かりました。そのときの検査で、私には風疹の抗体がないこともわかりました。私たち夫婦はその時まで、妊婦が妊娠初

期に風疹にかかると、かなり高い確率で障害のある赤ちゃんが生まれてくることをまったく知りませんでした。折りも折り、その頃は風疹が四年に一度の大流行の年に当たり、私の勤務している小学校でも流行の兆しが見えていました。こういう状況の中で、学校の先生方や子供たちは私を大変心配してくれました。しかしこともあろうに、突然、主人が高熱を出し、続いて身体中に発疹が現われたのでした。

主人は風疹の発病と同時に主人の実家に行っていましたが、十日後には私もついに高熱を出し、とうとう翌日には身体のあちこちに赤いはん点が現われてきました。

私は「我が恵み、汝に足れり」というみことばを思い出し、事態を落ちついて受けとめることができました。そして、私が風疹にかかることを心配していた学校の子供たちから感染したのではなく、主人から感染したことを感謝することができました。

かかりつけの産婦人科の先生に電話をしたところ、何よりもまず、風疹だとすれば、障害を持った子供が生まれる危険性が高いので、医者として赤ちゃんを産むことは賛成できない、ということでした。その日、診察のためその先生のところへ行き、私はクリスチャンであり、産む決心でいること、たとえ障害のある子供が生まれたとしても、私たちクリスチャンは良いものでも悪いものでもすべて神さまの御手からいただくのだ、とお話しました。すると先生は、「あなたの信仰を尊敬します。私は医師として、全面的に協力させていただきます」と立ち上り、深々と頭を下げられたのでびっくりしました。

成人になってからの風疹は、時として重く、私も三十九度を越える熱と歯茎からの出血が何日

も続きました。そういう中で、次のみことばが与えられました。

主は、生まれる前から私を召し、母の胎内にいる時から私の名を呼ばれた。
主は私の口を鋭い剣のようにし、御手の陰に私を隠し、
私をとぎすました矢として、矢筒の中に私を隠した。そして、私に仰せられた。
「あなたはわたしのしもべ、イスラエル。
わたしはあなたのうちに、わたしの栄光を現わす。」　（イザヤ　49・1～3）

「御手の陰に私を隠し」「矢筒の中に私を隠し」…私はこのみことばによって胎の中の子は、風疹のビールスから完全に守られた、またこのことによって神さまの栄光が現わされるのだと確信しました。

同じ日に主人は会社の課長、部長、社長と、上役の方々に次々に呼ばれては堕胎するようにアドバイスされて帰ってきました。重役のご親類に、やはり風疹の影響で耳が不自由なお子さんが産まれた例があり、私たち家族を心配してのことでした。しかし帰りの電車の中で次のみことばが示されたと、喜び勇んで帰ってきました。

またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」

イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざ

がこの人に現われるためです。」（ヨハネ　9・1〜3）

「栄光が現れる」という同じ意味のみことばが同じ日に二人に与えられたということで、このできごとも神さまからのもので、神さまの栄光が現わされるために私たちに与えられたのだ、と感謝することができました。

神さまのみことばに支えられ、また集会のみなさまの熱い祈りに支えられ、まったくの平安のうちに私は守られていました。妊娠中という心の動揺しやすい時期に、しかも、障害を持った子供が生まれてくる可能性が大きいと周囲からも言われているのに、学校の同僚の先生からは、「ほんとうに幸せそうね」と言われるほどでした。神さまの与えてくださる平安は、どれほどすばらしいものでしょう。

郡山の母に風疹にかかったことを電話で話すとかなりショックだった様子でしたが、私が産む決心をしていることを話すと「がんばりなさい」とその時は言ってくれました。ところがそれから一カ月経った四月十一日、突然その母から「赤ちゃんを産むことをやめるように」との電話がかかってきました。ある総合病院の産婦人科で助産婦をしている母が医師に意見を聞いてみたのだそうです。その結果、かなり高い確率で障害を持った子供が生まれてくるということで、「国井（私の母の姓）さんの娘さんだったら、母親としてその出産をやめさせるように命がけで説得すべきだ」と言われ、母は足もとから震えがくる思いだったのだそうです。電話のあった次の日、両親は私たち夫婦を説得するために上京してきました。

母は私に両手をついて涙ながらに出産をあきらめるよう懇願し続けました。しかし二人の意志が強いことを知るとようやくあきらめ、次の日には郡山へ帰っていきました。郡山に着いた父からかかってきた電話を忘れることができません。「元気で丈夫な赤ちゃんが生まれてくるように神に祈れよ」父はこう言ってくれたのです。

七月二十九日、主人と私は産婦人科の先生に、大切な話があるので来て欲しいと言われ、診察室で先生と向いあって座っていました。

「障害を持った子供が生まれてくる可能性がある、と言うよりは、まず、障害を持ったお子さんが生まれてくると考えた方がいい状況です。障害を持った子供さんが原因で夫婦仲が悪くなるケースが多いんです。私はそのことを心配しています」

と先生は言われました。主人は

「子供は神さまが与えてくださるものです。私たち夫婦には信仰があります。たとえ何があってもそのことを神さまから受ける覚悟があります。」

と証ししました。先生は、涙ぐんでおられました。

七月三十日、夜十時、破水。主人の車で病院へ向いました。

病室で聖書を開くと次のみことばが目に飛び込んできました。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。
わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

（イザヤ　41・10）

みことばとはほんとうに生きて力あるものです。

陣痛の苦しみの時、私のにわか仕込みのラマーズ法は、いつの間にか「イエスさま、イエスさま」という呼吸法に変っていました。イエスさまが私と一緒にいてくださる。私の痛みもすべてともに担っていてくださる……。

目の前がまっ白になったその瞬間、おぎゃあ、おぎゃあという産声。元気な赤ちゃんの裸の後ろ姿が見えました。産声が待合室に響き渡ったとき、主人は詩篇十九篇の五節を読んでいました。

太陽は……勇士のように、その走路を喜び走る。（詩篇　19・5）

「理想的に育っています。見ていても気持ちがいいくらいですよ」四カ月後の検診で、担当の先生にこのようなお墨付をいただきました。

ジョン＝バニヤンの「天路歴程」という本の中に、次のような挿話があります。主人公の「キリスト者」は、天国への旅を続けていくのですが、ある門をキリスト者が通ろうとすると、二頭の吠えたける獅子がその両側にいます。キリスト者はひるむのですが、「導き手」に言われる通りに門の真中を進んでゆくと、その二頭の獅子は鎖につながれていて、キリスト者は何の害も受けずに旅を続けてゆくのです。

私たち夫婦の体験も、まさしくこの通りでした。クリスチャンにとっては、悪魔の放つ火矢も、私たちに届くときには神さまの御手によって祝福に変えられているのです。

私は生まれたときから、
あなたにいだかれています。
あなたは私を母の胎から取り上げた方。
私はいつもあなたを賛美しています。
私は多くの人にとっては奇蹟と思われました。
あなたが、私の力強い避け所だからです。
（詩篇　71・6、7）

▼ボリヴィアから留学中の宮前静香さんの洗礼式の日に。左から竹本裕子さん、静香さん、陽子さん、世喜子さん、夫力さん。



限りない主の愛

故　長澤文枝

一九四六年東京に生まれる。区立市ヶ谷小、女子学院中等科、高等科、上智大学国文科卒業。ヨット部でご主人の宏信さんと知りあい、一九七六年結婚。長男俊一郎さん、次男徹郎さん。一九八三年発病、三年の闘病の末一九八六年九月に天に召される。

▼吉祥寺集会の屋上で。左から喜文さん、文枝さん、梅子さん。



一九八六年に、武蔵野市民文化ホールで吉祥寺キリスト集会主催の「喜びへのコンサート」が行われました。その時、天に召される前の長澤文枝さんは壇上に立たれ、証しをなさいました。以下はその全文です。

長澤文枝さんの証し

私は、ごく普通の主婦です。子供が二人おります。私の体にはがんの病巣がありまして、抗がん剤を打ちながら、この病気と二人三脚で生活をしています。

三年前の一月、私は自分の胸にしこりを見つけました。ずっと健康に恵まれて過ごしていましたので、このように恐ろしい病気の兆候を見た時、私はとても怯えました。「まさか」と思い、その「まさか」を打ち消しつつ病院にまいりました。しかしその「まさか」は、現実となりました。私は乳腺腫瘍という病名を告げられて、その年の五月に手術を受けました。

外科の手術というのは案外体の回復が早いもので、私は一カ月後に退院し、後はもとどおりの生活ができるほど健康になりました。しかし、私の心には空しいという思いがありました。今まで楽しかった私の人生、幸福とは、こんなにはかないものだったのでしょうか。以前価値のあったものは何一つもとのように輝いて見えませんでした。子供と遊んでも、友人や夫と談笑しても、買い物をしても、本を読んでも、その空しさは消えませんでした。今目に見えているもの、つまり生活のすべて、物という物全部、愛しい家族すらも、やがては壊れていくもの、失われていくものであることを、私は確実に知らされました。

私は何を信じたらよいのでしょうか。何のために生きているのか、何を求めているのか。この世界には何一つ確かなものはありませんでした。私は空しさのうちに、そのことを知りました。私の「心」は失われてしまい、ただ体だけが生きていました。

そのうちに、私は吉祥寺キリスト集会に導かれるようになりました。私は、聖書に書かれている唯一の神こそが永遠であり、確かな存在であることを学んで、少しずつ変えられていきました。聖書のすべてを理解し、受け入れることなど、とてもできませんでした。けれども、ここには何かがある。私が今まで知らなかったもの、想像もつかなかったような何かがある、という思いにかられて、私は神の存在というものに目を開かれていくようになりました。それからは、世の中で賞賛されているものや人の目を惹くものよりも、神のみことばによって語られている世界に深く深く満たされるようになりました。

その頃の私は、病気を診てくださるお医者さまが、病状について何も答えてくださらないこと、また、たまに答えてくださっても私の状態には納得のいかない説明に聞こえ、何となく不信感を持ちました。さらに、お医者さまは患者の体のことに対して責任を持つだけであって、患者の心のありさまに対してはまったく無関心といっていいほどであることが、私にとって大きな悲しみでした。ある日、そんなことを夫と話しあううちに、とうとう夫は真の病名を私に告げてくれました。私の病気はがんだったのです。それを告げることのできなかったお医者さまに対して、今は同情することもできます。心の通いあうお医者さまに診ていただくことは、病人にとって大きな励ましです。それまでの私は、空しい心をお医者さまにぶつけていたのであって、本当はそれ

は医師の仕事ではなかったのです。人間には、仕事に没入することによっても、人間同士の愛や友情や慰めによっても、決して満たされることのない「心」の部分があり、そこは「神の領域」だったのです。

病名を知って一年後に、私の病は再発し、今度は専門医院に入院いたしました。私自身にとってもっとも苦しかったその時期、動けなくなるほどの体の痛みや将来への不安を抱えて打ちのめされていたその時に、父なる神は私の上に働かれました。私のちっぽけな存在を越え、理性を越え、感情を越え、意志を越えた何か大きな不思議な力が私の上に働き、神の存在と完全な力とを信じさせてくださったのです。

真の神は聖書のみことばを通して私に語りかけられました。

わたしが主である。ほかにはいない。わたしのほかに神はいない。あなたはわたしを知らないが、わたしはあなたに力を帯びさせる。（イザヤ　45・5）

主なる神は私を形造られ、この世に生まれさせてくださり、過去、現在、未来を通して私のすべてを知っておられ、私が信じさえすれば、完全なご計画のうちに全能の力をもって守ってくださる。こう確信できることは何とすばらしいことでしょう。それは私の中に何か価値があったからでは決してなく、主イエス・キリストが過ちの多い小さな存在にすぎない私のために十字架にかかってくださった、血を流して苦しんでくださったというただ一つの事実によって、私に無償で与えられたものだったのです。私の魂は救われました。私の心は安らぎを得ました。

人にとって最大の不幸は、果たして病気でしょうか。肉体の死でしょうか。神を信じる者にとってその答えはノーです。人間の魂が永遠に神とともにあるということは、移り変る一時的な幸福を求めていくよりはるかに高く、はるかにすばらしいからです。

主イエスは言われました。

わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。

（ヨハネ　11・25）

この世界にあるものはすべて、時の流れに従ってやがては滅びていきます。しかし、人間の魂は永遠に生きるのです。今、主によって新しいいのちを吹き込まれた私は、主のみことばを信じることによって生き生きと生きることができます。

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。

（Ⅰペテロ　1・8）

人間として生まれた以上、死をまぬがれることはできません。誰もがやがては確実に、死を迎えるのです。

ただイエス様とともにある時のみ、私たちは自分の子供たちに、「いつまでもいっしょに」と言うことができるのです。

たった今、治りにくいご病気にかかっていらっしゃる方、ともに苦しんでおられるご家族、そういう患者さんの心と体をあずかっておられるお医者さま方、それらお一人お一人の皆さまが、神の完全な愛を知って心から喜んでくださいますように。それが主にある私たちの願いなのです。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

（ピリピ　4・6、7）



▲長男喜信さんの嫁ルシラさん（右から3人目）と一緒に。



▲かほるさんの洗礼式の日。左から徹郎さん（文枝さんの次男）、梅子さん、俊一郎さん（文枝さんの長男）、かほるさん、喜文さん、雄治さん（かほるさんの次男）、長澤宏信さん（文枝さんのご主人）、謙太郎さん（かほるさんの長男）。



▶かほるさんの洗礼の日に家族で。左端はかほるさんの弟の喜信さん。

天国で楽しい再会を（母の証し）

唐澤梅子

一九二八年長野県上伊那郡に生まれる。長野県立伊那高等女学校を経て戸板女子専門学校卒業後、長野県立高遠高等学校家庭科教師となる。印刷会社、営業担当の喜文さんと結婚。（株）陽成社創立、現在取締役。長女長澤文枝さんは一九八六年がんのため召される。長男喜信さん、次女一瀬かほるさん。現在は長男の嫁ルシラさん、孫のことえさんと同居。趣味はアートフラワーと人形製作。

一九八三年四月の末、長女文枝の胸にしこりができているのを知り、三鷹の日赤病院に診察に行きました。医者からは腫瘍と言われましたが、家族には乳がんであることが知らされました。文枝が結婚して八年、長男俊一郎が四歳、次男徹郎が六カ月でした。

五月のゴールデンウィーク明けの六日に、左胸を全部取ってしまうという大きな手術をしました。「乳がんだったら切り取れば奇麗に治るでしょう。田舎の近所のおばさんも二十年前に手術をしているし、あの方もこの方も十年五年と元気でいらっしゃるもの。文枝も大丈夫……」と自分に言い聞かせておりました。手術の結果は大変よく、三週間で退院できました。でも若い文枝にとってはきっと大きなショックがあったことでしょう。

その頃のある日のこと、文枝は

「軽井沢に行って来たいの。徹郎をお願いしていいですか」

そう言って出掛けていきました。軽井沢から帰りますと、

「お母さん、私洗礼を受けようと思うの」と目を輝かせて言いました。私はそれを聞いた時、「文枝らしい」と思いました。といいますのは、文枝は小学六年生の卒業の時、受け持ちの先生が「将来何になりたいか十分間の間に書いてください。卒業のアルバムに載せます」とおっしゃった時、文枝はただ一人「ささやかな事でも他人の役にたつことをしたい」と書いて出したのです。先生に「文枝さんは常々クラスの中でも、体力のない友達、気の弱い友達を助けていつも人の面倒を見ているようです。中学はミッションスクールに入れたらどうですか」と言われミッションスクールを選びました。そんなことが頭の中にありましたから、私は「貴女の人生は貴女のもの。悔いのない生き方をなさい」と申しました。

そんな話をした後、文枝は五月の末に吉祥寺キリスト集会にて洗礼を受けました。

私は苦しい時、悲しい時、何度か教会の前に立ちましたが、クリスチャンというのは私とは別世界の人々であると思いこんでいましたから、文枝の洗礼式に初めて集会に一歩足を踏み入れた時、正直言って何か不思議な雰囲気を感じました。でも、若い方々が主人と私と息子とに大変親切にしてくださり、暖かい愛が集会の中にいっぱいあふれていることが肌で感じられました。

みことばやお祈りの言葉など、見るもの聞くものみんな新しいものばかり、「こんな世界があるんだな。文枝はこんなすばらしい方々を友達に持つことができて、何と幸せでしょう」と心から拍手を送りたい気持になりました。

記念の撮影も終り、家に帰っても、私は一人で訳の分からない興奮の中にいました。やがて私

は「信仰ってなんだろう」という今まで考えたこともない疑問を持つようになり、文枝に誘われるままに吉祥寺キリスト集会に通うようになりました。聖書のみことばとお祈り、福音集会などに何度も参加しているうちに「私はこの年になるまで何をしていたのだろうか、とても恥ずかしくて神様の前に出られるような人間ではないのではなかろうか」という思いが強くなりました。たしかに私は、信州の谷間に育ち、古い因習の中で祖父母から両親、また私へとただしきたりを伝えられ、それを守ってきただけで、何かはっきりとした生きる支えとでもいうようなものを教えられたこともなく、ただ習慣的なくり返しの生活があっただけでした。

そんな私にも軽井沢のバイブルキャンプに参加してはというお誘いがあり、集会の皆さんとゆっくりお話することができました。ベックさんからもイエス様のお話とみことばを聞かせていただいて、長時間いろいろと教えていただきました。私は訳のわからない涙があふれて恥ずかしいほどでした。二泊三日の軽井沢キャンプでしたが、言葉では表現できないすがすがしいものを感じ、軽井沢を後にしました。私は「この感激を主人にどう伝えようか、そして時間がかかってもいい、私も洗礼を受けたい」と思いながら帰京しましたが、主人に話すと頭から叱られそうで、なかなか話すことができませんでした。

再発

文枝はその後二年間通院し、「もう病院へこなくてもよい」と医者に言われたと言って、喜んで報告にきました。しかし、その喜びも束の間のことで、半年後の十一月には、首のリンパ腺に

怖れていたグリグリができてきました。文枝自身、がんではないかと疑いだし、夫に問いただし、がんであることがとうとう本人に分かってしまいました。すぐに私どもに連絡があり私の主人と三人で新宿で会いました。その時文枝は

「私はもう長くは生きられないの。お父さんも集会にきてちょうだい。私はお父さんも、お母さんも、かほるも、喜信も、みんな大好き。天国でまたみんなで楽しく暮したいの」

涙を流して熱をこめてそう言いました。主人は

「うん。分かった。これからは集会に行くようにする」

と返事をしました。

その日は家に帰りましたが、私には文枝の気持が痛いほど分かりました。文枝は三十歳を越えたばかりです。文枝とは後何年生活ができるのだろうか。悲しい涙が溢れ言葉になりませんでした。私は主人に頼みました。

「私たちはこれから何年文枝といられるか分からない。私もイエス様を信じています。だから洗礼を受けさせてください。そして天国で私だけでも文枝と一緒に暮したい。同じ道を歩かせてください」

主人は文枝のせっぱつまった表情によほど心を打たれていたのでしょう、あっさりと

「いいよ」

と言ってくれました。すぐ文枝に電話をし、次の洗礼式のお仲間に入れていただけるよう頼みました。文枝は、

「お母さん。ありがとう。よくお父さんが許してくれたね」と喜んでおりました。一九八五年十二月二十二日、やっと洗礼を受け、はっきりと「私はイエス様を信じ、従っていきます」と皆様の前で証しをすることができました。

私はベックさんの腕の中で水の中から起きあがった時に、今までの五十八年間の古い衣が取り去られ新しい衣を着せられた思いがしました。ちょうど小さな虫が幼虫から成虫になる時のように、不思議な思いがしました。その夜、主人も私が洗礼を受けたことでよほど寂しかったのでしょう。

「私とお前では戒名が違ってしまったな」

とポツリと言いました。主人は、文枝に言われて集会に行くようにすると言ったものの、主人自身が心臓の持病があるため、寒い時は家にこもりがちでした。

すべてを主に委ねて

文枝はその後二週間検査のために入院し、退院後も十日に一度化学療法を行うために通院しました。薬を点滴で入れた後は気分が悪く、起きることもできないほどでした。それでも文枝は、苦しくても一度も苦しさを訴えることをせず、聖書にあるようにすべてをイエス様に委ねていました。自分の体のことはもちろん、夫の宏信さんのこと、子供たちのことなど、必ずイエス様が愛をもって守ってくださるのだといつも口にしていました。

一九八六年四月、主人が突然心筋梗塞で倒れてしまいました。救急車で病院に運ばれ、「いつ

万一のことがあってもおかしくないような状態ですから家族の方は今晩は病院にお泊りください」と医師に言われ、一晩まんじりともせず、文枝と一緒に祈って祈って祈り続けました。幸い、主人の病状は二、三日で落ち着きまして、ほっといたしました。しかし、食事療法はもちろん厳守、そして絶対に無理はいけませんと、医師にきつく言われてしまいました。このように、私どもの祈りが聞かれたのでしょう、二週間の入院ですみ、病院の回りの方にうらやましがられながら退院することができました。

その年の七月になって、文枝は背中の痛みを訴えるようになりました。病院が私どもの家に近いことやこれからのことなども考えて、文枝の一家が引越してくることになりました。文枝は残された日々を賑やかにみんなで送りたいと願っていたのですが、引越しの少し前に痛みがひどくなり、とうとう入院することになりました。でも、文枝は「子供たちのこと、よろしくお願いしますね」と平然としておりました。痛みがやわらぐと聖書を手にみことばを読んでいました。すべてを主に委ねていた文枝は、苦しみの中に平安があり、安らぎを持っていました。そして、

「私は病気が悪くなってもちゃんと行く所があるからいいけれど、同室の皆さんは救われていない方々でしょう。いったいどこへ行くのかしら、それを考えると……」

と言っておりました。そんな気持で、少しずつ、同室の方や別室の気のあった方々に聖書の話をしていたようです。やがて一カ月たっても退院が許されず、その時はほんとうに悲しそうでした。しかし文枝は私には涙さえも見せませんでした。それでもその頃は週末には家に帰ることが許され、ソファーで横になりながら、家族での団らんを楽しみました。

九月になってますます病状が悪化し、主治医に「お母さん、ちょっと」と呼ばれるたびに、身のちぢむ思いがいたしました。私も救われている身なのですが、文枝が天に召される時が迫っていると教えられた時には「私が先に行って待っていてあげたい」と痛切に思いました。そして夢中で看病する日々が過ぎていきました。まもなく個室へ移され、それからは時間に制限なく文枝と一緒にいることができるようになりました。

やがてある日のこと「あと一週間でしょう」と主治医に言われ、それからというものは度胸をすえて「文枝のためにやるべきことをやらなければならない。それが親の務めだ」

そう考えて気をとり直し、わが身にむち打ってむち打って夢中で動き回りました。

九月二十八日のことです。その日は長男俊一郎の運動会の日でした。文枝はその朝目覚めたあとヨーグルトを食べ、それからずっとうわ言を言うようになりました。昼近くになって

「お父さん、お母さん、ごめんなさい。かほる、喜信ごめんね」

とうわ言の中で言うのです。「ああ、これがこの子の最後の言葉なのではないかしら」と、私はすべてを察することができました。私は「イエス様、文枝が今日イエス様のもとへ旅立ちます。どうぞこの子を御手の中に迎え入れ、抱きとってください。そして未だ救われていない、主人、かほる、喜信もいつかは文枝といっしょに天のみ国に入れていただけますよう導いてください。どうぞこのつたない祈りを聞き届けてください」と、くりかえしくりかえし文枝のベッドの横で祈りました。

夕方には両方の家族が集まり、皆で見守っておりますと、午後七時頃文枝が

「お母さん、お母さん」
と呼びました。あまりうわ言が長いので
「文ちゃん、お母さんよ、一日中聖書のお話をし続けて疲れたでしょう。お祈りしてあげるから静かにお休みなさい」
そう言って祈りました。「イエス様、文枝の痛みを軽くしてやってください。そしてイエス様の御手の中に迎え入れてください。安らかにあなたのみもとに着きますようお導きください」。
その祈りの中で、文枝は静かで安らかな寝息となり、やがてとても美しい、安らぎに満ちた顔に変わりました。それは今までの痛みから、苦しみから、この世のすべての疲れから解放された、実に奇麗な顔でした。私は悲しみの中に平安を感じました。文枝はイエス様を信じ、イエス様の子供として天国に迎え入れられたのです。今までにない、いい顔でした。イエス様から私ども家族への愛の贈り物だと、私は感じました。

聞かれた祈り

葬儀の日は、文枝の次男の誕生日でもありました。その後、次女のかほるも集会へ通うようになり、軽井沢のバイブルキャンプにも、集会にも一緒に行くことができるようになりました。私は夢のような気がしました。文枝と一緒にいつも祈っていたことだからです。天国にいる文枝の笑顔が目に浮び、目頭があつくなりました。私と文枝の二人が心を合わせた小さな祈りにも、主は応えてくださいました。感謝と喜びでいっぱいです。

そして文枝が召されて半年後、かほるも洗礼を受けました。仕事を持っているために時間に余裕のない私などより、かほるの方がはるかによく聖書に親しんでいるようです。

文枝が召されてちょうど一年たった一九八七年九月二十七日、文枝の記念式を集会で行っていただきました。その日はなんと長男の結婚式とも重なりました。この結婚はブラジルのリオで決められたことであり、主のすばらしいご計画にただ感謝するばかりです。

嫁のルシラさんは日系三世ではありますが、天から降ってきたような素直な良い娘さんです。主の限りない愛を感じます。そして一九八八年六月に長男に長女が与えられ、祝福式を我家で行っていただきました。その時、主人がベックさんに

「私も今度の洗礼式に入れてください」

と言いました。そして八月七日、主は心臓の悪い主人のために真夏の日を洗礼の日と定めてくださいました。今では我家は、一粒が三粒になりました。こんな私のようなすみっこの方にいる者の願いも、主はちゃんと聞きとどけてくださったのです。主人の回りにも、一冊、二冊とイエス様の本が増えてきています。

私たちはこれからも、主の救いのみわざを感謝し、文枝と天国で楽しく再会できる日を待ち望み、祈りの生活をつづけたいと思っています。

主は私の羊飼い（父の証し）

唐澤喜文

一九二二年長野県上伊那郡に生まれる。専門学校入学者試験検定合格後、中央大学法学部入学、学徒出陣にて陸軍予備士官学校入学。比島派遣軍に配属となり、一九四八年八月に帰国。一九五二年（株）陽成社を創立。現在代表取締役。趣味はゴルフ。

私は、娘の文枝が吉祥寺キリスト集会で洗礼を受けたいと言った時、そしてやがて妻もイエス様を信じて文枝と共に歩みたいと言った時、きっと我身にも一大変革が起こるだろうということを知っていました。そしてベックさんも、それは時間の問題であるということをご存知のようでした。

私はそれまで、曹洞宗の教本を読んだり、一応は禅宗の教義にしたがったりしてきましたが、それらの中からこれと言って特に得たものは何もありませんでした。だから妻がイエス様を信じてこれから生きていきたいと言った時も「ああいいよ」と簡単に了解した訳でした。

私はその頃、信仰というものに対して、漠然と次のように考えていました。私のように田舎の家が十七代も続いている家では、となり近所全部が仏教ですし、お墓も全部曹洞宗の一門です。その中で私の家だけがキリスト教だと言うのはちょっと考えものだ、と。しかし今となってみるとその当時持っていたそういった観念そのものも、信教の自由が認められているのですから、実

はあまり意味のないことなのです。ただ私自身が決心して決めていけばいい問題である訳です。

そして決心して以来、朝妻が読む聖句のひと句切りひと句切りが私自身にも有難く感じられ「今朝の一節はよかったよ」とすなおに言えるようになったのです。聖書も最近もっと読まなければならないと思うようになっています。聖書は深い意味を持っているし、もっともっと知らなければならないとつくづく思うようになりました。

文枝が亡くなってから、かほるもイエス様を信じるようになり、姉の分まで我々に尽してくれることになろうとは全然思っても見なかったことだけに驚いています。集会の皆様方とも親しくおつきあいさせていただいて感謝しています。また、かほるがクリスチャンになり、集会に行くことに理解を示してくれている夫の賢治さんのことも、有難いと思っています。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主はわたしのたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。

（詩篇　23・1～4）

これは文枝の最も好きなみことばですし、私も好きです。このみことばをいつまでも自分のなぐさめの言葉として生きていきたいと思っています。

主は生きておられる（妹の証し）

一瀬かほる

一九五四年東京の新宿で生まれる。教育大付属小、中、都立文京高校を経て恵泉女学園短期大学英文科卒業。専門学校で服飾デザインを学び、（株）レナウンに勤務。一九七九年一瀬賢治さんと結婚。長男謙太郎さん、次男雄治さん。趣味はテニス。

恐れるな。わたしは、最初であり、最後であり、生きている者である。わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。また、死とハデスとのかぎを持っている。

（黙示　1・17、18）

しかし、キリストは永遠に存在されるのであって、変わることのない祭司の務めを持っておられます。したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

（ヘブル　7・24、25）

だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます

（マタイ　6・33）

初めに、神が天と地を創造した。　（創世記　1・1）

姉が住んでいた関町のグリーンタウンの一室を入院とともにひきはらう時、部屋に貼ってあったこれらのみことばを壁からはがし、しまっておきました。まだ救われていなかった私には、このみことばの意味はさっぱり理解できませんでしたが、その時からすでに主はこんな小さな者にも目をとめて導いてくださっていたのでした。今再びこのみことばに目をとめる時、姉が私に

「聖書に書いてあることは、一つ一つ、事実だけが記されているの」

と教えてくれた時のことを思い出します。神は存在する、ということを体験を通して確信していた姉は、このみことばを通して神様はほんとうにいらっしゃるのだと伝えたかったのでしょう。

私と姉は三つ違いで、小さい頃はよく面倒を見てもらい、なんでも姉のすることをうらやましく思っていました。性格は正反対といってもいいくらいで、彼女は本が好きな文学少女、私はスポーツ好きの活発な少女でした。私の通っていた短期大学も、毎日礼拝のあるミッションスクールでしたが、学生時代は真剣に聖書を読むこともなく、楽しい毎日を送っていました。両親は商売をしていて大変苦労してきていましたので、私たち子供三人には何の苦労もさせずにおこうと、愛情豊かに育ててくれました。

性格がはっきりと違っていたので、特別に仲がいいというような姉妹ではなかったのですが、お互いに結婚し、二人の子供を持つ母親という同じ立場になってみて、やっとこれからなんでも

楽しく話しあえるな、と思っていた矢先のことでした。

一九八三年四月、姉の胸にしこりが見つかり、病院へ行くとすぐ手術。家族にだけはがんという病名が告げられました。

しかし、乳がんというのは、切り取ってしまえば絶対に大丈夫治るんだと簡単に考えていました。外科手術後の回復は以外に早く、外目にはそんな大手術をした病人とはとても思えないほどでした。私も二人目を出産したばかりで、自分の生活の忙しさに追われていましたので、姉がどれだけ手術後に悩んでいたか、まったく思いやるゆとりがありませんでした。

数カ月後、姉から電話があり、「洗礼を受けるから見にきてほしい」と言われました。教会らしい所に行っているのは知っていましたが、「どうして私が見に行くのだろうか」とその時思いました。でも病気のこともあって、「断わってはかわいそうだし」という思いもあって、吉祥寺キリスト集会へ初めて足を踏み入れました。

やたらに人が多いのと、生き生きと動き回る集会の人々の様子にすっかり圧倒され、「なんだか場ちがいのところへ来てしまったなあ。早く帰りたい」というのが第一印象でした。姉の受洗の間中、母が泣いており、私にはどうして泣いているのかが分からず、終るとさっと一人で帰りました。

姉はその後二年間、たまに病院で検査をしたりしてはいましたが、順調に体も良くなって、子育てに励んでいました。私も最も忙しい時期で、あまり密に姉とは連絡をしあわなかったそんな頃、母から電話で、「お母さんも洗礼を受けることにした」というのです。私はびっくりして、

「えっ、どうして?」と一瞬思ったのです。姉の時は病気のこともあって、何かに頼りたいのだろうと思い、すぐに納得できたのですが、母の場合は父のことが頭に浮び、少し時間がかかったのです。というのも、父は長野の代々続いた家で、七人兄弟の長男として、「家」を継ぎ、田舎へ帰るたびに仏壇の前でお経を読んでいました。そういった旧家の後を立派に継いでいることが父の誇りでもあるようでしたので、「お父さんはいいって言ったの?」と母に聞きました。すると「うん。許してもらえた。」と涙声で答えたのです。父が許してくれたのだったら回りの状況はどうであれ、私は賛成でした。母と姉はいつも物の考え方が同じようで、お互いになんでも話しあっている様子でしたから、姉と同じ道を母もいっしょに歩んでいけたら、きっと姉も心強いだろう、とそんなふうに思っていました。

でも私は、母の洗礼は見に行きませんでした。その頃の私は、自分の楽しみをすべてに優先させていて、日曜日というと夫と子供といっしょにテニスをしたり、ドライブをしたりというのが生活のリズムで、その予定を変更したくないという自己中心的な考え方が強かったのです。また、自己中心的だと自分でも分かっていましたけれど、人に迷惑をかけているわけでもないので、悪いなあと感じたことは一度もありませんでした。

主の導きのはじまり

母の洗礼後、実家へ帰ると「実を結ぶ命」や「光よあれ」があちこちに置いてあり、なにげなく読んでいました。イエス・キリストに関して自分から本を読んだのはこの時が初めてではなか

ったかと思います。リンデさんが二十歳という若さで、がんという病気をこえて、すべてを主に委ねて天に召されたすばらしい記録が記されてあり、感心して読みました。姉が乳がんでしたので表紙の標題が目に入り、「がんにうち勝った」と書かれているのは最初、「がんが治ること」だと思っていたのです。しかしこの本を読んで、何か別の方法でがんに勝つことができるのだとかすかに思ったのでした。

「光よあれ」は短篇小説を読んでいるかのようで、イエス・キリストに出会ったことによって人生が一八〇度変わってしまった方々のことがたくさん書いてあり、これも一気に読みました。しかし、自分には必要のないものであり、関係のない別世界の方々のことだと頭から決めていたので、自分から何か聖書のことで姉に聞くということもありませんでした。ただ、「光よあれ」の最後の方に、ゴットホルド・ベックさんという宣教師の方がメッセージを書いておられ、心に残った個所がありました。

「今のこの地上での生活は、私たちが永遠に対して正しい決断を行うこと、すなわち、主イエス・キリストを受け入れて、主なる神との交わりをもつための準備期間です」

どうしてこのことばが心に残ったのか分かりませんが、そういうふうに考えたら生きていくのが楽だろうなと思っていました。

「死」をみつめて

母と姉は、集会に行ったり、軽井沢のバイブルキャンプへ行ったりと楽しそうに過ごしていま

した。私一人とり残された気持も少しはあって素直ではなかったので、誘われても多分行かなかったでしょう。

姉の手術後二年少したった頃、姉の首にしこりが見つかり、心配そうに専門病院へ診察に行きました。怖れていた再発でした。

次の日、母から「手術できない場所で、危険な状態だと言われた」と涙声で電話してきました。一瞬、ぼう然として言葉の意味を理解しようとするのですが、「危険」というのは一体どういうことなのかがピンときません。不思議なもので、自分の身内というのは死ぬことなんかないという錯覚というのか、そういう思いがいつも心の中にあり、「死」というものを直視できない状態でした。しかし病状は悪くなる一方で、投薬をしながらの通院が続きました。

その頃のこと、姉が自宅療養中のさなか、一九八六年三月に「喜びのコンサート」という集いが武蔵野文化会館であり、招待状と次の手紙が送られてきました。

「いつもあなたにすっかり面倒をかけてしまいありがとう。これから先も、両親のこと喜信のこと、きっと私にできることは数少なく、あなたや賢治さんにご心配をかけると思いますが力になってあげてください。私は生きている限り、皆のために祈ります。私の病気についてはあなたも覚悟していると思うけれど、全治する方法はまだ見つかっていないし、あと数年生きられれば、というふうに思っています。私は、全てを支配なさっているのは、ただおひとりの神だけであると信じておりますが、神が私にこの病を背負うようになされた以上、この神は私に対し、奇跡をおこして癒してくださるのがみこころであるとは思いません。私自身の心の中に、

これほどの信頼と、死に対する恐れからの救いをもたらしてくださったこのこと自体が、私にとっては奇跡に等しく思われますから。

ただ心に残るのは、まだ信仰を持っていない宏信さん（夫）が私の亡きあとどんなに苦しみ、絶望と孤独を味わうだろうか、ということと、おそらくまだ幼いうちに母をなくす子供たちが、どんなに寂しい時期を過さねばならないだろうかということのみです。人間的な目から見ればこの上なく不幸な事態を通して、夫と子らがより早く主なる神を知り、神様に委ねることのすばらしさを知ることができれば、もはや不幸ではなくなるということを信じて疑いません。けれども、そのどん底の時期に、やはり肉親の人々が力になって愛してくだされば、その心の痛みもより早く癒えることも真実だろうと思います。だからそのことをあなたに頼んでおきます。私がどのように生きたか、どのように神を信じて天に召されたか、子供たちに伝えてやってほしいのです。私の生きざまをしっかり見ておいて、幼い子らが成長した時に教えてやってほしいのです。あなたに信じることを強いるつもりは全くありません。それは、神だけになし得るわざですから。三月十六日のコンサートの切符を同封します。私も話をします。

私自身のことは心配しなくて大丈夫。神に召されるまでしっかり生きます。体のことではおせわになることもあるでしょうからお願いします。よろしくね。

三月九日　　長澤文枝」

コンサートでの証しは大変感動的でした。しかし、姉のうしろにイエス様がおられて支えてくださっていたことを、その時私はまだ見ることができなかったのです。

次の日、井の頭にある高橋さんの家庭集会に姉について参加しました。初めて、ベックさんとお会いし、ごあいさつをしました。とっても大きな手でした。けれど私はその場の雰囲気になじめず、顔もこわばって座っていました。

次の月にも姉が連れていってくれました。一カ月たっていたので姉の具合はずいぶん悪かったのですが、どうしても行きたいというので、私は付き添いのつもりでした。今度は少し慣れたせいか、聖歌も声を出して歌い、お話の内容も少し分かりました。神は愛であるというお話でした。帰りがけにベックさんが玄関のところまでわざわざ来てくださって「また来てください」と声をかけてくださった時、目から涙が一気にあふれてどうにもならなかったことを覚えています。

姉は七月に具合が悪くなり、入院しました。なかなか検査が終らず、日に日に悪くなるのが分かり、退院もむずかしいのではと思えてきたのでした。九月に入り個室へ移され、その残された何日間の間に、こんなにぶい私の上にも主が働かれたのでした。

病室には、聖書と「光よあれ」と「実を結ぶ命」だけが積んであり、私が付き添いの時、時間がたくさんあるのでなにげなく聖書をパラパラとめくってみました。すると赤い線がたくさんひいてあり、みことばが目にとびこんできたのです。

今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

（Ⅱコリント　4・17、18）

学生の時見なれていた聖書でしたのに、この時初めてみことばが心につきささってきたのです。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（Ⅰコリント　10・13）

脱出の道とはいったいどこにあるのだろうか。この苦しみから脱け出すことができるのだろうか。「教えてください」と心の中で叫んでいました。

自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。

（マタイ　6・19、20）

このみことばが目にはいった時、ほんとうに天国というのが存在するのではないか、という思いがせまってきました。また同時に、それまで私が大事に思ってきた一つ一つが、果して価値のあるものなのだろうかと考えるようになってきました。

その日、病院から帰る途中で本屋に寄り、聖書を買って帰りました。何か自分でも説明できない大きな力が私にそうさせている、というように思われました。

私が病室に泊り込む時に、聖書を開いて読んでいると、寝ていた姉が私の方をじっと見つめ、そしてまた目をとじました。痛みで目をあけることが少なくなっていたのですが、集会の皆様が来てくださると、ほんとうにうれしそうで、聖歌を歌ったり、イエス様の話をしたりする姉を見て、「いったいこの力はどこからくるのだろうか？　私も知りたい」と思うようになりました。

九月二十八日、最後まで痛みは消えませんでしたが、姉は母の祈りの中で静かにイエス様のもとに帰りました。姉の顔をなでながら、「よかったね。もう痛くなくて。イエス様といっしょになれてよかったね」と姉に言えたのは不思議でした。すべてが静かでした。

集会でのすばらしい葬儀の帰り道、もう外は真暗でしたが、どうしても姉と仲の良かった方々にお会いしたくて、けげんな顔をしている主人と別れ、その方々のお宅を訪ねました。あいにくお留守でしたが、外で主人が待っていてくれていっしょに帰ったのです。でも私の頭の中には白い二本の道がはっきりと見え、「あなたはどちらの道をこれから歩むのか」と問いかけられていて、どうしたらいいのか分かりませんでした。二本の道というのは、今まで私が歩んできた道と、姉が示してくれた神を信じて生きる道です。

私のそれまでの人生は、主人に百パーセントと言ってよいほど精神的に頼っていて、主人と子供がいれば何もいらないくらいに思って生きてきました。でも、私の人生から、この二つのものが取りさられることがあるのかもしれないと思っただけで、その時の自分の姿がどういう状態になるかが想像できるのです。「私のような者が、神を信じて生きていけるのだろうか。クリスチャンになんかとてもなれない……」自問自答してみたりしましたが結局答えは出ず、まずは姉が

何を信じて天へ召されたのかを知っておきたいと思って集会へ通うようになったのです。

イエス様の十字架の意味

家庭集会、礼拝、福音集会へ通うようになり、姉の思い出もあって毎日のように涙で顔がくしゃくしゃになりました。そして泣いた後、なぜか気持がすっきりとして、最初は何のことか良く分からなかったメッセージも、だんだんと自分自身に語ってくださるようで楽しみになってきていました。それまで、『十字架』という言葉は知っていても、なぜイエス様が死なれなければならなかったのか全く分かりませんでしたが、イエス様が背負われていたのは私が神にそむいていた罪であり、そして流された血潮で私の罪を清めてくださったことを知りました。そして、「もうあなたの罪を思い出さない」と言ってくださっているのです。頭で理解するよりも先に「ありがとうございました」と主に感謝できたことは、ほんとうにあわれんでいただいたゆえでしょう。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ　3・16）

主なる神から遠く離れていたこんな小さな者の上にも、愛をもって導いてくださり、「来なさい」と言ってくださっているのです。

恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。

（イザヤ　43・1）

それまで姉にまかせきりだった様々な問題が、私の上にも押し寄せてきて、途方にくれていた時でもありました。しかし、主はそのこともいっしょに背負って歩んでくださると言っておられ、感謝しました。

彼がわたしを愛しているから、わたしは彼を助け出そう。彼がわたしの名を知っているから、わたしは彼を高く上げよう。彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは、彼に答えよう。わたしは苦しみのときに彼とともにいて、彼を救い彼に誉れを与えよう。

（詩篇　91・14、15）

主は生きておられる

姉が亡くなってちょうど一カ月目の十月二十八日、ベックさんが個人的に分かりやすくイエス様のことを話してくださり、今までの罪を告白して「イエス様、赦してください」といっしょに祈ることができました。十一月に初めて軽井沢のバイブルキャンプに参加し、大自然の中、とても新鮮な思いでメッセージや多くの方の証しを聞くことができ、感謝しました。特にそのキャンプで初めて知ることができたのは、「祈り」という意味が、それまで私の思っていたのとはすこし違うということでした。祈り会で集会の皆さんは、初めて会った方のために、「その方が救われるように」と祈っていらっしゃるのでした。私は「よく知らない方のためにどうして祈れるのかしら」と不思議に思ったのですが、その祈りの場に主がご臨在になっておられることを強く感

じました。そして、一人一人が祈ることによって主との心の交わりを持っているのだということも知りました。

軽井沢から帰り、それまで口に出して祈れなかった一つ一つを主の前にひきだして、だんだんと祈り初めました。祈り初めていくと、自分がいかに素直でないか、自我の強いものであるか、そして他人をさばいている者であるかがはっきりと分かり、ほんとうに自分がどんなにだめな者であるかが示されてくるのでした。姉が仲よくさせていただいていた集会の方の祈り会にも入れていただき、いろいろなお話しを通して主にあるものの心の平安と喜びが伝わってきて、ほんとうにうれしく思いました。そして、共に祈っていただいた一つ一つのことに主は必ず応えてくださり、そのたびごとに必ず道を開いてくださいました。

がんこな父さえも、父にふさわしい方法で導いてくださり、バイブルキャンプを通して主に立ち返る時を与えられ、一九八八年八月七日に洗礼を受けることができました。多くの病、そして人生という重い荷を背負っていた父の上にも、愛をもって働かれた主に心から感謝しています。主は生きておられ、私たちの小さな祈りを必ず聞かれる方であると確信しています。

だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。（マタイ　6・33）

このみことばの意味を、今こそはっきりと知らされました。主に信頼し、いつも喜んで歩んでいる時、私たちの中に主が働かれるのです。

主のみこころ

姉はどうしてあのような治らない病気にかからなければならなかったのか。あのような痛みを背負わなければならなかったのか。私は病室でよくそんなことを考えました。どうして私はどこも痛くないのだろうか。何か姉のかわりにするべきことがあるのだろうか。しかしある時、そんな疑問を持っていた私に、主はみことばで答えを与えてくださいました。

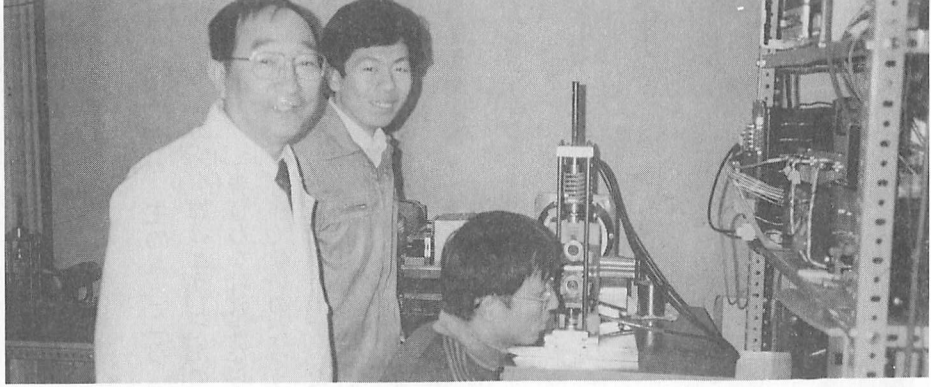
愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起ったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。

（Ⅰペテロ　4・12、13）

こうしてあなたがたは、地上の残された時を、もはや人間の欲望のためではなく、神のみこころのために過ごすようになるのです。

（Ⅰペテロ　4・2）

姉のたった一つの願いは、イエス様のために多くの実を結ぶことでした。多くの方に自分が体験した喜びを知らせたい。そのことを姉はどんなに心の中で祈ったでしょうか。イエス様は、すべての魂を救いたいと思っていらっしゃるのです。どうぞ主にある心の平安を、一人でも多くの方が知ることができますようにお祈り申しあげます。



▲学生に実験の指導をする二郎さん。

高慢を砕かれて

大塚二郎

一九四〇年東京武蔵野市に生まれる。武蔵野市立第二小、学芸大付属小金井中、都立西高、東京工業大学制御工学科卒業、同大学院機械工学科博士課程を経て同大学精密工学研究所に勤務。主として工作機械などの精密機械の研究に従事。工学博士。東京工業大学助教授。同大学サッカー部監督。家族は妻玲子さん、長男哲史さん、次男英二さん、母なほさん。趣味はサッカーとオートバイ。

▼仲間が仲良く集まって。後列左から染野茂夫さん、池島潤一さん、大八木徹さん、二郎さん、森下茂さん。前列左から安田義治さん、飯島信太郎さん。



はじめに

一九八三年十二月、私は都合四回目の精神病院に入院しました。そこは国立武蔵療養所（現精神神経センター武蔵病院）というところですが、主治医は妻にこう言ったそうです。

「大塚さんのご主人は、あのプライドを捨てないとこの病気から立ち直れません」

今になってわかるのですが、それまでの私は、本当にプライドの高い高慢な者で、へりくだることなど知らない人間でした。学歴で人に優劣をつけ、しかも「旧帝大、東工大、一橋大以外は大学とは言えない」というような不遜な考えが心の隅にありました。しかし、そんな私を主は放っておかず、私の高慢さを徹底的に砕くために、薬物依存症という、精神的にも肉体的にも大変苦しい病気をお与えになりました。薬物依存症（薬中）とは、睡眠薬、鎮痛剤、鎮咳薬などの風邪薬、法律で使用を禁止されているシンナー、覚醒剤、麻薬などの薬物が、自分の意志ではやめられなくなる病気で、症状はほとんどアルコール依存症（アル中）と同じです。治すためには、アルコール依存症が一滴のお酒も飲んではいけないのと同様、一粒の薬も飲んではいけないのですが、薬をやめ続けることは大変むずかしいのです。

アルコール依存症、薬物依存症は「高ぶりの病気」と言われる一面を持っています。「人間」を低くしないと、この病気の治癒はありえません。聖書の中で、イエス・キリストは何度もこう言われています。

だれでも、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます。

（マタイ　23・12）

この薬物依存症から解放されるには、信仰を持つ以外ないといっていいでしょう。

薬物依存症への道

一九四〇年に四人兄弟の末っ子として生まれた私は、一九四四年に父を亡くし、母の手一つで大変かわいがって育てられました。中学、高校、大学とエリートコースを歩み、内心「自分は頭がいい」と思っていましたから、高慢になったのはあたりまえだったかもしれません。

大学院に在学中、東京オリンピックのあった一九六四年、二十三歳の時から睡眠薬を用いるようになりました。それまではよく眠れないことが多かったのですが、薬を飲むようになってからは、八時間ぐっすり眠れて朝もパッチリ目が覚め、バリバリ仕事ができるようになりました。当時は薬局に行って「睡眠薬をください」と言えば、カウンターにずらりと薬を並べて、「どれにしますか」という時代でした。「ハイミナール遊び」という、睡眠薬を飲んでラリる遊びがはやったのもこの頃です。

そのうちに、私は薬で酔うことを覚えました。お酒よりももっと気持ちよく酔えるのです。鎮痛剤を飲んだ時、体がしびれるように感ずることがありますが、私にとってこれが快感でした。

一九七〇年、大阪万博に象徴されるように、日本の景気が最高にいい時に結婚しましたが、結婚相手は高ぶりのない女性がいい、あまり「学」のありすぎる女は嫌だ、と思い、現在の妻と結婚しました。

睡眠薬を用いてでも仕事をバリバリやり、業績を上げて他人から偉く見られたいという意識が絶えずありましたから、休日も研究のために大学に出勤しました。その結果、三十五歳を過ぎる頃には学会や産業界から六回も表彰され、私はますます高慢になっていきました。そして、「自分は他の人とは違う」と思うようになっていきました。けれども、いくら仕事に没頭していても、私の心は決して満たされることはありませんでした。

心の支えを求めて

理工系大学へ進んでも、私には科学万能という考えはあまりありませんでした。何か心の支えになるものが欲しいと思い、高校時代の友人と座禅を組んだこともあります。やがてそれでは飽き足らなくなり、大学四年の春には、真理を求めて八〇CCのオートバイに跨がり、四国八十八ヶ所のお遍路さんに出かけました。徳島県の一番寺霊山寺から「すべてを弘法大師さんにゆだねて」と出発し、般若心経を唱えながら高知県のお寺をまわっているうちはよかったのですが、愛媛県から瀬戸内海の方へまわるうちに、「これは裏切られた」と感じました。自分は一生懸命やっているのですが、まったく心が満たされないのです。それ以来、「私は宗教には頼るまい」と思うようになりました。

それからの私の生きがいは、仕事とオートバイ、そしてサッカーでした。オートバイでは、当時日本で始まったばかりのトライアルという競技に夢中になりましたが、やがてそれも虚しくなってやめました。サッカーの方は三十歳まで現役でプレーし、それ以後もレフェリーとしてあち

らこちらの試合に出かけていましたが、薬物依存症の進行とともにそれもまったく声がかからなくなりました。

そのような中で、薬でもうろうとした頭で「神はいないのだろうか」と考えることもありましたが、行きつくのは、なぜだか「やはり自分が神なのではないか」という思いでした。

妻は、結婚してすぐに私の薬に問題があると気づいたようです。結婚して五年を過ぎた頃には、夕食をとるために食卓に座っても、じきにすきっ腹に飲んだ薬が効いてきて、よだれをたらし、そのままくずれるように眠ってしまうという状態でした。妻は市の保健所や病院に相談したようです。かくして私の精神病院への入退院の繰り返しが始まりました。

第一回精神病院

一九七八年四月、私は妻にうまく言いくるめられて、格子窓のついた外出もできない近所の精神病院に入れられてしまいました。しかし、先生と喧嘩をして、一週間で病院を飛びだしました。この頃にはそろそろ薬局での睡眠薬の販売もうるさくなったので、眠れないといってまた別の精神病院から手に入れた薬を飲んでいました。しかしやがてそれだけでは足りなくなり、ある薬局からBという薬を手に入れて、睡眠薬と併せて飲んだところ、心臓が止まってしまいました。一九七九年四月のことでした。母が、なかなか起きて来ない私に気づき、あわてて近所の医者に心臓マッサージを施してもらって九死に一生を得ました。

ひどい精神病院へ

こうして川崎の精神病院へ二度目の入院をすることになりました。数年前に宇都宮の精神病院のことがマスコミで話題になりましたが、それと似たりよったりのところへ五カ月間も入れられました。退院してからもそこの副院長の外来に通っていましたが、「薬物依存症」などという言葉は一度も聞かされませんでした。それどころか、その先生は何でも薬で解決しようとするタイプで、「少しぐらいの睡眠薬ならいいですよ」と、次々に薬を出すのです。これが現代の代表的な医者でしょう。気づいた時には薬の副作用で右半身が不随になっていました。都内の二、三の病院で診断してもらったところ、いずれからも、「薬を半分にしなさい」と言われましたが、「まわりの人たちは薬なしで眠れるけれど、私だけは特異体質だからしかたがない」と、薬を減らす気などまったくなかったのですから、そんなことができるはずはありません。ついに、右足をひきつらせながら歩くようになってきました。体もやせて四十六キロになりました。

薬物依存症と診断される

妻は私の右半身不随を心配して、どこからか東京小平市の国立武蔵療養所神経内科というところを見つけてきて、そこに一九八二年の九月に入院しました。薬を切られて、禁断症状から油汗が出てイライラし、どうにもたまらなくなりました。そこで、私の指導している大学院の学生に電話して車で来るように呼び出し、無断外出して薬局で大量のBを購入し、夜中にそれをほおばっているところを看護婦さんに見つかりました。かくして神経内科からアルコール薬物病棟へ移

され、正式に「薬物依存症」と診断されました。そこは今までの精神病院とは違って依存症患者だけの病棟で、毎日プログラムがきっちり決まっていて、集団療法などで徹底的に病識を持つように教育されます。

ここでも私のプライドの高さは端的に出ました。四十数人の患者の中で、「俺はアル中とは違う。第一家庭もあるし仕事もある」、また、薬物依存症の患者も私の他に数人入院していましたが、「俺は他の薬中とも違う。覚醒剤のヤーさんとも違うし、シンナー坊やの青二歳とも違う」と、病棟の中で一人で数学の勉強なんかしていました。三カ月入院したものの、こんな状態では薬をやめられるはずもなく、退院と同時にまたもとの暗闇に逆戻り。しかも今度は病気の進行が今までよりずっと早く、薬の量も加速度的に増え、退院後半年で、一回に十人分ぐらいを飲まないと効かないほどになりました。こんなにたくさんの薬を手に入れるのがまた大変で、土曜日には何軒もの精神科をはしごしました。右半身の不随も前よりひどく、歩くのもかなり困難で、お箸さえよく持てないありさまでした。またこの頃は、常時薬が体に入っていないと動けず、睡眠薬を飲まないと朝も起きられないのです。

はじめは「離婚、離婚」とわめいていた妻も、そのうちに、もう私の回復などありえないと、あきらめの状態でした。私としても、妻の気持ちが私からどんどん離れていくのが実に寂しいのですが、どうしようもないのです。家の中も、この頃の数年は暗くなる一方で、八十歳を越えた母も「かわいい息子がこんなになって」と悲しみの毎日でした。

再度の武蔵療養所入院

体がいよいよ不自由になり、「これ以上飲み続けると自分は死ぬ……」と思っても、自分の意志でやめることができません。今度は完全にギブアップして、再度武蔵療養所に入院しました。入院して数日後、禁断症状から意識不明になりました。その時の私は、病棟の中をフラフラと徘徊したり、壁に向って一人で呟いたり、大変だったそうです。医学的にいうと、脳が炎症を起してかなり危険な状態で、「大塚さんはもしかするとそのまま植物人間か」と言われたそうです。

しかし、主治医の懸命な治療のかいあって、一週間ほどで意識を取り戻しました。そして、その年の正月は、精神病棟の中で迎えることになりました。

本当の神との出会い

この時私は、これからどうしたら生きていけるのかまったくわからず、「神様助けて」と叫びました。しかし聖書には、神様の方から私の名を呼んでくださったとあります。ずっと前から呼んでいてくださったのです。

あなたを形造った方、主はこう仰せられる。
「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」
（イザヤ　43・1）

他の患者はグランドでソフトボールをしたり、体育館でバドミントンをやっているのに、私だ

けなかなかよくならず、いつも外出禁止。病棟に置いてあるアルコール依存症に関する本を読んでいると、今度は不思議と、自分もアル中と同じ、と思い始めました。周囲の回復しつつある患者を見ていると、毎晩のようにA・Aと呼ばれるアルコール依存症者のミーティングに出て行きます。私は前回の入院では、A・Aには神の話が出てくるからいやだと、かたくなにミーティングの出席を拒んでいたのですが、今度は私から主治医にお願いしたところ、同伴者があるなら、という条件で出席の許可がおりました。（注　A・Aは Alcoholic Anonymous の略称。無名のアルコール中毒者たちの意。アルコール中毒者・薬物中毒者たちが、自発的に集ってミーティングを中心に行う回復のための集団療法。）

初めて東久留米のA・Aミーティングに出たのは、忘れもしない一九八四年一月九日のことです。そのときのテーマは「信仰には力があると信じるか」でした。ある者は戦争中天皇を神としたことを語り、またある者は神と信仰について語りました。私は、四国八十八ヶ所をまわって裏切られた話をしました。そして私はこのような体験を通して、A・Aミーティングにたびたび出てくる神は、聖書の神にちがいないと直感的に感じました。（なお、アルコール依存症については、「光よあれ」第二集にある染野茂夫さんの証しをご覧ください。）

武蔵療養所の看護婦さんは、他の病院と違って大変親切なのですが、そんな中で一番若く当時まだ独身だった大戸美津子さんという方が、ある日次のようなみことばをくださいました。

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

自分を知恵のある者と思うな。主を恐れて、悪から離れよ。それはあなたのからだを健康にし、あなたの骨に元気をつける。

（箴言　3・5～8）

私はかつて、座禅を組んだりして悟りというものを求めていたのに、聖書は「自分の悟りに頼るな。自分の力に頼るな。主に頼れ」といっている……このみことばには驚きました。

大戸さんは、次に吉祥寺キリスト集会発行の「実を結ぶ命」と「光よあれ（第一集）」の二冊の本をくださいました。まず「実を結ぶ命」を読みましたが、「みことば」だけ全部とばして読みました。まだ何か聖書に抵抗があったのです。それでも、二十歳そこそこの少女ががんに打ち勝った話を涙ながらに読んだのでした。そして、大戸さんから「集会に来ませんか」と誘われて一九八四年二月十九日日曜日、高田雄二さん（彼も一緒にクリスチャンになりました。現在新潟長岡在住で、A・Aで活躍なさっています）と一緒に、礼拝に出席しました。

その週の土曜日、染野さんという、二年前に同じ病院を退院した方のお宅で家庭集会が開かれました。その日、入院して二カ月たって初めての外泊の許可がでました。妻と一緒に出席しました。映画とベックさんのお話の内容は、まったく覚えていません。しかし、その後の食事をしながらのひとときは印象的でした。みなさんの輝いた顔、そしてお酒もないのに笑いにつぐ笑い。感激し、妻と興奮気味に家へ帰りました。「この人々が信じている神なら信じてもいいな」と思いました。そして、次の日の礼拝で、夢中でイエス・キリストの体を象徴するパンにあずかりました。

それからというもの、私は嬉しくて嬉しくてしかたがないのです。なぜなのか理屈ではわかりません。薬物依存症になったことさえ感謝できました。まさに、聖書にこう書かれているとおりです。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。

（詩篇 119・71）

その年の桜の花の美しさ、桜に続いて咲く花々の美しさ、町を歩く女性の美しさ。それまでの私は白黒で物を見ていたようで、急にまわりがカラーになったのではないかと錯覚したほどです。

その時の入院で本当に不思議だったのは、「自分だけは違う」という思いがまったくなくなったことです。N・A（Narcotics Anonymous＝無名の薬物中毒者たち。内容はA・Aとほとんど同じ）のミーティングにも出席し始めたのですが、気がついてみると「ヤーさん」とも「青二歳」とも何の隔てもなく話しあえるのです。やはり、主が私を徹底的に砕くことによって変えてくださったとしか思えません。

主治医は私を特別に扱ってくださり、最後の一カ月間は週の半分を病院で、もう半分を自宅で過ごすようなプログラムにしてくださいました。毎週水曜日の夜は、染野さんご夫妻が私たち夫婦を集会の聖書の学び会に連れて行ってくださったのですが、ある日の夜、ベックさんから洗礼を受けるようにすすめられました。私が

「聖書を読んでいないからまだ資格がありません」

と言うと、ベックさんは、

「それでも資格は十分です」

と答えられ、結局入院中のイースターに、何と三十三人という多くの方々と共に受洗しました。

四カ月半の入院の後、退院して、集会・ミーティング・病院の三つを柱にした新しい生活が始まりました。毎週土曜日は都内のあちこちの家庭集会に集いました。私は特に重症で（ミーティングでの私のニックネームは「重二郎」といいます）、このプログラムを二年続け、職場への完全復帰にも一年半かかりました。

今までは精神病院を出ても、体重はあまり増えなかったのですが、今回の退院時は何と二十キロ近く太りました。主にゆだねることを覚えたので、いつも安心していられるからこその「平安太り」ですが、友人からは中年太りだと言われています。

問題点

信仰を持ってからの日々を振り返ってみると、いろいろな問題がありましたが、本当に主は時を選んで一つずつ、また少しずつ解決してくださったという感じがします。

1　罪人であることの実感

理屈では罪ということがわかっていても、自分が罪人であるという実感があまりないのです。ですから、十字架の意味もいまひとつわかりません。「あなたが神から離れて生きてきたこと自

体、もっとも大きな罪ですよ」と言われても、「何だ、自分が生まれついてから、何も悪いことをしていないのに、最初から罪人と言われても心外である」というのが私の本音でした。ですから、礼拝中もみなさん方が、「十字架のみわざで私の罪を赦してくださって感謝します」などと祈っていてもピンときません。礼拝が退屈で退屈で、聖歌を歌うことのみが礼拝の楽しみであったこともあります。それでも、自分の病気を治すにはこれしかないということが十分わかっていたので、懸命に集会に通っていました。そして、聖書を通して自分というものを観察していくうちに、自分の心に良いものが一つもないことが、少しずつわかってきました。それが神から離れ、神に反逆する人間の罪の結果であることも、いつも心の中で人を妬んだり、裁いたり、悪いことばかり考える自分――人間はもともと罪人であることも、わかってきました。

2　主にすべてを明け渡さないこと

聖書には、自分のすべてを百パーセント主に明け渡すべきだという意味のことが書かれていますが、それが恐ろしくてなかなかできません。「そんなことをしたら、この自分というものはどうなってしまうのか。十パーセントぐらい、自分というものをとっておきたいのだ」と真剣に思っていました。するとどうでしょう。結局、すべて自分百パーセントになってしまうことにある日気づきました。やはり、信仰は徹底しなくてはいけないということを学びました。

3　理性で聖書を読むこと

かなり長い期間、聖書を理性で、そして自分の知識に頼って読んでいました。私は物事を理屈で考える習慣がついているうえに、知識があると過信していることもあって、頭で聖書を理解し

ようとするのです。たとえば、「義」という言葉がわからないと辞書を引く、「聖霊」がわからなければまた辞書を引く。そんなことをしても何一つわかりません。

事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。

（Ⅰコリント　1・21）

生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。

（Ⅰコリント　2・14）

聖書というものは、頭で理解するべきものではないようです。イエス・キリストから聖霊をいただいて、その霊による力ではじめて理解できるようになるのです。

試練

薬物依存症という病気になる前から、私は絶えずまわりの人の目を気づかい、人が私をどう見ているかを気にしていた者ですが、退院してから一時それがひどくなりました。電車に乗っても人々が自分を注視しているような気がするのです。そして妄想もでてきます。自分でも、これは病的だと思いましたが、主治医によると、後遺症の一種でもあったようです。集会へ行っても、まわりの方々の目が気になる時があるのです。そのうち、みなさんの行状が気になりはじめまし

た。「クリスチャンのくせにあんなことをやっている」と。

そんなことばかり気にしているうちに、自分の喜びが少しずつなくなっていくのがわかりました。そして一九八六年の秋頃には、とううつ病のような状態になりました。聖書を読んでもみことばが頭に入りません。夜は恐ろしくて眠れません。こうなると考えるのは、また薬を飲むことです。どうにかできるのは、祈ること、そして無理をして集会へ行くことだけでしたが、ちょっとした集会でのお話とメッセージをきっかけに、人ばかり見てイエス・キリストから目を離すという大変な罪を犯している自分に気づきました。

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。

（ピリピ　2・6、7）

イエス・キリストは罪のない、また罪を犯す可能性すらない完全なお方であることが、やっとわかったのです。と同時に、自分はクリスチャンにはなったけれど、相も変わらず罪を犯してしまう駄目人間で、だからこそ完全なお方であるイエス・キリストを見続けていかなければいけないこともわかりました。

その頃、長男の反抗期、勉強拒否という新たな試練が与えられました。

「何で勉強しなくてはいけないのか。よい学校に入って、よい会社に就職して、それでどうな

るのか。今の世の中間違っている」とか、「人間は何のために生きるのか」とまで言い出しましたが、かといって福音に耳を傾けようとはしません。ついに自殺をするのではないかと私たちが心配するまでになりました。このように、ともすればまた高慢になりそうな私を主は放っておかれず、子供に対する親の無力さを通して、さらに訓練なさいました。この子供のことでは、夫婦ともに苦しみました。しかし、主はもっとも適切な時に試練をお与えになることも学びました。

そのような試練にあっても、私たち夫婦には不思議と平安と喜びがあるのです。

私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。

（ヤコブ　1・2）

というみことばが、私ども夫婦にとって現実のものとなってきました。本当に不思議なのですが、苦しい時にも私たちの心の底には平安と喜びがあるのです。心に宿っている聖霊がそうさせてくださるのです。

こういった一つ一つの試練を通して、主が私たち一人一人を愛してくださっていることを実感しました。

訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。

……霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく

思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。（ヘブル　12・7、10、11）

なぜ私は高慢になったか

プライドが高いとか、高慢なことは、自分ではなかなか気づかないものです。他人に指摘されて初めて気づくことが多いようです。いや、他人から指摘されても、自分はそうではないと思う場合のほうが多いかもしれません。

神である主は、人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」（創世記　2・16、17）

さて、神である主が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった。蛇は女に言った。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」女は蛇に言った。「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ』と仰せになりました。」そこで、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようにな

ることを神は知っているのです。」

そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。

（創世記　3・1～6）

ここに、人間の悪（罪）の源がはっきり示されています。アダムとエバは、神から食べてはいけないと言われていた「善悪の知識の木の実」を食べてしまいました。この「善悪の知識の木の実」には深い意味があるのでしょうが、私も、小学校一年から大学院五年まで、二十二年間も「知識」を食べ続けた結果高慢になったことを、聖書を通して知りました。人間が、少しでも他人より偉くなろうとするのは、ここに由来するのです。聖書には次のように記されています。

知識は人を高ぶらせます。

（Ⅰコリント　8・1）

そして、何と蛇は二人に対し、「神のようになれる」と言って誘惑しているのです。何とも魅惑的な言葉です。ですから、私が薬を飲みながら「結局、自分が神ではないか」と思ったのは当然のことだったのです。それは、真理（まこと）の神を知らない人間の愚かさに他なりません。

おわりに

私は以前のように、人の目を気にしながら大学での研究や教育を行うことは止めました。絶え

ず主の方を向いて、主とともにいる生活をしていけば、主がすべてを最善へと導いてくださるという確信が持てたからです。とはいっても、学生とともに実験に励んでいる時など、また昔の「俺が、俺が」という自分に逆戻りし、知らず知らずのうちに前の「高慢な私」になっていることに気づき、ハッとして祈り、悔い改めるといった毎日です。

イエス・キリストという真理を知って、人間世界がどのようなものか見通せるようになりましたが、それよりもまず、自分がどのような人間であるか（実に良いところのまったくない人間であること）を知ったことは、我ながら大きな驚きです。そのような自分だからこそ、イエス・キリストの十字架による赦しが必要であることもわかりました。そして、聖書にある神が、宇宙万物を支配しておられること、それゆえこの世に「偶然」はまったくないことを知ったことは、私の研究にとてつもなく大きなプラスになりました。

最後に、今までのことを振り返ってみると、次のようなことがわかります。私は元来寂しがりやなので、自分以外の何物かに常に依存したかったのです。その対象は次のようなものであり、いずれも私の神、偶像でもあったわけです。

1　仕事という人生の目的
2　仏教という宗教
3　スポーツという快楽
4　情愛という感情

5　睡眠薬という友人

結局自分をも含めて、これらのものすべてに私は裏切られました。なぜなら、これらのものはすべて、人間に属し、人間が造ったものであったからです。人間の造ったものに一時的な満たしはあっても、いずれは必ず裏切られるのです。そして、私が最後に依存したものは、永遠に変ることのないイエス・キリストでした。この方は、まったく罪のない完全な方なのに、私自身の罪のために十字架上で苦しまれて、私に代って犠牲になってくださったのです。この犠牲なしには、現在の私に平安と喜びはありません。聖書はこう言っています。

彼（イエス・キリスト）に信頼する者は、失望させられることがない。（ローマ　10・11）

私が、最後となった四回目の精神病院に自ら飛び込んだのは、「これ以上薬を飲むと死ぬ」という恐怖心からでした。イエス・キリストを心のよりどころとする私たちクリスチャンも、いずれ死んでこの肉体は滅びます。しかし私たちの霊は、もはや悲しみも涙もない天の御国に行って、イエス様と一緒に、絶対的な平安と喜びを持って永遠に生き続けるということが、聖書で約束されています。私たちの本格的な人生は死んでからです。ですから今は、死に対する恐怖はなくなりました。ただし、死ぬ前にあまり苦しむのは、正直言って今でもいやだな、と思いますが。

アダムとエバはエデンというすばらしいところに住んでいましたが、罪を犯したためにそこを追放されました。以来人間はこの地上をさまようことになりましたが、イエス・キリストというお方が神との和解のためにこの世につかわされ、その方が人間に代って犠牲になってくださった

おかげで、私たちは再びすばらしい天の御国へ行けるようになりました。聖書を読むと、天国にはエデンの園にあったような「善悪の知識の木」もなく、罪の問題はもはや存在しないところです。一日も早くイエス様と一緒になりたいものです。イエス様、早く来てください。

悲しみから喜びへ

大塚玲子

静岡県掛川市に生まれる。同市の西山口小、東中、掛川東高を経て文化女子短大卒業後、お父さまの経営する榛葉鉄工所に勤務。一九七〇年二郎さんと結婚。

私は、ベビーブームの年に、静岡県の掛川市で四人姉妹の次女として生まれました。両親が小さな鉄工所を経営している関係でいつも忙しく、また、二歳年下の妹が身体が弱かったため、おばあちゃん子として育てられました。そして、地元の女子高から、東京の平凡な短大へ進学し、卒業しました。



▲軽井沢で母なほさんと二郎さん。
なほさんがイエス・キリストを受け入れた時。



◀1987年5月。薬をやめて3年目の日を記念して。(A・Aバースデー)

その頃、両親の会社は順調に伸びていましたので、私は、精神的にも経済的にも、何不自由なく、十二分に恵まれた生活をしていました。ですから、わがままで、自己中心的で、見栄っ張りの、どうしようもない女の子だったと思います。しかしこんな子でも、親の顔のおかげで、市の青少年のリーダーとして、市や県の行事に参加したり、ボーイスカウトのお手伝いをしたり、いつもちやほやされて過ごしていました。

そして、二十二歳の時、現在の主人とお見合いをしました。その頃の私の回りは男性も女性も同級生ばかりでしたので、七歳も年上の主人を見て、額も広くはげ上っていて、かなりの年令の差を感じました。でも話をしてみると、外見とはまったく違っていて、純粋で、世の中の汚れを知らない素直な子供のような人で、びっくりすると同時に、とても好感がもてました。

また、主人は、私の両親の会社が主人の大好きなオートバイの仕事をしているので、そこの娘ならということもあって、結婚を決心したそうです。主人の母は、私の両親を見て安心したようです。このようにして、話はとんとん拍子に進みました。

婚約中は、彼の運転するオートバイの後ろに乗って、富士のスピードウェイのオートバイのレースを見に行ったりして楽しく過ごしました。そして、両親の会社も順調な中で、周囲からも大変祝福されて、一九七〇年十月四日に結婚しました。

最初の二年間は本当に楽しいことばかりでした。主人は学生時代からサッカーをしており、私は高校の時、ハンドボールをしていまして、二人ともスポーツが大好きでした。日曜日には、よ

くサッカーの国際試合を見に行ったり、主人の関係のサッカー試合の応援に行きました。また、主人は落語が大好きで、寄席にもよく連れて行ってもらいました。しかし、このようにして楽しんでいる間に、結婚する前からあった主人の薬物依存症という病気は、見えないところで少しずつ進行していたのです。

やがて長男が生まれ、その頃から少しずつ、睡眠薬の影響が表面に出てきました。家庭生活や子供のことには関心がなくなり、自分の研究と学生のサッカー部のことに夢中で、家庭はただ生活するためのエネルギーを補う場所にしかすぎなくなりました。

このような生活の中でも、一番悲しかったのは、一九七五年頃のことです。勤めの帰りに、駅で睡眠薬を飲んでくるらしく、家について食事の時になると、ちょうど薬が全身にまわってきて、目がうつろになり、お箸を持っている手もきかなくなり、口からはよだれと共にごはんがこぼれ落ち、見ていられませんでした。そのうちうとうとしだし、くずれるようにしてその場で眠ってしまうのでした。私は、小さい子供を抱えて、このような主人を哀れで見ていられないのを通りこして、憎しみさえわいてきました。それでも何とかしてあげなければと思いましたが、昼間はとても元気で勤めに出かけ、夜になると別人のようになる主人を見てはどうすることもできず、泣いてばかりいました。その頃は、薬物依存症という病気を全く知りませんでした。

結婚当時は、七歳も年上の主人に、すべてリードしてもらうつもりでしたが、このような状態で、家の中のことはもちろん、力仕事、周囲とのつきあい、育児、母の相手など、すべて私がしなければなりませんでした。そんな中で、主人の薬の問題を何とかしなければと、保健所、病院

を走りまわりました。

そして、忘れもしない、一九七九年四月のことです。主人は睡眠薬を多量に飲みすぎて心臓が止まり、すんでの所で死ぬところでした。こうして、精神病院への二回目の入院となりました。この二、三日後に長男の小学校入学式、二日後に次男の幼稚園入園式と、三つのことが重なり、毎日、昼間は笑顔でとびまわり、夜は子供を寝かせつけてから一人で泣いていました。

そして、入院一カ月後、主人の外泊許可が出て迎えに行きましたが、驚いたことに、歩くこともままならず、洋服を脱ぐことも着ることもできなくなっていました。パジャマを着ることも一人ではできず、当時三歳の次男と同じか、もっと悪い状態でした。布団からも起き上がれず、私が手伝ってあげなければ何もできなくなっていました。これはてっきり薬で脳がおかされてしまったのでは、と大変心配いたしました。

それでも、五カ月の入院で身体は日に焼け、外見だけは元気そうになって退院いたしました。私は、そのような主人を見て大変嬉しく思いました。しかし、それもつかの間、また睡眠薬を飲み始め、量も増えていくのです。主人に薬のことを言いますと、すぐ謝って、「もう絶対飲まない」と約束してくれるのですが、体の方が要求するらしく、約束が守られた日は一日もありませんでした。私は、主人が眠っている間に、カバンの中、机の引き出し、戸棚の中、主人が隠しそうな所を捜しまわり、薬を全部捨ててしまいました。次の日、主人が大変怒り、別人のようになって、時には刃物をもってあばれるようになりました。その頃の家計簿を見ましたら、隅に「神様どうか主人を助けてください」と書いてありました。

その頃、幸いにも小平の国立武蔵療養所という精神病院を知り、初めてアルコール薬物専門の病棟に入院することができました。そこで主人共々、私も病気に関する教育を受け、今度は主人もまじめに闘病に取り組んでいましたので、本当に今度は大丈夫と思い、この喜びはとても大きなものでした。退院の時、主治医と相談し、一家で百日マラソンをすることにしました。一月の寒い時でしたが、前の苦しみに比べ、親子で一緒にマラソンできることは、私たちにとってどれだけ大きな喜びであったかわかりません。しかし、この病気は本当に回復し難い、厄介な病気です。主人はまた、隠れて薬を飲み出しました。進行性の病気ですので、前よりももっと悪い状態になり、身体も増々やせ細り、歩く姿は人間ではなく影が歩いているようでした。

また、長男は、事情があって、私立から公立の小学校に転校したのですが、先生方や友達とコミュニケーションがとれず、登校拒否をおこしていました。もう私は、主人のこと、子供のことで身も心もずたずたにされていました。

主人自身もますます苦しくなって、今回は初めて自分から国立武蔵療養所へ再度の入院をお願いしに行きました。一九八三年十二月十三日のことでした。

そこでクリスチャンの看護婦さんの大戸美津子さんと出会い、翌年の二月下旬に染野さんのお宅の家庭集会に、夫婦で出席することになりました。そこで染野さんが同じ病院を二年前に退院されて、元気にしていらっしゃることを知りました。入院中の主人から家庭集会に一緒に出ようと電話があったのですが、私は聖書の話があることなど知らないで出席しました。着きますと、みなさまが笑顔で迎えてくださいました。武井生子さんが横にすわられて、一生懸命聖書の話を

してくださったのですが、私は初対面の方々に囲まれ、大変緊張して何も頭に入りませんでした。

そして数日後、火曜日の学び会に染野待子さん、高橋久美子さんに付き添われるような感じで出席しました。本当にその日のことは忘れることができません。私はただ集会に出るだけだと思いましたが、時間があるとのことで二階に通され、初めて宣教師のベックさんにお会いしました。

ベックさんは、聖書を読んでくださり、それから、イエスさまが、私の身代わりとして十字架について、そこで苦しんで血を流され、長い間神様から離れていた私の罪を赦してくださったことを教えてくださいました。私はひとりでに涙があふれ、ベックさんと一緒に「神様、ありがとうございます」と祈らずにはいられませんでした。

それから、私は日曜日の礼拝、火曜日の婦人の集いが楽しみで、みなさんの証しなどを楽しみにして聞いていました。でもその後のおつきあいがとても苦手で、子供の用事などにかこつけて、学び会が終るとそっとぬけ出してさっさと帰っていました。その頃の私は、学びが終ってからも、みなさん方が楽しそうに昼食をいただきながら、一時間も二時間ものんびりお話されているのが、何とも不思議でなりませんでした。といいますのは、私はもともとせっかちで、家の中にいましても、じっとしているのが嫌いで、何かしていないと落ち着かない性格でした。そして、すぐ結論を出したがる悪い癖がありました。また、主人の母と一緒の生活でしたので、子供の用事や自分の用事で外出する時には、母に「ちょっと出かけてきます」と言いますと、「どこに出かけるの?」「誰と?」「何時に帰るの?」といつも聞かれ、それは当然のことなのですが、そのうちに苦痛になりました。母は明治生まれで、教育熱心な、「日本の母」と言った感じの、すばらしい

人なのですが、私にはできすぎた母でした。

薬を飲んでいた頃の主人は、朝なかなか起きられず、九時半頃出かけては、夕方六時には必ず帰ってきました。そしてすぐ食事ができる状態になっていないと機嫌が悪くなるので、私は、毎日四時過ぎには必ず家にいました。それでその頃の友だちから「大塚さんは、三十分刻みで動いているのね。バタバタと舞い降りて来たと思うと、すぐまたバタバタと飛び去っていく。まるであわただしい小鳥みたいね」と、よく言われました。こんな状態でしたので、自ずと集会からは少し遠ざかっていた時もありました。しかし、三週間位集会に出ないでいますと、むしょうに行きたくなり、ちょうどその頃、何かのメモで、水曜日の聖書の学び会のことを知りました。集会案内には、「聖書の基礎の学び」ということが書いてあったような気がします。私は聖書のことを全く知りませんでしたので「基礎」というところにとても安心感が持てました。すぐに染野待子さんに電話して一緒に行きました。そうしましたら、またびっくりしたのですが、その日の学びの箇所は次の所で私にぴったりのところでした。学び会が終って聖歌を歌っている時、何も知らない、こんな愚かな私にも聖霊が働いていてくださったのかと思うと、涙が出て仕方ありませんでした。

あなたがたは、すべての悪意、すべてのごまかし、いろいろな偽善やねたみ、すべての悪口を捨てて、生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。あなたがたはすでに、主がいつくしみ深い方であることを味わっているのです。（Ⅰペテロ　2・1～3）

イースターに洗礼の機会を与えられました。でも、イエスさまのことを知ってから一カ月半しか経っていませんでしたから、次の機会に延ばそうと思っていた時、夜の学び会でベックさんにお会いしました。ベックさんは、「ご主人と一緒に受洗する事は本当にすばらしいことですよ」と話され、一九八四年四月二十二日のイースターに、入院中の主人と一緒に洗礼を受けました。その時、主人と同じ病院に入院しておられたアルコール依存症の高田雄二さんもご一緒に受洗して、喜びはたとえようもありませんでした。主人と私は、イエス・キリストによって生まれ変わりました。

だれでもキリストのうちにあるなら、そこには新しい創造があります。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。（Ⅱコリント　5・17）

あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――（エペソ　2・4、5）

まさに、霊的に死んでいて、肉体も死の寸前であった主人が、みことばのとおりに、今、生きかえって元気になりました。それからの私たち夫婦は、聖書にもとづいて歩んで行こうと決心しました。

妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。（エペソ　5・22、23）

今は、主人が一家のリーダーとなって、世間並、いや世間よりももっと幸福な夫婦関係がもどってきました。神様のあわれみとめぐみにより、家庭は造りかえられ、本当に幸せな毎日が続きました。

しかし、愚かな私は、時々、神様を第一とする生活をしないで、この世と神様との間を行ったり来たりしているような者でした。神様は、このような私の姿を見て大変悲しまれたことと思います。私自身もいつも次のみことばが気になっていました。

わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。（黙示　3・15）

このように、聖書には中途半端な信仰はいけないと書かれています。

愛そのものであられる神様は、このような私をもお見捨てにならないで、子供の高校受験を通して再び訓練してくださいました。そして、私を少しでもイエス・キリストの恵みにあずからせようとしてくださったのだと思います。

わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。

主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。（ヘブル　12・5～7）

子供は生まれてからずっと、知らず知らずのうちに、主人の病気の影響を受けていたことでしょうし、また、自己愛のかたまりのような私に育てられたのです。これでは問題がおこらないはずがありません。子供が小さい時は、私はかなり溺愛して育てていたと思います。主人は薬に問題があり、あてにならなかったので、私は生活のすべてを子育てにかけていました。幼稚園の頃から、水泳教室、習字、学習塾と子供を振りまわして育て、今思えば、本当に申し訳ないことをしたと思っています。また、主人の母が大変教育熱心で、いつも孫の成績を気にしていました。私は子供のためではなく、自分の見栄のため、また、母の手前子供を立派に育てなければと必死でした。その結果、小学校五、六年頃から、いろいろな問題がでてきました。

中学に入ってからは、時々精神的に不安定になり、親に対する反抗、先生に対しての反抗、そして社会へも反抗するようになりました。最終的には、子供から「大塚家や、親のために生きているのではない。自分の人生だから好きなようにしたい」と言われました。

そして、アナーキストのような思想を持つようになり、生きがいをエレキギターに求め、ロックミュージックに深入りしていきました。点数や偏差値だけが全てであるかのような学校生活に疲れ、現在の学歴社会を激しく非難し、「自分は高校に行かない。中学を卒業したら、アルバイ

トをしながら音楽を通して自分の生き方をアピールしたい」と言う一方で、英国のロックグループのセックスピストルズや日本のラーフィンノーズやブルーハーツのように、テレビに出られるグループを作るんだと、大人の部分と子供の部分が混在したような子供になっていきました。中学二年の時、すべてのものから自由になりたいと言い出しました。その頃まだ習字を習っていまして、先生もすじが良いと期待してくださっていましたがそれもやめ、学習塾もやめ、学校でも全く勉強しなくなってしまいました。授業中は、きらいな科目はいねむりをし、テストは白紙で出す始末です。宿題も出さず、成績は想像がつくと思いますが、ほとんどないに等しい点でびっくりしました。私たち夫婦はどうすることもできず、完全に神様におゆだねするしかありませんでした。みことばと集会のみなさま方と一緒のお祈りしかありませんでした。やがて受験の一カ月位前から、子供が心を開き始め、つい最近できた埼玉県の非常に自由な教育を行っている高校（現在の偏差値教育に反対し、おちこぼれの生徒や登校拒否児を扱っている）と、もう一つ都内の高校で、制服なしのやはり自由な教育をしている高校の二校なら受験すると言い出しました。そして自ら埼玉県の高校はぜひ行きたいと言うのです。私も主人も祈りましたが、なかなか「御心だけがなるように……」とは祈ることができず、「子供がこんなに気に入った所です。みこころにかないましたらどうぞ合格させてください」と自分の思いで祈っていました。結局その高校は閉ざされ、子供も私たちも悲しく、たくさんの涙を流しました。けれどもその時、私は今まで自分がかわいそうで泣いていたことに気づかされました。

「神様、お赦しください。自分のことしか愛せない愚かな私を……」。この時、アブラハムの

ことを思い出しました。

神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」

アブラハムは全焼のいけにえのためのたきぎを取り、それをその子イサクに負わせ、火と刀とを自分の手に取り、ふたりはいっしょに進んで行った。

ふたりは神がアブラハムに告げられた場所に着き、アブラハムはその所に祭壇を築いた。そうしてたきぎを並べ、自分の子イサクを縛り、祭壇の上のたきぎの上に置いた。アブラハムは手を伸ばし、刀を取って自分の子をほふろうとした。

御使いは仰せられた。「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。」

それから主の使いは、再び天からアブラハムを呼んで、仰せられた。「これは主の御告げである。わたしは自分にかけて誓う。あなたが、このことをなし、あなたの子、あなたのひとり子を惜しまなかったから、わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。（創世記 22・2～17）

私たちはとてもアブラハムのようにすることはできません。でも、この時不完全な私たち両親の

思いより、完全なお方におゆだねすれば最善をなしてくださるという確信が与えられました。そして、神さまに子供をささげる思いで、

「神様、どうぞあなた様のみこころだけがなりますように、すべてのことに感謝いたします」と祈れるようになりました。そして子供は、一週間後、二つ目の都内の高校を受験しに行きました。試験の直前は精神的にも不安定で、発熱もありましたが、子供は完全に主に守られて試験を受けることができました。そして合格させていただきました。

わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。（エレミヤ　33・3）

見よ。わたしは、すべての肉なる者の神、主である。わたしにとってできないことが一つでもあろうか。（エレミヤ　32・27）

神様は完全なお方で、みことばの約束のとおり最善をなしてくださいました。

子供は一応高校には合格しましたが、状態は何も変わっていません。相変わらず「神様は目に見えないから信じられない」と主に反抗する者です。しかし聖書には次のような約束があります。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

ですからいつになるかわかりませんが、子供も必ず救っていただけるのです。

肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

（ヘブル　12・10、11）

このようにして私は主の大きな愛を知ることができました。

苦しみに会ったことは、
私にとってしあわせでした。
私はそれであなたのおきてを学びました。
あなたの御口のおしえは、
私にとって幾千の金銀にもまさるものです。

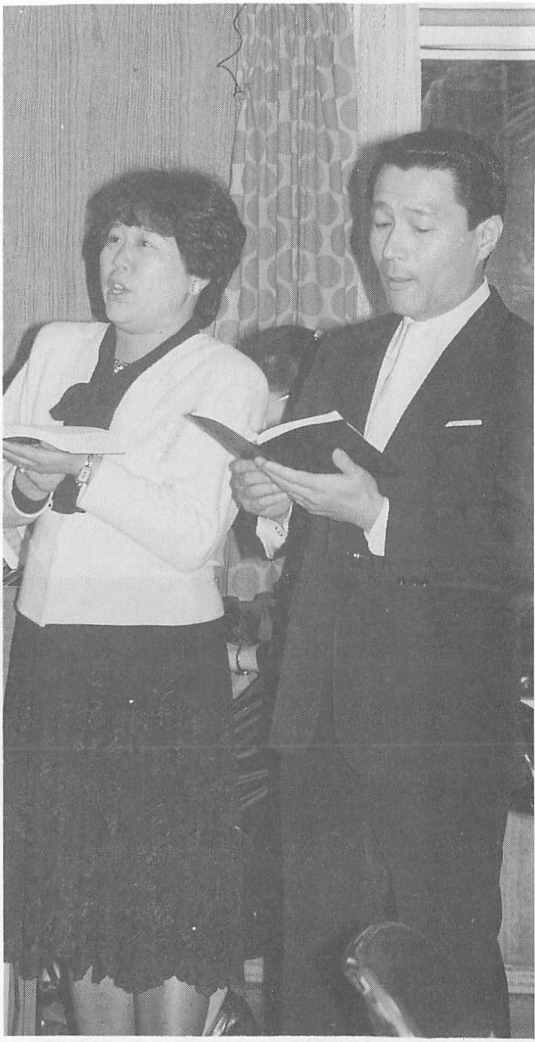
（詩篇　119・71、72）

神様の御名を心から賛美申しあげます。

▼軽井沢バイブルキャンプにて。長男哲史さんと玲子さん。



▼野口修さんとブリギッテ・ベックさんの結婚式で聖歌を賛美する規夫さんと和世子さん。



まもなくかなたの

中西規夫

一九四五年京都市に生まれる。深草小、深草中、堀川音高、東京芸術大学声学科卒業。川崎市立高津高校音楽教諭、神奈川大学合唱団、武蔵大学合唱団常任指揮者を経て一九七七年にセントポーリア音楽院を開校する。家族は妻和世子さん、次男義忠さん、妻の母小林さいさん。趣味は魚つり。

「あなたのお子さんは急性骨髄性白血病です」
医師の低い声でした。私は一瞬にして谷底に落されたような衝撃を全身に感じました。当時、長男康弘はわずか八歳だったのです。
「なにかの間違いではないでしょうか」
「詳しく検査しましたが間違いありません」
私の心臓の鼓動は高まり、医学知識のない私は恐る恐る聞きました。
「先生、本当のことを言ってください。あとどれぐらいもつのでしょうか」
「早ければあと二カ月かも知れません。よくもって二年です」
……長い沈黙が続きました。しばらくの放心状態のあとで、私は気を取り直して先生にお願いしました。
「今の話は妻には絶対話さないでください。妻は今、お腹の中に六カ月の子供がいますので、妻が病気のことを尋ねても言葉を選んでください」
長い闘いの最初の日です。その夜は皆で泣き明かしました。
「絶対奇跡を起こして見せる。子供の病気ぐらい親が治さないでどうする」と次の日から私は立ち上がりました。それは今まで自分が行動を起した時には成功しなかったことが一度もないという過剰なまでの自信でした。
まず、病気のこと、病院ははたしてここが適当なのか、医師は、など色々と調べ、この病気を治された他の病院や医師にも相談しました。そして毎日家の近くのお寺と神社に病気全快の祈願

をし、実家（京都）が信仰する病気の神さまである生駒山の石切神社へもお参りに行きました。康弘の病気は日一日とよくなり、三回目の治療で完全に元の体に戻りました。退院して元気に学校へ行けるようになった時には夢のようでした。私は石切神社のお参りが助けたのだと信じていましたし、その後もお参りを続けました。退院する時に医師から、「再発したら終りです」と言われましたが、そんな言葉も忘れるように、元気な毎日が続き、スポーツ、旅行、魚つりなどの通常の日常生活を送っていました。しかし何をしていてもいつも息子の顔色やようすをうかがうような、不安な毎日です。そして一年半が過ぎ、

「一年半過ぎましたね。もしかして五年延命とか十年延命と言うことも考えられますね」と医師から言われ、また今までに十年たっても再発しない方がおられるというお話を聞き、「この子には奇跡が起るのでは」と希望がわいてきました。

そんなある日、合奏の練習があり、私は指揮棒を振りながらバイオリンを弾いている康弘の方を見ますと、なんとなくだるそうに立って弾いているのに気がつきました。少し熱があるようで、「かぜでも引いたのでは」と少し心配なので翌日病院へ連れて行きました。検査の結果は一年八カ月目の再発でした。「とうとう再発したか」と長い間の疲れがどっと出てきました。医師から、「あとは骨髄移植の道しかないですね」と言われ、さっそく家族全員の血液の検査をしましたが、全員不適合でした。主治医の方も大学病院の八百人ちかくのリストを調べてくださいましたが、適合者なしでした。もうどうすることもできません。しかし私はそれでも諦めず、次は食事療法だとばかりご飯を玄米食に変え体質改善を図り、薬代わりに霊芝を飲ませました。毎晩祈りなが

ら妻と霊芝を削ったことをよく憶えています。

偶像崇拝への道

家の近くの神社やお寺のお参りは一日たりとも欠かしたことはありませんでしたが、ある日よく当たると言う霊能者がいる、と聞いた私はすぐに尋ねて行きました。最初は静岡です。次いで小田原へは妻と妻の姉が毎週行きました。そして最後に出会ったのが大阪の霊能者で、その方は最初に次のように言われました。

「残念ですが康弘くんは亡くなります。全然光が見えません」

「何か助ける方法はないでしょうか」

「少しでも光が見えてくると良いのですが、全然見えません。今日から般若心経のお経を毎日唱えなさい。そして高野山へ三十回お参りをし、先祖供養と病気回復祈願をしなさい。そうすれば光が見えてくるかも知れません」

次の日から毎週日曜日に和歌山県の高野山へ行き、先祖供養と般若心経のお経を唱えながらお百度を踏み、またそこのお坊さんには三百六十五日の毎日の病気回復の護摩だきをしていただきました。その内にお坊さんとも親しくなり、そのお坊さんから、

「ゲルマニウムはよく効くらしいですよ」

と言われ、早速買いに行って毎日浴びるように飲ませたのです。

病気の方は一進一退でしたが二度目の退院ができるようになり、「このままゲルマニウムで治

るのでは」と思っていました。
毎週日曜日の高野山への帰りに霊能者の所に寄るのですが、まだ光は見えてきません。そして言われました。
「一生に一度だけのお願いをする神社が高野山の頂上にあります。そこへ私が案内します」
十二月の吹雪の日でした。膝ぐらいまである雪の山道をお経を唱えながら登り、その神社に、
「どうか康弘を助けてください」と一心に祈りました。しかしゲルマニウムの効果も薄れ、病気は少しづつ悪化し、そろそろ三度目の入院の日が近づいてきました。そんなある日、
「フィリピンへ心霊手術に行きなさい」と言われました。
私はこの子が助かるのなら何でもやる決心をしていましたから、何のためらいもなく妻にフィリピンへついて行ってほしい、と頼みました。医師の反対を押し切ってまで行ったにもかかわらず、十一日間滞在の心霊手術では、何の効果もなく帰ってきました。霊能者は、
「まだ光が見えないのはあなたの祈りが足りないのです。高野山へあと二百回行きなさい」
不可能な数字です。けれども私は一週間高野山のお寺に泊まる事を決心しました。
朝六時から夕方五時まで、お百度を何回も踏みながらお経を二百回以上唱え、即身成仏の弘法大師の前で、中西康弘と書いたろうそくを毎日百本ならべました。私は康弘の命の光を求めて無我夢中です。それでも光は見えません。最後に霊能者が、
「祝詞も一緒に唱えなさい」
奇跡が起ることを信じていた私は、もう何の神様でもよかったので必死で唱えました。

いよいよ三度目の入院です。もう治療法がなく、あとは待つだけでした。私は堪えられず、まだ他に何か方法はないかと探し回りました。ある日友人から電話があり、

「ニュースで聞いたのだけれど、あるモノクロール抗体を使って移植手術をすれば、拒絶反応が少なく、手術の成功率が高いらしいよ」

次の日、新聞を何種類も買い、隅から隅まで調べると、友人の言った記事が載っていました。名古屋の病院です。すぐ病院に電話をかけ、その教授と話をしました。その教授は、

「明日、朝十時に病院へ来てください。詳しくお話を聞きましょう」

すぐに主治医に相談し、その場で今までの病気の経過を全部書いていただきました。そして私の家族の染色体の血液検査表を持って、翌日名古屋の病院へ駆けつけ、教授とお話したのです。

「不適合でも骨髄移植手術ができます。その提供者はお父さんだけです。しかしもう一度緩解状態（この病気の悪い細胞がなくなる状態）にならなければだめです。東京の病院では使用していない薬を使って緩解状態になる確率は20％。そして手術の成功率は５％～10％です」

私は喜びました。「ここまで諦めずに来てよかった。成功率だって０％じゃないんだから」

「しかし不適合で手術をした例は、今までありません。この手術も試験管の実験で不適合でも実施できると確信するところに至ったのです。ですからその点は、お父さんが決心してください」

私は一刻の猶予もできない状態と考え、即座に、「明日連れてきます」と答え、その日の午後、東京の病院で康弘に話しました。

「康くん、名古屋の病院に良い薬があるから明日の朝名古屋へ行くよ」
「うん。わかった」
親を信じきっている子供の言葉でした。
次の日から名古屋の病院生活が始まり、妻は病室に寝泊まりして看病をすることになりました。
そして数日したある日、お知りあいの小川泰徳さんが病室を訪ねて来てくださったのです。その時にテープ（世の光の十六巻）を持って来てくださり、そのテープを毎日康弘が寝る前に聞いていたのだそうです。私も名古屋へ行った時に初めて小川さんにお会いし、その時も祈ってくださいました。私は内心「困ったなあ」と思い、小川さんが帰られた後に康弘に聞きました。
「いやだったら断わってあげてもいいよ」
「いや、来てもらって」
そして次のテープが聞きたいと言うのです。
その日から数日後、小川さんはベックさんを連れて来られました。ベックさんが、
「イエスさまを信じますか」と尋ねたら、
「信じます」
とはっきり答えたそうです。私はこのことは後になるまで知りませんでした。私は相も変わらず自分の力でとか、自分の骨髄がこの子を助けるのだと思い続けていたのです。
病気の方は最初の治療で少し良い方向へ行きかけたと思うと、また少しずつ悪い方向へ進行し、そして最後のお正月が来ました。

「康くん、明けましておめでとう。今年こそ元気に退院しようね」
「うん、そうだね」
「今日は義忠が来る日だよ。何して遊ぼうか」
「うん。そうだ、買物遊びをしようよ」
久し振りに弟が来ることに康弘は喜び、一生懸命に紙のお金を作り、お店屋の準備をしました。午後に弟が来るともう無我夢中で弟と遊んであげていました。楽しい二日間でしたが、弟が帰った後、病気は急速に悪くなりました。そして亡くなる一日前に、もう一度弟に会いたいと言ったので次の日に連れて来たのですが、その時はもう意識がなくなったり戻ったりの状態でした。わかるかどうか不安でしたが、
「康くん！　康くん！」と呼び続けました。
「康くん！　康くん！」すると、
「聞こえているよ」と意識が戻ったのです。
「義くんが来たよ！　わかるか！」
「わかるよ。わかるよ。義！　義！　義！」
弟の名前を何度も呼び、本当にうれしそうでした。辛い最後の別れでした。その後私がベッドのそばで子守歌を歌ってあげると、そのまま眠りこんでしまいました。その少し後にベックさんと小川さんが尋ねて来られ、お二人ともこんなに悪くなっていることをご存知なかったので、本当にびっくりしていらっしゃいました。そしてお二人がお祈りしてくださっている中で昇天する

ことができました。

私と妻とが両手をにぎり、

「康くん、ごめんね、助けられなくて。疲れたでしょう、ゆっくり休んでくださいね。ごめんね。ごめんね」

私の最後の言葉でした。一九八五年一月十八日夜七時五十五分。

その日の深夜、東京へ連れて帰る車の中で私は考えていました。

「この三年八カ月はいったい何だったんだろう。絶対助かると思っていたのに、私の拝み続けた神様はどうして助けてくださらなかったのだろう。もともと助かる病気ではなかったのかなあ。あと六カ月早ければ手術ができたのに、どうして間に合わなかったのだろう。この三年八カ月の行動は何だったんだろう。どうして？　どうして？」

答えのない質問を何度も繰り返していました。

頭の中が空白のまま、京都の実家の浄土真宗でお葬式を挙げました。

後で妻から、康弘が名古屋で小川さんが持って来られたテープを覚えるぐらいに何回も聞き、そしてベックさんにイエスさまを「信じます」とはっきり言ったことを聞かされて驚きました。そのテープのテーマは「新しい命の誕生」でした。大変子供に解りやすく、音楽も全部覚えたそうです。その中に次のような聖書のみことばが入っていました。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやす。（詩篇　103・2、3）

そして、仰せられた。「もし、あなたがあなたの神、主の声に確かに聞き従い、主が正しいと見られることを行ない、またその命令に耳を傾け、そのおきてをことごとく守るなら、わたしはエジプトに下したような病気を何一つあなたの上に下さない。わたしは主、あなたをいやす者である。（出エジプト記　15・26）

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（Ⅰヨハネ　1・9）

その他にもたくさんのみことばが入っています。私は康弘と同じように何度もテープを聞き、涙を止めることができませんでした。康弘はすでにイエスさまを信じて新しいいのちに生まれ変わっていたのです。私が三年八カ月かかって何も光を見つけることができなかったのに、康弘は数日で救い主を見つけ、光をあびていたのです。名古屋へ行ったのも救い主に出会うため、そして三年八カ月の期間も、すべてイエスさまのご計画だったのです。医師の言ったように二年しかもたなければ、康弘はイエスさまにお会いすることがなかったでしょうし、私たちも光を見出すことはなかったでしょう。

もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらない。彼らは永遠に王である。（黙示　22・5）

そしてベックさんとのお話しあいの中で、私を強く信仰の道へ導いた言葉は次の言葉です。

「人間を創造された神はただ一人です」

こんな簡単な真理がなぜ今まで解らなかったのだろうか。私は三年八カ月の間、偶像崇拝をしてきました。人間が作った神様にあやつり人形のように動かされ、暗闇の中をさまよいながら私たちと同じ人間の手で造られた像や建物を拝んでいたのです。いくら光を求めても本当の命の光が見えてくるはずがありません。そして自分の傲慢さで、世の中のことを何でも思い通りにできると思っていた罪深さに気がつきました。もしこの子の病気が治っていたら、私は一生光を見ることができず、地上で羊のようにさまよっていたでしょう。私は康弘を助けようとして反対に助けられたのです。

私たち家族は、康弘によって救われました。

そして私の少しずつの信仰の歩みの中で、吉祥寺集会で記念会をしていただき、その年の十二月に受洗しました。本当に感謝です。

あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。

（ヨハネ　15・16）

私たちを選んでくださったイエスさまに感謝し、神様のご計画で私たちを救いの道へと導いてくださったベックさん、小川さん、また私たちにたくさんの愛をくださった吉祥寺キリスト集会

の皆さまに感謝します。

これからは、まだイエスさまを受け入れていない方のために歌によって主を賛美し、今まで私たちにくださったたくさんの愛をお返ししたいと思っています。また長い間、康弘の看病をしてくれた妻、小さな義忠を世話してくださった小林さいさん、仕事を休んでまで色々と面倒を見てくださった小林千穂子さんに心からお礼の言葉を申しあげます。妻は一番最初の入院の日から、ずっと聖書をベッドのそばに持って来ていました。今考えますと、すべてのこと、すべての解決方法が聖書のみことばに示されていたのです。

イエスさまはもう一つ私たちに大きな愛をくださっていました。それは次男義忠を授けてくださったことです。私が子供が好きなことをよくご存知で、康弘が発病した年に義忠を授けられたのです。私にとってこんな大きな愛はありません。その義忠も大きくなり、朝学校へ行く時に康弘の写真に向って呼びかける声がいつも聞こえてきます。

「お兄ちゃん、行ってきまーす」

我が家には、康弘が完全に蘇っているのです。

まもなくかなたの流れのそばで、楽しく会いましょうまた友達と。神さまのそばのきれいなきれいな川で、みんなで集まる日のああなつかしや。　（聖歌　687）

わたしは主、あなたをいやす者である

中西和世子

一九四六年山口県に生まれる。三才で長野市へ転居。信州大学附属長野小、中学校、県立長野西高、東京芸術大学音楽学部声学科、同大学院オペラ科卒、現在はご主人の規夫さんとセントポーリア音楽学院にて後進を指導。

天国の康弘君

長男康弘が天国に行ってもう四年。闘病生活の三年八カ月より長い月日が過ぎました。いつもは明るい私も、この証しを書くためにペンを手にして、一行書き出すと涙があふれます。悲しくて、悲しくて……でもやがて心の中は静かになり平安が満ちてきます。さらにもう一行と進むと、また口を押さえて号泣します。辛くて辛くて……でも一足先に天国へ行った康くん、その康くんを私たちに預けてくださった神様、ありがとうございます。もうすぐ再会の日が来ます。待ち遠しいです。

一九八一年五月末、家族五人と私のお腹の中の六カ月の次男義忠と、みんなで箱根旅行に出かけました。出がけから少しだるそうな康くんに「今からでも帰った方がいいんじゃない」と心配しましたが、「大丈夫、行きたい」と答えるばかりでした。その夜、高熱を出して救急車で小田原の病院に運ばれました。真夜中の静まり返った山の中に、けたたましいサイレンが鳴り響く音を今でも恐しいほどよく覚えています。その時の診断では風邪ということでした。予定通り二日

泊ってのんびりとしましたが、はた目にもひどく具合の悪そうな康くんでした。帰ってから近くの医院で診察を受けると、風邪とは思えないということで血液検査をし、結果を待つことになりました。なぜか急いだほうがよいのではないかという気がして、翌日検査の結果を待たずに都立清瀬小児病院に行きました。康くんを一目見た医師は、即座に病名が分かったそうです。

急性骨髄性白血病。知らせを受けた時、家庭医学書を開いてみましたが、今いったい何が起きているのか分かりませんでした。その日の内に入院が決まり、夜、身の回りの物を持って行った時には、いったいどんな顔をしたらいいのか心配な私に、康くんはほんとにやさしい笑顔でした。それまで離れて生活したことはありませんでしたので、不安そうに手を振りふとんをかぶってしまった康くんの気持を思うと、病院を出る時は何度も何度も振り返り、身も心も引き裂かれる思いでした。その日から始まった三年八カ月の闘病生活は、ありとあらゆる病気の合併症を引き起しながら、大変に苛酷なものでした。

最初の治療は効果があって、退院後の約一年は、通院治療を続けながらも、元気だった時と同じように学校生活を送ることができました。もしかしたら、という不安の中にも、家族にとって本当に充実した楽しい毎日でした。その夏、康くんと主人は北海道旅行に出かけ、初めて飛行機に乗ったり、ゴルフをしたり、限りなく続く大自然の中を走り回ったりし、最高の想い出をつくることができました。

康くんは本当に頑張りました。その後の再三の入退院にも、いつも笑顔で希望にあふれていました。私は元気で笑っている時の康くんだけを思い出します。康くんは今、本当に天国にいるん

ですから。

見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。

（黙示　21・3、4）

偶像崇拝の嵐

闘病中は、偶像崇拝のただ中でもありました。見るもの聞くもの、何でもかんでも手当り次第、溺れる者はわらをもつかむのたとえそのままに、右往左往して、康くんの病気が治るためなら何でもしようと思いました。ともかく、一刻を争うのです。今自分が何をしているのか、それが正しいのか間違っているのか考えている暇はありません。考えることだって許されない、せっぱつまった気持でした。

にわかに我家に出現した、たんすの上の神棚のような物には、お札やら紙切れの類が所狭しと重なりあい、お経だ、呪文だ、本やら用紙やらの文句を唱えて、ろうそくは消してはいけない、線香は絶やすな、湯飲み十個にはお茶を入れ、コップ三つには牛乳、小さな皿に塩とお米を入れて、その日に開けたお酒を一本、お菓子を三皿、さかきも飾って……。これを毎日新しく取り替えるのは一仕事でした。家の近くから遠方まで、神社仏閣で康くんを取り囲んでしまおうと、お祓いに、お清めに、毎日午前二時にお参りに出かけたり、主人は大阪の、私と姉は小田原の霊能

者の所に通って指示を受けたり、山梨の山奥の坊さんや、甲府の仙人や、親戚総出であちこち手分けして走り回りました。口にする物はすべて、水まで自然食に切り換え、一番好きだった肉類はその後一度も口にすることはありませんでした。小児病院では初めての三食持込みとなり、私は一日中食事を作って、運んでは食べさせ、持ち帰るという生活になりました。晴れた日は食事を持って自転車に乗ると、一回でも多く唱えると効果があるという般若心経を口ずさみながら二、三十分の道のりを行きました。角を曲がって教会の屋根に十字架が見える所に出ると、今度はすばやく、主の祈りに切り換え、通り過ぎるとまたお経に換えました。

ゲルマニウム研究所にも通い、薬などは全部飲んだらとても食事はできないほどたくさんありました。一九八二年十一月にはフィリピンのバギオへ、心霊手術を受けるため十一日間旅行しました。「今行くのでしたら、無事に帰って来られる保証はありませんよ」。主治医は、両親の思うままにしてもらう以外に、もう手の尽くしようがないと思っていられたようでした。無事に帰れたのが不思議な位大変な旅でしたが、北海道と同様に、私との想い出の旅行になりました。

しかし、神を知らなかった当時、あなたがたは本来は神でない神々の奴隷でした。

（ガラテヤ　4・8）

私たちは神からの者であり、全世界は悪い者の支配下にあることを知っています。しかし、神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださったことを知っています。それで私たちは、真実な方に、すなわち神の御子イエス・キリストのうちにいるの

です。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。子どもたちよ。偶像を警戒しなさい。

（Ⅰヨハネ　5・19～21）

わたしがあなたがたを選んだのです

一九八四年九月末、主治医から、「考えられるかぎりのすべての治療をしました。後三カ月だと思います」と言われ、私は宇宙が崩れ落ちるような激しいショックを受けました。しかし、後どの位という言葉は今までに何度も聞かされてきましたし、その度に康くんは頑張りました。まだ残された道は必ずあるに違いないと思いました。ある友人が、ラジオのニュースで聞いたといって、名古屋の病院で、不適合による骨髄移植手術の実験的用意があることを教えてくれました。主人は早速名古屋に行き最後の治療として受けてみようと決心しました。三年四カ月、お世話になった小児病院の先生方、看護婦さんたち、そして共に難病と闘い続けた大勢のお友だちとの別れは康くんにとって辛いことでした。でも静かに話しかける主人の言葉に、「良くなるために行きたい」と答えてくれました。翌日の明け方、主治医、婦長さんに送られて、車いすを押す私は、溢れる涙をどうすることもできませんでした。寝台車に乗って、点滴をしながら、東名高速を走りました。久し振りの外の景色に、私たちは皆、希望を持ってとても楽しい思いでいました。

名大附属病院分院に転院して、始めから二つの大きな問題にぶつかりました。一つは、献血者を、それも病院の指示に従っていつでも提供してくださる方を二、三十人捜さなければならないこと。もう一つは、今まで考えたこともなかった入院治療費のことでした。東京では難病指定に

よって都が全額を支給してくれましたので、何と一カ月数百万円もかかると聞かされた時は、目の前が真暗になりました。主人は名古屋の地図を開き、病院から近い順に大学を尋ね歩き、献血をお願いしました。費用のことは、事務長さんのお取り計いによって、その日の内に東京都との間に提携が結ばれました。すべて、主のご計画に不可能はありませんでした。感謝でした。もちろんこの時、私たちは何も知らなかったのですが。

主の呼びかけ

私は、小、中学生の頃、近くの日曜学校で、お話を聞いたり、賛美歌を歌って、聖句の暗記ができるとカードをいただいたりしていました。また、英語の聖書研究会に通ったこともありました。私に神様のことを最も力強く教えてくださったのは、三村祥子先生でした。一九七六年二月、今までに学んできた声楽の大きな疑問と壁にぶつかって、先生の下に新しい学び場を得ました。初めてお会いした時、先生は「一番大切なのは信仰です。信仰なくして歌も生活もありません」とおっしゃいました。そして、聖書の箴言一章七節を示され、「この意味を良く考えてください」と言われました。

主を恐れることは知識の初めである。愚か者は知恵と訓戒をさげすむ。(箴言　1・7)

私は帰りに本屋に立ち寄り、新旧そろった聖書を買い求めました。先生のお勧めもあって、その頃、セブンスデーアドベンチスト教団の通信聖書講座の学びも始めました。先生は折りに触れ

て、声楽の助けとしても役立つようにと、聖句を聞かせてくださいました。

それればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

（ローマ　5・3～5）

何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。

（Ⅰコリント　10・31）

声楽の訓練そのものも、信仰の助けを必要としました。

その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

（創世記　2・7）

「神様がくださった息を、深い所で暖めて、それを音色と響きに変えて、漂うように聞く人の心をつつむのです。一つ一つ、煉瓦を積むように積み重ね、その求める目標の最高の一点には神様がいらっしゃるのですから、祈りと求めによって進みなさい」。この教えは、今やっと私にも分かるようになってきました。

信仰と歌一筋に八十歳とは思えない情熱をもって教えてくださった先生が、風邪がもとで入院され、数週間で天に召されました。一九八七年五月三日。今でも全く信じられません。主の御再

臨を待ち望みつつ、苦しい息の中で話された最後の言葉は、「純粋な神の愛、神が愛によって人間に送られた賜物のひとつである音楽」だったそうです。「娘の私が言うのも変ですが、母は中西さんのことをとても愛していました」。フルーティストの長女園子さんは、毎年開くリサイタルのプログラムの一ページに、音楽家としての経歴ではなく、神様への感謝の言葉と聖句を書かれています。三村家の皆さんは、私がクリスチャンになること、康くんの病気が守られること、賜物を神様のご用に役立て、賛美に用いられることを祈っていてくださいました。

先生が大切にされた　ジョージ・ラスターの言葉。

「私は祈りながら神様の助けをいただいて歌っています。神様の愛に心打たれ、救われた喜びにあふれて歌っているのです。神様を知らないでどうしてこの歌を歌うことができましょう」

主が来られた

転院から一カ月半が過ぎた十一月十六日、小川泰徳さんという方が、献血を申し出てこられました。突然の来訪にびっくりしましたが、東京から離れて知人のほとんどいない名古屋では訪れる人も二、三人で淋しい所でしたので、とてもうれしいことでした。小川さんは東京の小児病院で康くんと同じ頃入院しておられた方のお知り合いから伝え聞いて訪ねてくださったことを告げられ、リンデさんの「実を結ぶ命」の本と「世の光」のテープを一本、お母さんのためにと持ってきてくださいました。

小川さんを送りながら、病院の玄関まで歩いて行く時、私はとうとう神様がきてくださった、

とうとう神様の方からきてくださったのだと、とてもうれしかったことを鮮やかに覚えています。早速、本の副題の「がんにうち勝った」という所を見て、どんな方法でよくなられたのかしらと捜しました。すぐにそれは私の思っていたような内容とは違うことに気づくと、「がん」という字を目にすることがとても恐ろしくなって、その時その本をしっかりと包みこんでしまいました。

私とは反対に、康くんは毎夜消灯時間がくると、テープを聞いていました。いつの間にか、すっかり覚えて、羽鳥さんの真似をして私に聞かせてくれるようになりました。「お母さん、新しいテープを聞きたいから、小川さんに電話して」というほどに喜んでいました。小川さんは大変びっくりされ、新しいテープを何本か持ってきてくださいましたが、新しいテープを聞く力はもう残っていませんでした。十二月十二日、初めてベックさんが、小川さんと共に訪れてくださいました。ベックさんは康くんに、「イエスさまを信じますか」と尋ねました。康くんは一言、「はい」と答えました。笑顔がとても爽やかでした。

「世の光」の十六番

康くんがいったいどんなテープを聞いていたのか。どうして主を信じる気になったのか。当時私も何度かテープを聞いていましたが、それがどの辺なのか分かりません。康くんの暗記していたフレーズを手掛かりに、一番から二十一番まである「世の光」のテープを順に回してみました。小川さんもその箇所がどこかまでは覚えていらっしゃらず、たまたま手に入ったテープを順番に持ってこられたとのことでした。さがしているうちに、康くんがいつも言っていた通りのフレー

ズが十六番から流れてきた時は、心の底からこみあげてくる懐かしさがありました。主人も私も、そのテープを聞いて驚きました。「すごいね。良かったね。みことばも、聖歌も、お話もたくさん知ってたんだね……」と、主のなさることは本当に素晴しいことを、改めて知らされ、感謝でいっぱいでした。十六番の内容は、「新しいいのちの誕生」、「勇気ある生き方」、「魂の医者」、「いのちのありか」という四つのメッセージと、イエスさまのみことば（聖句）が十二カ所と、歌やオーケストラの演奏でした。始めのみことばは、

あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。

（ヨハネ　15・16）

康くんが初めて耳にした、このみことばは、まさにその時、イエスさまが康くんに愛のみ手をさし出された、イエスさまのみこころそのものでした。偶像崇拝の奴隷となっていた私たちにではなく、幼い康くんに向って、主は静かに、しかし確実に語りかけられました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

（マタイ　11・28）

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主はあなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし……。（詩篇　103・2、3）

親として子供に教えるべきこととして、1．イエスさまが救い主であること。2．十字架にかかってくださったこと。3．よみがえられたこと。4．いつまでもそばにいて守ってくださること。という文章をどこかで読んだことを覚えています。主は、このような方法で、康くんを「はい」と素直に従うことのできる「信仰の人」に、かえてくださいました。

主のご臨在

一九八四年六月、康くんは名古屋へ希望を持って転院しましたが、これが最後の入院となりました。病状が一度も回復せず、治療を受けることはできませんでした。一日として点滴が外れる日もなく、「お母さん、今度退院したらみんなで温泉に行こう。もう体がカチカチになっちゃったよ」と言っていました。その後私はお風呂に入るたびに、康くんに申し訳なくて泣きました。東京では入院していたのが小児病院のため、子供たちの面会は許されていませんでした。名古屋では、遠いため会いたい友だちに来ていただくこともできません。「ここは大人の人ばかりで、子供と話がしたいなあ」とも言っていました。十二月十日、十二歳のお誕生日を二人でお祝いしました。小学校の卒業を控え、一日も早く元気になって、みんなと一緒に卒業式に出たいということを、卒業文集に書いていました。早く友だちに会いたいこと、みんなでぼくを励ましてくれてありがとう、ということも書かれていました。

一九八五年一月十八日、「弟の義くんに会いたい」と言う康くんの所へ、義くんとおばあちゃんとおばの千穂子がかけつけました。最後の力を振り絞るようにして義くんの手を握った康くん

は一言、「かなしい」とつぶやきました。康くんを取り囲む私たち家族の一人一人にとって、それは本当に悲しい一言でした。この日が特別の日になるなどと、私たちは誰も知りませんでした。「光よあれ」の第一集の中に、ベックさんは、「ひとりの人間の人生において、本当に大切なものは、死の直前の三十分前においてなおも重要な意味を持ち続けているものだけです」と書かれています。

主人と私は、言いようもない重い空気に押しつぶされそうになりながら、じっと康くんを見守っていました。なぜかその時、ベックさんと小川さんが入って来られました。「今夜は家庭集会があるため、明日こようと思っていたのですが」と言われましたが、お二人が来られたことは、正しく「奇蹟」でした。静かにやさしく「康弘」と呼びかけるベックさんに、私は夢中で、「康弘に洗礼を受けさせてください」と叫ぶようにお願いしました。ベックさんは「それは必要ありません。康弘はすでにイエスさまを信じているのですから」とおっしゃいましたが、私は良く意味が分からず不安でした。

主があなたとともにおられる。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。恐れてはならない。おののいてはならない。

（申命　31・8）

その時、信仰と言えるほどの何もない私にさえ、主がこの場にいてくださると思わずにはいられませんでした。ベックさんからお祈りの言葉をいただいて、暗記していた康くんは、イエスさまがいつも一緒にいてくださることを、きっと疑うことなく知っていたと思います。

康くんは、七時五十五分、天に召されました。主は、康くんをしっかり抱き締めてくださいました。

吉祥寺キリスト集会に導かれて

主人の実家の方法で、葬儀は行なわれました。康くんのお友だちも、先生もみんなきてくださいました。ベックさんや小川さんご夫妻が何度か訪れてくださり、集会で記念会をしていただくことになりました。前日、初めて集会所を見せていただき、ベックさんとお話する機会をいただきました。当日は初めてお会いする大勢の集会のみなさま、そして、歌やお祈り、メッセージと、不思議な新しいことばかりでした。会の後のお話の時に、主にある康弘「兄」と言う耳なれない言葉に、「幼い康弘は弟ではないのですか」と聞きますと、「信仰においては、やはり康弘兄です」と言われた野口広教授の謙遜なお人柄に、心打たれる思いでした。

四十九日のお経をあげるためこられたお坊さんに、康くんが信じた神様に私たちも従って行きたいということを主人が話しました。お坊さんは、「分かりました」と仏壇の中の本尊なるものを引き取ってくださり、帰られました。

記念会の中で、小川さんは康くんについて、こう語られました。

「二カ月ほどの交わりでしたが、康弘くんは、初めて触れた唯一の真の神を直感的に悟り、主をまっすぐに見つめて、全てを委ね祈るという態度を見せてくれました。にっこり笑って、『こんにちは』と言った後はほとんど口数の少ない康くんでしたが、ただ主にある兄弟として

一緒にいるというだけで充分であり、その時を通して、主の恵みと力を、私にも与えてくれました。主の配慮で救いのための完全な時と場所を与えてくださり、人間の力の小ささ、神の力の偉大さを知りました。今、康弘くんは病気や苦しみからすっかり解き放され、天のみ国で憩っています。

イエスさまは、『康弘くん、よく頑張ったね』と涙を流されていますよ」

また、ベックさんは、言われました。

「どうして、なぜと聞かないことが信仰です。康弘くんは病気で死んだのではなく、それが神の時だったのです。たとえ、病気がいやされても、人は必ず死にます。イエスさまを救い主と信じた康弘くんは、一秒もかかることなく、真っ直ぐ、天国に引き上げられたのです」

天国からのメッセージ

天国での再会を知り、一日も早く洗礼を受けたいと願う私と、もう少し時間が欲しいと言う主人の間に、今まで同じ目的のため戦ってきた時とは違う、一致の無い日々が続きました。主人は常にやさしい思いやりを持って、自己中心的激情型の私を許し続けてくれました。私は何でも自分の思い通りにして、何かあると決まって謝るのは主人でした。聖書も私なりに理解しようと頑張る毎日ですが、心が打ち砕かれたことのない私に、主のみこころが分かろうはずもありません。小川さんの奥様は、「理解しようとしてではなく、みたまに触れたいと思って読むといいですよ」と助けてくださいました。

「聖書を読みかえしなさい。神の御心や御思いが知れないで絶望しないでください。注解書がなくても祈っては読み、読んでは祈りなさい。神から得る少しは、人から得るたくさんにまさる。また人からのものは不確実で度々人に曲げられている。しかし神からのものは定まっている。私たちが神から得るものほどよく心に留まるものはない」（ジョン・バンヤン）

いつまでもこの世の悲しみから抜け出せない私たちに、康くんは夢を通して語りかけてくれました。五月のある日曜日の明け方、私は初めて康くんの夢を見ました。いつも座っていた椅子に、私と向いあっているのです。目もくらむほどの光の中で、白い服を着た康くんは、懐しい笑顔で語りかけてきました。「お母さん、ぼくはこんなに元気になったんだよ。ぼくのために祈ってくれた人たちに会いに行きたい。お母さん一緒に行こう…」私は本当にびっくりして、目を覚ましました。

その二日後の火曜日の明け方、主人も康くんの夢を見ました。「お父さん早く起きないと集会に遅れるよ。そうだ、ぼくも一緒に行こう」主人も驚いて起きあがったそうです。

康くんは、なぜか、どうしてかは分かりませんが、集会のことも、そこで主にあるみなさんが祈られていることも知っているのです。私は本当にうれしくて、うれしくて、天国の確信を得ることができました。

家族みんなで

一九八五年十二月二十二日。集会のクリスマス会の日に、家族そろって受洗の喜びにあずかり

ました。天国の康弘くんが一番喜んでくれて、天のみ使いと共に、喜びの声をあげてくれたことでしょう。またこの日から、賛美のご用で聖歌を歌うというお役目も勤めさせていただき、主を讃えることのできる恵みをいただきました。

詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい。（エペソ　5・19）

主の十字架が分からない私に、イエスさまがきてくださいました。

イエスはご自分で十字架を負って、「どくろの地」という場所に出て行かれた。（ヨハネ　19・17）

イエスさまは十字架を負われて、私の前を通られました。悲しいみ顔が、私をじっと見ていらっしゃいました。それは私の十字架でした。

だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。（マタイ　16・24、25）

義忠くんのこと

ずっとひとりっ子だった康くんに、九つ違いの弟ができました。今、義忠くんはこの世ではひと

りっ子になってしまいましたが、お兄ちゃんが大好きです。

生まれる前から、家族の目と心が、お兄ちゃんに向っていた中で、義くんは愛情を一身に受けることもできず、三才になっても話すことができませんでした。精神も不安定で、心の中ではいつも「お母さーん」と助けを呼んでいたのではないかと思います。康くんが生まれるとき、忙しい私のために康くんの世話をしてくれるために我家にきてくれたおばあちゃんは、今度はその愛する康くんの病気を心配しながら、また十年前のように、義くんの世話をしてくれました。姉の千穂子も、弟の竜一郎も、仕事の合い間に、叫んで走り回るだけしかできない義くんのために何かと助けて、支えてくれました。私も決して忘れませんが、義くんにもずっとこのことを覚えていて欲しいと思います。三年前、義くんは、「お母さん、お兄ちゃんいつ帰ってくるの。天国は遠いから帰ってこられないのかな。そうだ、ぼくとお母さんで天国に行けばいいんだ」と言いました。その義くんは今、小学一年生。ベッドに座って必ずお祈りして、テープを聞いて寝ます。お兄ちゃんの聞いた「世の光」のテープを聞いていると、

「義くんにはむずかしいから分からないでしょ」

「お母さん分かるよ。ぼくね、イエスさまに会ったことあるんだ。真剣な顔してたよ。でもねイエスさまはほんとにぼくのために死んだの。それほんと。きっとぼくの心のためだね」

こんなに小さいのに、イエスさまと一緒だなんて、ほんとにすごい恵みです。

今、私たち家族は

私たちは、毎日康くんが一緒にいることが感じられます。そしてそれがとても自然に感じられるのです。私たちの心にある康くんは、もう、高校生です。康くんは、その小さな体に重い十字架を負って、その小さな体全部で、主のご栄光をあらわして、私たちにイエスさまを教えてくれました。康くん、ありがとう。もうすぐ会えます。楽しみです。

わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです。

（ヨハネ　15・11）

今の私たちの気持そのものを書いてくださったメッセージがありました。

「病気ばかりしている人があります。障害者の子供を持った親があります。愛する家族に死なれた人があります。この世では、生きる喜びなど、絶対にないと思われる人が、沢山あります。生きる喜びがあるとするならば、それは自分にとっての価値や利益であるのは、当然のことです。しかし、この世での喜びなど、あるとも思えぬ身の上でありながら、喜んで生きている人があります。キリストを信じている人々です。彼らにとっては、何が喜びなのでしょう。それは、イエスさまが、いつも共にいてくださること、それが喜びなのです。その喜びこそこの世の何事によっても奪われない喜びなのです」

（金田福一著「十字架の愛」より）

わたしは主、あなたをいやす者である。

（出エジプト　15・26）

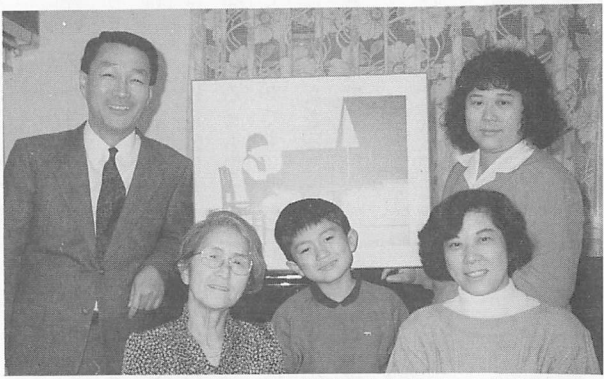
みことばのお約束の通り、主は康くんの心と体を、私たち家族ひとりひとりの心を、完全にいやしてくださいました。イエスさまのみこころに、いつも「はい」と従える者としてください。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

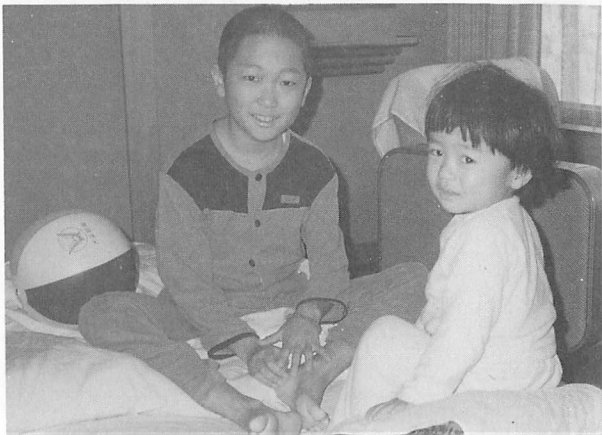
（使徒　16・31）



▲1985年2月、康弘さんの記念式。



▲ご家族揃って。左から規夫さん、小林さいさん、義忠さん、小林千穂子さん、和世子さん。



▶家族揃っての熱海旅行で、康弘さんと義忠さん。

主は愛の神



▲西軽井沢のベックさん宅でのクリスマスパーティー。



▲母けいさんが主を受け入れた日に。左から和子さん、古川けいさん、長女鮎子さん。



◀ベックさんの四女ブリギッテさんの結婚式。母娘揃って和服を着て。

上野和子

一九二七年東京都に生まれる。愛日小、女子学院、山脇美術専門学院を卒業後、お兄さんの友人だったご主人と結婚。家族は夫松夫さん、母けいさん、長女鮎子さん。趣味は手芸、読書。

星野富弘さんのこと

一九八一年の春、私は通院していた病院の書店で、大変美しい一冊の詩画集を見つけました。その本には、一ページごとにさまざまな花が優しく温かく描かれており、花の絵の上には心を打つ短い詩が載っていました。だんだんと本を読んでいくにつれて、著者の星野富弘さんが、体育の教師として赴任して二カ月目に、クラブ活動の指導中の事故で首から下のいっさいの自由を失い、輸血を受けながら何度も大手術を受けて生命を取りとめ、イエスさまを信じるようになったこと、そして努力に努力を重ねて、口にくわえた筆で、五体満足だった時には一度も描いたことのない、こんなに美しい絵を描くようになったことがわかりました。その時の驚きと感動は言葉で言い表わすことができません。病院の待合室で本を見ながら涙があふれました。

それと同時に、私の胸中にいつからかくすぶっていたある疑問が押えようもなく大きく広がっていくのを感じました。私は一九六三年に洗礼を受けて以来その時まで二十数年間「ものみの塔協会」（エホバの証人）に属していました。「ものみの塔協会」では、いっさいの輸血を禁じています。しかし、今見ているこの美しい本を描いた星野さんは、普通なら失意のどん底にあってもおかしくないほどの試練を受けながら、見る人の心に大きな慰めとなる美しい絵を描き、今まで気がつかなかった草や花の美しさ、人の愛や神のみわざに対する目が開かれて、現在おかれている自分の状態を素直に感謝しているのです。これが神様の祝福でなくて何でしょう。輸血を受けて生命を取りとめ、日々主のご栄光を現わしている星野さんを、神様がお喜びにならないはずがありません。それならば、何が何でも輸血を禁じる教えはどこかおかしいのではないかしら、と

思いました。

このことがあってから少し後、エホバの証人を両親に持つ一人の小学生が事故に遭い、大学病院に運ばれましたが、輸血を勧める医師の説得に両親がどうしても応じないという報道が、新聞やテレビを通して行われました。この少年はついに輸血を受けられぬまま亡くなりました。もちろん輸血をすれば必ず助かると決まっていたわけではありません。でも、エホバの証人は死んでも天国に行く希望がありません。死ぬと人は皆墓に行くと教えられます。そのことはこれから死んでいこうとしている人にとって、どんなに恐ろしいことでしょうか。「ハルマゲドン」という、神とサタンとの地上における最後の大戦争が神の勝利に終って、神による新しい世が来た時、墓にいる人々が肉体を持ってこの地上に蘇って来ると教えられているエホバの証人の信者にとって、ハルマゲドンを生きて通過することが何よりの願いなのに、その前に死んで墓に行くことは、いくら将来復活する望みがあるといっても決して嬉しいことではありません。子供でも小学生になれば家庭勉強や集会での勉強でこれらのことを教えられますから、その少年もやはり死ぬことはどんなにか恐ろしく、生きていたいと強く願ったのではないでしょうか。

同じ頃、永年親しくおつきあいして来た年配のエホバの証人のご婦人が、がんになられました。この方は、エホバの証人の中で目ざましい活躍をしたわけではありませんでしたが、大変優しい方で、主人の強い反対を受けていた私や娘のことをいつもお心にかけてくださり、折にふれていたわってくださった数少ない親しい方でしたから、何度かお見舞いにうかがいました。それは今思い出しても心が痛む情景でした。病室には、平安、希望、喜びはまったくありませんでした。

「天地の創造主なる聖書の神エホバ」が私たちの神のはずでしたが、その場にはエホバ神の存在はまったく感じられませんでした。それは不思議なことに、救いのない、暗く悲痛な雰囲気でした。沈みきった心で家に帰り、あらためていろいろなことを考えていると、数年前、エホバの証人のご婦人がやはりがんで亡くなった時のことが思い出されました。その方は、毎月百時間の伝道奉仕を何年間も続け、たくさんの人をエホバの証人に導いて、円熟した働き手として周囲の誰からも大変尊敬されていた方でしたが、がんになり、もう治る見込みがないとわかった時、つきそっていた方々が驚くほど取り乱されたとうかがって、当時私はずいぶん驚いたものでした。

「何かおかしいのではないかしら。救い主はいったいどこにいらっしゃるのだろう」。私は深く考え込みました。

そうです。まだ十代の頃、私にも、イエスさまをすぐ身近に感じ、死の陰の谷を歩みながらも、恐れることなく喜んで生きていた日々がありました。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。

（詩篇　23・1～4）

真の神様との出会い

私が初めて聖書と出会ったのは、旧制高等女学校の一年生の時のことです。学校がミッショ

ン・スクールでしたから、毎朝チャペルで礼拝があり、週に一時間は聖書の講義を受けていました。けれども、一九四一年、私が二年生の十二月八日に日本軍が真珠湾攻撃を決行し、太平洋戦争が始まりましたので、戦争にばかり目が向いていて、聖書の授業も上の空で、神様についてはほとんど何も知りませんでした。

女学校生活も、四年、五年の頃は、学校で授業を受けるよりも勤労動員先で働くことが多くなり、B―29の空襲もほとんど毎夜のことになりました。夜も洋服を着たままで眠り、空襲警報が鳴ると枕元の救急袋をつかみ、防空ずきんをかぶって避難する毎日でした。東京の街は厳しい燈火管制下にあり、真っ黒い街並の上に満天の星が何事もないように美しくまたたいていました。今私が見ているこの星の光は何億光年も昔のものかもしれない。この宇宙の広大さに比べて何と自分の存在の小さいことか。私は砂浜の砂の一粒よりも、もっと小さい存在ではないのか。空襲の合間に、生まれて初めて人間とは、自分とは何者なのだろうかと考えたその時、私は自分でも気づかぬうちに、神様のみ手の中にあったのでした。

あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。

（詩篇　8・3、4）

空襲で二度も被災し、無理がたたって疎開先で結核にかかっていた私は、一九四五年八月の終戦を迎えると間もなく療養所に入りました。その頃、療養所では内村鑑三の唱えた無教会クリス

チャンのグループが熱心に伝道活動をしており、私も毎日一時間ずつ聖書の個人勉強をしていただくようになりました。この時初めて、私たちが神と仰ぐ方は、天地万物の創造主で聖書の神以外にはいらっしゃらないことを知りました。

最初の人間アダムとエバの時代から、私たちは神様に背き続け、罪を重ねて来ましたのに、神様はすべての人が救われることをお望みになり、御子イエスさまを人としてこの世にお遣わしになったことや、イエスさまが十字架の上で流された血潮によって私たちは清められ、自分の罪を悔い改めた者は誰でも救われて永遠にイエスさまとともに天国で生きる希望ができたことなど、すべてのことを心から信じることができました。

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。（エレミヤ　15・16）

当時の療養所は、医師は足りず薬はなく、食事もおよそ病人が食べられるようなものは出されませんでしたから、患者さんはバタバタと亡くなっていきました。患者さんの多くは、私と同様に戦時中の勤労動員などの無理から発病した若い方々でしたから、「死ぬのは怖い、死ぬのは嫌だ」と言いながら亡くなっていくのを見るのはつらいことでした。

そんな中で見送った無教会クリスチャンの年若いお嬢さんのことは、深い感銘とともに私の心に焼きつきました。何の設備もない殺風景な病室の粗末なベッドの上で、見取る肉親もなく、もう食物の通らなくなった喉を潤す一杯のジュースやお茶さえなく、私たち数人の無教会クリスチ

ャンの歌う賛美歌に送られて、結婚式に臨む花嫁のように顔を輝かせて昇天した、あのお嬢さんの病室には、確かにイエスさまがともにおられました。私もまだ十代でしたし、一緒に見送ったお友だちも若い人が多く、死はすぐ身近にありましたが、イエスさまの救いを確信していましたから、今度見送られるのが自分かもしれないと思っても死を恐れている人は誰もいませんでした。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」

（ヨハネ　11・25）

初めて知った福音の喜びと、毎日母が運んでくれた豊富な食料のおかげで、私はすっかり元気になりました。

迷い出ていた日々

やがて私は専門学校を卒業し、兄の友人であった現在の主人と結婚しました。主人は優秀な営業マンで大変仕事熱心でしたが、飲み歩くことも大好きで、帰宅時間は午前様、無断外泊も当たりまえでした。月給は飲み代になってしまうので渡してもらえず、主人の父への送金もありましたから、経済的にずいぶん苦労しました。

主人は、福音にはまったく無関心でした。また無教会というのは文字通り教会を持たず、在来の教会に対しては非常にきびしい批判をいつも聞かされておりましたので、近くの教会に行く気にもなれず、クリスチャンの方とおつきあいする機会もなく、一人で聖書を読んでお祈りする毎

日でした。また、主人の転勤にともない、次々に社宅を変わらなければなりませんでしたから、引越しが多く、子供もいない私には、お友だちを作る暇もない寂しい日々でした。

そんなある日、一人のご婦人の訪問を受けました。それがエホバの証人のHさんとの出会いでした。Hさんは私と同年配の、上品で感じの良い方でしたし、あらゆる宗派に属さず聖書を学ぶというお話は、私にはとても嬉しく思えましたから、無料で毎週一時間聖書の勉強をしに来てくださるという申し出を喜んでお受けしました。

Hさんは最初の印象通りとても良い方で、お話も楽しかったのですが、エホバの証人の聖書勉強は私が考えていたように聖書そのものを学ぶのではなく、「ものみの塔協会」の出版する本を、一ページごとについている質問の答えを本文の中から見つけながら読んでいく、という形で進められるので、結局こちらの考える余地はなく、決まった答えに誘導されてしまいます。最初はそのことに納得できず、「これはおかしい」とか「違うのではありませんか」とか一々反論しておりました。けれどもHさんは嫌な顔一つなさらず、「私にはわからないので調べてきます」と言って帰られると、次の週にはにこにこと笑顔で、「長老にお聞きしてきました」と、実に上手に説明してくださるのです。Hさんの根気とお人柄にひかれて、私はだんだんエホバの証人の方にかたむいていきました。

ある人が来て、私たちの宣べ伝えなかった別のイエスを宣べ伝えたり、あるいはあなたがたが、前に受けたことのない異なった霊を受けたり、受け入れたことのない異なった福音を受け入れたりするときも、あなたがたはみごとにこらえているからです。

（Ⅱコリント　11・4）

初代コリントの教会の人々が何ものにも惑わされず、みごとにこらえたのにひきかえ、私は今まで受け入れたことのない異った福音に耳を貸し、初めに学んだ聖書の神と同じ道と信じて、間違った道を歩き始めておりました。

人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。

（箴言　14・12）

「エホバ神」こそ聖書に書かれている天地万物を創造した唯一の真の神であると信じて、厳しい組織の教えを守り、断固として反対する主人と対立してまで伝道に行き、集会に通い、組織の出版する膨大な量の本を勉強してきたこの二十年の信仰生活は、喜びも祝福もなく、本当に労苦しても報いのないものでした。どんなに懸命に頑張っても頑張っても、さらに努力することを要求され、心が休まる時はありませんでした。

また神のご臨在も感じられず、いつも一人ぼっちのような気持ちでした。そのような毎日の中で、ふと、「何か違うのではないかしら。聖書の神は愛だと信じていたのに、愛されている実感のないこの寂しさは何だろう」と思うことがありました。けれども私は、愚かにも、自分の祈っている対象が、いつの間にか偶像にすり換わっていたことにまったく気づきませんでした。

再び光の中へ

輸血拒否で亡くなった少年のご両親が、心を傷めるようすもなく、それどころか「自分たちは正しいことをしたのだ」と何のためらいもなく言い切って、喜んで伝道活動をしているとHさんからうかがった時、私は決定的に「違う！」と感じました。愛の神が、そのようなことを喜ばれるとは、私にはどうしても信じられませんでした。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。

（イザヤ　43・4）

この頃私は体も弱っておりましたので、集会に出ることもなく、また家を新築して引越したことでもあり、エホバの証人の方とのおつきあいはほとんどなくなり、時々Hさんがお電話をくださる外は孤立しておりました。

そんな時、女学校時代の親友から、自宅で聖書の学びがあるからいらっしゃいというお誘いがありました。私はもうすっかりエホバの証人には失望していましたし、彼女はクリスチャン・ホームに育ち、お父様も伯父様も高名な無教会クリスチャンで、私にとって心おきなくイエスさまの話のできる唯一の友人でしたので、私は喜んで出かけて行きました。そこで彼女の幼な友だちである吉祥寺キリスト集会の重田さんの聖書のお話をお聞きし、「光よあれ」の第一集をお借りしたのです。一気に終りまで読み、もう一度読み返しました。「この集会には主が生きて働いておられる」と感じました。わけても、軽井沢バイブルキャンプの楽しそうなようすに惹かれ、

ぜひ娘を参加させたいと思いました。

私の度重なる入院のため、娘には小学生時代から、精神的にも家事労働の面でも大きな負担をかけてきました。その上、長いエホバの証人の生活の中で、娘にもエホバの証人のきびしい律法による教育をし、助けを求めるべき真の神に導くどころかどんなに祈ってもむなしい偶像を教えていました。いつも自分自身の重荷に喘いでいた私は、娘の心がどんなに傷ついていたか、思いやったり労わったりする余裕すらありませんでした。

娘は一人で悩み、その解決を求めて幼い頃から優しくしていただいていたHさんを頼って、「エホバの証人」になろうとしていました。しかしそこに救いがないことは、長い間のエホバの証人の生活を通して、私にははっきりわかっていました。私は証しの本をお借りした重田さんにお願いして、一九八六年五月、吉祥寺キリスト集会に娘と二人案内していただいたのでした。

初めての礼拝で、次々に祈られる集会のみなさまの心からの主への賛美と感謝を聞きながら、その場に主がいらっしゃることを感じ、嬉しさがこみ上げました。その年の六月、娘が一番始めにベックさんとお話する機会を与えられ、救われました。次に、初めて参加した七月のキャンプで、ベックさんとお話した主人が救われました。実に結婚してから四十年近く願い続けた主人の救いを、主は一瞬のうちに行われました。その知らせを聞いた時、ひざが震え、息がつまりました。人目がなかったら、その場にひれ伏して感謝したいと思いました。

その年の十一月一日、この日は私の誕生日ですが、ベックさんに悔い改めのお祈りをしていただいて、長い間の私の間違った信仰と歩みを悔い改め、私も救われました。

あなたは、私のいのちを死から、まことに私の足を、つまずきから、救い出してくださいました。それは、私が、いのちの光のうちに、神の御前を歩むためでした。

（詩篇　56・13）

そして翌年の春、八十七歳の母がベックさんとお祈りする機会を与えられ、救われました。驚くべきことに、わずか十カ月の間に、私たち家族四人は皆救われたのです。主の大いなる愛と憐れみの賜物でした。

救われたとはいっても、私たちのその後の歩みは決して平坦なものではありませんでした。娘は、キャンプや集会でみなさんと一緒にいる時には元気でしたが、家に帰ると元気がなくなり、相変わらず悩んでいるようでした。私はどうしたらよいかわからず、途方に暮れることも度々ありましたが、いつも主は助けの手をさしのべてくださいました。

中でも、ベックさんご夫妻の信仰生活を通して、すべての解決は主にしかないことや、主に近づくのを妨げるものに対しては一歩も退かずに戦う姿勢を学ぶことができたことは、本当に大きな主からの祝福でした。

私たち家族は、今では主に従う者として、それぞれの試練を受けています。これは私たちが主のみもとに呼んでいただく時まで続くことでしょう。私たちは今では、同じ主を仰ぐ者として同じ土台に立ち、聖書のみことばという共通の言葉を持っています。また二十年間を越えるエホバ

の証人の生活の中で、むなしい偶像を礼拝していた時には味わうことのできなかった大きな祝福に包まれて、やがてともにイエスさまのみもとに行くという嬉しい希望も持っています。そして何よりもすばらしいことに、主とともにあって、喜んで生きています。娘もすっかり元気になって、毎日嬉しそうに会社に出かけています。神様が私たち一人一人を愛していてくださり、惜しみなくすべてを与えてくださると身をもって知った今、感謝でいっぱいです。

ことばに表わせないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。（Ⅱコリント　9・15）

笹川さんのこと

一九八七年六月、私は持病だった腸がとうとう詰まって入院した大学病院の消化器外科で、同じ吉祥寺キリスト集会の笹川さんとご一緒になりました。入院して三週間ほど過ぎた頃、腸の手術を数日後にひかえて、同室の方々に「光よあれ」と「実を結ぶ命」の本をお配りしていた時、病棟づきの看護助手のおばさんから、「その本、笹川さんのところで見たわ」と言われ、飛び上りそうにビックリしました。笹川さんが同じ病院の、しかも同じ病棟に入院していらっしゃることを少しも知りませんでした。まだ三十代の若さでありながら、消化器系のがんに冒され、回復の望みのないお体で沖縄の伝道旅行に同行なさったり、軽井沢のキャンプで証しをなさったりと、常識では到底考えられない活躍をしておられる笹川さんのお噂は、かねがねお聞きしていました。慌て者の私は年がいもなくガウンも羽織らず、ゆっくり歩いても一分で行ける笹川さんの病室にとんで行きました。

笹川さんは、六人部屋の窓に面したベッドに、ベッドの背をぐっと高く起こして座っておられました。いきなりパジャマ姿のおかしなおばさんが、面会時間でもない時に飛び込んできたのですから、笹川さんはさぞびっくりなさったことでしょう。それでも、「吉祥寺キリスト集会の上野です」と名乗った私に、関西なまりのかすれた声で、身近に同じ集会の人が入院してきて嬉しいと言ってくださいました。熱で充血した目や、喘ぎながら話される声に、笹川さんの病状が進んでいることが感じられました。

それから私が退院するまでの一カ月ほどの間に、何度か笹川さんとお話しをする機会がありました。同じ病棟の患者同士は便利なもので、面会時間に関係なく午前中でも夜でも訪問しあうことができるので、笹川さんも体調の良い時に、二、三度ガラガラと点滴台を引きずりながら私の病室まで訪ねてくださいました。中でも、私が手術を受けて五日ほど経ったある日の夜、術後でまだ個室にいた私を訪ねてくださった時は、ゆっくりとご自分の生い立ちから、がんだとわかった時の驚き、そしてイエスさまに救われた喜びを語られ、「自分はボロ雑巾のような者だけれど、主を知った喜びを一人でも多くの人に証ししたい」と言われました。そして、自分の病気が回復の見込みがないとわかってから、家族そろって沖縄旅行に行きたいと祈ったこと、軽井沢のキャンプで証しをしたいと祈ったこと、同じ集会の人が身近に入院するように祈ったこと、またそれらの祈りがすべてかなえられたことなどを、子供のように嬉しそうに話されました。この頃はよく高熱が出て、冷たいものが欲しくなるけれど食べても戻してしまうことなどもいろいろ話していかれました。病気との長く苦しい闘いに、身体はすっかり衰えていらっしゃるようでしたが、

心は決して病気に負けてはいらっしゃいませんでした。私には、イエスさまの愛がすっぽり笹川さんを包んでいるように見えました。

私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。

私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。（Ⅱコリント　4・16～18）

私の退院が目前となった日曜日、病院の売店でパンと葡萄ジュースを買ってきて、笹川さんのベッドの横で、笹川さんご夫妻と私で三人だけの礼拝をしました。同室の方のおじゃまにならないように、小さな声で聖歌を歌い、笹川さんが感謝のお祈りをしてくださり、笹川夫人と私が短い聖句を読みました。小さな礼拝でしたが、そこにイエスさまがいらっしゃることを感じました。

私が退院して二カ月余り後、笹川さんが召されたことを御代田の地で知りました。今はイエスさまのおそばでゆっくりと寛いでおられることでしょう。

主のなさることに偶然はありません。私がこの時期に入院して手術を受け、短い間でしたが笹川さんとご一緒になれたのも、みんな主のご計画であり、この祝福を心から感謝しています。

思えば、主は私の若い日にご自分を現わしてくださり、手を差しのべていてくださいましたのに、愚かな私は結婚生活の中のさまざまな試練を主からのものとして受け取ることができず、み

ことばの中に助けを見出すこともできず、自分の心を悲しみと不信と恨みで一杯にして、間違った道に迷い込んでしまっていたのでした。

このわたしが地を造り、その上に人間を創造した。わたしはわたしの手で天を引き延べ、その万象に命じた。

（イザヤ　45・12）

わたしが主である。ほかにはいない。わたしは光を造り出し、やみを創造し、平和をつくり、わざわいを創造する。わたしは主、これらすべてを造る者。（イザヤ　45・6、7）

私たちの神は存在するすべてのものの主です。そしてその神は、やはり私が信じたとおり、愛の方でした。あらゆる病も、苦しみも、困難も、それを主の訓練として受ける時、助けと慰めが豊かに主から与えられると知りました。

神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。それは、私たちにキリストの苦難があふれているように、慰めもまたキリストによってあふれているからです。

（Ⅱコリント　1・4、5）

長い間の背きの罪にもかかわらず、主はなおも私をあわれんで顧みてくださり、私たち一家四人を救い上げてくださいました。

あなたがたの神、主に立ち返れ。主は情け深く、あわれみ深く、怒るのにおそく、恵み豊かで、わざわいを思い直してくださるからだ。（ヨエル　2・13）

かつて私が属していた組織には、誠実で、勤勉で、努力を惜しまない善良な方々が沢山いらっしゃいました。どうか主によってその組織の誤りが公にされ、一人でも多くの方々が私と同じように真の神のもとに導き出されますようにと、日々祈り続けております。

主よ。私は国々の民の中にあって、あなたに感謝し、国民の中にあって、あなたにほめ歌を歌いましょう。あなたの恵みは大きく、天にまで及び、あなたのまことは雲にまで及ぶからです。

神よ。あなたが、天であがめられ、あなたの栄光が、全世界であがめられますように。（詩篇　57・9～11）



▲受洗を喜ぶ松夫さん。
左は親友の梅原真次さん。



▲松夫さんの洗礼式の日。

神よ、よくぞお導きくださいました

上野松夫

一九二一年東京に生まれる。赤城小、暁星中学校、早稲田大学法学部卒業後、日本火災海上保険株式会社入社。同社専務取締役、日本火災損害調査株式会社取締役社長を経て、現在日本火災海上保険株式会社協議役。ワールド証券株式会社参与。株式会社旭日顧問。財団法人交詢社社員。

受洗

「天と地のすべてのものを造ったもの、それが神であると言うなら私はそれを信じます」

「そうです。それが神様なのです」

私が初めて参加させていただいた一九八六年七月の吉祥寺キリスト集会の軽井沢キャンプの時、御代田のベックさんのお宅の書斎で神と御子と聖霊についてベックさんがじっと私をみつめながら長い時間お話なさった後で私が最後に申しあげた言葉に対し、ベックさんはこのように答えられました。

初めに、神が天と地を創造した。（創世記　1・1）

私の父の家系も母の家系も宗教は神道でした。しかも父方の祖母は神官の娘でした。さらに私の家内の実家も神道で、奇しくも神道ずくめの一家でした。

私が卒業した中学はカソリック系のミッション・スクールで、先生方の約半数は日本人や外国人で、妻帯せずに校内で起居を共にされる黒服の神父さんでした。クラスメートには教会関係者の子息が数人いましたし、現在も聖職者として生活している方も何人かいます。しかし私は、学校時代も、また卒業してからも、聖書というものに手を触れたことすらありませんでした。家が神道であり、成長期の中学がミッション・スクールであっても、私自身は無神論者であり、宗教にはまったく無関心でした。

その私が冒頭のようなことで神を受け入れ、聖書を学ぶようになったきっかけは、その頃一人娘の鮎子が、私たち家族にはどうしてもうかがい知ることのできない心の苦脳にとりつかれていたからです。もともと潔癖なぐらい純粋で、芸術的で、ガラスのように繊細で脆い感受性の持ち主であっただけに、その苦しみを見ても、親の力でその中に入っていき理解することも取りなすこともできず、救い出す術が見出されませんでした。私たち夫婦の苦しみは大変なものでした。私は生まれて初めて、我が身を犠牲にしても鮎子を救ってほしいと、何ものかに必死に祈りました。生まれて初めて自分の力でどうすることもできない事態にぶつかったのです。そうしている内に、妻の友人の紹介で重田定義さんご夫妻を存じあげることとなり、重田さんのご案内でベックさんとお会いし、冒頭の言葉となったのです。

信仰的な資質がまったくなく、頑固で無知で神から一番遠くにいた私を神があわれんでくださり、私の最愛の分身である鮎子に苦しみをお与えになり、私にショックを与えて、神の光の中へ導き出してくださったのです。

私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。

（エペソ　2・3～6、8）

「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」

（ヘブル　12・5、6）

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（Ⅰコリント　10・13）

その年の十一月、ベックさんご夫妻は鮎子を手許へおよびくださり、私たちの願いを聞いてくださってクリスチャンホームの家族の一員として暖かく迎え入れてくださいました。

鮎子はそれまで医師と薬に頼っておりましたが、ある日ベックさんの奥様の三時間におよぶご忠告のあと、医師と薬から離れることを決心し、所持していた薬をすべて放棄しました。その年の十二月、妻の和子と鮎子が、続いて翌年三月私が、吉祥寺キリスト集会において洗礼を受けました。

私の会社生活

四十年間勤めあげた私の会社生活は、非常に恵まれたものでした。その大半が営業の仕事でしたが、その間上司にも恵まれ、叱責を受けたことなどほとんど記憶にありません。同僚とも仲良く、仕事上の競争心もあまりありませんでした。（というのも、私の入社した戦争直後は計画採用として同時に多数の人が入社するということはなく、個々の面接入社でしたから同期生がおりません。）将来どのくらいの地位まで出世するという野心も目やすも持っていませんでした。入社三年目で、軍隊時代の疲れが出たのか、病気になり、二年近く会社を休職しましたが、その点ではあせりもなくのんきなものでした。部下の面倒見もよく、仕事をガッチリやってくれるのであまり叱ったこともなく、部下もよくなついてくれました。残業も多いのですが「仕事が終れば仲間同士だ」と言ってよく飲みに連れていきました。

我々の商売である損害保険というものは、大まかにいえば同じ紙切れ（保険証券という商品）

を同じ値段で国内二十社が売り先を求めて競い合い、それで巨額の保険料をいただくのですから、その競争は実に熾烈であり、想像を超える営業的な手練手管を要するのです。そういう競争の中にありながらも仕事の成績は順調で、期末期末の表彰も数えきれないほどいただき、表彰状は丸めたまま書棚に放り込み、賞金は全員で飲み屋に行ってたちまち消えてしまう始末でした。

ただ、どういうものか大きな仕事をやり終えた時、何か空しい虚ろな気持にとらわれることがしばしばあったことを覚えています。「私は何のためにこんな努力をし、いったいあとに何が残ったというのだろう？　私の生き甲斐とはいったい何なのだろう？」と。

今、当時を思うと私の営業生活は大きな罪をおかしていたことになります。それはあまりにも自己中心的であり、傲慢とうぬぼれの強いものでありました。私は自分の内に傲慢な気持を持っていたので、他人の内にある傲慢をことさら嫌悪していたのです。

私の永年たずさわってきた仕事は特殊な保険であり、上司として迎えた方々には深く立ち入って理解することがむずかしいので、それをよいことに上司をさしおいて独善的に処理し、得意先の大企業の重要なポストの方々のところにも添えものとして上司の同行をねがい、相手の方に対しても「お言葉を返す様ですが……」と前置きしながら、失礼な欲ばった注文をつけたりしました。また、原子力発電所の建設工事の保険とか、航空機の賠償責任保険などは、契約金額が何千億円という大きなロットのものだけに、他社との競争は激烈を極め、それこそ夜討ち朝駆けが常態といった戦いの毎日です。戦いに敗れるような奴は、サラリーマンとして力量不足、うだつがあがらなくても当然だ、などとうそぶき、今にして思えばその頃の私はまったく闘争的であり、

自己中心的であり、プライド（傲慢・自負心）の塊り以外の何者でもありませんでした。今思うと、罪の大きさにおののかざるをえません。

信仰の上に立って罪を考えたとき、私の会社生活は厳格に問われなければならないものです。神を無視し、神に敵対している人生を、神はお赦しにならないし、自分では気がつかない心の中の罪まで神はご覧になっておられると思うと、罪人としての恐ろしさをしみじみと考えざるをえません。

だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。おのおの自分の行ないをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思ったことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。

（ガラテヤ　6・3、4）

あなたのしもべを、傲慢の罪から守ってください。それらが私を支配しませんように。そうすれば、私は全き者となり、大きな罪を、免れて、きよくなるでしょう。

（詩篇　19・13）

この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。

（ローマ12・2）

家庭生活

妻和子の父親は政治家でした。したがって私に嫁いで初めてサラリーマンの生活に触れたわけです。妻は早くから無教会派キリスト教の信者であり、純真で世の中の諸事についてうとい方でした。私は会社では良い社員であったかもしれませんが、仕事以外の私生活は無茶苦茶で放らつ極りないものでした。それは独身時代から続いていたのですが、思いもよらない私の所業に妻は驚き、どれほど嘆かせ悲しい思いをさせたかはかり知れません。それは尋常一様のものではありませんでした。

鯨飲しました。夜数時間寝ただけで前後二十数時間飲み続けたこともあり、深夜先輩を連れて飲んで帰り、そのまま朝まで飲み続けたこともあります。しばしば徹夜麻雀もしました。家を空けたことも数限りなくありました。和子に渡す給料は半分だけ（終戦後月給を二度に分けて支給される時代がありました）、ボーナスは妻に内緒にしていたのでまったく渡さないというふうだったので、家内は自分は粗食にし私の食事だけ別に用意していたこともあります。生活費が足りなくて実家へ無心に行ったり、質屋ののれんをくぐったこともあります。十数年の間はそれが特にひどかったようです。その間妻は離婚を考えたこともあったようですが、じっと耐えしのんできました。

今、この歳になって悔んでもおそいのですが、私は妻の気持になって物事を考えてあげたことがまったくなく、私の欲望だけを追い求め、妻を踏みつけにしていました。

感謝

最後に、神様から遠いところにいて神を無視し、高ぶりの心で自我の追求に明けくれていた私を、吉祥寺キリスト集会を通して神が救ってくださいましたことを心から感謝いたします。

ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。

（Ⅱコリント　4・16）

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

（Ⅱコリント　5・17）

▼日本火災の元役員の親睦会で。左から石井恒正さん、松夫さん、田中辰郎さん。



主こそわが道、真理、そして生命

瀬島志郎

一九三五年出雲市に生まれる。高松小、出雲二中、県立出雲高校を経て、法政大学卒業。一九五八年株式会社亀岡商会入社。十一年間勤務の後、有限会社瀬島商会創立。一九六二年妻安江と結婚。趣味はゴルフ、音楽、ダンス、スポーツ大好き人間。家族は長女純子さん、長男真一郎さん。

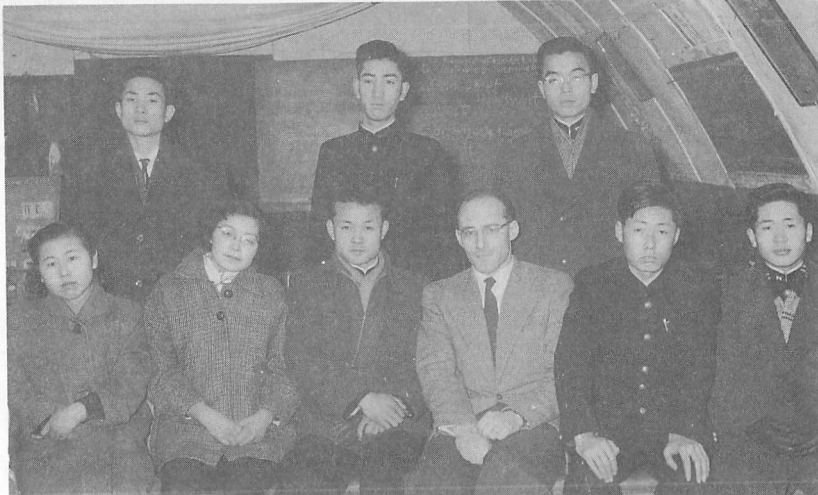


▲ご家族揃って日曜礼拝に出席。



▲入院中の妻安江さん（中央）と長女純子さん、長男真一郎さん。

▼若い時のベックさん（右から4人目）。1954年12月高津図書館でのドイツ語研究会で。瀬島志郎さん（右端）と田辺正隆さん（中央）。



ベックさんとの出会い

一九五四年、私が大学へ入って間もない頃、同じクラスの田辺正隆君に誘われて、あるドイツ人からドイツ語の会話を一緒に習おうということになりました。その方が宣教師のゴットホルド・ベックさんでした。ベックさんはその前の年の一九五三年に来日され、その頃はまだ独身でした。当時南部線高津駅前にあった、粗末なカマボコ型ドームで広さが三、四十坪ほどの高津図書館で、毎週二回夕方五時過ぎから教えていただいていました。授業の始まる前にベックさんはまずドイツ語で祈られ、次いでみなでドイツ語で聖歌を歌い、授業の終りにはまた祈られていたことをよく覚えています。

ベックさんは来日されて間もない頃のことでしたから、今のように日本語がお上手でなく、会話も、授業も、祈りもすべてドイツ語でした。私たち六、七人の仲間も、ドイツ語を大学で習い始めたばかりでしたから、ベックさんの祈りの内容などとても理解できるわけはありませんでした。ただみんなで黙祷して、何となく形だけ祈りに参加しているだけでした。

その年の秋、ベックさんのいいなずけであるミンヘンさんが船の長旅を重ねてたった一人で来日されました。ベックさんはほんとに嬉しそうでした。今でこそドイツと日本の間は飛行機で十数時間ですが、当時は船便しかなく、ドイツからの船旅は時間的にも費用の上からもさぞ大変だったことでしょう。

ミンヘンさんが来日されて間もなく、私たち仲間はベックさん、ミンヘンさんとご一緒に箱根、江の島へピクニックに出かけました。お二人は仲がよく、どんな時でも穏やかで、ご一緒にいて

いつも平安が与えられる感じがしました。

消息不明の期間

私たちはやがて本月の教養学部から飯田橋の本校に移りました。ドイツ語会話の集いも持たれなくなり、ベックさんと級友の田辺正隆君の消息もいつしか途絶えてしまいました。その後も折を見てはドイツ大使館に問い合わせたり、いろいろと情報を得ようと手をつくしてみましたが、どうしても判りませんでした。田辺君は学校に退学届けを出しており、彼の消息も判明しないままでした。その後大学では、ドイツ語研究会を創設して、ドイツ、スイス、オーストリアの在日留学生との交流をはかったり、ＶＤＳＧ（関東大学ドイツ語連盟）に参加し各大学、大使館、日独協会の方々とドイツ語を通して交流をもつことができるようになりました。そして機会があるたびにベックさんのことを聞いてみましたが、誰も知りません。後になってちょうどその頃茨城県那珂湊からドイツへ一時帰国されていたことがわかりました。

一九五八年、私は卒業と同時に石油販売会社に勤めました。それから十一年間、経理部、販売部へと配属が変わり、その後ガソリン・スタンドの勉強をさせられました。一九六二年三月二十七日、私は妻の安江と郷里の出雲大社で結婚式を挙げました。結婚式の日の夜、私の父が脳溢血で危篤になり、四月四日になくなりました。出雲では結婚式と父の葬儀をあわただしくすませて帰京しました。

一九六三年に長女の純子、一九六五年に長男の真一郎が生まれました。一九六三年一月に会社

を辞めて現在の会社を創立しました。創業以来会社経営のために、年中無休で心血を注いでがんばりました。多くの方々のご協力を得て、本社を含む四カ所の事業所を運営するまでに成長することができました。その間、経営者として直面しなければならない資金や人の問題で思案の余り、眠れぬ夜も幾度となく経験しました。今ふり返りますと、むしろ倒産しなかったのが不思議なくらいです。当時もし私に資産があったり、誰か当てにするような人があれば、大きな負債を抱えて逆に倒産していたかもしれません。

「経営はよくも悪くも、すべて経営者の責任である」という信念が、経験を積むに従って強くなっていきました。同時に経営に対する自信と自負心も少しずつ増長していったように思います。一生懸命に仕事に精を出して家族を幸せにしよう、自分も成功者になろうと、人一倍努力をしました。「夫は仕事に励み、妻は家事と子供の面倒をみる」。そのような役割分担と分業が、最も理想的な家庭の姿であると考えていました。

結婚して二十数年の間、私たちは幸せなことに決定的な対立を経験したことは一度もありませんでした。そして自分では家族を大切にしているつもりで、何よりも物心両面で豊かな生活を目標にしていました。やがて子供たちが成長するに従って、子供たちの教育の問題や家事にかかわる問題が多くなり、また複雑にもなってきました。しかし私は「家にいて、家に在らず」で、時折妻から真剣に相談されても、それらの問題は直接自分の問題ではなく、妻の担当する分野の問題だと思い、煩わしくも面倒なこととして、真剣に取りあわないことが間々ありました。今思えば「私にして、私に在らず」で、自分の仕事のことしか考えず、心にまったくゆとりがなかった

ように思います。今思うと妻には大変な責任と負担を負わせてしまいました。その頃の私は、妻や子供たちに対する本当の愛情が欠けていたのです。自分の思いではなく、相手を思いやる気持がありませんでした。もちろん私も、時として家族一緒に食事にでかけたり、妻や子供をよろこばすためにプレゼントを買ってきたりすることはありました。しかしそれは、自分中心の押し付けの愛情表現にすぎなかったことが、今ははっきり分かるようになりました。

人は自分の道はみな正しいと思う。しかし主は人の心の値うちをはかられる。

（箴言　21・2）

再会

一九七八年、ふとしたことからベックさんが吉祥寺に住んでいらっしゃることを知りました。あれほど探していたベックさんが私の会社から車で十分足らずの所に十数年前から住んでいらっしゃったなんて、信じられない気持でした。ベックさんに再会することがどうしてこんなに嬉しいことであり、またどうして再会を待ち望んでおり、それにはどんな意味があるのか、当時の私には、分かりませんでした。

ベックさんのお宅を訪ねますと、心から喜んで迎えてくださいました。ミンヘンさんもいらっしゃり、二十五年間のことを何からお話してよいのかとまどいました。昼間のことで長女のハイデさんがコーヒーとクッキーを出してくださいました。私は慣れないドイツ語の単語を並べたて、一生懸命に話しました。でもすぐに私のドイツ語など邪魔でこそあれ、まったく必要がないこと

にすぐ気付きました。成人されたハイデさん、ベックさん、ミンヘンさんは、みんなとっても日本語がお上手で、私は時の流れを感じ感無量でした。

数日後ベックさんは、私の家族四人を夕食に招いてくださり、ミンヘンさんの手造りのドイツ料理とケーキで心からのもてなしを受けました。食事の後、羽鳥明さんの少年時代の映画を見せてもらいました。長い時間お邪魔していて気付いたことですが、ベックさんのお宅にはテレビがありませんでした。その理由をおたずねしますと、「最近日本では、テレビが昔の神棚みたいになっていて、家族がお互いに顔を合せないで、みんなテレビを向いてしまっています。これは大きな問題です」と話してくださいました。

テレビを通して何を見るかが問題なのではなく、多くの家庭ではテレビが生活の中心になり、そのために家族のコミュニケーションがなくなってしまっていることを教えてくださいました。二十五年前にはお互いに独身であったのが、今ではベックさんには五人のお子さんが、また私にも二人の子供があり、両方で十人の家族の楽しい時間が与えられました。

キリスト教に対する憤りと反感

その後ベックさんは、車で時々私の会社を訪ねてきてくださいました。そして吉祥寺のキリスト集会に来るようにと誘ってくださいました。私はベックさん、ミンヘンさんは大変好きでしたが、しかし宗教、とりわけ「キリスト教」にはまったく興味がなく、強いて言うならば、係わりをもちたくない気持でした。その頃の私は日常生活、家庭、会社で何の問題もなく、比較的恵ま

れた生活をしており、もし自分に不足不満があるとすれば、それは自分自身の努力が足りないためだと自分なりに納得していました。

やがてそのうち、私が帰宅すると、妻が聖書を読んでいるのを見かけるようになりました。一九八一年のある日、妻は私の前に座って「一生に一度のお願いですから、どうか洗礼を受けることを許してください」と手をついて頼みました。私は何がどうなっているのか分からず、理解できませんでした。私の知らない間に、それほどまでに「キリスト教」にのめりこんでしまっていたのかと、当惑しました。そして私が、これほどまでに家族のために一生懸命頑張り、努力しているのに、いったい何が不足なのか、何が不満なのか、これまでの生活にそれほどまでに不満感を持っていたのか、どうして素直に話してくれなかったのかと、被害妄想の心が次々に湧き出てきました。

私にはそれは大きなショックであり、落胆しました。私のプライドはショックで大きなダメージを受けました。それと同時に、突然、よく分かっているつもりの妻のことが他人のようにみえてきました。聖書を研究するぐらいならまだしも、「キリスト教」に入るなどとんでもない、と真っ向から反対し、「宗教」を妄信することの怖さなどを話しました。

私の日頃の想いは妻を喜ばすこと、子供たちに父親として尊敬されるようになることでした。自分が妻から無視された、という嫉妬心も加わり、腹立たしく思いました。「妻を本当に幸せにできるのは自分しかいない」と、頭で考えていたわけですから。その時の私は、妻を自分の下に留まらせるために真剣に語りました。しかも結婚して以来、一度も口にしたことのない「離婚」

を覚悟の上でのことかとつめ寄りました。妻は沈痛なおももちで、しかし落ちついた態度で「わがままを許してください」とだけ答えました。私は「離婚」などと口走りましたが、それは卑怯にも一種の脅し文句であり、私のやるせない気持と当惑と戸惑いから刹那的に口からとび出した切り口上でしかないことにすぐ気付かされました。しかし、男としての体面上、表情には現わさないように努めました。

今になって思うと、妻は「主イエス・キリストを信じたい」と願い、私は「キリスト教はだめだ」と反対していた訳です。これではしょせん平行線で、私は神様と力比べを試みていたことになります。この勝負ははじめからついていたようなもので、妻は一九八二年二月七日に洗礼にあずかり、主に自分をすべてゆだねる決心を証ししました。

妻のがんの宣告

一九八三年のこと、妻は年の初めから時々咳をしていました。本人は風邪をこじらせてしまったようだと言いながら、それでも念のために呼吸器専門の国立療養所中野病院へ診てもらいに行きました。お昼前に、妻が会社へ診療の結果を知らせてきました。肋膜炎の悪化で、すぐ入院しなければならないということでした。彼女が入院するのは、出産のために入院して以来のことです。それで妻は自分の病気入院のことよりも家のことの方がもっと心配だと言っていました。

翌日朝、入院しました。入院した日に、右脇腹に大きな針を刺し、その先にゴム管を継ぎ、2リットルほどのガラスビンに腹水が二杯も出ました。

四月二十四日、十一時頃、病院の主治医の先生から電話があり、妻の病気のことでお話したいと連絡があり、妻の義兄と一緒に病院へ行きました。最悪でも手術の家族同意の話かと思っていました。しかし主治医は、胸部レントゲン写真を五、六枚テーブルの上に置かれ、真白く写っている写真を説明され、妻は「末期肺がん」であり「腺がん」で、他の臓器への転移進行も早く、最も気の毒な状態であると話されました。私はただ、「まさか」という思いだけでした。にわかに主治医の先生の言葉を信じる訳にはいかない思いでした。治療のための手術や薬がないかといろいろ伺いましたが、病気を治すための治療方法は皆無であることをはっきり告げられました。それどころか妻の生命は早ければ一カ月、いずれにしてもその年の梅雨を越すのは無理であること、病状はそれこそ処置なしの状態であり、ただ病気の進行に伴う痛みに対する処置しか残されていないことも告げられました。先生には丁重にお礼を申しあげ、処置についてもよろしくお願いをして、席を立ちました。

病院の前庭のベンチに座り、一人で先ほど起きたことが現実とは思えず、夢を見ているような気持で茫然としていました。何とも表現しようのない虚脱と虚無感の中で、じっと座っていました。結婚時代からの妻のことが、走馬灯のように想い出として脳裏に浮んできました。

今まで苦労ばかりかけ、いつも自分のことより私と子供たちのことで明け暮れて、何一つとして無理難題を言わなかった妻のことが本当にいとおしく、不憫に思え、可哀相でもあり、また急に妻へのはかり知れない感謝の気持で一杯になりました。妻の病室は三階でしたが、すぐに病室へ行く気にもなれず、といってそのまま帰る気にもなれず、一時間ほどそこに座り続けました。

会社を設立して以来一度として会社の手伝いは頼まず、家事、育児に専念してもらいましたが、わがままな私を本当に助け、これまでに会社が発展した最大の功労者であったことに気付きました。しばらくして気を静め、何気ない様子を装って病室に入りますと、妻は私が日中突然現れたので「何かあったの」、と逆に心配してくれました。

主治医の先生のご意見では、子供たちには知らせない方がよいのではないかとのことでした。特に、身内の女性には知らせないようにとのことでした。翌日私は、なぜか分かりませんが、ベックさんを訪れ相談をし、ご一緒に祈っていただきました。二人の子供ですが、何といってもまだ一人の母親のことであり、幼いながらもこの厳しい現実に正面から対峙させることが必要だと思い、夜、二人の子供に事実をそのまま話しました。子供たちには本当に苛酷なことで、可哀相でしたが、話してよかったと思います。二人とも心配したよりはるかに成長していて、この現実をしっかりと受け止めてくれました。長女は勤めを辞めて看病に専念したいと言いました。長男は高校三年で大学受験をひかえていましたが、その年の受験はあきらめて、妻の看病をすると自分で決めました。

私と子供たちの三人は心を一つにして毎日妻の病院へ通いました。同室の患者さんや病院には大変ご迷惑をかけましたが、妻のベッドのまわりには、夜九時の消灯まではほとんどと言っていいくらい交替で、あるいは三人で付き添いました。病院が家庭のようになりました。しかし、妻の容態は少しずつ確実に悪化していきました。抗がん剤投与が始まると食欲は極端になくなり、看病するといってもただ見守っているだけ、といった悲しい状態になってきました。何でも私に

できることがあれば言って欲しい、と聞きますが、「何もいらない」という返事しか、返ってきません。

この頃妻がいつも祈っていたことは、私が主に救われることでした。実に不思議なことですが、病気が悪化しても妻の心の中には平安があり、私は身体は健康でしたが、心の中は日々衰えてゆく状態で、まことに対照的でした。入院して以来、長男の役割は毎晩消灯前に吉祥寺キリスト集会のメッセージか証しのテープをカセットデッキにセットして帰ることでした。どんなに容態のすぐれない日でも、妻は必ずテープを聞き、みことばを聞くことだけが楽しみのようでした。聖書のみことばは語っています。

人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。

（マタイ　4・4）

主はこの頃から、私の前に、妻のがんを通してご自身の栄光を現してくださいました。私は、どうして妻がこの病状にあって日々平安でいられるのか不思議でなりませんでした。私がこれからの子供の将来のことや家事のことを心配しますと、妻は笑みを浮べて「あなたに子供は育てられないでしょ、何も心配しないでイエス様にお願いしたら」と、軽い気持で答え、ことさら取りあわない風でした。六月十日から七月二日まで一時帰宅が許され、その間に妻のたっての望みで、一度は私と二人で、次は子供と四人で、吉祥寺集会の日曜礼拝に参加しました。

妻の体はボロボロの状態でしたが、家に帰ってからも本当に嬉しそうでした。その頃、私の知

らない間に、集会のベックさん始め妻のお友だちの方々が時々見舞ってくださり、いろいろとお話をしてくださっていました。またベックさんの口を通して、妻は不治の病であることを知っていましたが、自分からは私にはそのことを一度も言いませんでした。ですから二人でいる時、死について、死後について、時々話すことができました。

七月二日。再入院して間もなく、妻はナースルームの隣の面会謝絶の個室に移されました。その頃からは妻は弱って聖書が読めなくなり、私が読んであげるようになりました。読んでいるうちに、静かなので眠ったと思って読むのを止めますと、ただ眼を閉じてみことばに聞き入っているだけのことがよくありました。体調のいい日には聖歌を歌いました。面会謝絶の部屋から歌声が聞こえるので、看護婦さんがとんで来て私たちを見、驚いていました。

七月二十七日十二時十五分。妻は飛行機が離陸するように、一足先に天国へと旅立って行きました。私と二人の子供には涙はなく、主への感謝とともに妻の天国への旅立ちを見送ることができました。ちょうど、肺がんの宣告を受けて三カ月と三日目のことでした。

私は自分が先に死ぬことを考えたことは何度かあったと思いますが、まさか妻が私よりも先に召されるとは想像したことさえありませんでした。「私のいる所には必ず妻がいるものだ」、これがそれまで私が当然だと思いこんでいたことでした。それは私が神の知恵を知ろうとしないで、自分の知恵に頼った結果でした。「妻の病床での様子と、天に召された時」を通して、見えない神を心の目ではっきりと見ることができました。私はその時から、主イエス・キリストにすべてをゆだねる決心をしました。

一粒の麦（主イエス）がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。（ヨハネ　12・24）

私と二人の子供は、その年の九月十八日、洗礼の証しへと導かれました。

私の家の主人は、私ではなく、主イエス・キリストです。

真の神との出逢い

私は妻のがんとの闘病と、天に召されたことを通して、本当に多くのことを知ることができました。自分自身の本質は、私自身の知識ではなく、真理である神を知ることによってはじめて知らされるものであること。パウロは次のように言っています。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。（ローマ　7・15）

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。（ローマ　7・18）

肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔

術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。（ガラテヤ　5・19～21）

しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。（ガラテヤ　5・22、23）

私はかつて、「宗教」と「信仰」を同じものだと考えていました。歴史的に見ても、洋の東西を問わず、「宗教」上の争いは数えきれないほどあり、現在も「宗教」絡みの争いは続いています。「宗教」戦争は、神の名のもとに争う人間の、最も悲しむべき行為だと思います。それにくらべて真の「信仰」は、人間を本質的な罪から解放する、平和をもたらす基です。人間の造った神、人の組織した宗教によって、私たちは真の平安と希望と喜びを得ることはできません。

妻の死によって、それまでまったく無頓着であった家計のこと、身のまわりのこと、子供たちとのコミュニケーションに関することまで、急に私の上にのしかかってくることになりました。すべてを妻に任せっきりにしていたので、家の中のことはまったく分からない状態でした。妻が天に召されて数日後、私は二人の子供たちと次の三つのことを約束しました。それは、新しい家庭を築くためでした。

1　間に合わせの外食はしないこと。2　洗濯は毎日すること。3　掃除は毎朝必ずすること。実にたわいのないことですが、新しい家庭をつくるためには、まず衣食住のことが人間生活の営

みの中では基本となる、それをしっかりと確立しなければ、と思ったからです。

馴れないこともあって、出勤前の家事は時間を要し、要領も段取りも分からないまま起床時間がどんどん早くなり、ふと気がつくと、五時前から家の中をばたばたかけまわっているような毎日でした。ことに昨年の二月は足を捻挫して、ほとんど片足しか使えず、歩行もできない状態になりました。それでも家の中をキャスターの付いた椅子に乗り、漕ぐようにして動きまわり、掃除機などを操作しました。階段は椅子を片手で担いでいざるように上り下りしました。洗濯も椅子に座ってやり、台所でも椅子を置いて料理をしました。具合のいいことに軽量の藤製の円筒型の椅子がありましたので、紐を取付けて背負って移動しました。その格好はかたつむりみたいで、自分でも苦笑したくなるほど不様でした。しかし、感謝と喜びがありました。ちょうど二人の子供たちが旅行中で私一人でしたので、子供たちの帰るのを毎日心待ちにしていました。帰ってきた子供から、大変しかられてしまいました。一日二日掃除をしないからといって、埃で人は死なないと言いますが、私にはそれは家庭生活の一種の死につながるように思います。埃そのものでは死なないとしても、私の内には怠惰という虫がいて、ちょっと気をゆるめるとせっかくはりつめている私の感謝ある生活を虫ばまれてしまいそうな気がするのです。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

（Ⅰテサロニケ　5・16～18）

このように身体が不自由な時でも、主は私を生かしてくださっていることを考えると家事労働が負担ではなくなり、日々、主に感謝し、喜んで生きていけることはまことに主の恵みです。

妻の死は私たちにとって限りなく悲しく、つらいことでした。しかし妻は、がんと死を通して、生けるまことの神のもとに私たちを導いてくれたのです。ああもしてやりたかった、こうもしてやりたかった、という妻への思いは、今となっては果すことができませんが、妻は今、そんなことに比較すらできないすばらしい天の御国に、主のみもとに引き上げられ、永遠のいのちをいただき、主の絶えざる愛の中に抱きとられ祝福されていることを思いますとき、ただ感謝あるのみです。そしてそれのみか、私たちもいつの日にかこのきゅうくつな身体を脱ぎ捨て、みもとに召され、そこで妻と再会することが許されているのは何という大きな喜びでしょう。

一九五四年にベックさんに初めて出会った時は、私は神を知らない、神にそむく者でした。ところがイエス様の救いを受け入れた今では、ベックさん、ミンヘンさんは「主にある兄弟姉妹」になっています。この主のみわざを見、この三十五年間の主の導きと備えに、ただただ感謝しています。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。

（エレミヤ　29・11～13）

あとがき

私たちは「光よあれ」第4集の中で、現在日本でいろいろと問題になっている身近なテーマについて、体験者の証しを通していかに生きるべきかを見てきました。最後に、締めくくりとして、一つの基本的な問いを発し、それについて考えてみたいと思います。

「私たちの人生を、充実した、生きがいのあるものにするのは何か?」

私たちの周囲には、充実していない、生きがいのない、満足していない人々が溢れています。その人々はまことの喜びを知らず、また心の平安を持っていません。その人々は懸命に働き、時間に追われて生活していますが、その人生の行き着く果ては、どうしようもない「虚しさ」です。また「生きがい」は、その人の人生の中で何を一番大切にするか、ということによっても明らかにされます。

「あなたにとって、一番大切なものは何でしょうか?」

ある時、私はドイツで何人かの人に聞いてみました。いわば、小さなアンケート調査です。あるエンジニアは「健康だ」と答えました。若いウェイトレスさんの返事は「ボーイフレンド」でした。理髪店のご主人は「仕事」でした。お肉屋さんの奥さんは「家庭です」と言いました。ある実業家は「経済力」と明快に答えました。いつも忙しいスーパーの店員さんは「一人でのんびりしたい」と望んでいました。市役所の職員の答えは「人の助けとなること」でした。

「一番大切なものは何か?」という質問に対する答えは、このようにどれもみな悪いものでは

なく、よく理解できるものばかりです。すべての答えはまちがっているとは言えません。しかし私たちはここで「はたしてそれらだけが、すべてだろうか?」ということをよく考えてみる必要があります。それよりもすばらしいもの、価値あるものはほんとうにないのでしょうか……。

あなたが突然、がんになったと仮定してみてください。あるいは少女のボーイフレンドが彼女を裏切って他の女性と一緒になったと考えてみてください。あるいはまたあなたのお店が自分の責任でなく潰れてしまったらどうでしょうか。家族の一人が急死したとき、暖かい家庭はどうなるでしょうか。実業家の海外投資先が政変で倒れてしまったらその結果はどうでしょうか。憩いを求める望みが満たされないときどうすればいいのでしょうか。市役所の職員が病気になって、もはや人のために尽くせないようになったとき、何がその人に残るでしょうか。

「あなたにとって、一番大切なものは何でしょうか?」

それは、あなたの夫、あなたの妻、あなたの子供、あなたの家、あなたの仕事、あなたの友達、あなたの健康、あなたの経歴、あなたの名誉、あなたの美しさ、あなたの財産、あなたの楽しみ……などでしょうか。

たしかに健康は富です。仲のよい家庭生活は宝です。夫婦の間のきずなはお金にはかえられません。しかしそれ以上のものがあります。一番大切なものがあります。

長い間イエス・キリストのことを徹底的に憎んだパウロは、後には次のように言っています。

私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。（ピリピ　1・21）

パウロのように言える人は幸いです。すなわち「私にとってキリストは、すべてにまさる一番大切なものだ」と。

大切なのは、肉体的な健康でもなければ、沢山の財産やお金を持つことでもありません。大切なのは、人間が罪の重荷から解放されていること、そして創造主である神が私の罪を赦してくださり、私に永遠のいのちを与えてくださったという確信を持つことです。

もしもまだあなたが主イエスをご存じないのならば、どうかあなたの心の扉を開いてください。主イエスを自分の生涯に受け入れて、その後で後悔した人は一人もいません。主イエスは限りなく豊かに恵んでくださるお方です。

パウロは主イエスを受け入れることによって自由になり、喜びに満たされた人間になったのです。彼の告白は、次のようなものでした。

私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。（ピリピ　3・8）

一九八九年　復活祭の日に

ゴットホルド・ベック

基礎的なみことば

救いに至らせる信仰は、人間の理性や感情に基づくのではなく、ただ神のみことばに基づくのです。理解したいという意欲や、何かを感じたいという意欲ではなく、ただ幼な子のように神のみことばを信頼することだけが誘惑の危険からあなたを守ってくれます。

その助けとなるように、いくつかのみことばを次にご紹介いたします。聖書を開いて、そのみことばを考えながら読んでください。そして与えられたみことばの内容のために、イエス様に感謝してください。そうすれば主はあなたを祝福してくださるでしょう。

一　みことばの大切さ

ヨハネ17・17　エレミヤ15・16　Ⅰヨハネ5・13　Ⅰペテロ1・23　詩篇119・105、160、162

二　悔い改めと信仰

Ⅰヨハネ1・9　箴言28・13　詩篇32・1～5　イザヤ55・6、7　ヨハネ6・37

三　私たちの身代わりとなられたイエス

イザヤ53・4～6　Ⅰペテロ2・24　Ⅱコリント5・21

四　血潮の価値

イザヤ1・18　ローマ3・24、25　Ⅰヨハネ1・7　エペソ1・7　Ⅰペテロ1・18、19

黙示12・11

五　確信の根拠

イザヤ43・1、25　イザヤ44・2　ルカ7・48　ヘブル8・12　ヘブル10・17

詩篇103・12　ヘブル13・5、6

六　思いわずらうな

マタイ13・22　マタイ6・25～32　ピリピ4・6、7　Ⅰペテロ5・7～9　詩篇55・22

七　試練の時

ヤコブ1・12　ヤコブ4・7、8　Ⅰコリント10・13　Ⅰペテロ5・8～10

Ⅰペテロ1・5～7　Ⅱコリント12・9、10　ローマ5・3～5　ローマ8・28

イザヤ40・29～31

実を結ぶ命がんにうち勝ったドイツ少女リンデのおすすめ

二十歳そこそこのドイツの少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇跡であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ　31・3）

リンデの、主に従い通す態度は、吉祥寺キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起し、多くの人々が自分の支配権をイエスさまに明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。

なおこの本は韓国語版、ドイツ語版が出版されました。さらに病床にあって本の読めない方々のために、ＰＢＡのアナウンサー渡辺康子さんが朗読したテープ（８本１組）があります。



ゴットホルド・ベック編著

実を結ぶ命がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

価三三〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒１８０武蔵野市吉祥寺本町４―９―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。10冊以上は特別価格でご協力します。

光よあれ「私たちは主のもの」証しシリーズ　のおすすめ

光よあれ

「私たちは主のもの」

第1集

25人の証し

価三三〇円

第2集

25人の証し

価三五〇円

第3集

42人の証し

価三三〇円

山本孝子さんの「み翼のかげで」、野口広教授の「klein aber mein から klein aber Dein へ」、野田繁さんの「虚しさからの脱出」、染野待子さんの「主が語られたことは必ず実現する」、池田傳一さんの「光の中に移されて」など、またベックさんのメッセージ「神は愛です」を収録。

松見敬三さんの「曙からお昼過ぎまで」、古田稔・康子夫妻の「すべてを主の御手に」、アルコール依存症から脱出した染野茂夫さんの「駆けのぼりし主の道」、重田定義教授の「主の御名はほむべきかな」など、巻末にはベックさんの「無限の宇宙にある神」が掲載されています。

江藤善清・恵子夫妻の「天国を望み見て」「主に導かれて」、蘇畑卓郎さんの「とこしえの磐」、納富信子さんの「主のご真実に支えられて」、武井達郎・生子夫妻の「主のよくしてくださったことを何一つ忘れるな」など。ベックさんの「みこころが地でも行なわれますように」を巻末に収録。

光よあれ

「私たちは主のもの」

第4集

66人の証し

価三五〇円

ニュースキャスター山川千秋さんの夫人穆子さんの「ここに、主がおられる」、故笹川郁夫・公子夫妻の「もはや私ではなく、キリストが私の中で」「走るべき行程を走り終えた夫」、竹本誠一さんの「主に導かれて七十年」、大塚二郎助教授の「高慢を砕かれて」などが掲載されています。

第5集

67人の証し

価三八〇円

吉屋和子さんの「その栄光は地に満ちわたれ」、村上誠弁護士と夫人の「主とともに歩む」「キリストにはかえられません」、田中順治・節子夫妻の「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした」「数えてみよ、主の恵み」、大城紀美子さんの「今日まで灯し続けた信仰の灯」など。

第6集

70人の証し

価三八〇円

玉城新正さんの「恐怖から解き放たれて」、新井稔さんの「妻の安らぎとともに救われて」、岡本広海・基子夫妻の「キリストにある愛、喜び、平安」「今あるは神の恵みです」、森島左武郎・久仁子夫妻の「あなたは豊かなところへ…」「栄光と支配がキリストにありますように」ほか。

お申し込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上、〒一八〇武蔵野市吉祥寺本町四―九―一一吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込を。なお一部品切れの節はご容赦ください。

光よあれ「私たちは主のもの」証しシリーズ　第7集のおすすめ

イエス様がいらっしゃるところには、あふれるばかりのよろこびと平安があります。「わたしを信じる者はどんなときにも、決して渇くことがありません。」（ヨハネ6・35）なんと多くのかたがたが、このみことばの真理を体験的に知るようになったことでしょうか。この7集は、愛する子供を召されて平安のうちにある神竹さん夫妻、苦しみのすえ主にあるやすらかな生活にみちびかれた上野（セツ）さんご夫妻、東大の社会心理学教授の飽戸弘さんと奥様、また沖縄の友野さん夫妻など六十九人のかたがたの証しにあふれ、カラー特集には「日本に、世界にひろがるよろこびの集い・バイブルキャンプ」、また巻頭と巻末にはベックさんのメッセージがおさめられています。「光よあれ」シリーズの最新刊ですので、ぜひお読みください！



光よあれ「私たちは主のもの」第7集
69人の証し

価四〇〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4―9―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）　ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びの内、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第一章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。

私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。

この本は、聖書を「研究」するためにではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



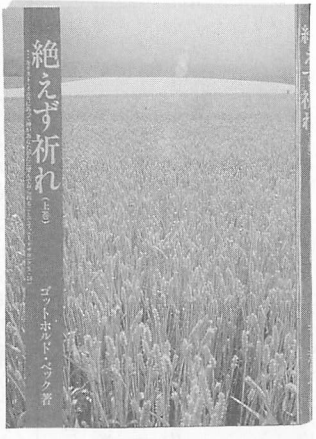
なにものも私たちを
神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）
ゴットホルド・ベック著
各巻とも価三〇〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4―9―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

絶えず祈れ(上巻)のおすすめ

ゴットホルド・ベック著

主なる神は私たちが祈ることを望んでおられます。なぜなら主なる神はあふれるばかりの祝福を私たちにそそごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえにそそがれるとびらをあけるのです。祈りのほんとうのたいせつさをよく知ることができれば、まだ救われていないかたがたはイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われているかたがたは、いまよりもさらにさらに何倍も何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るためのはげましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、近く刊行される下巻です。この上巻には、「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」の七つのメッセージがおさめられています。



絶えず祈れ(上巻)

ゴットホルド・ベック著

価四〇〇円

お申込みはハガキに本の名前(第何集、上下巻の別)、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4—9—11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

主イエスは言われた。

見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。 マタイ28:20

牧師制度がありません

私たちのキリスト集会には牧師制度がありません。会社員、公務員、教師、医者、経営者、芸術家、弁護士、技術者などさまざまな職業を持つ人々が集まって、自発的に責任を分かちあい、一切強制されることなく、純粋に聖書のみことばによりたのみ、主にある交わりを保つものの集いです。

会員制度がありません

もちろん名簿もありません。ですから「会員」になりたくてもなれないのです。いわゆる宗教団体的な制度は一切排除して、主ご自身のみが頭となって働かれ、導かれ、主ご自身が満ち満ちておられることのみを祈り求めている集会です。

組織・会則がありません

私たちの集会には、役員会も、総会も、定例会議も、会則も存在しません。みんなが助けあって重荷を分かちあい、全てが自発的に、喜びをもってなされています。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度がなく、献金は自発的に行なわれ、無記名ですから主のみがご存じです。

日曜礼拝と家庭集会

日曜日には、主の十字架の血潮をしのんでの礼拝があり、その後の福音集会では兄弟たちが交代でメッセージを伝えます。全国には90箇所以上に家庭集会があり、礼拝を行なう所も増えています。

キリスト集会

吉祥寺キリスト集会のご案内

私たちは、純粋に聖書の真理だけを学び、伝える者の集いです。会員制度を持たず、出入りは自由であり、いかなる党派、組織にも属していません。この本をお読みになって聖書と福音に関心のある方は、ぜひお気軽においでください。お電話をお待ちします。

吉祥寺キリスト集会

G. ベック　0422-22-2016　東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11〒180

日曜礼拝	10:30	14:00	19:00	火曜学び会	11:00
日曜メッセージ	12:00	15:00	20:00	水曜学び会	19:30
子供日曜学校	9:00			木曜祈り会	19:30
中高生日曜クラス	9:00				
青年日曜クラス	14:30				



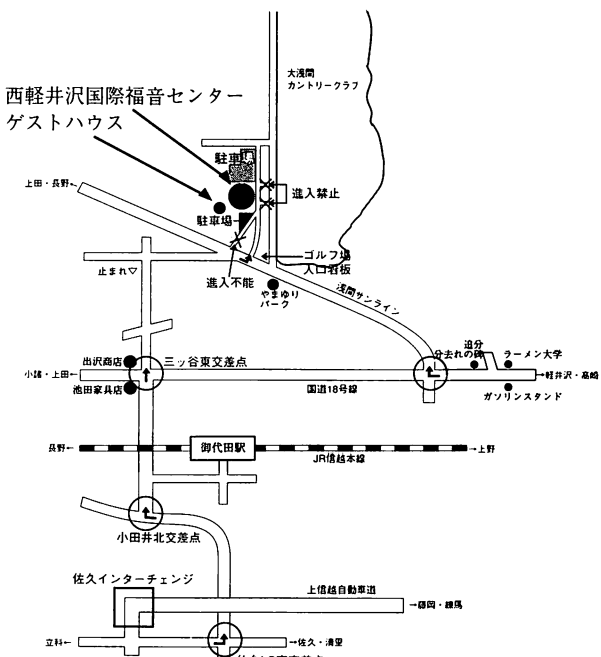
●ＡＡミーティングへのご案内

ＡＡ武蔵野グループは、吉祥寺キリスト集会において、毎週火曜日午後7時よりＡＡグループ・ミーティングを開催しています。アルコール・薬物などの依存症で悩み苦しんでおられる方、またそのご家族の方、知人の方、参加は自由です。ＡＡミーティングは、希望と信仰による回復のステップです。すでに悲惨な依存症から解放され、家族と共に希望と平和に満ちた生活を送っている大勢の人々が心から歓迎いたします。

西軽井沢国際福音センターのご案内

西軽井沢国際福音センター
0267−32−6400㈹　長野県北佐久郡御代田町塩野４５０−１５〒389-02

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
0267−32−6444　長野県北佐久郡御代田町塩野４５０−３３〒389-02



• ＪＲ信越線で御代田駅下車。タクシーで約５分＝800円程度。徒歩約45分＝３km。
御代田へは東京上野駅から信越線特急「あさま」で軽井沢乗りかえ、普通で３つ目の御代田駅下車。
• 国道18号線で軽井沢から追分信号を越えて1.5km先、２つ目の追分宿の信号を越えて10km先、左にESSOのガソリンスタンド、右に「分去れの碑」を右折して約３km。
• 道路は禁駐車周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

光よあれ
私たちは主のもの
66人の証し
シリーズ第4集

1989年5月1日初版
1994年5月1日再版
編　者　ゴットホルド・ベック

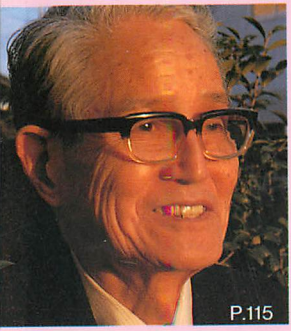
装　　幀　飯守恪太郎
編　　集　酒井千尋・上野鮎子
編集連絡　飯守節子
印　　刷　新生運動

発行所　吉祥寺キリスト集会
〒180 東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11
電話　0422-22-2016(ベック宅)
振替 東京 0-56116

定価350円
（本体340円）

















「光が、やみの中から輝き出よ」
と言われた神は、私たちの
心を照らし、キリストの御顔にある
神の栄光を知る知識を
輝かせてくださったのです。
(IIコリント 4・6)

定価 350円(本体340円)